

第4節 縄文時代の配石遺構

縄文時代の配石遺構として認定できたのは、表4に示した120基である。これらのなかには様々な要素を含んだ遺構があり、明らかに配石墓と認められるもの、住居に伴うもの、土坑とすべきもの、判断に苦慮するもの、縄文時代の遺構とするには疑問が残るもの等も含んでいる。

第5図をもとに遺跡全体での分布を見ると、住居をはじめとする他の遺構の粗密に符合しながら、遺跡全体に分布しているが、なかでも18区北側から28区にかけて集中する一群と、29区西側に集中する一群が目される。前者は、本遺跡の発掘調査当初の段階で列石遺構群と共に検出された一群で、大型の地山礫を伴うものや礫で周囲を囲むもの等があり、一部は列石遺構と一体の構造となるものもある。後者は配石墓群を中心とする一群で、墓域内では近接・重複する墓が数多く認められ、その周囲には丸石や円礫を含む多量の礫が集積されていた。

以下、18区から順に報告する。

1、18区配石遺構

18区では51基の配石遺構が調査された。このうち、1号から17号までは平成8年度に発掘調査が開始された当初に確認されたもので、18区1号・2号列石とともに一連の遺構群として調査された遺構である。これらが分布する地区は地山に非常に多くの礫を含んでおり、しかも配石遺構は表土層直下のかなり高いレベルで確認されているため、時期判定が難しい一群である。18号以降の配石は、大半が地山面に近いレベルで確認されている。

18区の配石遺構51基のうち、12号は住居の可能性が高いことから、また21号・22号・37号・38号は18区3号掘立柱建物に伴うことから、すでに横壁中村遺跡(7)で報告済みである。23号は18区27号住居の施設として、また30号～32号は18区19号住居及び5号列石に伴う施設として、横壁中村遺跡(8)で報告済みである。また、23号～29号・36号・43号・

46号～48号・50号・51号は埋没谷で確認された一連の遺構として、次回報告に委ねる。なお、19号は欠番となった。

以上の事情から、今回は残る28基の配石について報告する。

18区1号配石

調査年度 平成10年度

位置 L・M-23グリッド

経過 大きな地山礫と縦位の礫を組み合わせ、その中に礫を詰め込んだような状態が見られたことから、遺構として調査を実施した。

重複 東側に18区2号配石が接するが、重複の有無は不明である。

形状 南・西・北の三方に0.5～1mほどの地山礫4石があり、北東側には長さ40cm程のやや扁平な礫3石を立てて用いてくの字状に配置し、全体として方形の区画を構成している。区画の内部に直径10～30cmの礫を詰め込んだようになっており、特別に意識して配列した様子は伺えない。

下部遺構 詰め込まれた礫を取り除くと長径150cm、短径100cmの浅い土坑状になっている。

石材等 詰め込まれた礫に川原石が1石あるのみであり、その他は全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N46度E

遺物 出土遺物は少なく、中期後半の土器破片3点が出土している。

所見 地山礫4石は人為ではなく、縦位に礫は地山土中にも数多く見られる。縄文時代の遺構とするには疑問が残る。

18区2号配石

調査年度 平成10年度

位置 L-23グリッド

経過 1号配石と同様な観点から調査された。

重複 西側に18区1号配石が接するが、重複の有無は不明である。

第3章 発見された遺構と遺物

表4 横壁中村遺跡 配石遺構一覧

区	遺構番号	調査年度	グッド	遺構の重複	方位	長軸	短軸	時期	出土土器	出土石器	備考
18区	1号	1998	L・M-23	18-2号配石	N46度E	150	100	中期末～後期前半			
18区	2号	1998	L-23	18-1号配石				中期末～後期前半			
18区	3号	1998	K・L-24	18-1号列石内	N6度W	180	125	中期末～後期前半		磨石1、多孔石1	
18区	4号	1998	L-24	18-1号列石内				中期末～後期前半	後期前半少量	台石1	
18区	5号	1998	L-24・25	18-1号列石内	N7度W	180	140	中期末～後期前半			
18区	6号	1998	L・M-24・25	18-1号列石内	N90度	200	150	中期末～後期前半	中期～後期少量		
18区	7号	1998	M・N-22	-	N33度E	120	100	中期末～後期前半			
18区	8号	1998	O-23	-	N50度W	240	100	中期末～後期前半	後期前半少量		
18区	9号	1997	O-24	-		180		中期末～後期前半			
18区	10号	1998	P-23	18-11号配石		130		中期末～後期前半	後期前半少量		
18区	11号	1998	Q-22・23	18-10号配石		200		中期末～後期前半	後期前半少量	多孔石1	
18区	13号	1997.98	R-24	-		195	140	中期末～後期前半			
18区	14号	1996.98	S-23	-		120		中期末～後期前半	後期前半少量	敲石1	土坑の可能性あり
18区	15号	1996.98	S-24	18-4住		155	110	中期末～後期前半	中期後半～後期前半多量	磨石4	
18区	16号	1996.97	T-25	18-5住、18-17配石		125	90	中期末～後期前半	中期後半～後期前半多量	石鏃1、石鏃未製品1、加工痕1	
18区	17号	1997	T-25	18-6住、18-16配石		80		中期末～後期前半	中期後半～後期前半多量	石鏃未製品1、加工痕2、敲石1、石皿1	軽石製品1
18区	18号	2001	O-21	5・6焼土、1号掘立		300		後期前半	後期前半多量	磨製石斧1	
18区	20号	2002	M-17	-		120			後期前半少量		中期の配石墓か
18区	33号	2002	S・T-18					称名寺式	後期前半一括土器あり	台石1、石核1	住居の可能性あり
18区	34号	2002	O・P-12	7列石		180					18区7号列石に含まれる
18区	35号	2002	P-12	7列石		200					18区7号列石に含まれる
18区	39号	2002	K-13	18-25住					中期後半少量	敲石1	住居の施設か
18区	40号	2002	K-13	18-25住		220	120			磨石1	18区25号住居の出入り口か
18区	41号	2002	J-13	18区26住、18区226号土坑		400			中期末～後期初頭多量	削器1、磨石1、石皿1、台石1、多孔石3、石臼1	18区26号住居覆土中の礫
18区	42号	2002	J-14	-							18区26号住居の出入り口か
18区	44号	2002	I・J-12	18-238土坑他		500			中期後半～後期初頭多量	石鏃1、打斧2、磨石1	敷石住居の可能性あり
18区	45号	2002	T-7	18-5号列石の下		100					18区5号列石と関連か
18区	49号	2002	T-7	18-6号列石の下		170	120				18区6号列石と関連か
19区	1号	1998	S-25	19-24住?	N13度E			後期			配石墓の可能性あり
19区	8号	2001	V-19	19-6号配石		30		後期	前期諸磯c式	石鏃1、加工痕1	6号配石下部、焼土を伴う
20区	1号	1999	W・X-21	20-10号土坑		330	200				
20区	2号	1999	N・O-22	23住、3石垣、1建物		170		中期後半か	中期後半微量	加工痕1、多孔石1	中期の配石墓か
20区	3号	1999	P-19・20			90	80	中期後半	中期末少量	多孔石1	掘立柱建物の柱穴か
20区	5号	1999	J-24		N83度E	124	60				配石墓の可能性もあり
20区	6号	1999	F・G-25	2石列、161土、178土		170		加曾利E4式期	中期末少量	石鏃1	配石墓の可能性が高い
20区	9号	1999	F-24	162土、176土	N49度E	98	78	後期	後期微量	石棒片1	土坑墓か
20区	10号	1999	E-25	-	N34度E	140	64～96	後期	中期後半少量	台石1	土坑墓か
20区	11号	1997	C・D-25	-		200					
20区	14号	2001	I-22	-	N27度E	124	30	後期後半	-	台石2、台石片2	配石墓
20区	15号	2001	G-20	-	N82度E			加曾利B2式	加曾利E3式～加曾利B2式	磨石2、多孔石1	配石墓の可能性が高い
20区	23号	2003	H-12	505・506・507土坑		290	186	称名寺1式～堀之内1式	後期前半多量、土製円盤1	削器2、楔形石器1	柄鏡形住居出入り口の対ビットの可能性あり
20区	24号	2003	G・H-13	20-522土坑		308	220	加曾利E3式	中期後半少量	加工痕1、台石1	
20区	25号	2003	H-11	-		220	140	称名寺2式	称名寺式多量	石鏃1、打斧1、磨石3、石皿2、多孔石1	住居の可能性あり
20区	26号	2003	H-12	土坑							
28区	2号	1996.98	H-1	28-1号列石				中期末～後期前半	中期後半～後期	石鏃1、石核2、磨石1、多孔石1	
28区	3号	1996.98	P-2	28-6号列石				中期末～後期前半	中期後半	磨石1	立石
28区	4号	1996.98	Q・R-2	28-12号住居・8号列石		256	200	中期末～後期前半	中期後半多量	削器1、打斧2、敲石1、磨石2	石製品1
28区	5号	1996.98	Q・R-1	28-6号列石		254	142～160	中期末～後期前半	中期後半	石核1	石棒あり
28区	6号	1996.97	R-2	28-10号配石		180	120	中期末～後期前半	中期後半	加工痕1、石棒片1	石棒あり
28区	7号	1996	R-2	28-12号住居		135	80	中期末～後期前半	中期後半多量	石鏃1、削器1、打斧1	
28区	8号	1996.97	R・S-3	-		210	160	中期末～後期前半	中期後半	加工痕1	
28区	9号	1996	S-1	-		140	126	中期末～後期前半	-	打斧1	
28区	10号	1996	S-2	28-6号配石		175	110	中期末～後期前半	中期後半	加工痕1、使用痕2、楔形石器1	
28区	11号	1996.97	S-2					中期末～後期前半	中期後半～後期前半多量	加工痕1、敲石1	54の鉄滓が大形礫の下から出土
28区	12号	1996.97	S-2					中期末～後期前半	-		11号配石と一体のもの
28区	13号	1996	R・S-2	-		150	150	中期末～後期前半	中期後半	石鏃1	
28区	14号	1998.99	W-5	28-11号列石	N56度E	120	45～50	加曾利B1式	勝坂3式～加曾利B1式	石棒片1	配石墓
28区	15号	1998	X-1	-				称名寺式以降	称名寺式～堀之内1式多量	磨石5、多孔石1、石棒片1	
28区	17号	1998	Y-3		N22度W	148	92	堀之内1～2式	勝坂3式～堀之内2式	石核2、台石1、多孔石片1	配石墓の可能性が高い
29区	1号	1999	C-4	29-7号・12号住居		100	90	後期	中期中葉～後期	石核1	29区7号住居の柱穴か
29区	2号	1999	C-4	29-7号・12号住居		50	45	後期	-		単独の施設か
29区	3号	1999	C・D-3	-		500	160	後期	中期後半～後期前半	石鏃1、磨石1	29区2号列石廃絶時の礫か
29区	4号	1999	E-4	29-20住居を切る		40	30	後期	中期末～後期前半		墓を想定
29区	5号	1999	F-5	29-4号列石の下		320	120	後期	-		29-4号列石の地形か
29区	7号	1998	R-3	29-10号土坑	N5度W			後期後半	後期後半	石皿片1、多孔石1	土坑墓の可能性あり
29区	8号	1999	T-1	29-18号配石		30	30	後期後半	焼骨片7.6g	多孔石1	
29区	9号	1998	T-2	29-25配石を切る	N83度W	108	27	加曾利B2式	堀之内2式～加B2式	多孔石1、焼骨片2.1g	配石墓
29区	10号	1998	T-1・2			180	180	加曾利B2式	加B1～2式	石鏃1、焼骨片0.2g	備蓄された礫か
29区	11号	1999	T-1・2	29-12号配石	N19度W	160	50	加曾利B3式	加B2～3式	焼骨片1.0g	配石墓

第4節 縄文時代の配石遺構

区	遺構番号	調査年度	グリッド	遺構の重複	方位	長軸	短軸	時期	出土土器	出土土器	備考		
29	区12号	配石	1998	T-1・2	29-11号配石	N60度E	100	38	加曾利B2式	加B2式、焼骨片1.0g	使用痕1	配石墓、底面に石敷きあり	
29	区13号	配石	1998	T-2	29-25号配石を切る	N18度E	130	30	加曾利B2式	加B1~2式	焼骨片1.7g	配石墓	
29	区14号	配石	1998	T-2	29-15号・22号・29号配石	N17度E		78	高井東式	加B2式~高井東式、焼骨片3.2g	石核1、台石片1	配石墓、22号・29号配石を切り、15号配石に切られる	
29	区15号	配石	1998	T-2	29-14号・22号・29号配石を切る	N86度W	145	68	高井東式	高井東式	焼骨片2.5g	配石墓、底面に石敷きあり	
29	区16号	配石	1998	T-3				110	100	安行2~3a式	安行2~3a式多量、焼骨片14g	石鏃12、石鏃未16、石鏃7、削器類16、打斧1、磨石1、石核12、剥片239、砕片40	配石墓、耳飾り1点出土。覆土の水洗で珪質変質岩を中心に剥片75点、砕片5630点、焼骨片520g検出。
29	区17号	配石	1999	T-3	中世以後の墓に切られる	N9度E		83	後期後半	水洗選別で剥片6点、砕片309点検出	石鏃片1、石鏃未2	土坑か	
29	区18号	配石	1998	U-1	29-8号配石	N73度E	156	54	加曾利B1式	加B1式	-	配石墓	
29	区19号	配石	1998	U-1	29-33号配石				後期後半	焼骨片0.4g	-	29区33号配石の隣か	
29	区20号	配石	1998	U-2	29-24号・32号配石	N63度W	120	30	高井東式	高井東式	石核1、焼骨片0.5g	配石墓	
29	区21号	配石	1998	U-2	29-23号・24号配石	N80度W	110	40	加曾利B1式	堀2~加B2式、焼骨片1.5g	打製石斧1	配石墓	
29	区22号	配石	1999	T-2	29-14号・15号・29号配石に切られる	N74度W		30	加曾利B式期	-	-	配石墓	
29	区23号	配石	1998	U-2	29-21号・26号配石	N53度W	148	68	加曾利B2式	堀2~加B2	焼骨片6.0g	配石墓	
29	区24号	配石	1998	U-2	29-20号・21号配石	N69度W	180	80	加曾利B2式	堀2~加B2、焼骨片0.1g	石皿片1、台石4	配石墓	
29	区25号	配石	1999	T-2	29-9号・13号配石に切られる	N25度E	130	30~50	後期後半	-	-	配石墓	
29	区26号	配石	1998.99	U-3	29-55号配石を切る	N6度E	190	70	高井東式	堀2式~高井東式多量、耳飾り1対2点、土製円盤2点、焼骨片14.4g	石鏃1、加工痕1、打斧片1、石核1、磨石1、台石2、剥片19点、砕片6点	配石墓、底面に石敷きを伴う。耳飾り1対2点は副葬品の可能性が高い。	
29	区27号	配石	1999	U・V-3	29-39号配石を切る	N83度E	170	52~64	加曾利B3式~高井東式	堀2式~高井東式多量、焼骨片19.5g	石鏃15、石鏃未1、石鏃1、加工痕4、石核1、打斧欠1、台石1、剥片47点、砕片20点	配石墓、石鏃15点をはじめとする小型石器類と素材は、副葬品の可能性が高い。	
29	区28号	配石	1999	U-3・4	29-30号配石内にあり	N71度E	220	110~140	加曾利B3式~高井東式	堀2式~高井東式多量、お腹の大きな中空山形土偶1	敲石1、磨石4、丸石1、石棒片1、焼骨片3.8g	石棒、丸石、土偶出土	
29	区29号	配石	1999	T-3	29-22号配石を切り、14号・15号配石に切られる	N16度E	188	86	加曾利B2式	加B1式~安行2式、焼骨片0.8g	石鏃未1、石鏃1、敲石1	配石墓	
29	区30号	配石	1998	U・V-4	29-28号・40号配石、15号土坑		700	600	加曾利B式~晩期初頭	加B1式~高井東式多量	石棒6、丸石13、石鏃4、石鏃未1、加工痕2、石核4、砥石1、台石片1、敲石2、磨石類8	墓前祭祀場兼備の備蓄場所か、石冠1点、剥片28点、砕片8点	
29	区31号	配石	1998	V-1・2	29-32号・33号・34号配石	N74度W	150	35~65	加曾利B1式~2式	加B1~2式	使用痕1、焼骨片4.4g	配石墓	
29	区32号	配石	1998	U-1・2	29-19号・20号・31号・33号配石	N33度W	142	30~50	加曾利B2式	堀2式~加B2式	焼骨片6.2g	配石墓	
29	区33号	配石	1998	U・V-1	29-19号・31号・32号配石	N8度W	182	66~80	高井東式	高井東式	石鏃片1、焼骨片0.1g	配石墓	
29	区34号	配石	1998	V-2	29-31号・35号配石	N14度W	170	45~50	高井東式	堀2式~高井東式多量焼骨片22.0g	石鏃3、石鏃1、使用痕1、台石1	配石墓、水洗選別で剥片1点、砕片96点検出。	
29	区35号	配石	1999	V-2	29-34号配石	N75度W	-150	30~40	加曾利B3式	堀2式~加B3式多量、土製円盤1	石皿片1、台石片1、焼骨片6.7g	配石墓	
29	区36号	配石	1999	V-2		N11度E	120	40	加曾利B2式	堀之内2式、焼骨片2.2g	加工痕1、磨石1	配石墓	
29	区37号	配石	1999	V-3・4	29-38号・41号配石		500	500	後期後半	耳飾り片1	-	-	
29	区38号	配石	1999	V-3	29-37号配石					-	-	配石にあらず	
29	区39号	配石	1999	V-3	29-27号配石に切られる	N85度E	135		高井東式	加B2式~高井東式	加工痕1、磨石1	配石墓	
29	区40号	配石	1998	V-4					堀之内2式	堀之内2式	-	大型の地山礫が抜けた穴か?	
29	区41号	配石	1998	V-4					後期後半	-	-		
29	区42号	配石	1998	V-5	-				加曾利B1式~高井東式	加B1式~高井東式	加工痕1、丸石16、敲石2、磨石6、石皿片1、剥片3	丸石を備蓄した場所、あるいは儀礼に際し丸石を手向けた場所か	
29	区43号	配石	1998	V-5	-				後期後半	-	凹石1		
29	区44号	配石	1998	W-1	19-3号住居を切る		175	150	高井東式	堀之内1式~高井東式、土製円盤1	加工痕1、石棒1、石核3、磨石類2、焼骨片6.9g	同一場所に建て替えられた柱穴の集合	
29	区45号	配石	1998	W-1	無→写真より作成				高井東式	勝坂2式~高井東式、土製円盤1、焼骨片6.7g	石鏃2、石鏃未2、使用痕1、石核1、剥片4	44号配石と一連の遺構か	
29	区46号	配石	1998	W-2		N87度W	200	122	高井東式	堀之内1式~高井東式多量、焼骨片15.9g	玉1、石鏃2、加工痕3、石核1、石皿片1、台石片1、多孔石1	土坑墓か、軽石製品2点	
29	区47号	配石	1997	X-1	19-3号住居を切る		80	80	高井東式	堀之内1式~高井東式	削器1、多孔石1、焼骨片1.2g	住居の炬か	
29	区48号	配石	1998	X-3		N43度W	180	74	加曾利B3式	加曾利B2~3式多量	石鏃1、石核1、焼骨片4.3g	土坑墓か、耳飾り片1点	
29	区49号	配石	1998.99	X-5					高井東式	勝坂2式~安行式多量、耳飾り1、土製円盤4	石鏃1、加工痕3、楔形石器1、石核3、焼骨片1.9g	住居の可能性あり	
29	区50号	配石	1997	X-5					高井東式	前期初頭~高井東式多量	石鏃1、磨製石斧片1	住居の可能性あり	
29	区55号	配石	1998.99	U-3	29-23号配石を切り、26号配石に切られる	N80度W	154	30	加曾利B式期			配石墓	
30	区4号	配石	1999	O-1・2	土坑				加曾利E4式	中期後半多量	削器1、加工痕3、使用痕1、磨石4、台石1、多孔石2、石棒片3	土製円盤4点、軽石製品1	
30	区7号	配石	1999	I-1	-				-	-	-	20区7号配石から変更	
30	区8号	配石	1999	O-2	-				中期後半	-	-	20区8号配石から変更	
30	区11号	配石		A-5	-				-	-	-		
30	区12号	配石	1997	C-5	平面割付図No.2				-	-	-		
30	区15号	配石	1998	D-1	-				加曾利B2式	中期後半~後期後半	加工痕1	土製円盤3点	
30	区16号	配石	1998	D-3	-				-	-	石皿1		
30	区17号	配石	1997	D-5	平面割付図No.11				-	-	-	調査時は集石	
30	区20号	配石	1998	E-3	20-195土坑				-	-	-		
30	区21号	配石	1997	E-4	平面割付図No.10				-	-	-	敷石住居の残骸の可能性あり	
30	区22号	配石	1998	G-4	-				-	-	-		

第3章 発見された遺構と遺物

形状 周囲を長さ0.5～1 mほどの大きな地山礫が取り囲み、その内部に5～20cm程の礫を充填している。18区1号配石と似るが、内部の礫の量は少なくやや小ぶりのものが多い。

下部遺構 土坑状の掘り込みは認められない。

石材等 地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩垂角礫のみを使用し、川原石は含まれない。

方位 —

遺物 出土遺物は中期後半の土器破片1点のみである。

所見 周囲を囲う礫は人為ではないが、内部に集積された礫は小さなものに限られており、不自然である。ただし、畑作に伴う穴や植栽痕などにもこのような状態は見うけられ、注意を要する。

18区3号配石

調査年度 平成10年度

位置 L-24グリッド

経過 1号列石の内部にあり、縦位の礫と円礫の位置から方形状の区画が想定できたことから、配石遺構として分離された。

重複 18区1号列石内部にある。18区4・5号配石と接するが、重複の有無は不明である。1号列石を切っている可能性もある。

形状 南北方向に長軸をもつ長形状を呈する。西側に2石の扁平な礫を立てて配し、北東隅に大型の川原石1点、対角の南西隅に多孔石2点が配置されている。その他の礫は、東側は20～40cm程の礫がほぼ東西に一列に並び区画を形成しているように見えるが、明瞭ではない。内部にもほぼ同様な大きさの礫が充填されるが、配置等に規則性は認めがたい。

下部遺構 上面に集積された礫の下に大型の地山礫があり、下部遺構は認められない。

石材等 北東隅の川原石と南西隅の多孔石2点以外は、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩垂角礫を使用している。

方位 N6度W

遺物 土器は中期後半から後期前半の破片6点が

出土しており、石器は多孔石2点と磨石1点が出土している。

所見 調査所見は配石墓の可能性を想定しているが、縦位の礫は地山土中にもあり、川原石や多孔石は列石に含まれても差し支えない。この部分を分離して配石遺構とすることには疑問が残る。

18区4号配石

調査年度 平成10年度

位置 L-24グリッド

経過 縦位の礫が1石存在することから、3号・5号配石と同様な方形状の区画を想定した。

重複 18区1号列石、18区3・5号配石と接するが、重複の有無は不明である。1号列石を切っている可能性もある。

形状 18区1号列石の南側に接する位置にある。5号配石の南に並ぶ方形状の区画を想定しており、西側から南側にかけて鍵の手状に並ぶ40cm前後の扁平な大型礫を側縁とする。そのうち1石は立っているが、他の礫は判然としない。東側には礫は認められない。内部に礫はないが、5号配石と同様に、礫のない空白に人為的な所作を想定している。

下部遺構 下部遺構は認められない。

石材等 北側の1号列石と接する地点に川原石が1石置かれている以外は、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩垂角礫を使用している。

方位 —

遺物 土器は中期後半の破片が1点出土しており、石器は台石が1点出土している。

所見 調査所見は配石墓の可能性を想定しているが、判断材料に欠ける。

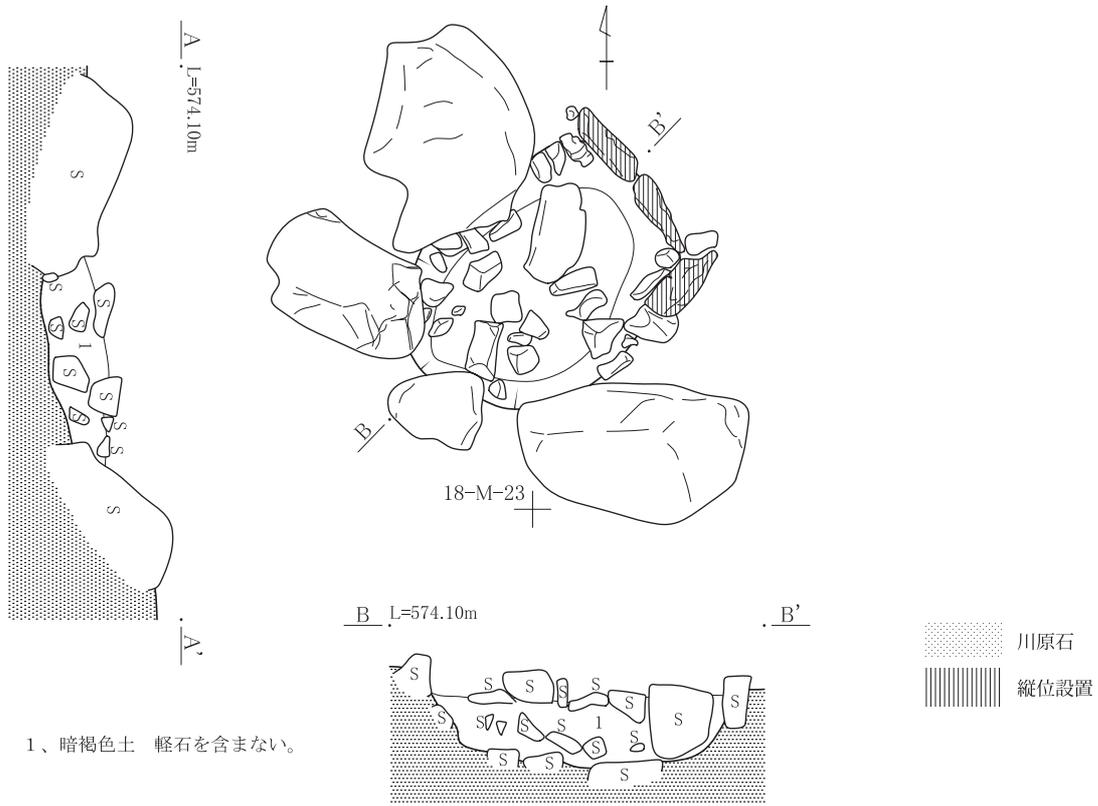
18区5号配石

調査年度 平成10年度

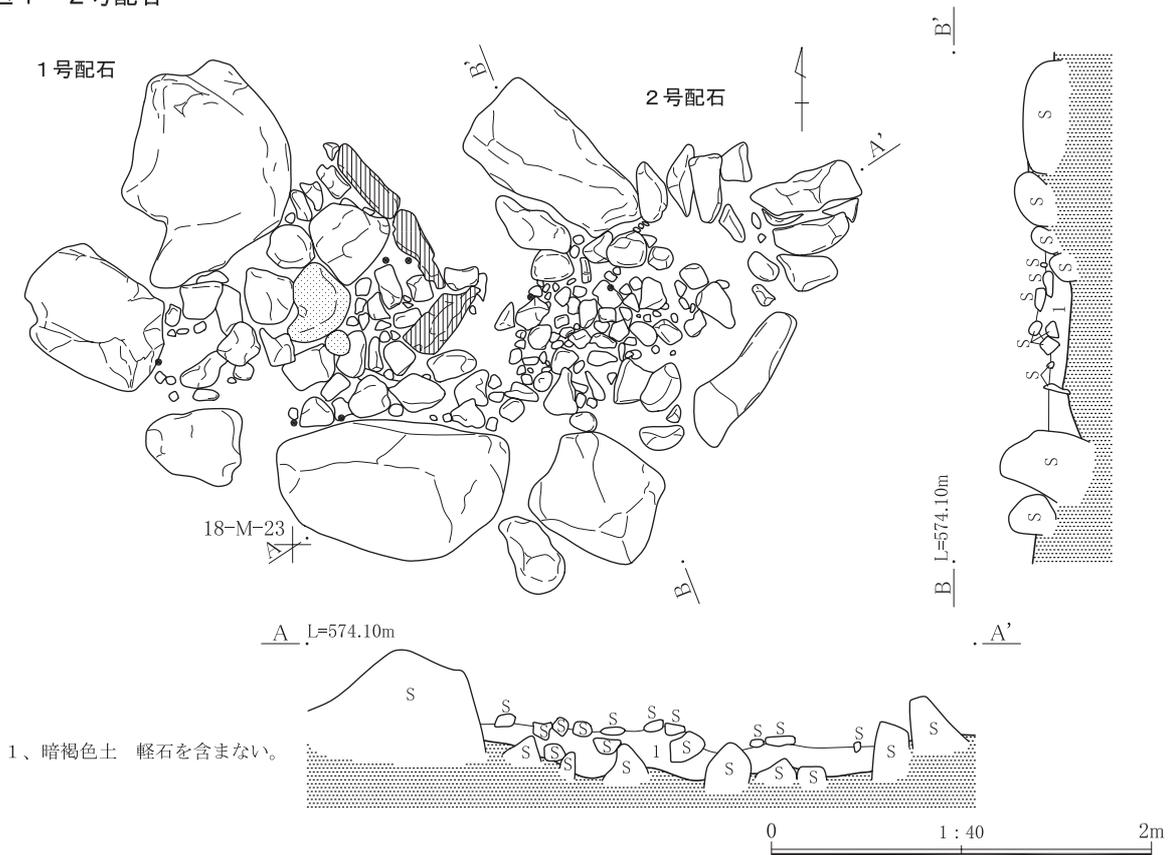
位置 L-24グリッド

経過 18区1号列石の内部にある。3方に立っている礫が1石づつあり、その内部に礫のない空間があることから配石と判断した。

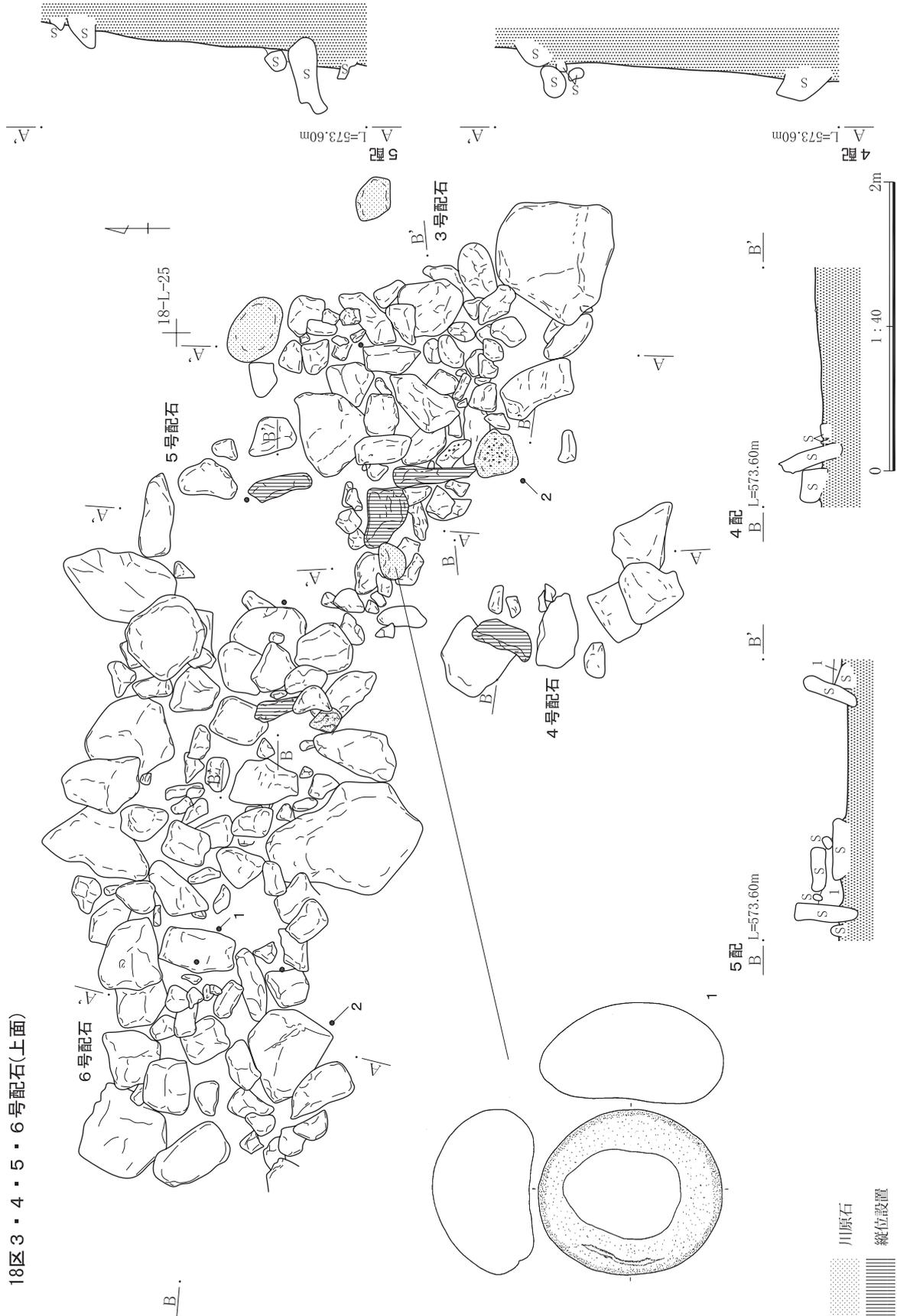
18区 1号配石



18区 1・2号配石

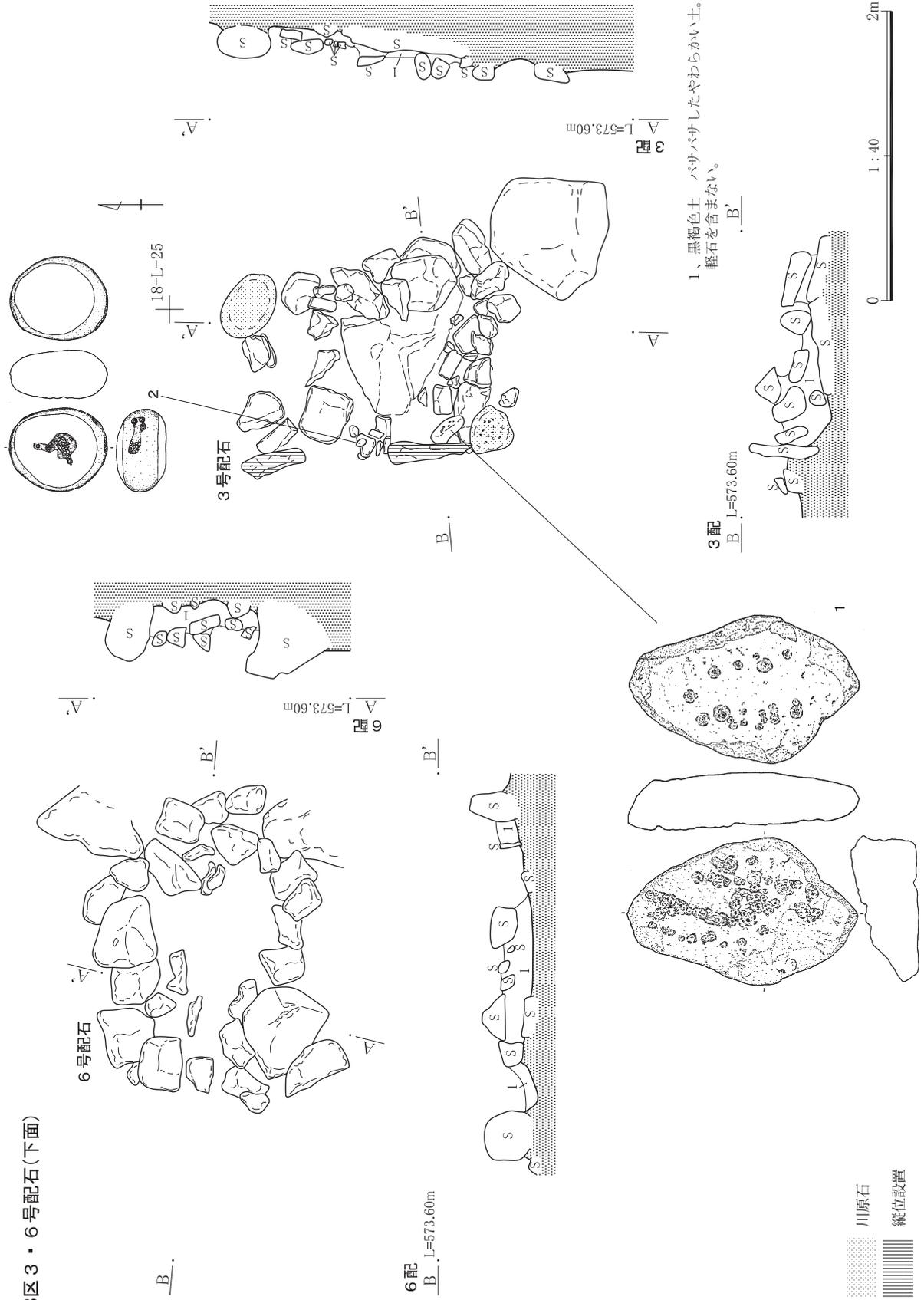


第87図 18区 1号・2号配石



第88図 18区3号～6号配石(1)

18区3・6号配石(下面)



第89図 18区3号~6号配石(2)

第3章 発見された遺構と遺物

重複 18区1号列石内部にある。18区3・4号配石と接するが、重複の有無は不明である。1号列石を切っている可能性もある。

形状 東・西・北に1石ずつ立っている扁平な礫があり、内部は礫のない空間となっている。東西の礫は、その他の礫とは異質なやや赤味を帯びた礫であり、対になるように配されている。このうち、東側の礫は18区3号配石の西側を区画する礫と共有となる。その他の礫の配置形状は判然としないが、礫のない空間は内部で南北130cm前後、東西130cmの方形状を呈している。

下部遺構 下部遺構は認められない。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。前述の2石もやや赤味を帯びるが基本的には地山に含まれる礫である。南側に川原石1石があるが、18区4号配石にも含まれるものである。

方位 N7度W

遺物 中期後半から後期前半の土器破片1点が出土している。

所見 調査所見では、本来礫がある場所が空白になっていることに人為の所作を想定し、配石墓の可能性を考えているが、判断材料に欠ける。

18区6号配石

調査年度 平成10年度

位置 M-24グリッド

経過 18区1号列石内部であるが、礫が長方形に配されている様子が看取され、意図的に配した可能性があるため配石とした。

重複 18区1号列石の内部にあり、1号列石を切っている可能性もあるが判然としない。

形状 25～50cm程の礫を用い東西方向に長い長方形に区画している。礫の並びは丁寧とは言い難いが、内側で東西140cm前後、南北80cmの長方形を呈している。区画内部には10～30cmほどの礫が乱雑に認められる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N90度E

遺物 中期後半から後期前半の土器破片4点が出土している。

所見 調査所見では配石墓の可能性が想定されている。

18区7号配石

調査年度 平成10年度

位置 M-22グリッド

経過 周囲を含め礫の非常に多い地点であるが、扁平な礫が一定の範囲を圍繞する様子が認められ、また立った状態の礫も多数あり、配石として調査を行った。

重複 重複する遺構は無いが、北東4mに18区1号配石、南西3.5mに18区18号配石が近接する。

形状 配石北側に配置される4石は、扁平な礫が立った状態で検出されており、南側の礫も本来は立っていた可能性がある。礫は、長軸120cm前後、短軸100cm前後の範囲を圍繞し、その内部は周囲より礫の量が若干少なく、底面は凹凸のある土坑状の掘り込みを伴う。その規模は長軸130cm、短軸80cm前後、深さ30～40cmである。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N33度E

遺物 確認されていない。

所見 調査所見では配石墓の可能性が想定されているが、周囲の礫の配置や内部の掘り込みは乱雑であり、配石墓とするには疑問が残る。

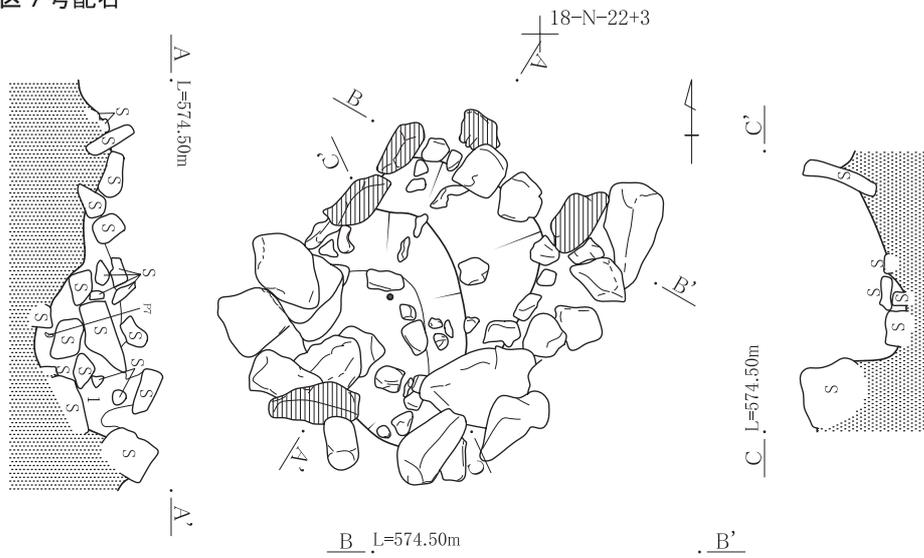
18区8号配石

調査年度 平成10年度

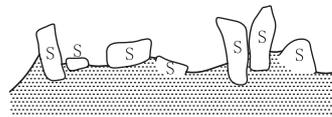
位置 O-23グリッド

経過 周囲を含め礫が非常に多い地点であるが、礫を除去している段階で掘り込みが確認できたため配石として調査を行った。

18区7号配石

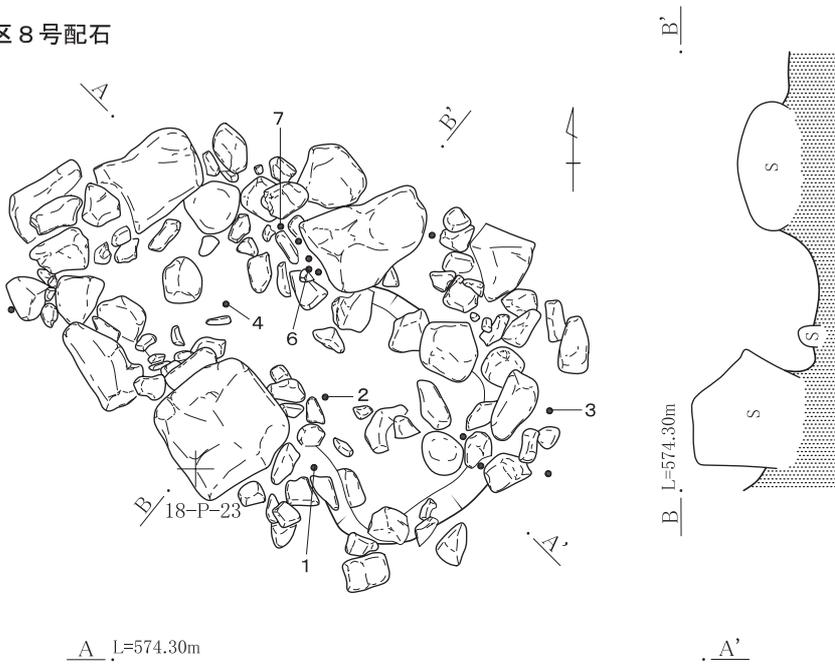


1、暗褐色土 軽石を含まない。



縦位置置

18区8号配石



0 1 : 40 2m

第90図 18区7号・8号配石

第3章 発見された遺構と遺物

重複 重複する遺構は無いが、西1mに18区10・11号配石が近接して存在する。

形状 長軸2.4m前後、短軸1m前後の長方形を呈する。遺構周辺の礫との区別はつきづらく、意識的に配したのか判断しがたいが、内部に土坑状の掘り込みがあるため、その周囲の礫を配石としたものである。内部には長軸方向の両端に円形状の川原石が認められ、意識的に配した可能性もある。内部の規模は長軸2.1m前後、短軸1m前後、深さは15cmほどである。

下部遺構 15cmほどの浅い掘り込みを伴う。

石材等 長軸方向にある川原石2点他は、全て地山に含まれるものと同じ粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N50度W

遺物 土器は中期後半から後期前半の破片が総数16点出土しており、主な土器は称名寺式である。

所見 個別の図では周囲を礫で囲まれているように見えるが、実際には本遺構の周囲も全面が礫であり、土坑としたほうが妥当であろう。時期は後期称名寺式期に比定されよう。

18区9号配石

調査年度 平成9年度

位置 O-24グリッド

経過 周囲を含め礫の非常に多い地点であるが、巨礫を中心としてその周囲に小礫が環状に配されている様子があり、配石として調査を行った。

重複 重複する遺構は無いが、北東3.5mに18区1・2号列石が近接する。

形状 大型の板状礫を、平坦面を水平にして置き、その周囲に小礫が集積された状態で確認された。中央の礫は長さ124cm、幅120cm、厚さ28cmの板状を呈する巨礫で、調査時には2石に割れていたが、もとは1石であったものと考えられる。割れた原因は人為的なものではなく、節理等による自然なものだと判断される。周囲の礫は10～40cm大で、周囲の礫を含めた規模は径180cm程の円形状を呈している。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 中央の巨礫を含めて、礫は全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 —

遺物 後期の土器細片が15点出土している。

所見 この地区には、本配石と同じような状態で確認された巨礫が集中しており、総合的な判断が必要となる。

18区10号配石

調査年度 平成10年度

位置 P-23グリッド

経過 9号配石と同様である。

重複 18区11号配石と接するが新旧関係は不明である。また、東側1mに18区8号配石が近接する。

形状 9号配石とほぼ同じ状態で確認された。中央の礫は長さ116cm、幅72cm、厚さ30cmの板状を呈する巨礫で、上面がほぼ水平になるように配置されている。周囲の礫は径10～40cm程であり、寄せ集められたように密集して配置されている。周囲の礫を含めた規模は径130cm程の円形を呈している。

下部遺構 下部遺構は認められない。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 土器は総数9点が出土しており、主な土器は後期称名寺式である。これらの大半は巨礫の下部から出土している。

所見 9号配石と同様である。なお、巨礫の下から称名寺2式土器が出土しており、本配石は少なくとも称名寺2式以後の時期になる。

18区11号配石

調査年度 平成10年度

位置 Q-22・23グリッド

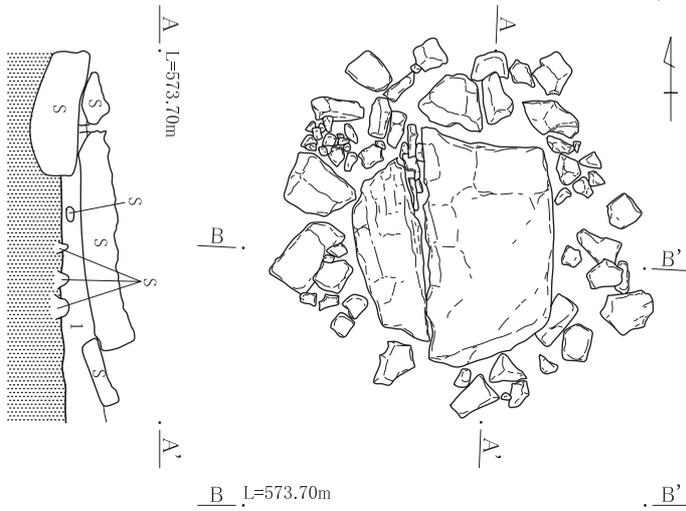
経過 9号配石と同様である。

重複 18区10号配石と接するが新旧関係は不明である。また、東側2.5mに18区8号配石が近接する。

形状 多角形の巨礫の周囲に小礫が集積された状

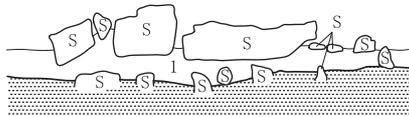
18区9号配石

18-O-24+3

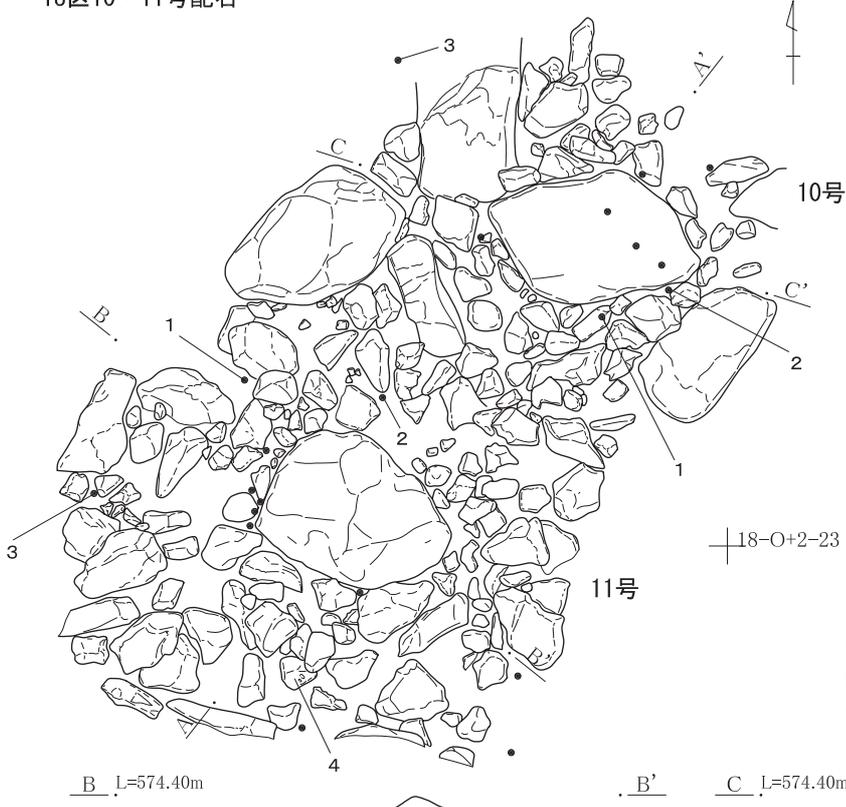


18区9号配石

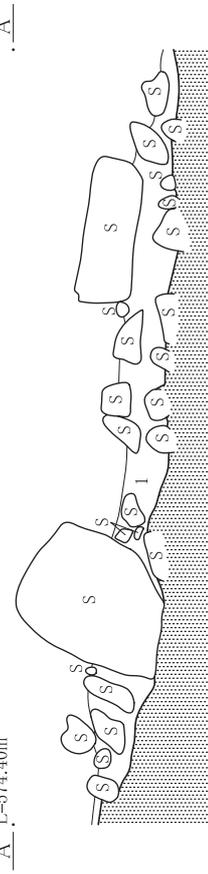
1、暗褐色土
軽石を含まない。



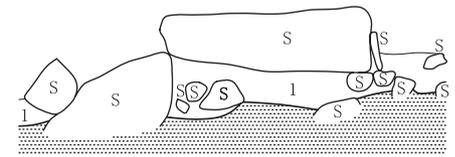
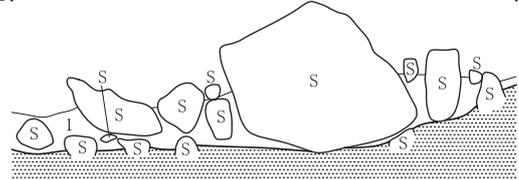
18区10・11号配石



18-O+2-23



1、黒褐色土 パサパサしたやわらかい土。軽石を含まない。



第91図 18区9号~11号配石

0 1:40 2m

第3章 発見された遺構と遺物

態で確認された。中央の礫は長さ98cm、幅76cm、厚さ80cmの巨礫で、周囲の礫は径5～50cm程である。周囲の礫の配置は18区10号配石と比較し若干散漫であり、配石外との峻別はつきづらいが、その規模は径200cm程の円形を呈すものと考えられる。

下部遺構 下部遺構は認められない。

石材等 礫は全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 土器は中期後半から後期前半の破片が11点が出土しており、そのうち後期称名寺式～堀之内1式期の土器が巨礫の下部から出土している。石器は多孔石が1点出土している。

所見 9号配石と同様である。なお、本配石でも巨礫の下から後期の土器が出土している。

18区13号配石

調査年度 平成9年度

位置 R-24グリッド

経過 9号配石と同様である。

重複 重複する遺構は無いが、西2.5mに18区15号配石が近接する。

形状 9号配石と同様に平坦面のある板状礫を使用した配石で、中央の礫は長さ126cm、幅66cm、厚さ36cmの巨礫であり、上面がほぼ水平になるように配置されている。周囲の礫は径5～40cm程であり、2～3重に密接した状態で巡らされている。周囲の礫を含めた規模は長軸195cm、短軸140cmの楕円形状を呈している。

下部遺構 地山となる層と中央の巨礫の間に15cm程の間層があり、不明瞭ながら掘り込みが存在した可能性がある。調査時点で掘り込みと確定することはできなかった。

石材等 中央の巨礫を含めて、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 確認されていない。

所見 基本的には9号配石と同様であるが、周囲

の礫が巨礫の平坦面に合わせて密集している点特徴的である。

18区14号配石

調査年度 平成8・10年度

位置 S-23グリッド

経過 周囲を含め礫の非常に多い地点であるが、扁平な礫が立った状態で半円形に認められるため配石として調査を行った。その後、礫を除去している段階で、ずれた位置から配石と重複する土坑が確認され、配石に伴うものとして調査を行った。

重複 重複する遺構は無いが、北2.5mに18区15号配石が近接する。

形状 径120cm程の円形に礫が巡る形状を呈する。内部には礫が見られない。周囲の礫は扁平な礫であり、南・東・北側についてはほぼ垂直に立っているものが多く認められる。調査時点での並び方は不規則であるが、円形に立てて並べていた可能性がある。

下部遺構 配石の礫を除去している段階で、北東に70cm程ずれた位置に土坑が確認された。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸84cm、短軸68cm、深さ48cmである。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。下部遺構の図中の礫は全て地山に含まれる礫である。

方位 —

遺物 土器は後期の破片が3点が出土した。石器は土坑内部から敲石が1点出土している。

所見 土坑の可能性が高い。

18区15号配石

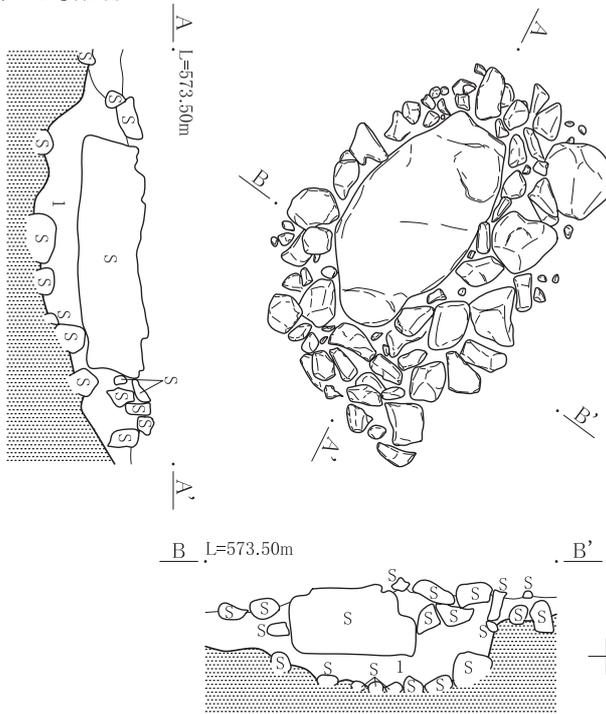
調査年度 平成8・10年度

位置 S-24グリッド

経過 周囲を含め礫の非常に多い地点であるが、巨礫を中心としてその周囲に小礫が環状に配されている様子があり、配石として調査を行った。

重複 調査時点では明確ではなかったが、配石調査後に18区4号住居（加曾利E3新段階）が確認さ

18区13号配石

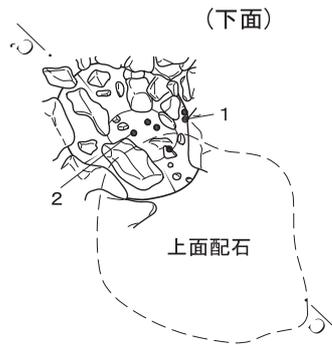
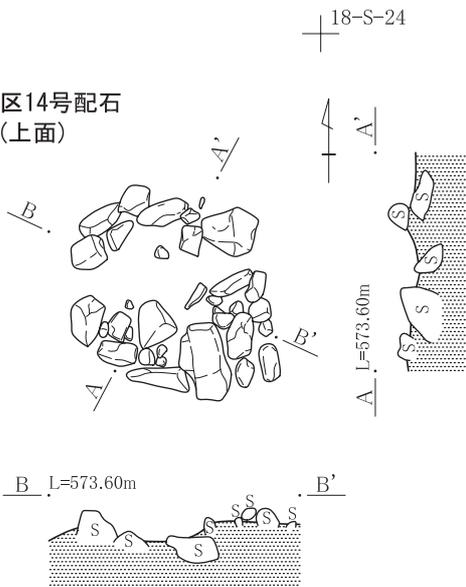


18区13号配石

18-R-24

1、黒褐色土 バサバサしたやわらかい土。軽石を含まない。

18区14号配石
(上面)



1、黒褐色土 しまりなくやわらかい。軽石と炭を少量含む。

0 1 : 40 2m

第92図 18区13号・14号配石

第3章 発見された遺構と遺物

れており、4号住居より後出と考えられる。また、東に18区13号配石、南に18区14号配石が近接する。

形状 中央の礫は、長さ120cm、幅80cm、厚さ46cmの巨礫であり、上面がほぼ水平になるように配置されている。周囲の礫は径5～40cm程であり、巨礫の周囲に一重に巡らされている。周囲の礫を含めた規模は長軸155cm、短軸110cmの楕円形を呈している。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 中央の巨礫を含めて全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 -

遺物 土器は中期後半から後期前半の土器が総数108点が出土した。そのうち、巨礫の直下から加曾利E3式新段階から同E4式の土器片が出土し、周辺からは堀之内1式の土器片が主体的に出土したが、前者は重複する4号住居の遺物と考えられる。石器は磨石類が4点出土している。

所見 巨礫の直下からも多数の遺物が出土しており、このタイプの配石が人為的なものと判断した根拠の一つとなった配石である。巨礫の下から出土した中期後半の土器は実際には重複する4号住居の遺物と考えられるが、この配石は加曾利E4式以降に構築されたという点は確認できる。

18区16号配石

調査年度 平成8・9年度

位置 T-25グリッド

経過 巨礫を中心としてその周囲に小礫が環状に配されている様子があり、配石として調査を行った。

重複 南東部を18区5号住居(加曾利E3新段階)と接しているが、重複関係は不明である。また、17号配石とも重複するが先後関係は不明である。

形状 中央の礫は、長さ80cm、幅70cm、厚さ30cmの巨礫であり、上面がほぼ水平になるように配置されている。周囲の礫は10～45cm程であり、巨礫の周囲に一重に巡らされている。周囲の礫を含めた規模は長軸125cm、短軸90cmの楕円形を呈している。

下部遺構 中央の巨礫と周囲の礫を含む範囲の下部

より土坑状の掘り込みが認められる。長軸100cm短軸90cmの楕円形を呈している。長軸の方向は配石と約90°ずれている。深さは、巨礫の上面から62cm、巨礫の下面から計測すると32cmである。

石材等 中央の巨礫を含めて全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 -

遺物 巨礫下の土坑状掘り込み内を中心に、中期後半から後期前半の土器破片が総数29点出土しており、石器は石鏃2点、加工痕ある剥片1点の他に、剥片2点、細片30点が出土している。

所見 本遺構は隣接する遺構よりかなり高いレベルで確認されており、東側に接する5号住居の確認面より25cm上に巨礫がのっている状況で、本配石の下部掘り方の下にある礫が5号住居の床面に相当する。出土遺物としたものも5号住居の覆土や遺構外遺物の可能性もある。

18区17号配石

調査年度 平成9年度

位置 T-25グリッド

経過 調査時点で角柱状の礫が直立した状態で確認されたため、配石として調査を行った。

重複 18区16号配石と重複し、16号配石の調査終了後に本配石の調査が行われた。16号配石が後出の可能性はあるが、断定できない。

形状 北東に長さ48cm、一辺12cm程の角柱状をした礫が立石のように直立している。また、この立石を含む径100cm程の範囲に径10～30cm程の礫が円形に認められる。立石は、確認段階で上部の18cmが露出していた。

下部遺構 配石下部に径80cm、深さ32cmの土坑が確認された。立石は、この土坑の北東壁側の底面付近から直立している。

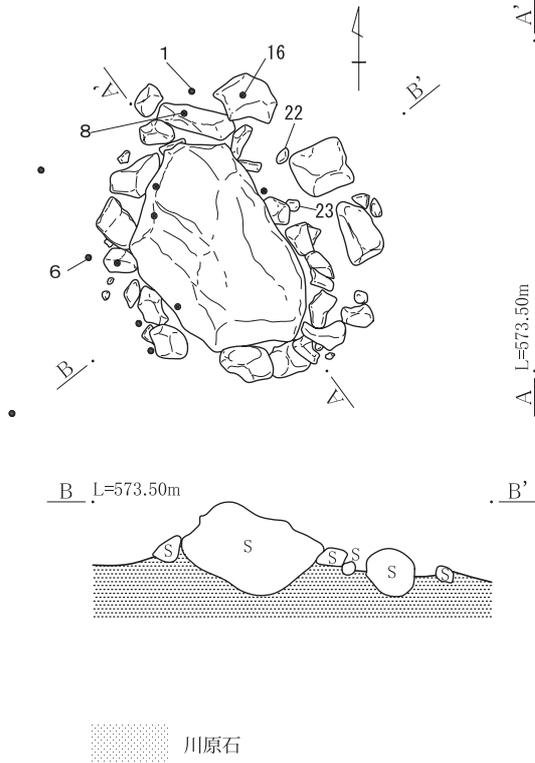
石材等 立石を含め、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 -

遺物 巨礫下の土坑状掘り込み内を中心に、中期

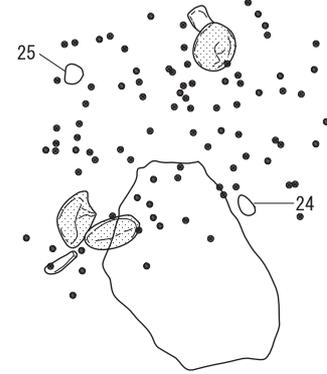
18区15号配石 (上面)

18-S-25



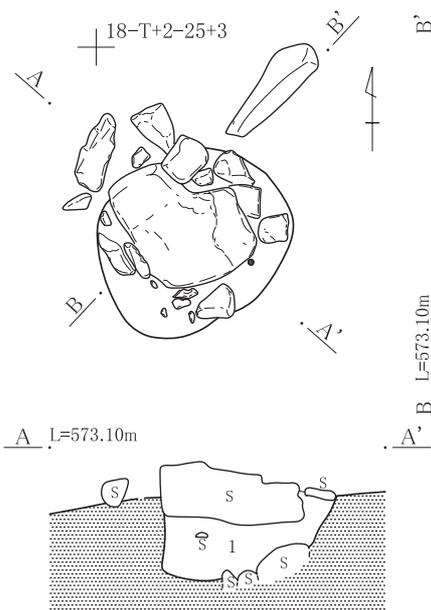
(下面)

18-S-25

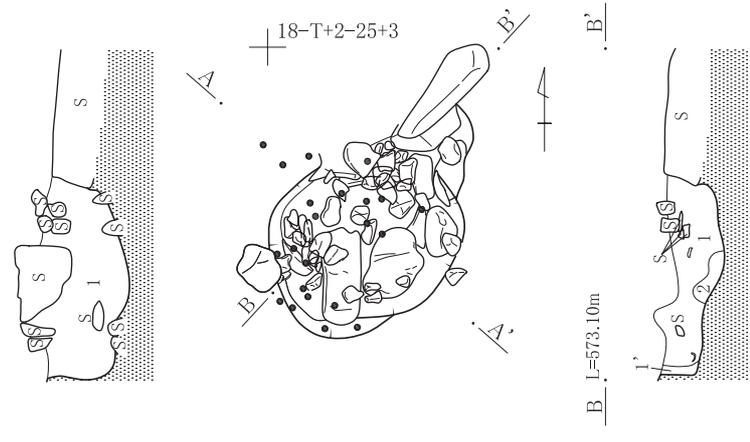


18区15号配石

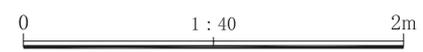
18区16号配石 (上面)



(下面)



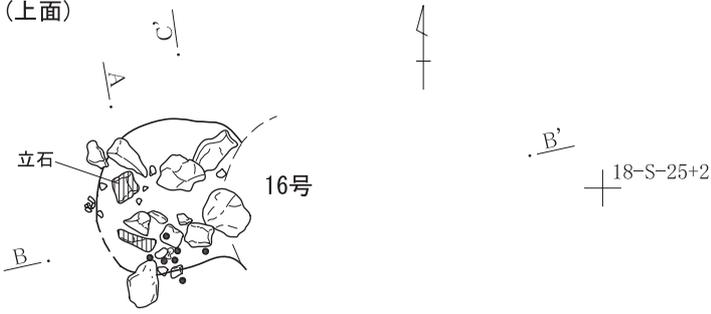
- 1、暗褐色土 しまりなくぼさぼさ。白色軽石粒は含まない。
- 1'、暗褐色土 1と同様であるが、1より縮まりがある。
- 2、黒褐色土 しまりあり、軽石少量混ざる。



第93図 18区15号・16号配石

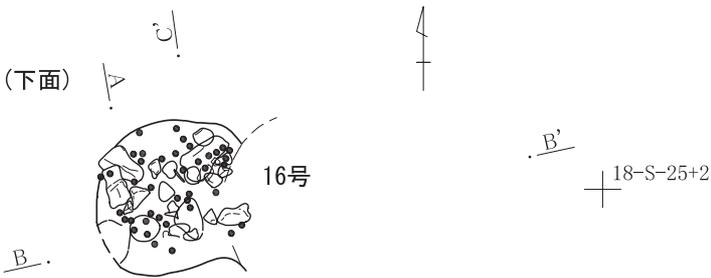
18区17号配石

(上面)



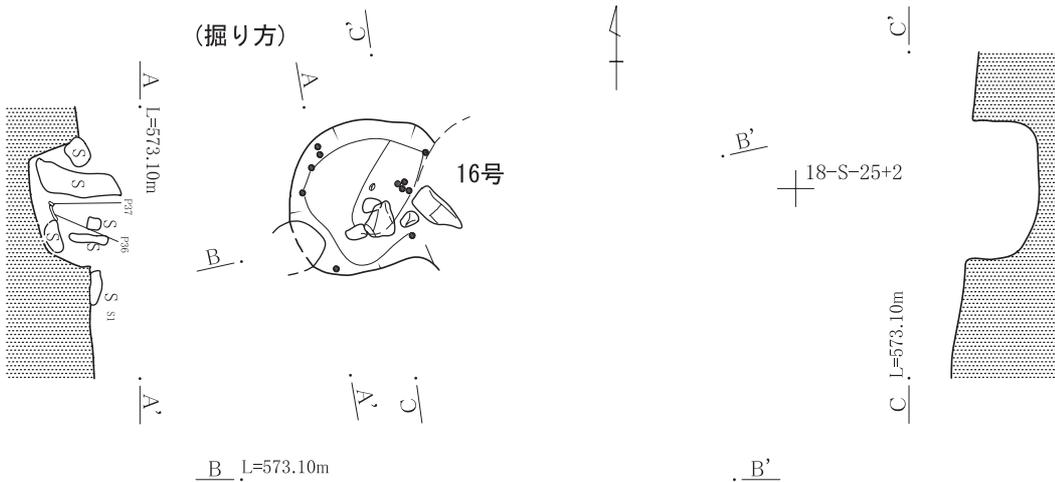
18区17号配石 (南東から)

(下面)



18区17号配石 立石と掘り方

(掘り方)



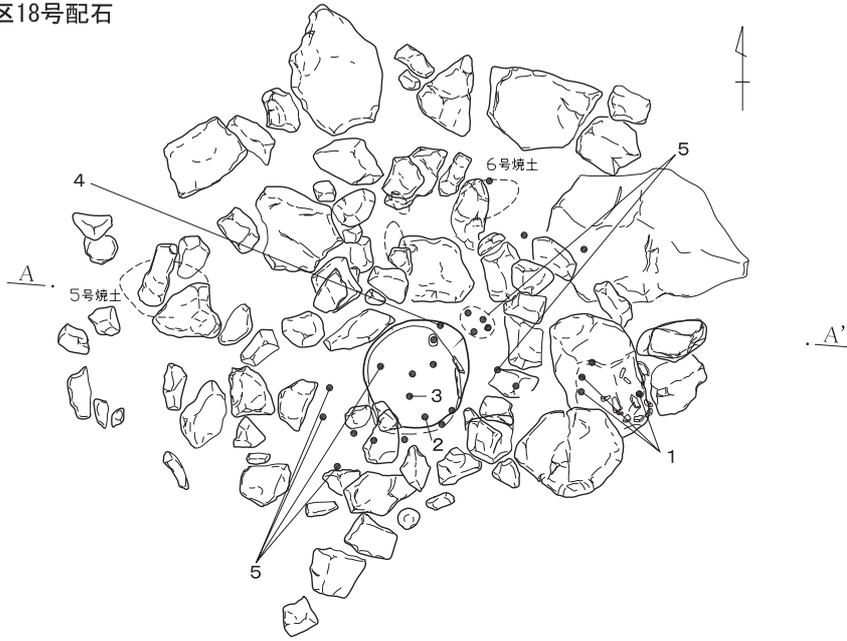
- 1、暗褐色土 しまり弱い。まじりものほとんどなし。
- 2、暗褐色土 はりボソボソ。まじりものなし。
- 3、黒褐色土 しまりあり。軽石・白色微粒粒混ざる。
- 4、暗褐色土 しまりあり。

縦位設置

0 1:40 2m

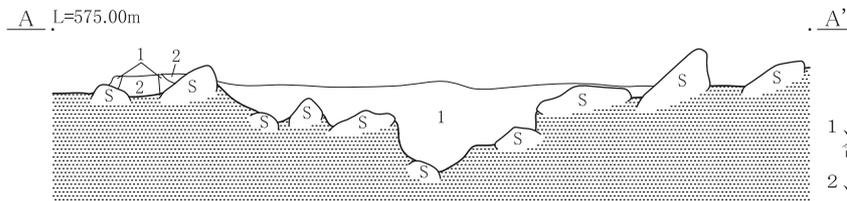
第94図 18区17号配石

18区18号配石



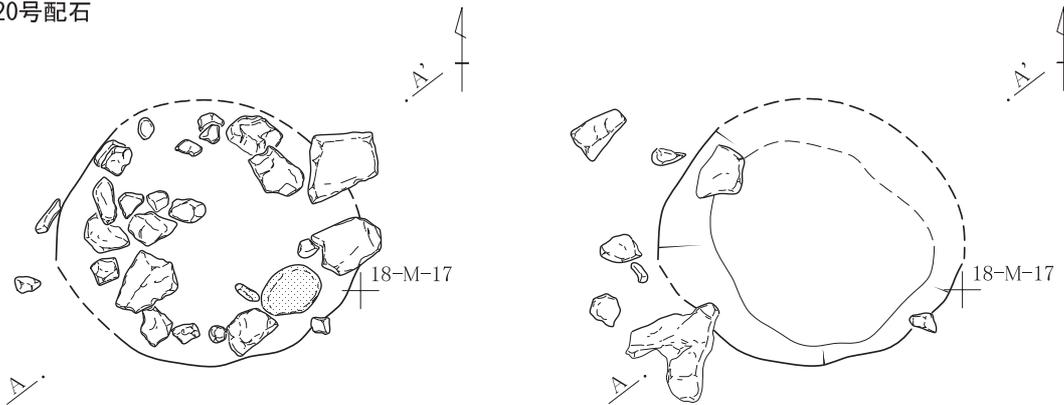
18-P-21

18-O-21



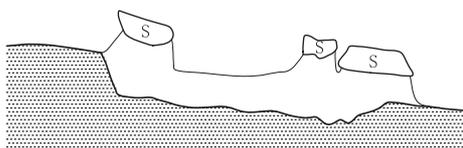
- 1、淡褐色土 黄褐色土をブロックで含む炭化物を少量含む。
- 2、淡褐色土 焼土を非常に多く混入する。

18区20号配石



A L=576.50m

A'



※明黄褐色土 地山の黄褐色土を多量に含む。 川原石

0 1:40 2m

第95図 18区18号・20号配石

第3章 発見された遺構と遺物

後半から後期前半の土器破片が総数59点出土しており、主な土器は加曾利E4式と称名寺式である。また、16号配石出土の土器と接合がするものがある。石器は石鏃未製品1点、加工痕ある剥片2点、敲石1点、石皿片1点、軽石製品1点の他に、剥片5点、細片49点が出土している。

所見 本配石も16号配石と同様に高いレベルで確認されており、同様のことが言える。また、両遺構の断面図を合わせてみると、17号の立石の頂部と16号の巨礫の頂部のレベルが一致しており、出土遺物も接合するものがあることから、16号と17号は一体の遺構だった可能性が考えられる。その場合、立石は用を成さないことになる。

18区18号配石

調査年度 平成13年度

位置 O-21グリッド

経過 バックホーによる表土掘削後の遺構確認作業で、3m四方の範囲で大型礫が環状に並んだ状態で確認された。内部の調査では、焼土の散布や遺物の出土も確認されたことから、当初は住居を想定して調査したが、内部を掘り下げると地山の礫が密集しており、炉や床面が存在しないことから、配石とした。掘り方調査で、中央付近に大きな柱穴が確認され、周囲を点検したところ、同規模の柱穴が方形に並ぶことから、1号掘立柱建物とした。

重複 配石範囲内に18区5・6号焼土があり、18区1号掘立柱建物と重複する。このうち、5号・6号焼土は遺構ではなく、遺物等と共に散布したものと判断された。なお、南東1.5mに18区14号住居(称名寺2式期)が近接する。

形状 径10~70cm程の礫が径3m程の環状に巡り、内部には礫が少ない。環状に巡らされる礫の用いられ方には規則性は認められない。

下部遺構 明確な掘り込みは確認できないが、配石内部の礫の少ない空間は、25~35cm程掘り下げると地山の礫となるため、人為的に礫が取り除かれている可能性も考えられる。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 -

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数106点出土しており、主な土器は後期称名寺式である。石器は小型の磨製石斧1点と剥片1点が出土している。

所見 礫が配置された状況は認められないが、礫の集中度が高く、遺物や焼土の散布も認められることから、1号掘立柱建物と関連する施設を想定したい。本地区は地山に多量の礫が含まれている。礫が雑然と集中するのは、掘立柱建物の柱穴を掘削した時に、掘り出された礫や周囲の礫を柱穴の周囲に寄せたためかもしれない。

18区20号配石

調査年度 平成14年度

位置 M-17グリッド

経過 バックホーによる表土掘削後の遺構確認で、礫が直径1.2mほどの環状に巡った状態で確認されたことから、配石として調査した。この地点は地山に礫を含まないため、明瞭な状態で確認された。

重複 重複する遺構は無い。

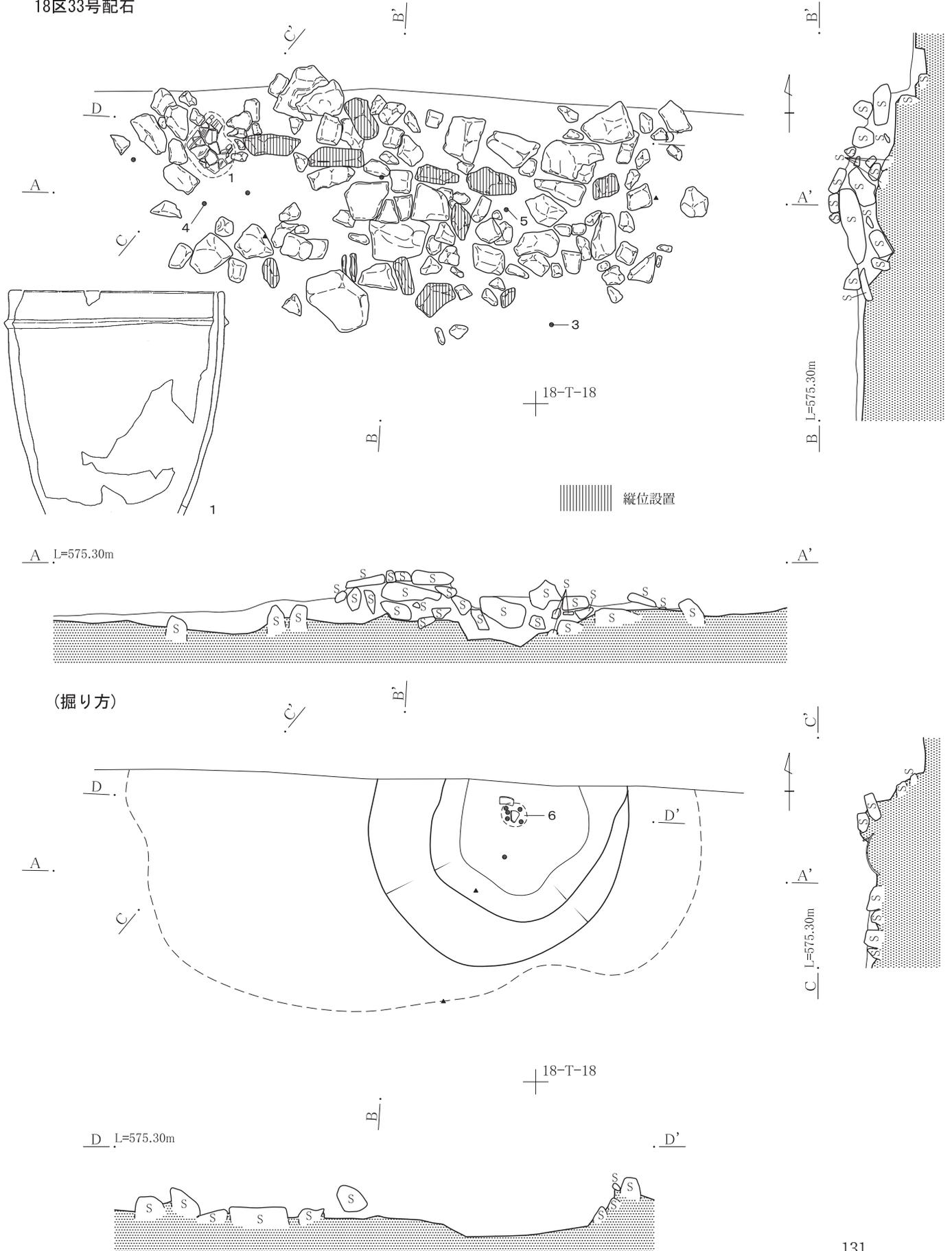
形状 直径1.2mの円環状に礫が配置されている。使用された礫の大きさは10~40cmと様々だが、扁平な礫が多用されており、扁平な川原石も1石含まれている。礫の配列は、長軸を横長につなぐように用いて環を構成しているが、明瞭でない部分も見られる。なお、東側に一番大きな板石2石を、やや傾けて並べるように配置している。

下部遺構 北東部の範囲が確認できなかったが、配石の直下に土坑状の掘り込みが確認された。平面形状はほぼ円形で、径145cm、深さは礫の上面から40cmである。

石材等 環を構成する礫に川原石が1石用いられている。その他は、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 -

18区33号配石



第96図 18区33号配石

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 土器は後期のものが3点のみで、石器は剥片1点が出土した。

所見 配石の規模や、板状礫を使用して長軸をつなげるように配置する点は20区2号配石と共通しており、配石遺構の一つのパターンを示しているものとする。

18区33号配石

調査年度 平成14年度

位置 T-18グリッド

経過 周囲を含め礫の非常に多い地点であるが、扁平な礫あるいは立った状態の礫が多く見られ、遺物も含まれているため、住居を想定して調査したが、炉をはじめとする住居施設が確認できないことから、配石とした。

重複 重複する遺構は無い。ただし配石北側は、配石として認識する前にトレンチ調査を行ったため検出できなかった。

形状 東西4m、南北は北側のトレンチのため不明であるが現況で2mの範囲を配石として調査を行った。礫同士は密集しており、積み重ねたような状況を呈している。その中で、扁平な礫を東西方向に立て並べた箇所も認められる。一見すると人為的なものか否か判断し兼ねるが、礫の間や礫の下から遺物の出土があるため人為的な配石としたものである。

下部遺構 積み重ねられたような礫を取り除くと、地となる層も礫を多く含むものであるが、配石のやや東よりの箇所に礫をほとんど含まない落ち込みが認められた。規模は、2mのほぼ円形を呈している。

石材等 川原石は1石のみで、他は全て地山に含まれるものと同じ粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数14点出土しており、主な土器は称名寺式である。石器は石核1点と台石1点が出土している。

所見 北側を大きく失っているため断定はできないが、やはり住居の可能性は捨てきれない。

18区34号配石（第11図参照）

調査年度 平成14年度

位置 O・P-12グリッド

経過 18区7号列石を調査中に、礫を少しづつはずしながら掘り下げていったところ、列石中に円形に礫の集中する部分があり、その下部に円形状の掘り方が確認されたため、これを配石とした。

重複 18区7号列石中に存在する。本配石部分の列石は明瞭な列をなしておらず、本来の位置を保っていないものと考えられる。確認状況から、配石が先に存在し、その上に列石が築かれたか、あるいは列石に付属するものとして本配石が築かれ、その後列石が崩れ、配石の上に乗るような形になった可能性がある。

形状 20～70cmの礫が180cm程の円形の範囲に集中して認められる。明瞭な石組みは看取できないが、扁平な礫か直立したり、やや傾いた状態で検出されている。

下部遺構 礫を取り除いたところ、径175cmのやや不整な円形のプランが確認された。礫をほとんど含まず、土坑というよりは、皿状の落ち込みといった状態である。礫を取り除いた状態からの深さは20cmである。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用し、1石のみ径40cmの扁平な川原石が使用されている。

方位 -

遺物 本遺構に特定できる遺物はない。

所見 18区7号列石は近世以後の石垣の裏込め部分から確認されており、本遺構もその一部である可能性もある。

18区35号配石

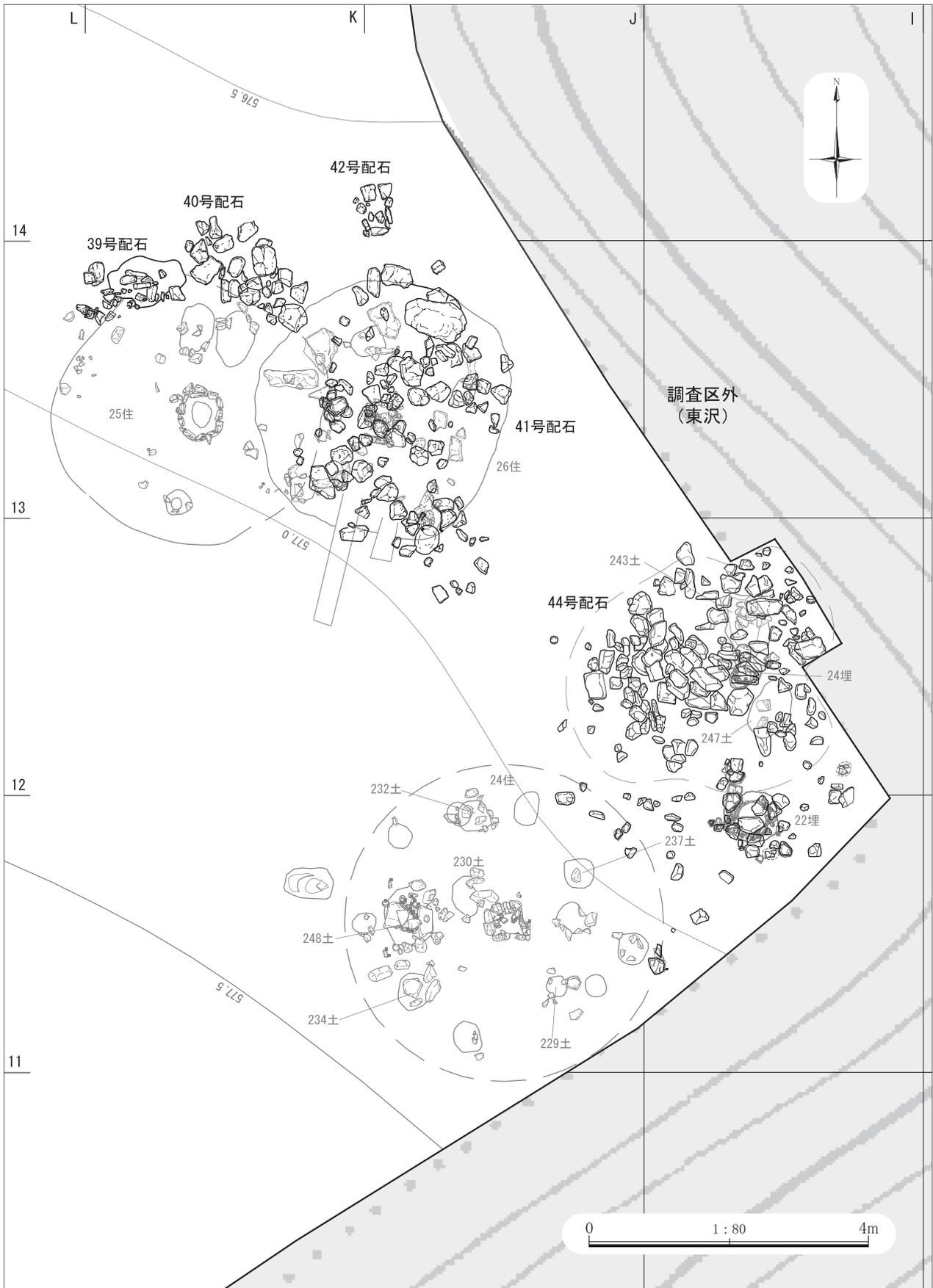
調査年度 平成14年度

位置 P-12グリッド

経過 18区34号列石と同様である。

重複 34号配石と同様である。

形状 10～70cmの礫が200cm程の円形の範囲に集



第97図 18区39号～44号配石遺構分布図

第3章 発見された遺構と遺物

中して認められる。明瞭な石組みは看取できないが、扁平な礫が直立、あるいはやや傾いた状態で検出されている。また、大型の多孔石が使用面を上に向け、据えられたような状態で出土している。この場で使用されたものかどうかは判断できない。

下部遺構 列石の軸と同方向に長い楕円形を呈する土坑が確認された。長軸は210cm程、短軸は132cm、深さは配石確認面から32cmである。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 本遺構に特定できる遺物はない。

所見 34号配石と同様である。

18区39号配石

調査年度 平成14年度

位置 K-13グリッド

経過 表土掘削後の精査中に、扁平な礫2石が直角に組み合い検出されたため配石とした。

重複 18区26号住居の西側に重複する、25号住居の推定範囲の北側に接するような位置に存在する。

形状 厚さ10cm前後の方形をした扁平礫2石を直立状態で用い、直角に組み合わせている。また、礫上面の高さも揃えられている。本来は南辺・西辺に同様な礫が存在し、方形に組み込まれていた可能性もあるが、検出段階では判断できなかった。礫に熱を受けた痕跡は認められず、炉ではないと判断し配石としたものである。なお、周囲には扁平礫の小片が数多く認められた。

下部遺構 楕円形状の浅い掘り込み内に設置されている。

石材等 2石とも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 土器は中期後半加曾利E3式期の破片が4点出土しており、石器は敲石1点が出土している。

所見 この地区は削平が進んでいることから、失われた住居が存在した可能性があり、本遺構も住居

の施設だった可能性もある。

18区40号配石

調査年度 平成14年度

位置 K-13グリッド

経過 表土掘削後の精査中、川原石を含むやや大型の礫が集中する箇所があり、配石として調査を実施した。

重複 本配石の調査終了後、南に接する位置に18区25号住居が確認された。調査時点では、独立の配石として調査を行ったが、25号住居（加曾利E4式期）と関連する遺構と考えられる。また、周囲には39・41・42号配石がある。

形状 長軸220cm、短軸120cmの範囲に径20～50cmの礫が集中して認められる。川原石は南東端に位置する。礫は、直立するもの、水平に据えられた状態のものも認められるが、意識的に配列されたとは認識し難いものが多い。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 大部分の礫は地山に含まれるものと同様な亜角礫を使用しているが、平らな面があり、ある程度の厚みをもった直方体状の礫を選択している可能性がある。南東端に川原石が1石認められる。

方位 —

遺物 土器は小片2点のみで、石器は磨石が1点出土している。

所見 南に隣接する18区25号住居は加曾利E4式期の住居であり、柱穴の配列等から、本配石の位置に張り出し部を有する可能性がある。本配石はその張り出し部に該当する可能性が高いが、礫の検出状況は乱れており、その後の攪拌が考えられる。

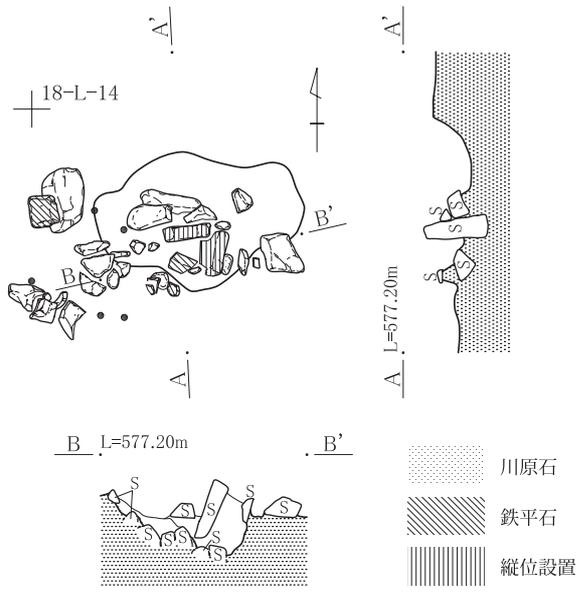
18区41号配石

調査年度 平成14年度

位置 J-13グリッド

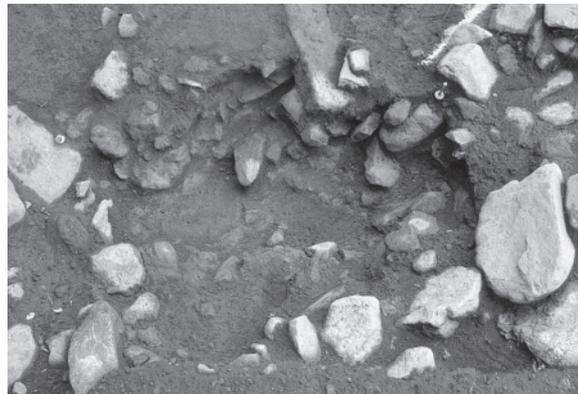
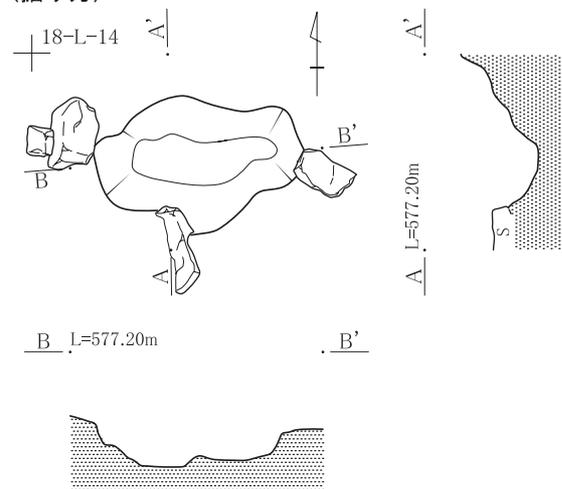
経過 表土掘削後の精査中に、石皿や多孔石、川原石を含むやや大型の礫が集中する箇所があり、配石として調査を実施した。その後、この配石の下か

18区39号配石
(上面)



18区39号配石

(掘り方)

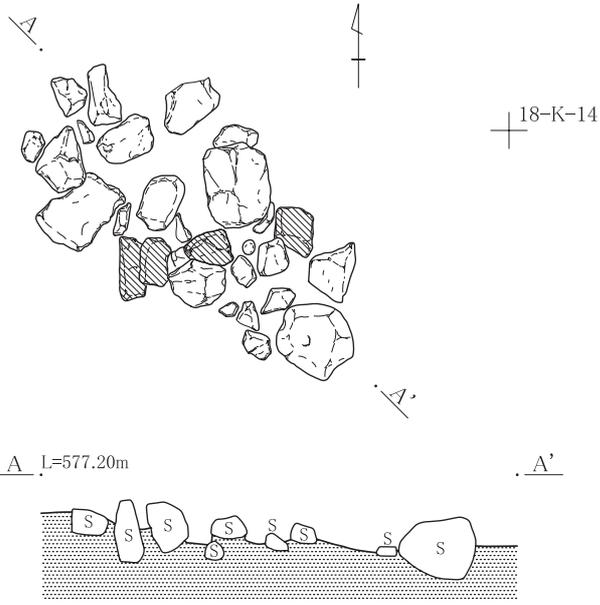


18区39号配石 掘り方

0 1:40 2m

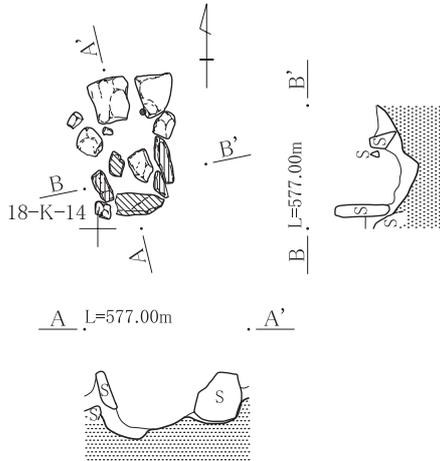
第98図 18区39号配石

18区40号配石



18区40号配石

18区42号配石



18区42号配石

0 1:40 2m

 鉄平石
 縦位設置

第99図 18区40号・42号配石



第100図 18区41号配石

第3章 発見された遺構と遺物

ら18区26号住居（加曽利E 4式期）が確認された。

重複 配石のほぼ真下に26号住居が重複し、25号住居と接する。配石検出面と26号住居炉との標高差は約40cmであり、25号住居とはほぼ同一面である。

形状 大小様々な礫が直径4 mほどの範囲に環状に集積され、東側にある東沢に面した部分は抜け落ちたように礫が希薄になった状態で確認された。礫は中央がやや窪むように希薄で、配石中には多孔石や石皿などの石器類と土器が多く含まれていた。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 大部分の礫は地山に含まれるものと同様な亜角礫を使用しているが、川原石を少量含む。また多孔石等の石器を含んでいる。

方位 —

遺物 中期後半から後期前半の土器が総数69点出土しており、主体は中期末加曽利E 4式である。石器は削器1点、磨石類2点、石皿1点、台石2点、多孔石5点、剥片1点の他に、石臼1点が出土している。

所見 本配石は、18区26号住居の覆土に相当すると判断する。26号住居の南側には中世以後の211号土坑が接しており、石臼はこの土坑に帰属するものであろう。

18区42号配石

調査年度 平成14年度

位置 J-14グリッド

経過 表土掘削後の精査中、扁平な礫2石が直角に組み合わせ検出されたため配石とした。

重複 重複する遺構は無いが、18区40・41号配石と隣接し、南側1 mに26号住居がある。

形状 南辺の礫は、24×22×6 cmの板状節理による「鉄平石」で、若干南に傾くが長辺を上にし、ほぼ垂直に据えられている。西辺は30×16×7 cmの扁平な礫が用いられ、短辺を上にし垂直に据えられている。東辺・北辺に礫は認められないが、本来は方形を呈していたものと推定される。東辺にも棒状の礫が有るが、他の2石と比較して標高差があり、こ

の礫の上に垂直に立つ石がもう1石据えられていたものと思われる。礫には被熱は認められず、炉とは考えられないため、配石とした。

下部遺構 規模は明確でないが、礫を配置するための掘り方が認められる。

石材等 板状節理の「鉄平石」と地山に含まれるものと同様な扁平な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 —

遺物 確認されていない。

所見 柄鏡型敷石住居の連結部に方形の石囲い施設をもつ例が本遺跡でも認められており、この部分には「鉄平石」が多用されていることから、その施設の可能性が考えられる。その場合、18区26号住居との関係も考慮する必要がある。

18区44号配石

調査年度 平成14年度

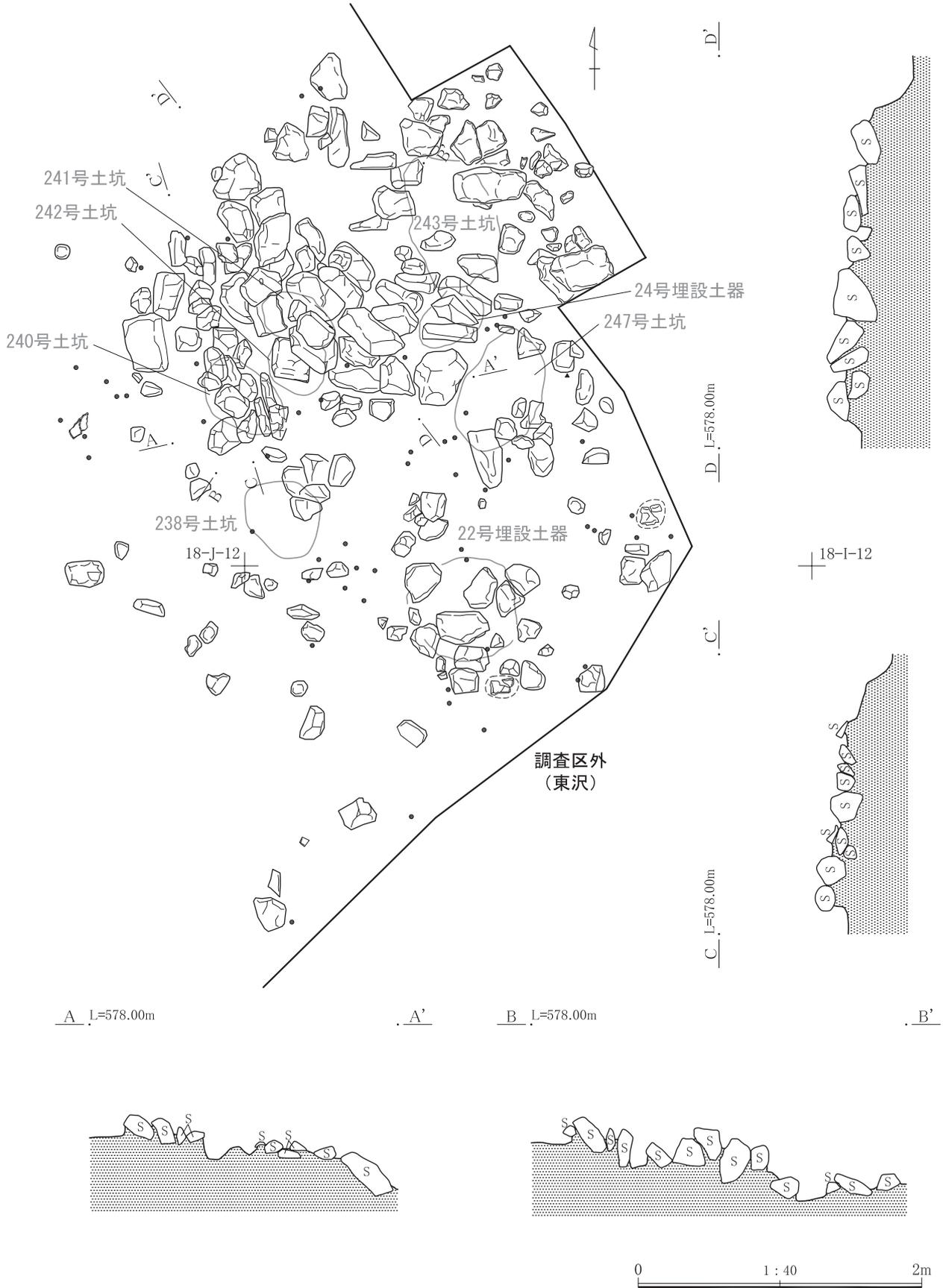
位置 J-12グリッド

経過 表土掘削後の精査中に、扁平な礫が積み重なるように検出されたため、配石として調査した。場所は東沢に面した角地で、崩落している可能性もあったが、礫の分布が調査区外に広がっている様子があるため、一部調査区の拡張を行った。

なお、本配石の調査後に、その下から土器埋設遺構や柱穴状の土坑が数多く確認され、調査段階にも住居の可能性が話題となったが、整理段階になるまで十分な吟味ができなかった。

重複 本配石の範囲には18区22号・24号土器埋設遺構や18区223号・238号・240～243号・247号が重複しており、本配石は223号土坑より古く、他の遺構より新しい。ちなみに、22号・24号土器埋設遺構はともに加曽利E 3式新～4式期である。

形状 礫は径5 m程の範囲に広がるが、主体となるのは北半の中心付近の長さ2.2m、幅1 mの範囲である。30～50cm程の扁平な礫が、やや傾いた状態で4・5段積み重ねられ、東南東—西北西に若干弧を描くように出土している。北西側は18区223号土



第101図 18区44号配石

第3章 発見された遺構と遺物

坑により壊されていることが考えられ、さらに延びていた可能性もある。

なお、弧の内側にあたる北東側には落ち込みがみられ、弧の北と南では1m程の標高差が認められる。調査区外のため明らかでないが、そのまま沢につながっている可能性も考えられる。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用しているが、若干川原石が含まれている。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数55点出土しており、主な土器は加曾利E3式新段階～同4式である。石器は石鏃1点、打製石斧2点、磨石類2点、剥片1点である。

所見 厚手の板状礫が数多く集積されており、出土遺物も多く、礫の下には2つの土器埋設遺構と柱穴状の土坑が5基ある。出土土器の時期と土器埋設遺構の時期に矛盾もないことから、本遺構は住居に伴う可能性が高く、礫の一部は住居の敷石であったと判断したい。時期は加曾利E3式新～4式期に比定したい。

18区45号配石

調査年度 平成14年度

位置 T-7グリッド

経過 18区5号列石の調査中に、列石の礫をはずしている段階で確認した。使われている礫が列石を構成する礫より小さく、周囲に同様な礫の密集状況が見られないため配石として調査を行った。

重複 18区5号列石の北側に接するように配置される。北西に重複する18区253号土坑との関係は、調査時点では確認できなかったが、その部分の配石が抉られたようになっているため、切られている可能性がある。

形状 5～25cm大の礫が密集し、径100cm程のやや不整な円形を呈する。礫の配置には、意図的な配列は認められない。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 ー

遺物 確認されていない。

所見 用途は不明瞭だが、18区5号列石とほぼ同時期に構築された遺構と考えたい。5号列石との関係ははっきりしないが、5号列石が崩れていく過程で重複した可能性がある。

18区49号配石

調査年度 平成14年度

位置 T-7グリッド

経過 18区6号列石の掘り方調査中に、列石の礫をはずしている段階で確認した。使われている礫は列石を構成する礫より小さく、周囲に同様な礫の密集状況が見られないため、単独の配石として調査を行った。

重複 18区6号列石の南に接するように配置される。

形状 径5～45cm程の亜角礫が密集し、長軸170cmの短軸120cmの楕円形を呈する。礫の配置には、意図的な配列は認められない。形状は異なるが、南西に隣接する18区45号配石と、礫の配し方、使用する礫種などの点において類似性が認められる。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な亜角礫を使用している。

方位 ー

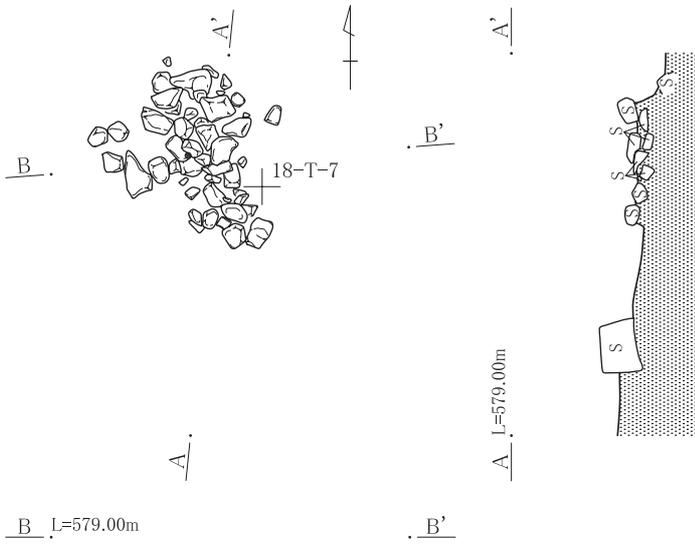
遺物 確認されていない。

所見 6号列石の掘り方調査段階で確認されており、6号列石構築以前あるいはほぼ同時期に構築された遺構と判断する。用途ははっきりしないが、形態は45号配石と類似しており、共通した性格の遺構と考える。

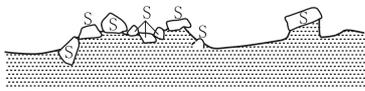


第102図 18区45号・49号配石遺構分布図

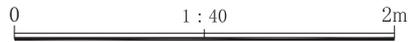
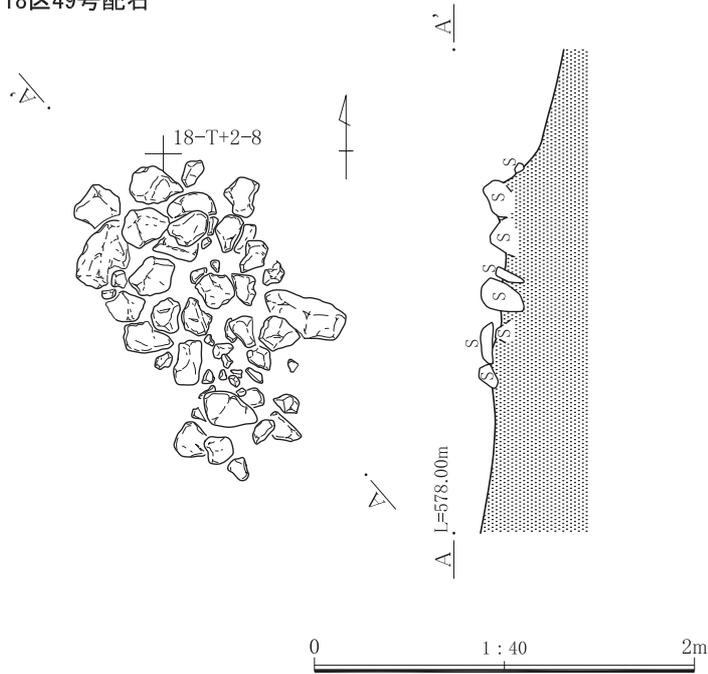
18区45号配石



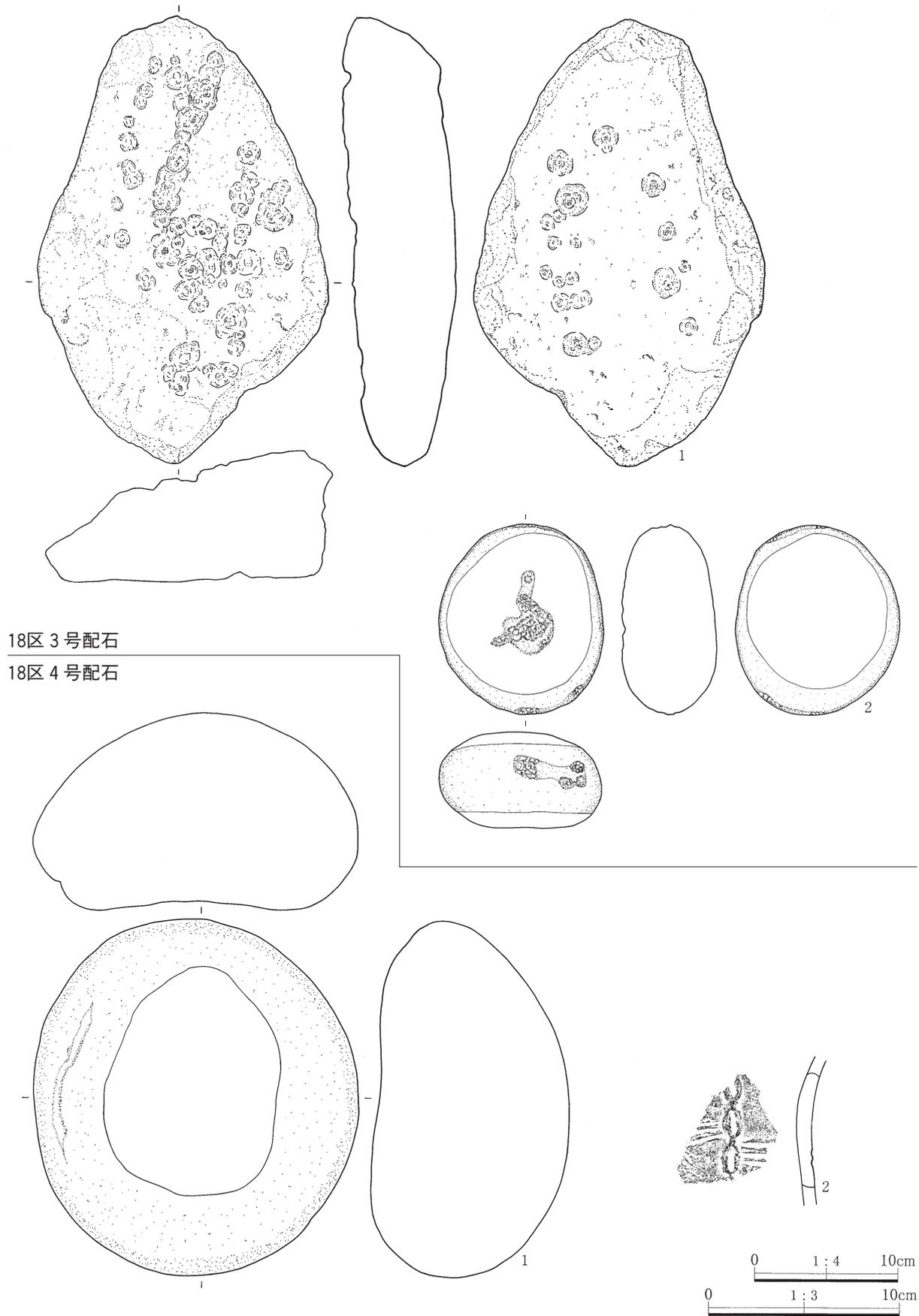
18区45号配石



18区49号配石



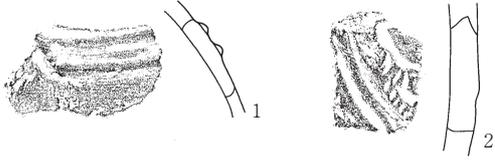
第103図 18区45号・49号配石



18区 3号配石

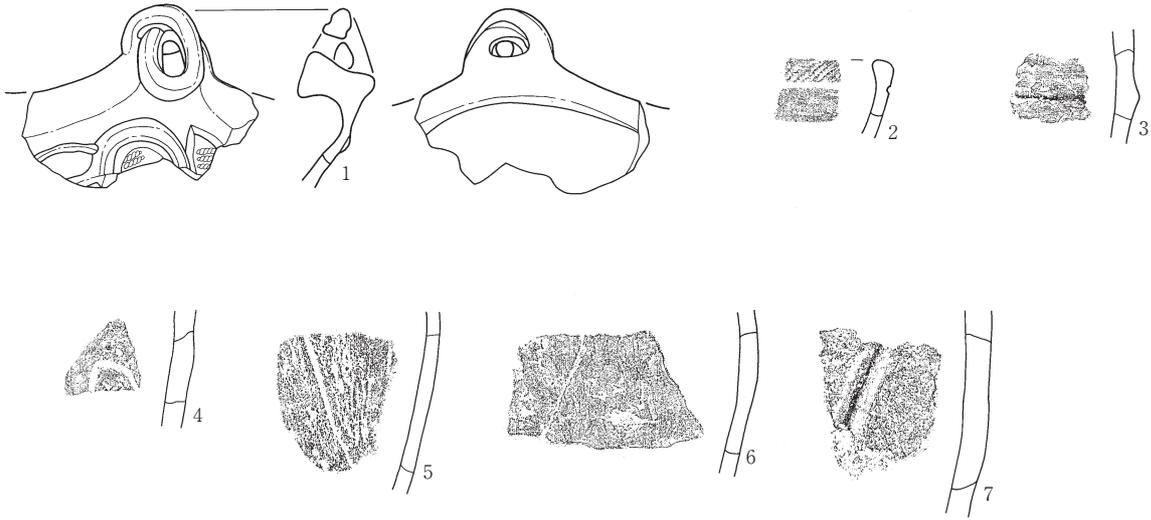
18区 4号配石

第104図 18区 3号・4号配石出土遺物

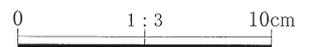
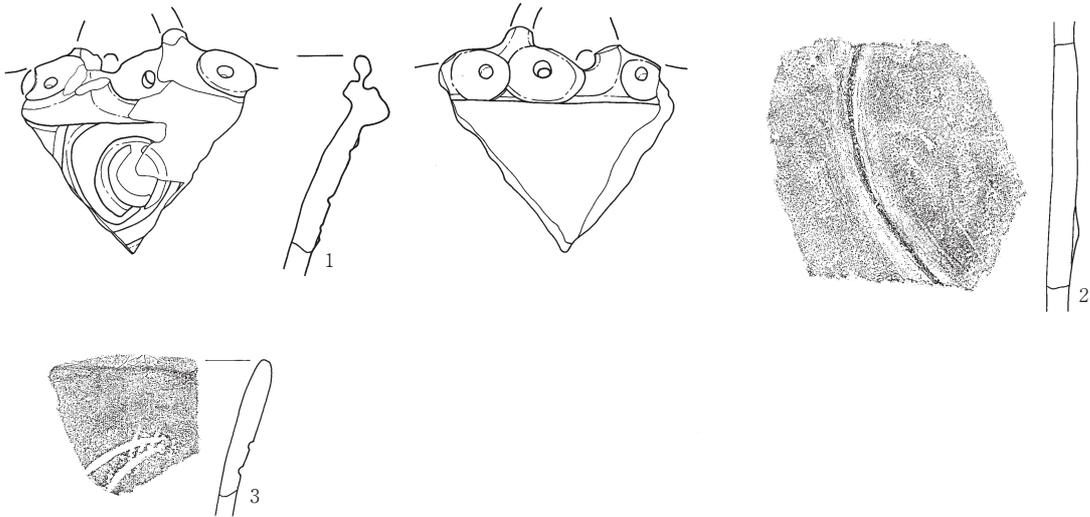


18区6号配石

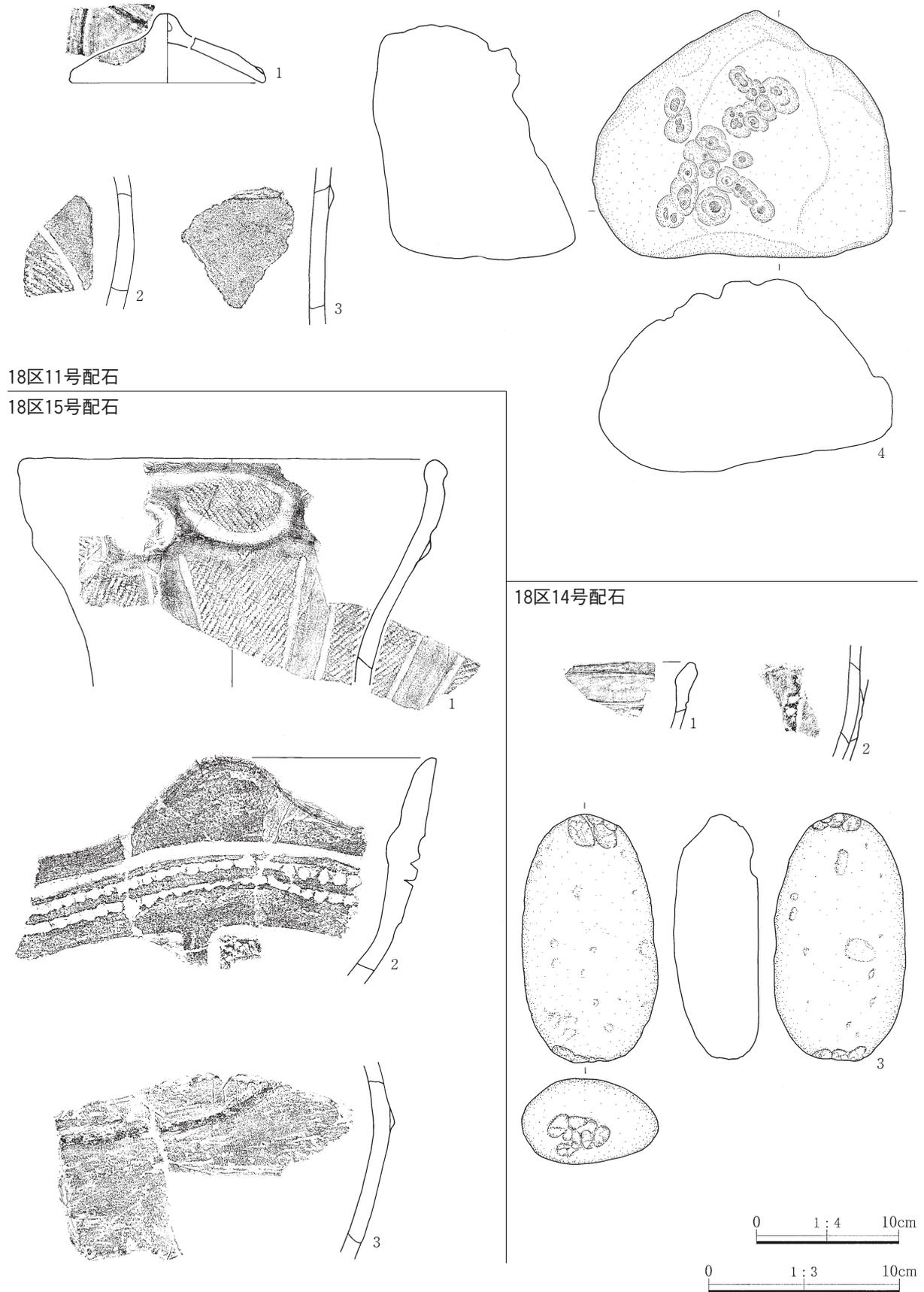
18区8号配石



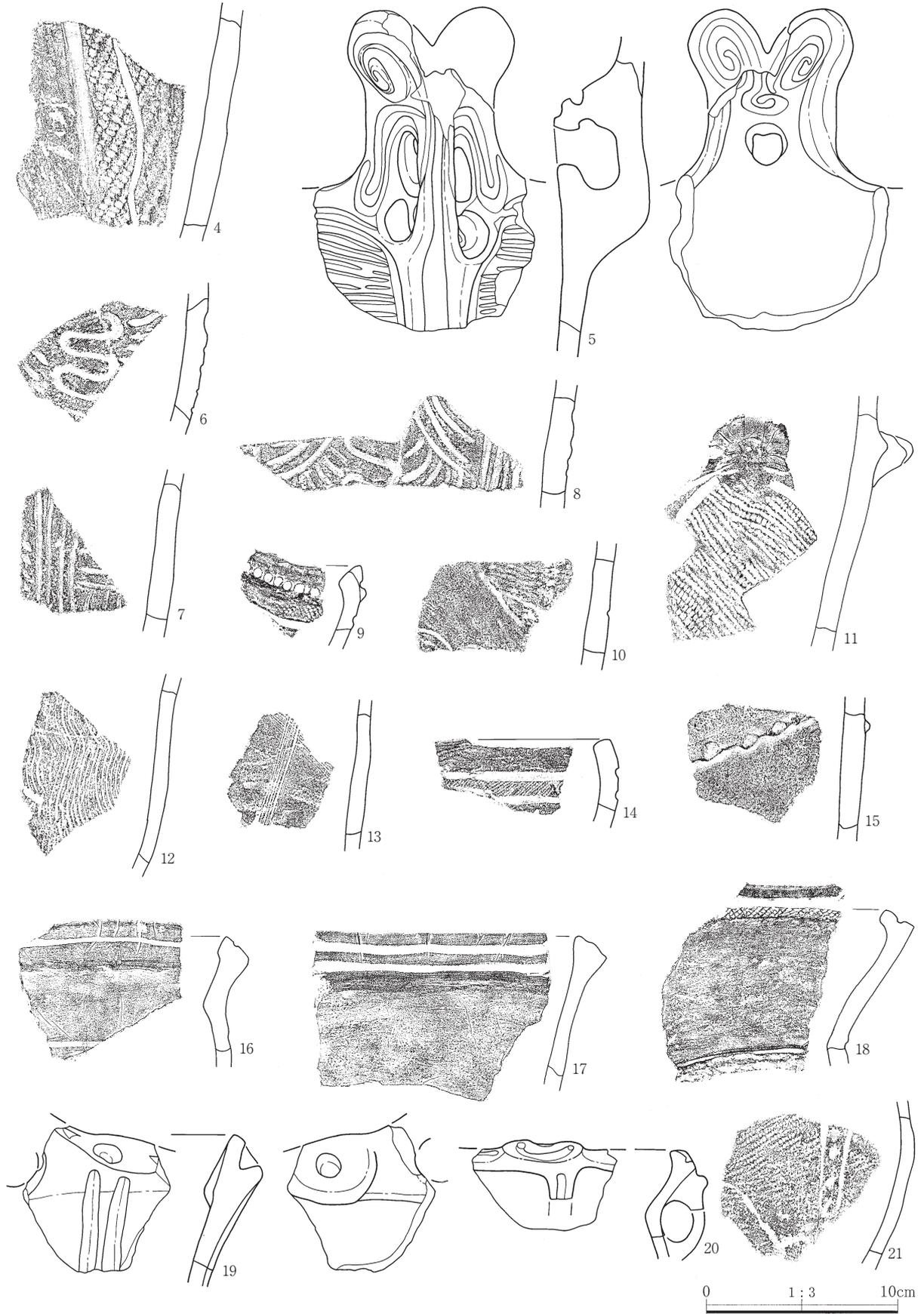
18区10号配石



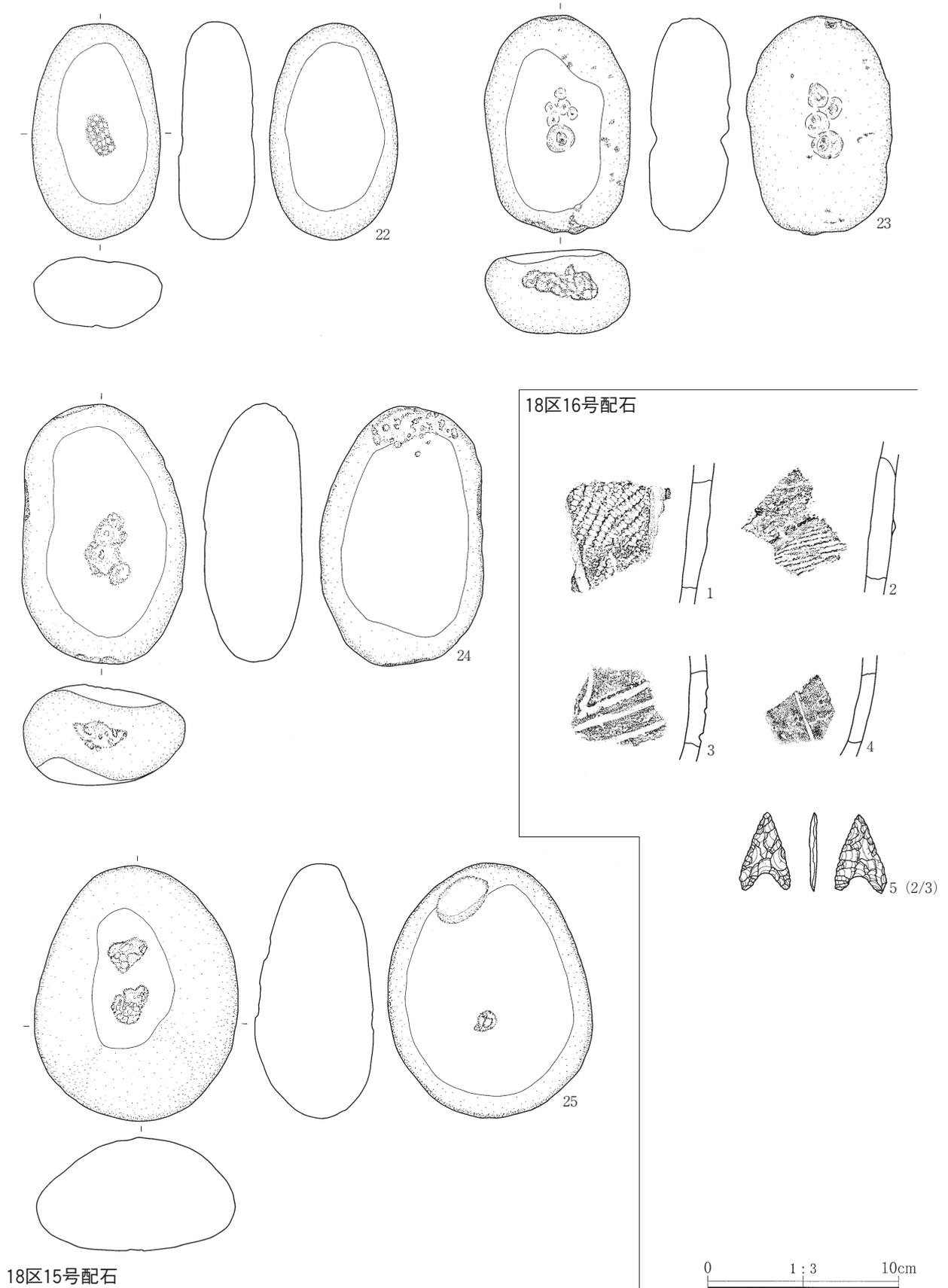
第105図 18区6号・8号・10号配石出土遺物



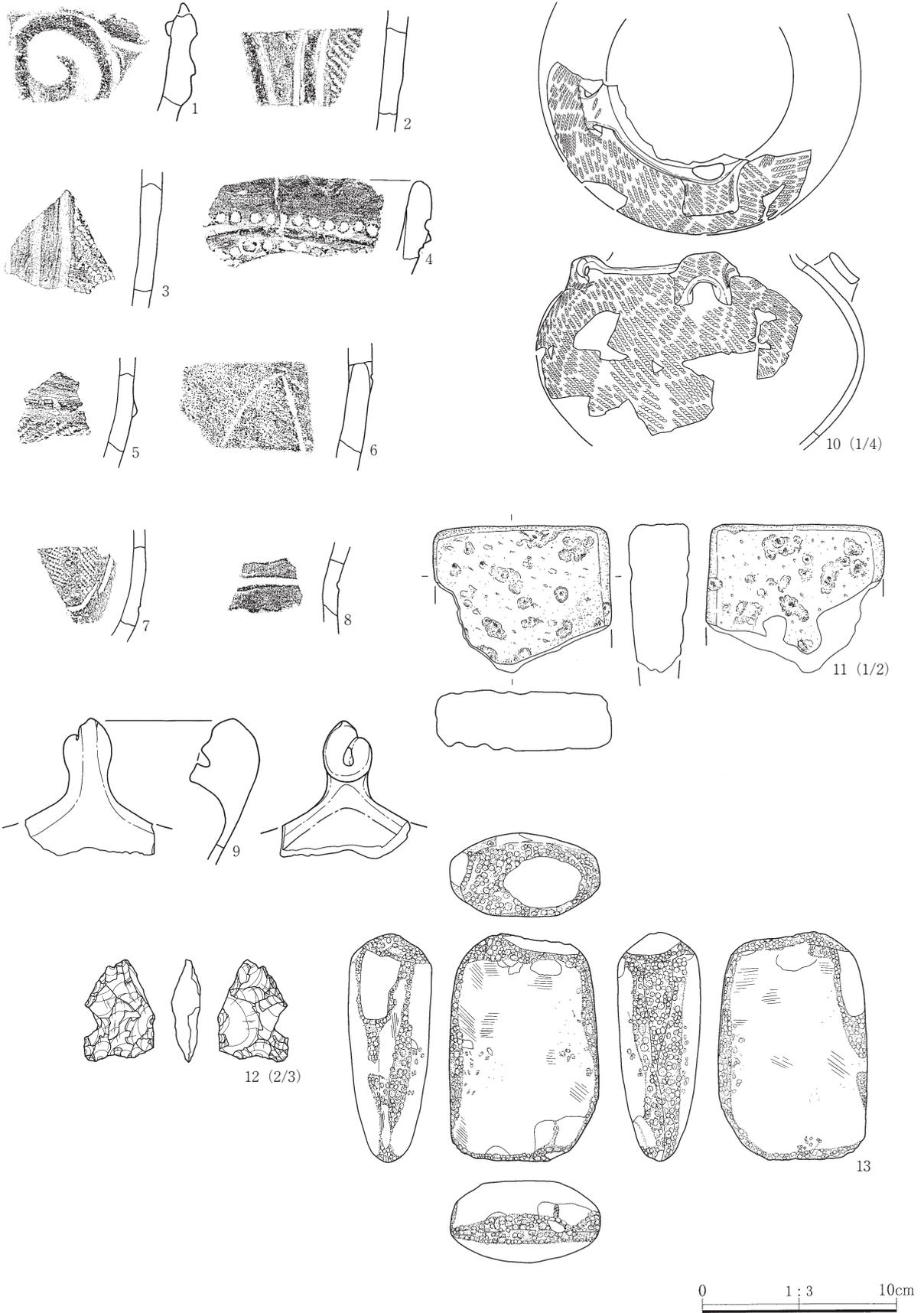
第106図 18区11号・14号・15号配石出土遺物



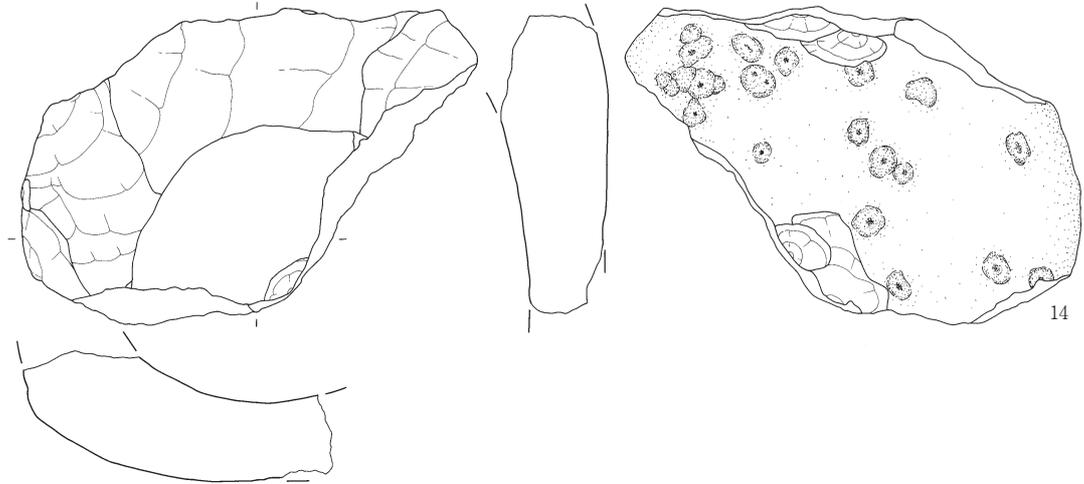
第107図 18区15号配石出土遺物



第108図 18区15号・16号配石出土遺物

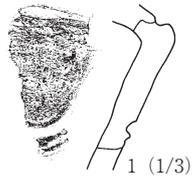


第109図 18区17号配石出土遺物

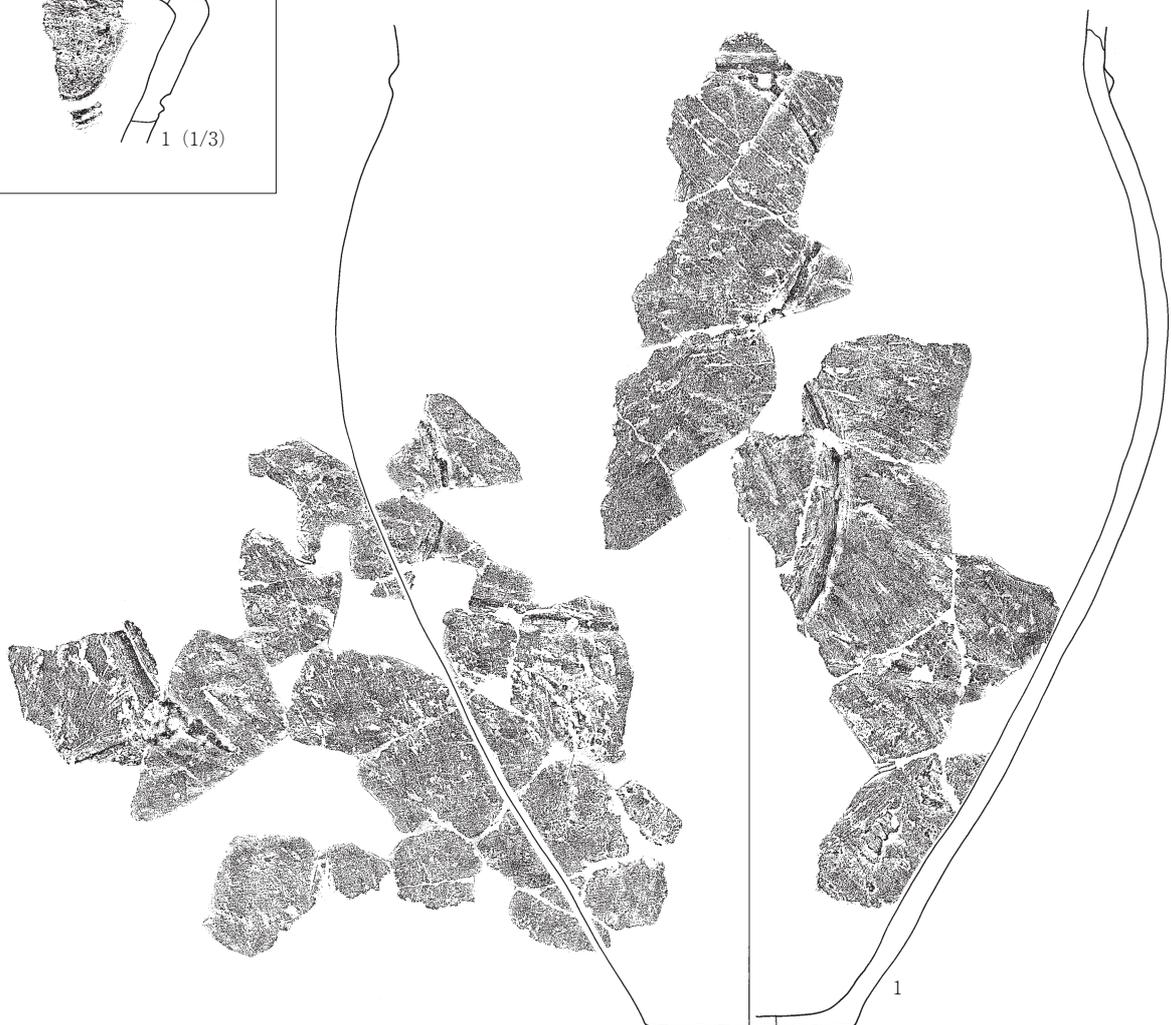


18区17号配石

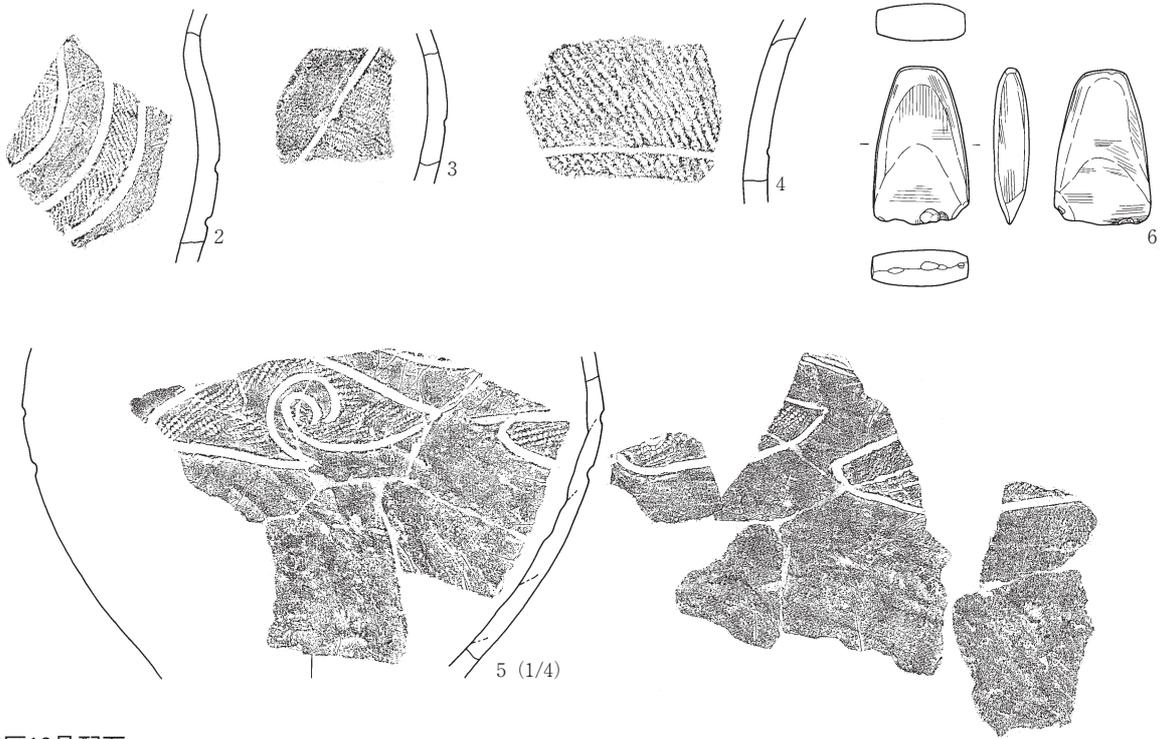
18区20号配石



18区18号配石

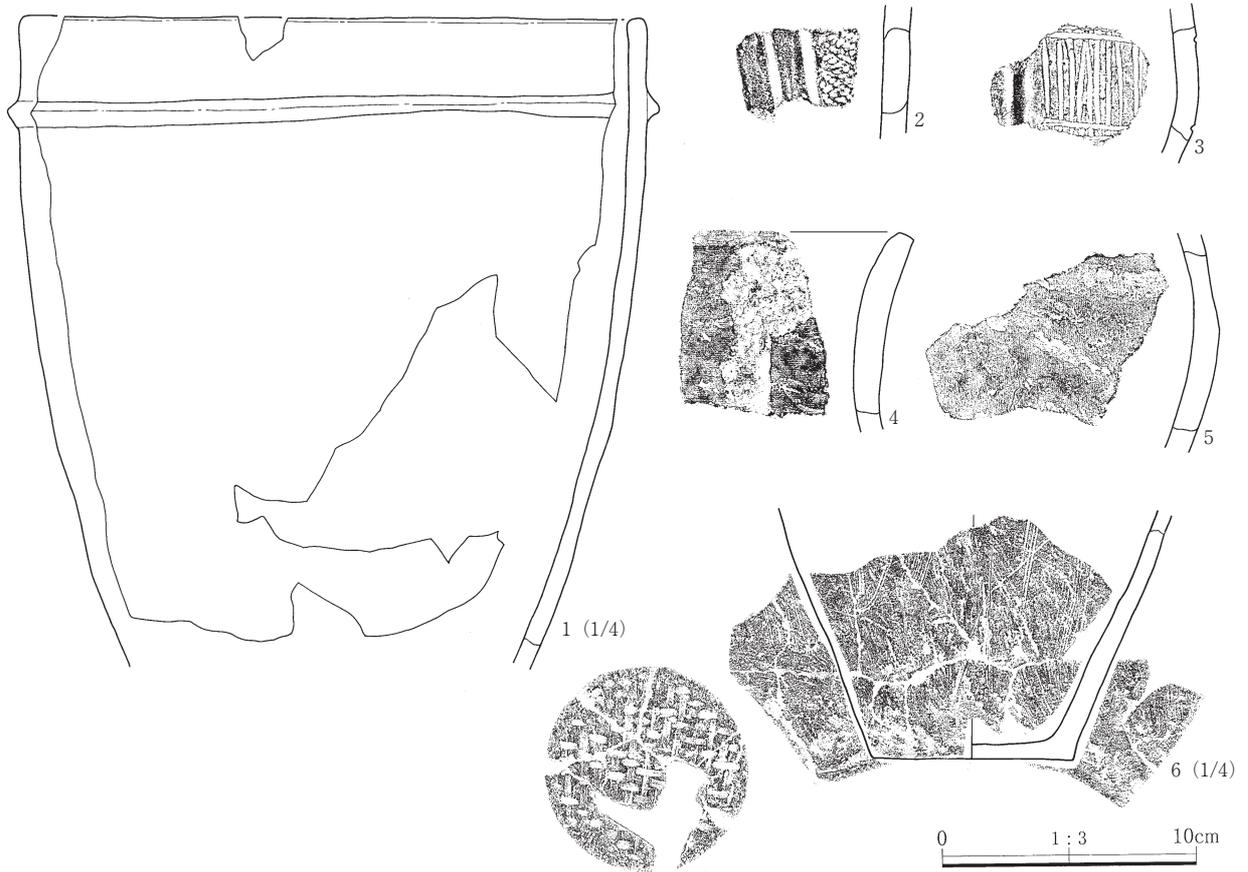


第110図 18区17号・18号・20号配石出土遺物



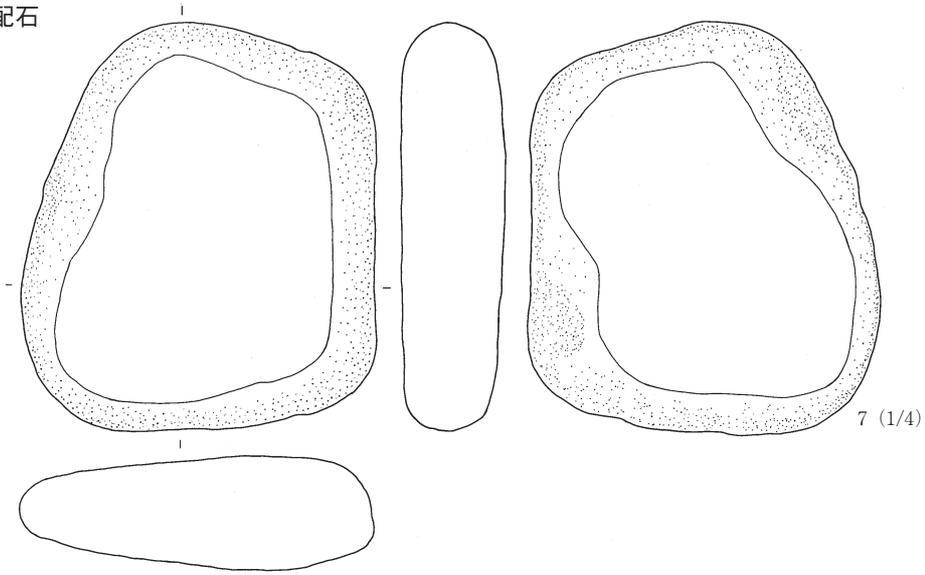
18区18号配石

18区33号配石

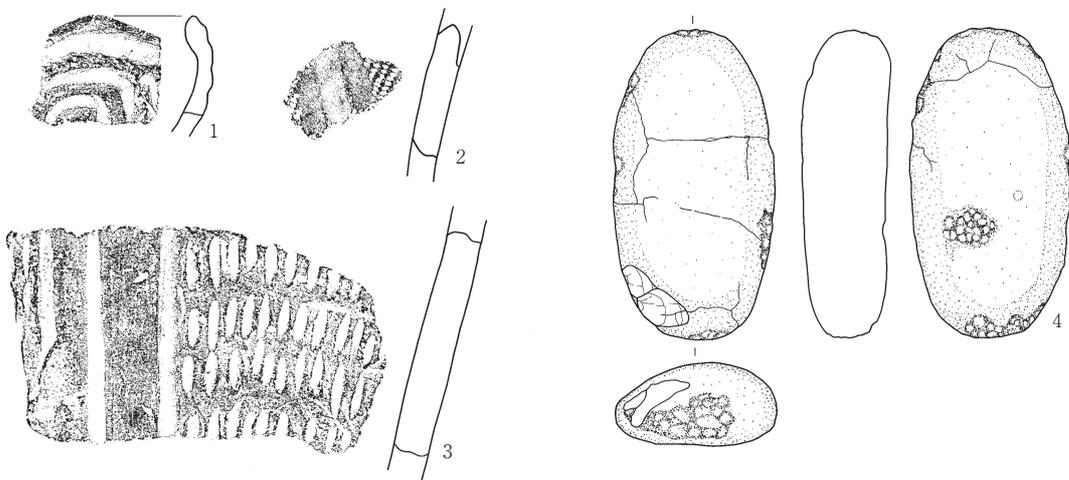


第111図 18区18号・33号配石出土遺物

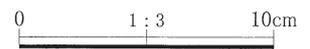
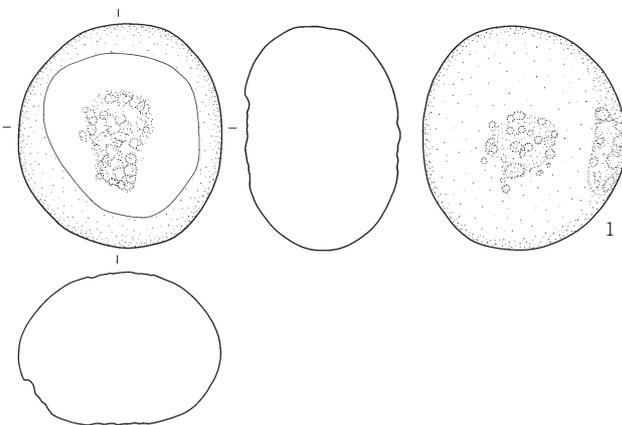
18区33号配石



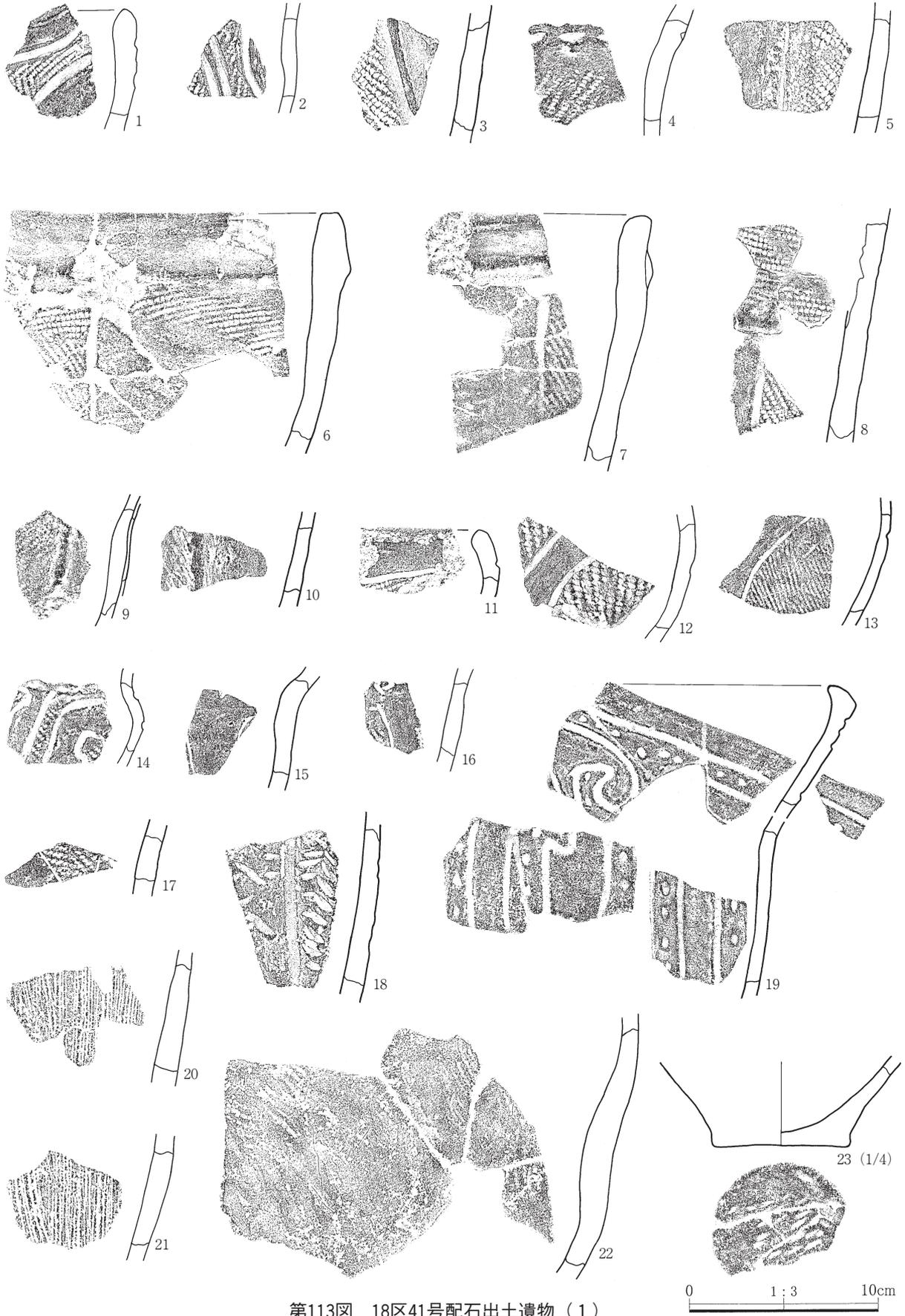
18区39号配石



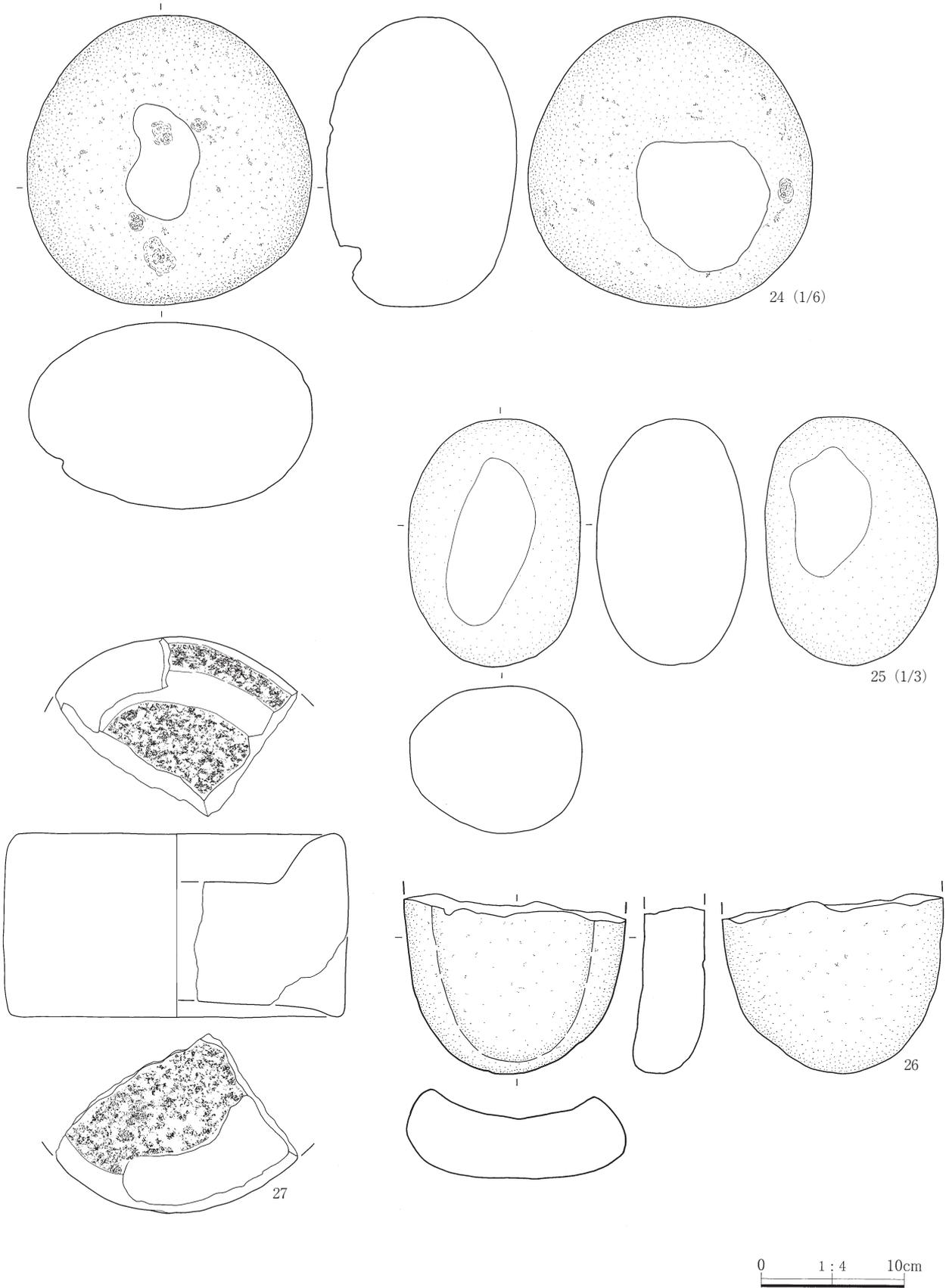
18区40号配石



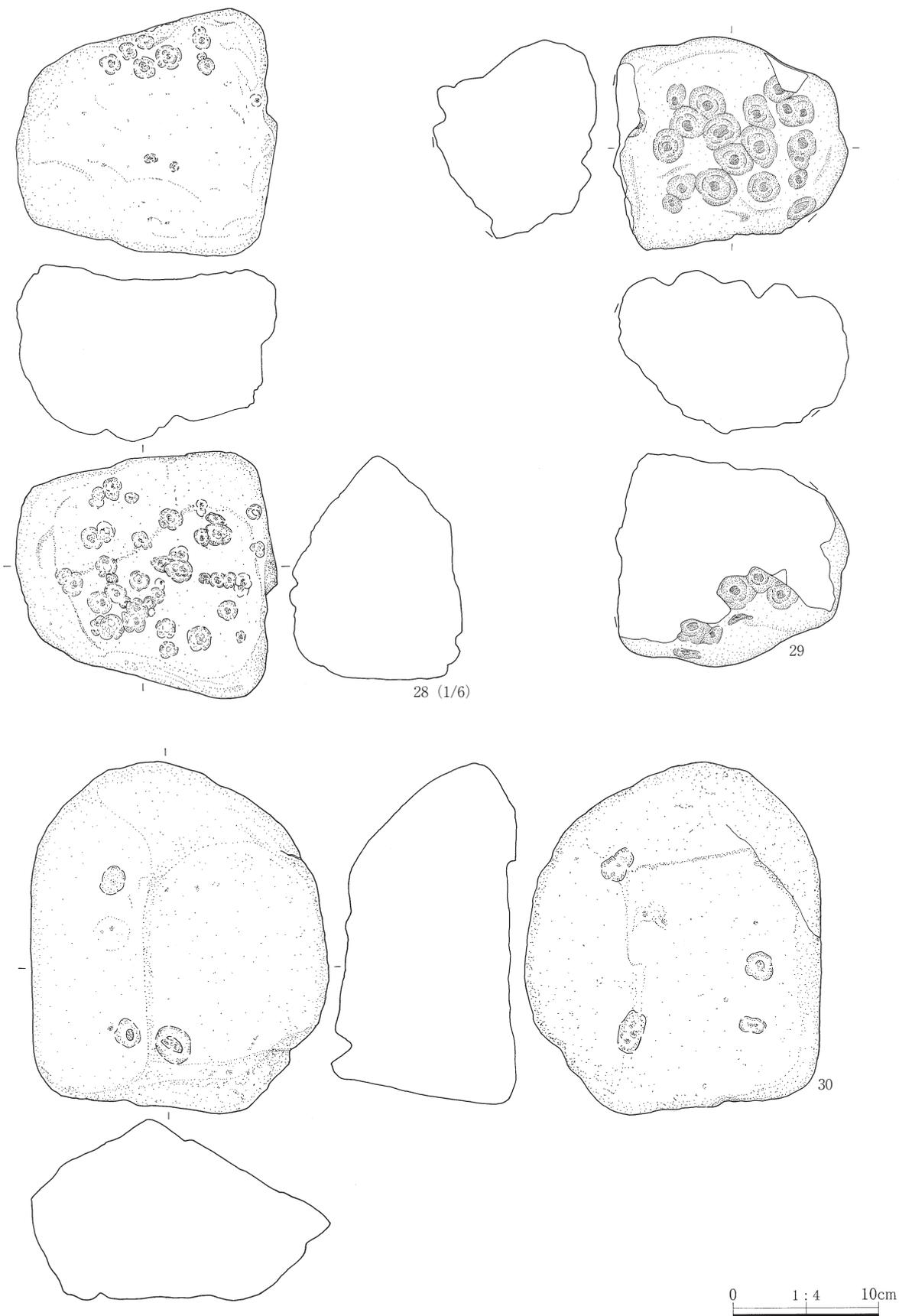
第112図 18区33号・39号・40号配石出土遺物



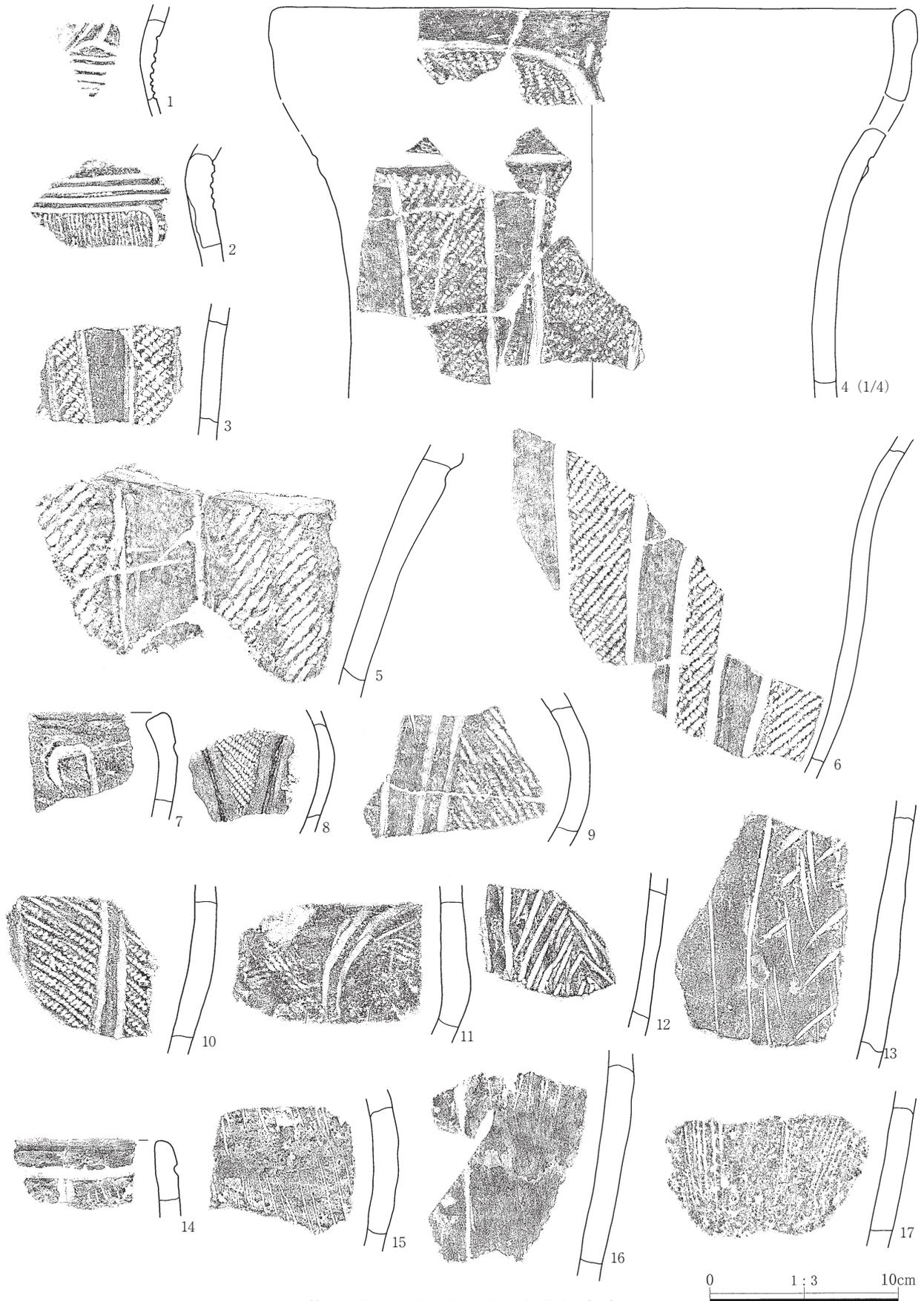
第113図 18区41号配石出土遺物(1)



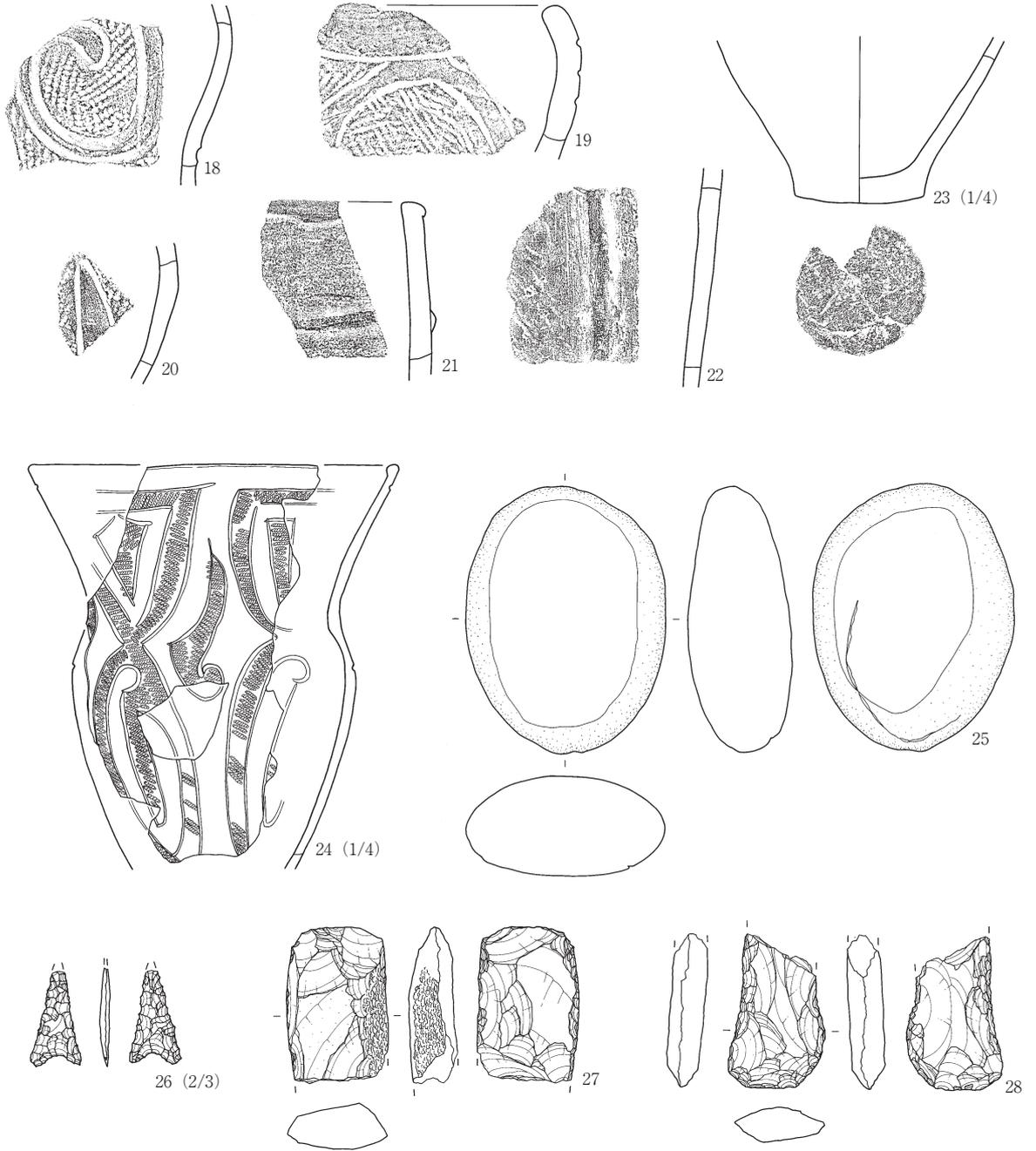
第114図 18区41号配石出土遺物(2)



第115図 18区41号配石出土遺物（3）



第116図 18区44号配石出土遺物 (1)



第117図 18区44号配石出土遺物（2）

19区配石遺構 19区では17基の配石遺構が確認されている。このうち、2号～7号・10号～17号の14基は20区4号列石に伴うものとしてすでに横壁中村遺跡（9）で報告済みである。また、9号は18区から続く埋没谷内にあり、後日報告予定である。そのため、今回は1号と8号について報告する。

19区1号配石

調査年度 平成10年度

位置 S-25グリッド

経過 平成10年度調査区の南東側で、扁平な礫が直立した状態で確認されたため、立石として調査を実施した。この地点は山根沢に面した低地で、粘性のある黒褐色土中で立石は検出された。その後、この下から21号・24号住居が確認されたが、同住居の報告では触れていない。

重複 19区21号・24号住居内の南東側に重複し、同住居を切っていると判断する。

形状 高さ50cm、幅50cm、厚さ12cmの扁平な礫が直立した状態で検出された。検出面からは38cm程が露出していた。周囲に礫は少なく10cm程の礫が数点見られるのみである。検出面の標高は、19区21号住居の敷石面の標高とほぼ等しい。

立石は、同住居に重複する別遺構と思われる2列の配石に伴うものと考えられる。立石を黒塗り表現で重ねてみると、立石は2列の配石のちょうど北側中央に立っていたことがわかる。重なる配石の規模は長さ140cm、幅75cmで、長軸をほぼ南北方向にとり、礫は側縁を斜めに立てた状態で配置されていた。短辺の礫は南北双方とも存在しない。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 周囲の小型礫を含め、地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N13度E

遺物 確認されていない。

所見 詳細な記録はないが、本配石は18区21号・24号住居の床面付近で確認された長形状の配石と一体のものであったと考えたい。その場合、立石は

長方形配石の長軸上北側に建てられていた可能性と、北側の短辺に据えられて一体の配石だった可能性が考えられ、形状的には後者の可能性が高い。なお、この長方形の配石は、その形態から配石墓の可能性が高いと考えられる。

19区8号配石

調査年度 平成13年度

位置 V-19グリッド

経過 18区6号配石の下部遺構の調査終了後、更に掘り下げた段階で、礫が環状に巡るのが認められ、配石として調査を行った。

重複 本配石の直上に19区6号配石がある。6号配石の下部遺構底面と本配石の確認面との標高差は5cmである。また、本配石直下に19区59号土坑があり、確認面は同一である。59号土坑埋土に掘り込まれていることになる。

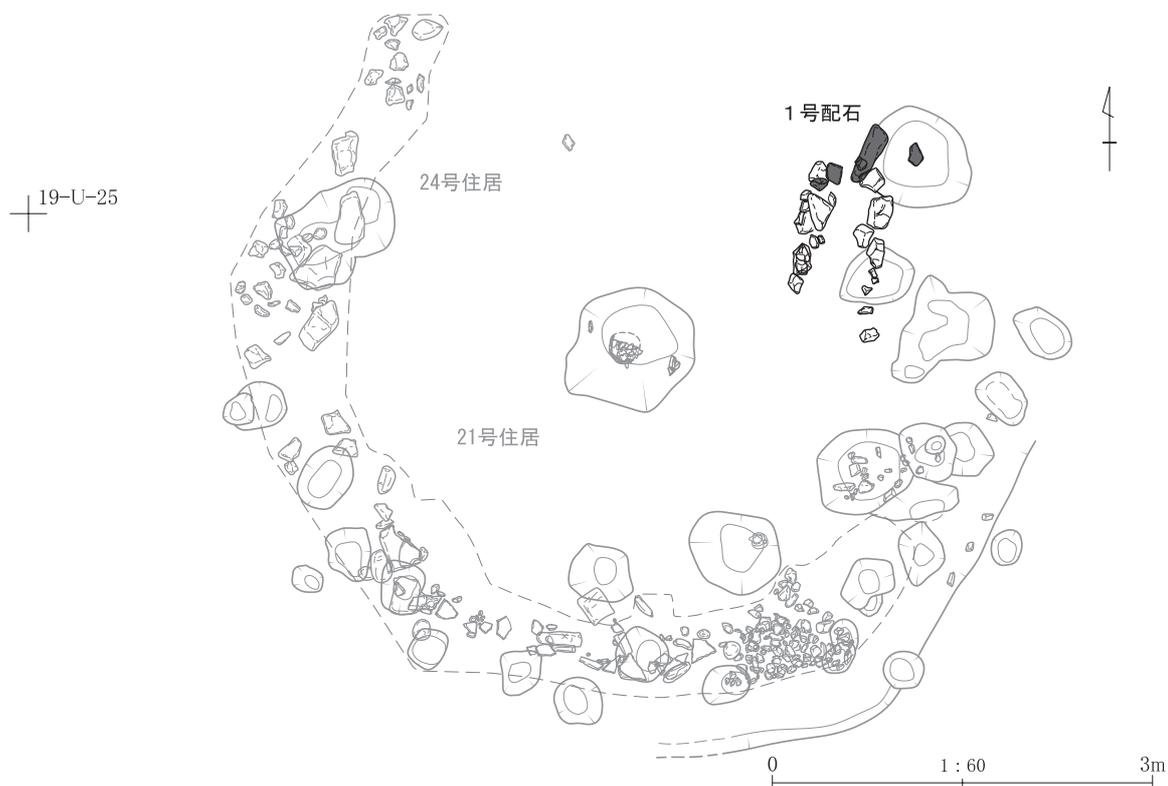
形状 8～12cmの礫6石を用い径30cmの環状に巡らしている。北東部に礫のない箇所があるが、本来はもう1・2石存在していたと考えられる。なお、本配石に接して南側に焼土の分布が認められ、配石内部にも少量であるが焼土粒を含んでいる。礫の表面に変化は少なく被熱は弱いと思われるも、本配石が住居の炉の可能性も考えられる。ただし周囲から壁や柱穴などは検出できていない。可能性の指摘にとどめておきたい。

下部遺構 配石内部に掘り込みが認められた。深さは18cmである。

石材等 地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

遺物 土器は前期諸磯c式土器が2点出土しているが、混在と考えられる。石器は石錐1点、加工痕ある剥片1点、細片1点が出土している。

所見 6号配石の下部遺構である土坑に伴う施設であった可能性が考えられる。

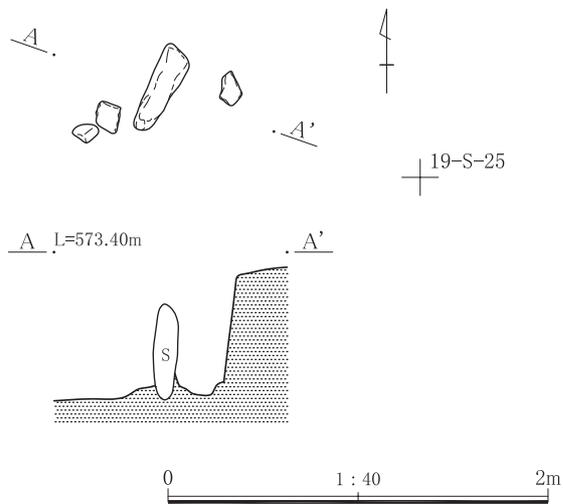


第118図 19区1号配石遺構位置図

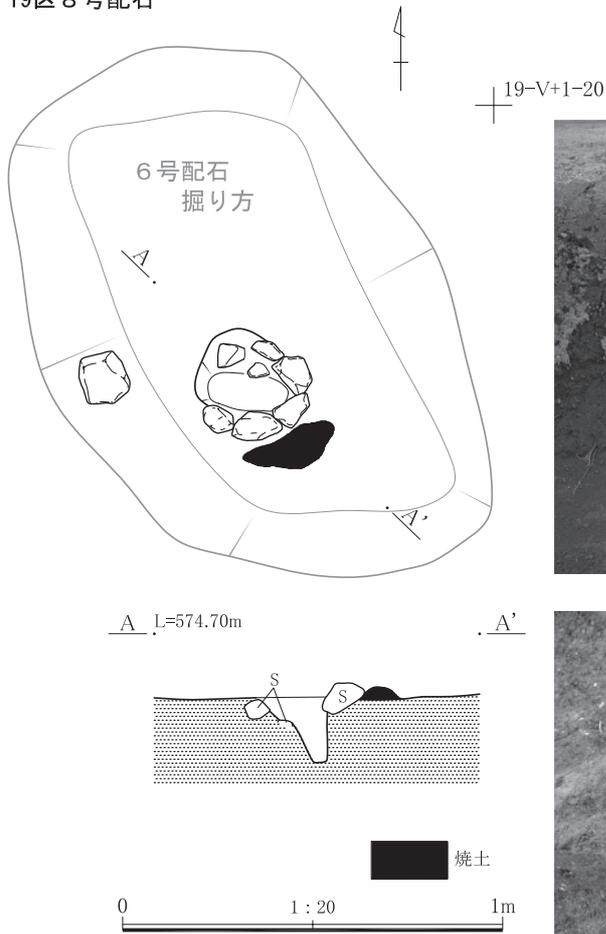


19区21号・24号住居 全景（西から）

19区1号配石



19区8号配石



19区1号配石（北から）



19区8号配石（北から）

第119図 19区1号・8号配石

20区配石遺構

20区では、1号から35号までの35基の配石が調査された。このうち、19号は近世墓に変更、20号・22号は20区4号列石に伴う遺構としてすでに横壁中村遺跡（9）で報告済み、34号は中世以後の遺構に変更、4号・7号・8号・12号・13号・18号・19号・21号・16号～22号・27号～35号はその後の検討で欠番となった。今回は残る14基について報告する。

20区1号配石

調査年度 平成11年度

位置 W・X-21グリッド

経過 表土掘削後の精査中、やや大型の礫が集中する地点があり、川原石も含むため、配石として調査を行った。

重複 20区10号土坑と重複し、礫の出土状況から10号土坑に切られているものと判断した。10号土坑は中世以後に比定されている。

形状 配石周囲と比較して、径10～60cmの礫が多数認められる。規模は東西330cm、南北200cmの範囲である。礫の配列は乱雑であり、規則性は認められない。ただし、東よりの部分に30cm程の礫が長軸162cm、短軸79cmの楕円形状に配列されているように見られる部分もある。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 川原石2点の他は、すべて地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 ー

遺物 確認されていない。

所見 東側に楕円形状に配置された様に見える部分もあるが、判断材料に欠ける。

20区2号配石

調査年度 平成11年度

位置 N・O-22グリッド

経過 中世の3号石垣と1号建物を調査後、周辺を掘り下げていたところ、環状に配列された礫が検出されたため、配石として調査を行った。

重複 20区3号住居、3号石垣、1号建物と重複し、3号住居を切る。3号石垣及び1号建物にきられているかは、はっきりしない。

形状 長さ30～50cmの扁平な礫8石が径170cmの環状に配列されている。それぞれの礫は長辺を環の内側に向けほぼ水平に据えられている。内部には径10cm程の地山礫がやや多く認められるが、意図的な配列は認められない。

下部遺構 環状の配石の内部にあたる部分に深さ24cmの掘り込みが検出された。

石材等 地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫4石と、川原石4石が使用されている。

方位 ー

遺物 中期後半の土器2点が出土しており、他に配石に使用された多孔石1点がある。

所見 中期後半に比定される配石と考えたい。礫の配置及び規模が18区20号配石と共通しており、中期後半段階の墓の一つの形態である可能性が考えられる。

20区3号配石

調査年度 平成11年度

位置 P-19・20グリッド

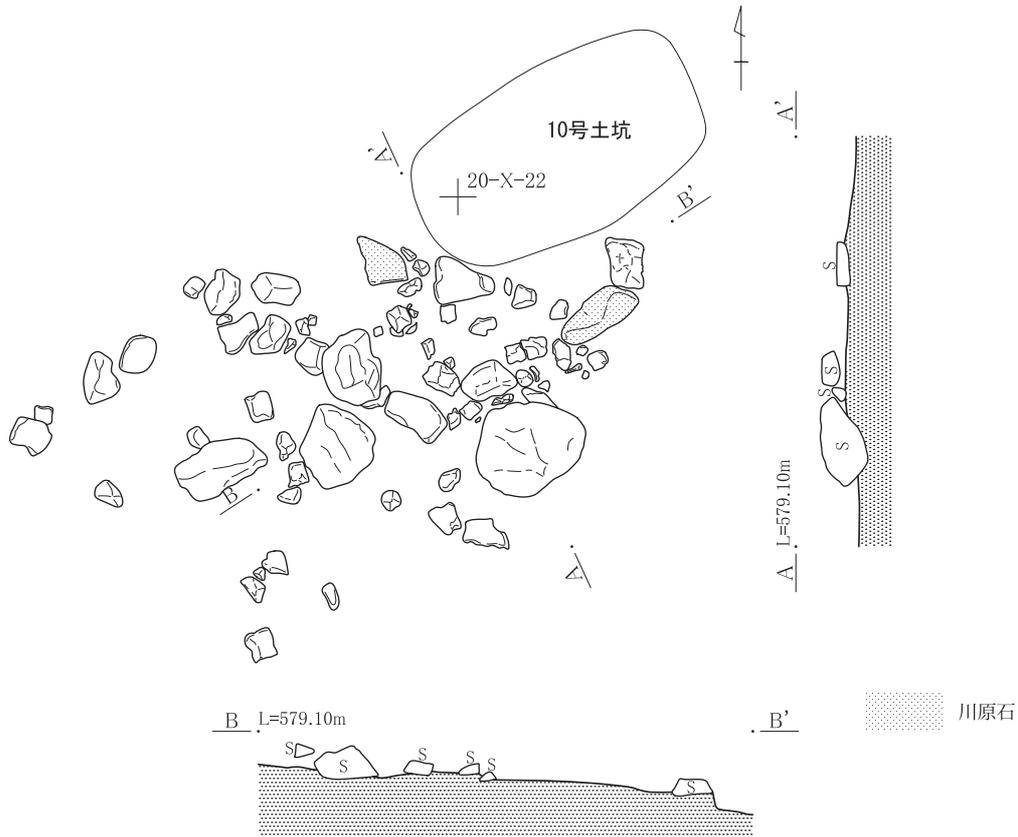
経過 表土掘削後の精査時に、扁平な礫が敷き詰められた状態で検出されたため、配石として調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められない。周囲には土坑は散在するが、他の配石は認められず単独で存在する。

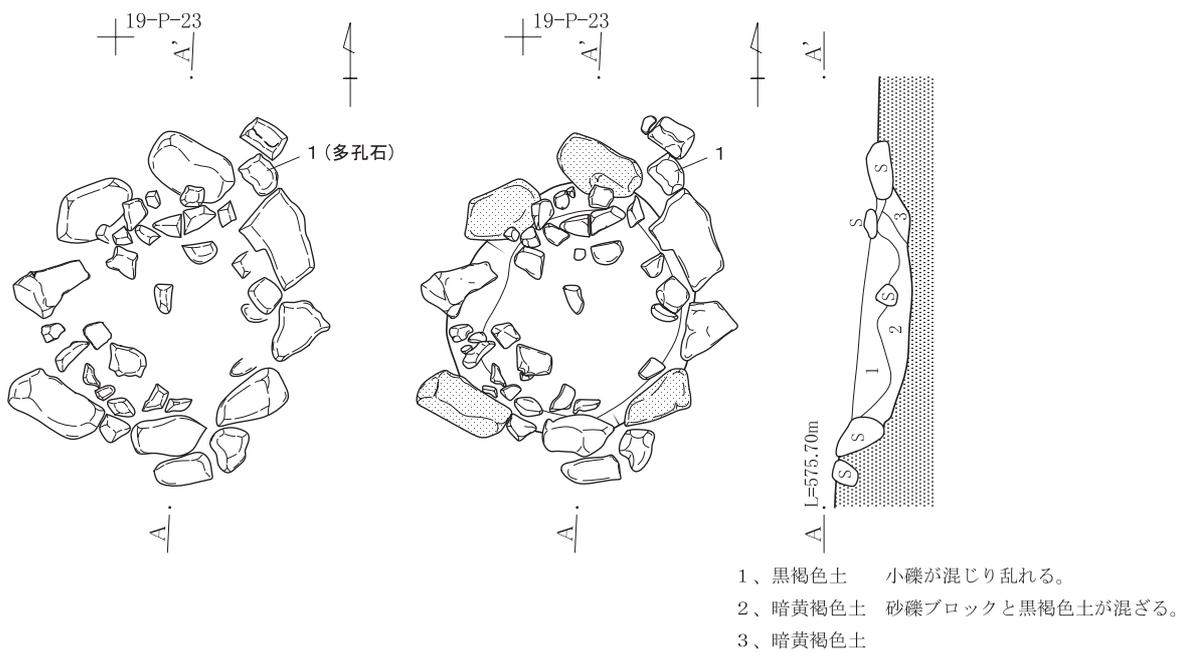
形状 長軸90cm、短軸80cmほどの円形状の範囲に、径10～40cmの扁平な礫を平坦面を揃えて貼り付けたような状態で配されている。中央部がやや落ち込んでいたが、これは土圧により凹んだ可能性も考えられる。また、形態的に炉の可能性も考えられるが、礫に被熱の痕跡は認められない。

下部遺構 配石下部に直径150cm、深さ56cmの円形の土坑が検出された。円形の配石下には、ほぼ同じ大きさのまま下層まで扁平な礫が埋土と混じった

20区 1号配石



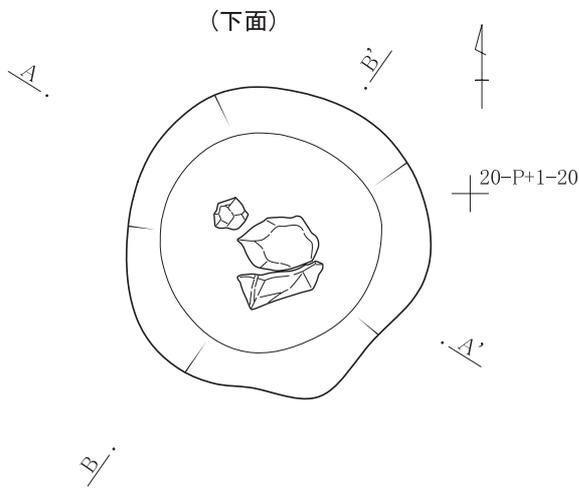
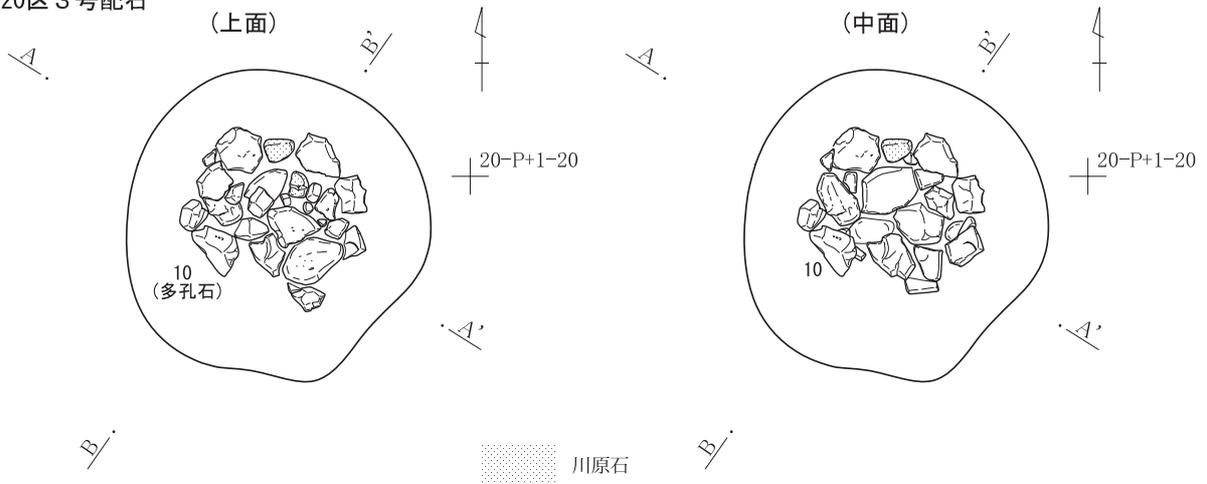
20区 2号配石



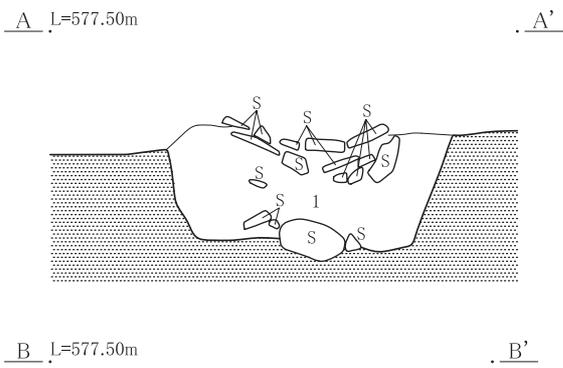
第120図 20区 1号・2号配石



20区3号配石

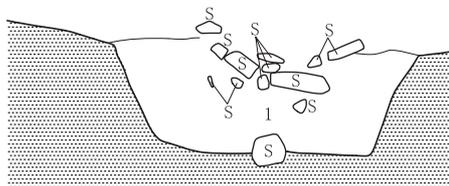


20区3号配石 掘り方確認



20区3号配石 掘り方調査

1、黒褐色土 砂質が混ざり、サラサラしてやわらか。



0 1:40 2m

第121図 20区3号配石

状態で詰め込まれており、その真下の底面には厚手の扁平礫3石が配置されていた。

石材等 小さな川原石は1個の他は、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 ー

遺物 土器は中期後半の破片が36点出土しており、主な土器加曽利E4式である。石器は多孔石1点と剥片1点が出土している。

所見 これと類似した状態は、18区3号掘立柱建物の柱穴（横壁中村遺跡（7）参照）で確認されている。3号掘立柱建物は、長軸に棟持ち柱を持つ12本柱構造の大型高床建物で、後期堀之内1式期に比定される。ほぼ南北に設置した棟持ち柱間の距離が12.95mあり、柱穴は直径1.2m、深さ1m前後であったが、柱痕部分に礫を詰め込んだものや、底面に板石を敷いたもの、柱穴上面に扁平礫を直径1mほどの範囲に敷き詰めた配石を伴うものなどが確認されている。

本配石は、柱穴としては直径に対して深さが浅いが、底面に敷かれた厚手の板石は、柱を受けるためのものと考えるのが妥当であろう。この地区は中世の館跡やその後の石垣等で削平が進んでおり、その点も考慮する必要がある。ただし、これと組み合う柱穴は、現状では周辺に見当たらない。

20区5号配石

調査年度 平成11年度

位置 J-24グリッド

経過 表土掘削後の精査時に長さ50cm程の扁平な礫が立位で認められたため配石として扱った。その後、この礫に接した北側に土坑が検出されたため配石墓の可能性を考え調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められない。周囲には土坑は散在するが、他の配石は認められず単独で存在する。

形状 礫に接して検出された土坑は、長軸をほぼ東西方向にとり、長軸124cm、短軸60cm、深さ43cm

を測る。この土坑の南辺に2石、北辺に1石の扁平な礫が立位で検出された。礫は壁の上層部分にあり、底面には達していない。

下部遺構 ー

石材等 立位で検出された3石はいずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N83度E

遺物 遺物の出土は認められなかった。

所見 配石墓の可能性も考えられるが、判断材料が少なく、断定できない。

20区6号配石

調査年度 平成11年度

位置 F・G-25グリッド

経過 中央に扁平な礫があり、これを圍繞するように礫がまとまっているため、配石とし調査を実施した。

重複 20区161・178号土坑と配石部分では重複し、土坑上に一部の礫が乗っている。下部遺構では重複していない。南東直近に9号配石が接近する。

形状 中央に長軸80cm程の鉄平石が横たわり、これを圍繞するように10~60cm程の礫が認められる。この範囲は、周囲にも礫が散在するため不確定だが、直径1.7mほどの環状に礫が集中しており、北側には70cmほどの大型礫が認められる。中央の礫は立石状に立てられていた可能性も考えられる。

下部遺構 配石のほぼ直下から土坑が確認された。規模は、直径1.2mほどの不整形円形を呈し、深さは30cmほどである。

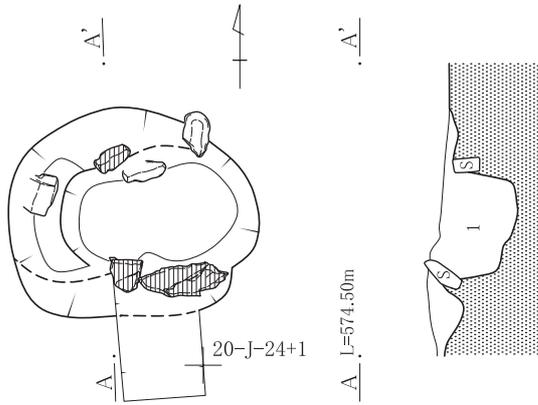
石材等 少量の川原石と鉄平石3点の他は、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 ー

遺物 土器は中期後半のものが76点出土しており、主な土器は加曽利E4式である。石器は石鏃1点、台石1点の他に、剥片3点、碎片1点が出土している。

所見 墓の可能性が高いと考えられる。時期は加

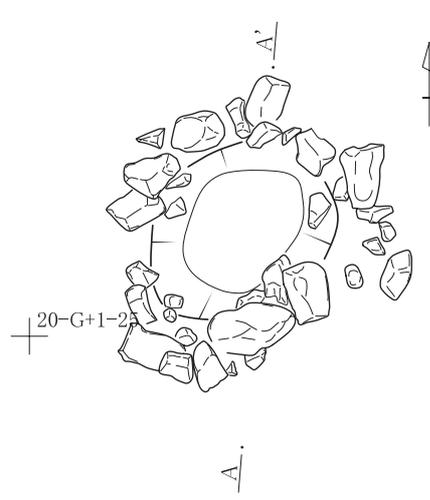
20区5号配石



1、黒褐色土 微細の軽石を含む。

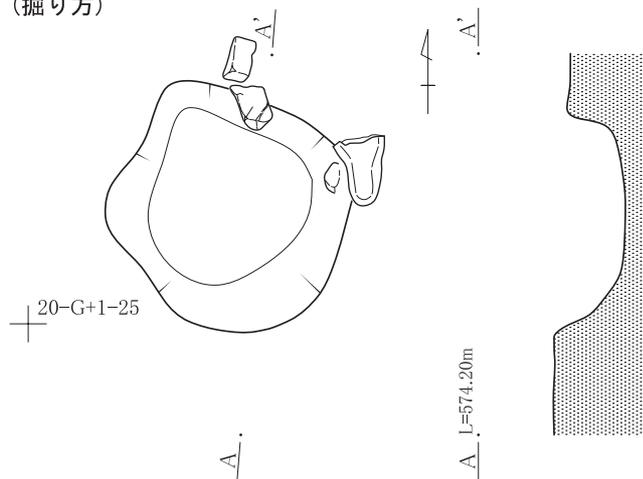
20区5号配石

20区6号配石
(上面)



 鉄平石
 縦位設置

(掘り方)



20区6号配石

0 1 : 40 2m

第122図 20区5号・6号配石

曾利E4式期に比定されよう。

20区9号配石

調査年度 平成11年度

位置 F-24グリッド

経過 石棒と礫が集中する地点があり、配石として調査を実施した。

重複 20区162・176号土坑と重複し、これらより新しい。北西に6号配石が接近する。

形状 上面の配石については写真記録のみであり、詳細な形状や規模ははっきりしない。写真では周囲に小礫が数個認められるが、大きな礫は地山の礫であろう。石棒は基部のみが掘り方の縁から出土している。

下部遺構 長径98cm、短径78cm、深さ28cmの隅丸長方形を呈する土坑が検出されている。平面図中の礫は、地山に含まれる礫であり、遺構とは関係ない。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N49度E

遺物 中後期の土器13点と石棒1点が出土している。

所見 墓の可能性もあるが、その場合は配石墓ではなく、土坑墓になるであろう。時期は後期と思われるが、重複する162号土坑から加曾利B1式土器が出土しており、同時期かそれより新しい時期に比定されるであろう。

20区10号配石

調査年度 平成11年度

位置 E-25グリッド

経過 表土掘削後の精査で、小礫が長さ1.4mほどの楕円形にめぐり、その端に台石と円形状の大きな川原石が検出された。その後の調査で楕円形にめぐる礫の下部に土坑の存在が判明した。

重複 重複する遺構は認められないが、西に6号・9号配石、東に11号配石、北側に30区14号・15号・18号・19号配石が近接する。

形状 写真では小礫が楕円形状にめぐる状態が確認できるが、残念ながら図は残されていない。おそらく下部土坑の縁にめぐっていたと考えられる。扁平な川原石を利用した台石は土坑の北東側長軸線付近にあり、円形状の大きな川原石は土坑の北西側側縁に置かれていた。また、写真では南半部の土坑上にも大小の礫がのっていた様子が見られる。

下部遺構 長軸を北東-南西に向けた不整な楕円形を呈する土坑が検出された。規模は長軸140cm、短軸64~96cm、深さ42cmである。底面に大きな地山礫があるため、この部分は掘りすぎており、本来は南半部のような幅の狭い形状だったと考えられる。図中の土坑底面の礫は、地山に含まれる礫であり、人為的に据えられたものではない。

石材等 台石と大きな川原石以外は、地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N34度E

遺物 土器は中期後半~後期前半の小破片が25点出土しており、石器は台石1点が出土している。

所見 下部土坑の形態から、墓の可能性が高いと判断する。時期は後期になるだろう。

20区11号配石

調査年度 平成9年度

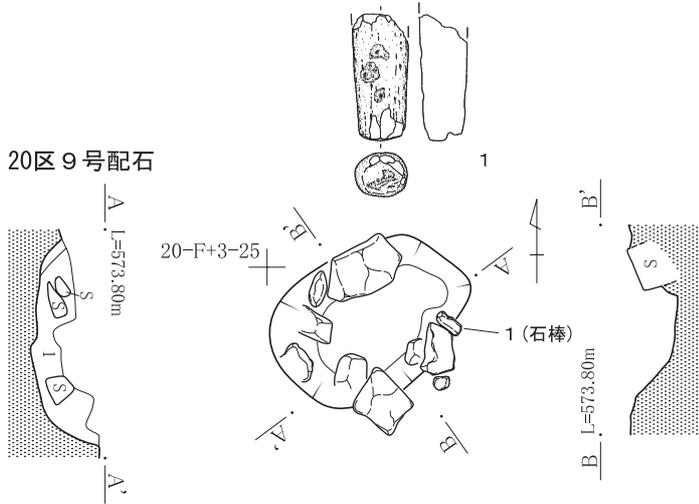
位置 C・D-25グリッド

経過 礫の少ない地区の中に、大型の礫が一定の範囲に集積しており、その中に長さ50cm程の棒状円礫2本が並んだ状態で確認された。遺物は伴わないが、配石の可能性が考えられたことから、配石として調査した。

重複 重複する遺構は認められない。西に20区10号配石、南に16・17号配石などが近接する。

形状 2m四方ほどの範囲に径10~60cm程の礫が集中して認められる。最北部には長さ50cm×幅18cmと長さ48cm×幅20cmの2石の棒状円礫が並んで横倒しの状態で検出され、その西側にも扁平な礫が3石並んだ状態で確認されている。東側にも礫がならん

20区9号配石

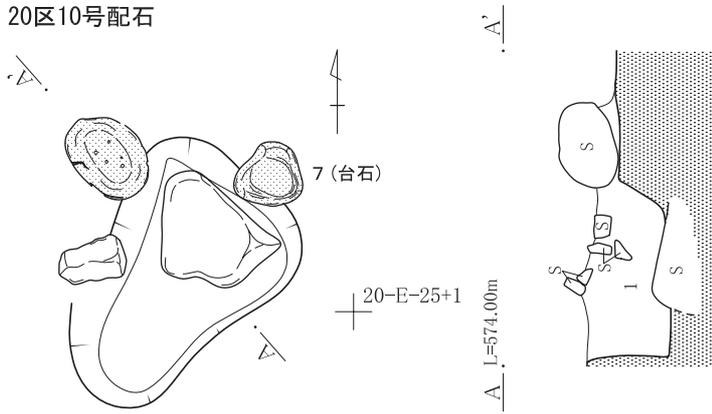


1、黒褐色土 地山の黄褐色土と黒褐色土の混土。焼土粒と炭化物粒を少量含む。



20区9号配石

20区10号配石

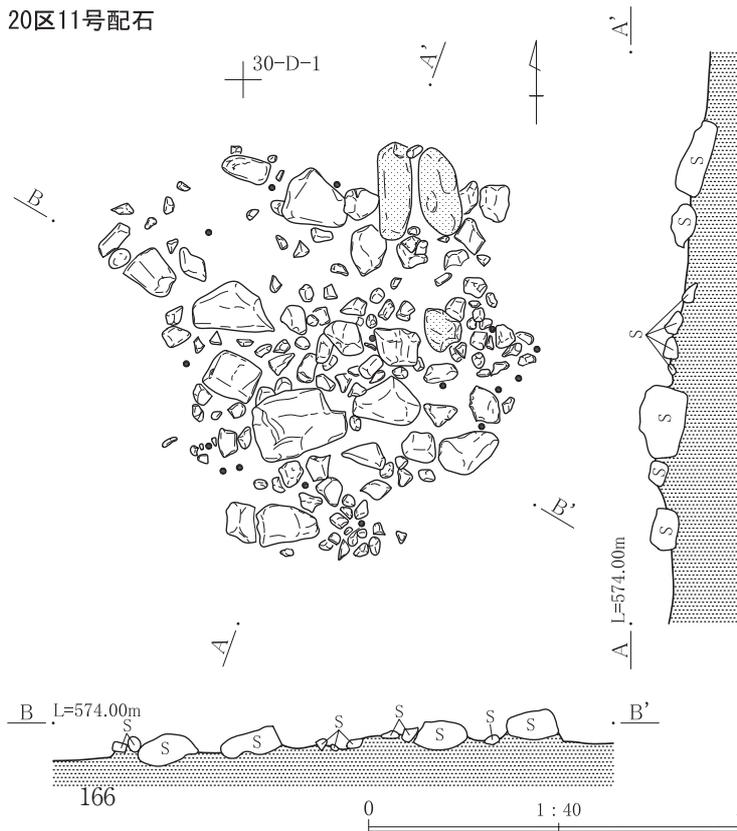


1、黒褐色土 微細な軽石を含む。



20区10号配石

20区11号配石



20区11号配石

でいたかどうかは不明である。棒状円礫は立石であった可能性も考えられる。南側の礫については、配列に規則性は認めがたく、一部は地山に入り込んであるものもある。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 棒状円礫2石は川原石ではなく、地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫であるが、形態は川原石に近似しており、他の地山礫に比べて明らかに円磨が進んでいる。加工は認められない。その他に若干の小さな川原石は認められたが、ほとんどは地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 中後期の土器片が14点出土している。

所見 2石の棒状円礫は立石だった可能性と、その後の利用のためにキープされていた可能性が考えられる。

20区14号配石

調査年度 平成13年度

位置 I-22グリッド

経過 地山に礫が多量に含まれる地区で、特にこの地点には巨大な地山礫が数多く点在している。そんな状況のなかで、扁平な礫が立った状態で並ぶ様子が看取されたため、配石あるいは配石墓として調査を実施した。

本配石のすぐ東側には4本柱構造の20区5号掘立柱建物があり、その柱穴に接する2つの巨大な地山礫（一つは2m、もう一つは1m）には何かを磨いた磨り面が点々と残っていた。

重複 重複する遺構は認められないが、東に20区5号掘立が近接する。配石墓としては単独で存在している。

形状 長方形を呈する掘り込み内に、厚手の扁平礫を縦位に配置して囲繞する。礫はほぼ全周するが、一部に欠落も認められる。礫は小口を上にして壁に立て掛けるように据えられているものが多く、周囲には横置きした扁平礫もいくつか認められた。

配石墓では、掘り込み内部に小口積みした上に扁平礫を重ねて平積みする手法が一般的であるが、本配石では小口積みの外側に扁平礫が横置きに置かれている。また、配石の北東長軸上に長さ80cmの大型扁平礫が設置されているが、この礫の上面には何かを磨いた磨り面が残っている。東側に近接する20区5号掘立柱建物に接する長さ2mの地山礫は、そのすぐ北西に接するような位置にある。

配石の範囲は、北東の大型扁平礫も含めて長軸214cm、短軸108cmであり、平積み部の内側で長軸124cm、短軸30cm、深さ36cmである。

下部遺構 断面調査では、掘り方は確認できなかった。掘り込んだ壁に直接礫を立て掛けたものと考えられる。

石材等 小口積みに転用された台石を含め、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N27度E

遺物 石皿片1点と台石2点が配石に使用されており、土器は中後期の細片が6点出土した。

所見 配石の形態から、配石墓としてよいだろう。上面をかなり攪拌されており、本来は上面に平積みと蓋石があったと考えられる。北東の大型扁平礫は蓋石だった可能性もある。時期を特定できる材料がないが、東側に接近する5号掘立柱建物（横壁中村遺跡（7）参照）は加曾利B2～3式期に比定されており、それに近い時期を想定したい。

20区15号配石

調査年度 平成13年度

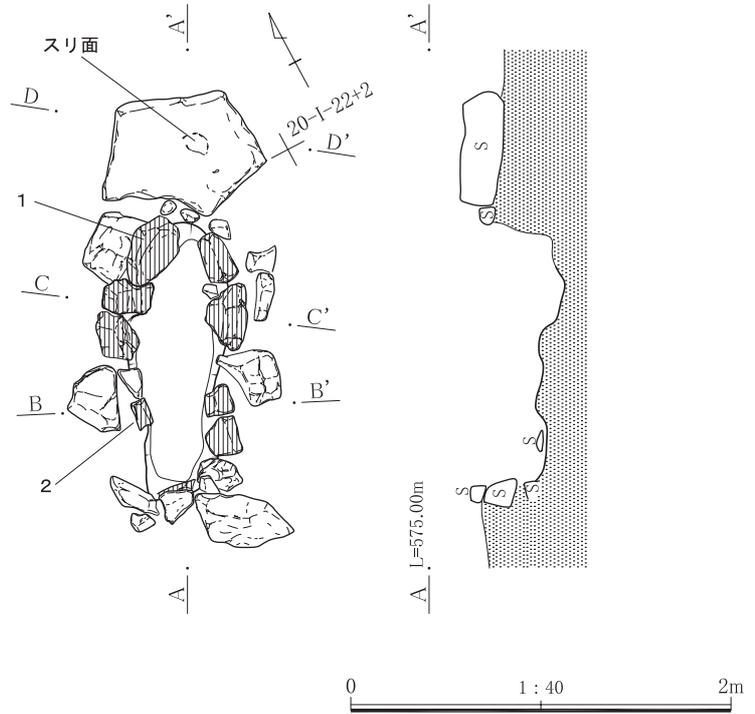
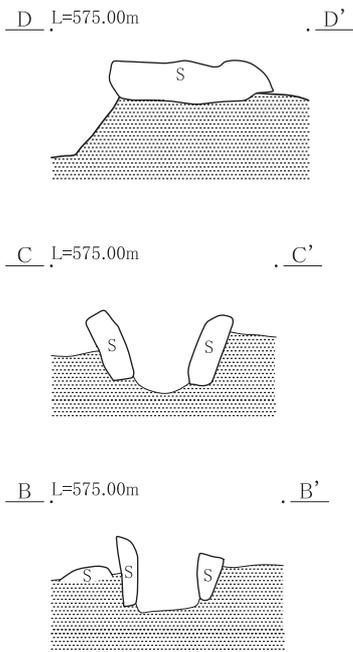
位置 G-20グリッド

経過 地山に礫が多く含まれる地区で、黒褐色土で埋没する掘り込み部分に礫と土器が伴うことから、土坑あるいは配石墓を想定して調査を実施した。

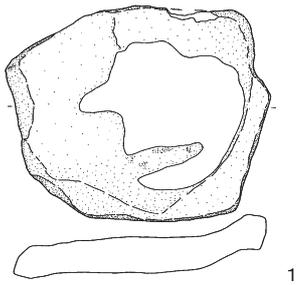
重複 重複する遺構は認められないが、南に20区7号掘立柱建物と近接し、398号土坑（中世以降）と接する。

形状 調査当初は、礫の配置が東西方向に長軸を

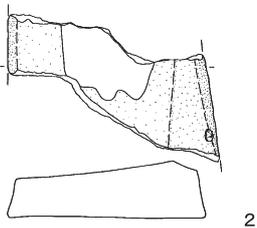
第3章 発見された遺構と遺物
20区14号配石



縦位設置



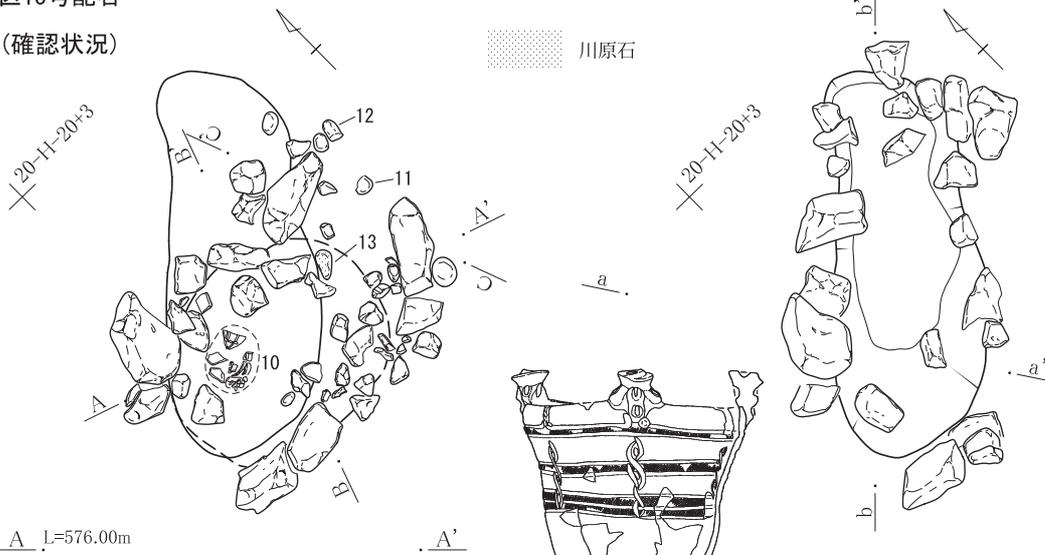
20区14号配石 (南西から)



20区14号配石 (南東から)

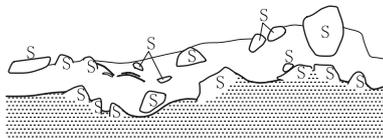
第124図 20区14号配石

20区15号配石
(確認状況)



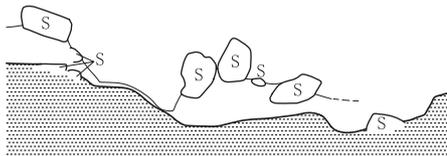
A L=576.00m

A'



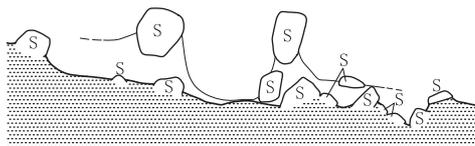
B L=576.00m

B'



C L=576.00m

C'



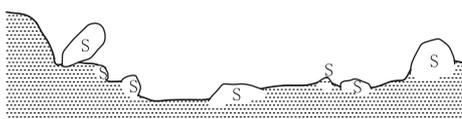
a L=576.00m

a'



b L=576.00m

b'



20区15号配石(東から)確認状況



20区15号配石(東から)掘り方

0 1:40 2m

第125図 20区15号配石

第3章 発見された遺構と遺物

とる長方形に認められた。使用されている礫は10～50cm程のもので、若干乱れるが80cm程の間隔において南北に2列並列し東西方向に延びているように看取された。また、その間の西よりの地点から深鉢形土器が逆位で出土している。土器底部は欠損しているが、意図的なものか、後世の攪乱によるものかは判断できない。

下部遺構 配石除去後に下部を調査した結果、北東-南西方向に長軸をとる土坑が検出された。規模は長軸194cm、短軸48～76cm、深さ25cmである。上位の配石と軸の向きがずれるが、その後に攪乱を受けた可能性も考えられる。この土坑と上位の配石を配石墓と想定すると、鉢形土器は南西端の覆土中位から出土していることになる。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用し、少数川原石が含まれている。

方位 N82度E

遺物 土器は中期後半～後期のものが総数99点出土しており、主な土器加曾利B 2式である。石器は磨石2点、多孔石1点のほかに、剥片と細片が1点ずつ出土している。

所見 礫の配置はかなり乱れているが、大型の扁平礫も多くあり、配石墓であった可能性が高いと考える。形状は当初に確認された東西方向に長軸をとる長方形のものであったと考えたい。時期は加曾利B 2式期に比定したい。

20区23号配石

調査年度 平成15年度

位置 H-12グリッド

経過 表土掘削後の精査中に、礫が集中する地点があり、遺物も多く含むことから配石として調査を実施した。

重複 20区505～507号土坑と重複する。土坑は505、506、507号土坑の順に新しく、507号土坑が称名寺2式期に比定されている。本配石は507号土坑のほぼ直上に位置し、同土坑より新しい。周囲には

北に24・26号配石、南に25号配石がある。

形状 長径2.9m、短径1.86mほどの楕円形状の範囲に、径5～50cm程の礫が集石状に認められる。破片であるが土器を多く含んでいる。

下部遺構 配石下部には3基の土坑が重複しており、これらはすでに報告されている（横壁中村遺跡（6）参照）。本配石はこのうち505号・507号土坑の範囲にほぼ重なり、505号とは出土土器の接合関係も認められた。

石材等 記録に不備があり、詳細は不明だが、いずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されていると考えられる。

方位 -

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数316点出土しており、このうち主な土器は称名寺1式～堀之内1式である。石器は削器2点、楔形石器1点のほかに、剥片15点、細片6点が出土している。

所見 今回改めて各遺構の関係を再検討した結果、本配石と505号土坑は一体の構造のもので、南側に近接する25号配石を含む柄鏡形住居の、出入口部対ピットに相当すると考えるに至った。時期は称名寺2式～堀之内1式期に比定されよう。

なお、507号土坑は23号土器埋設遺構（加曾利E 3式期）を炉とする住居の柱穴となる可能性が高い。

20区24号配石

調査年度 平成15年度

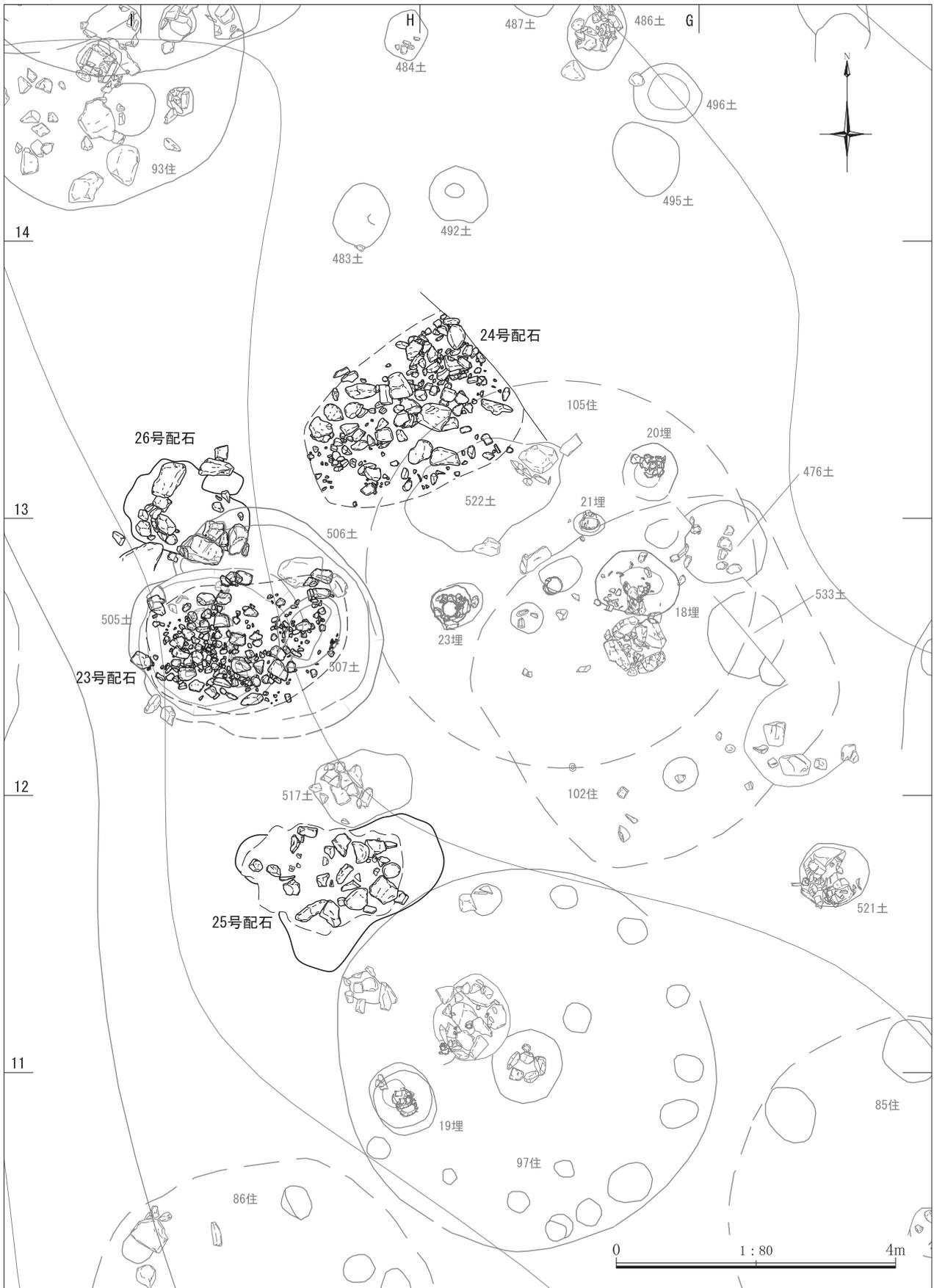
位置 G・H-13グリッド

経過 表土掘削後の精査中に、礫が集中する地点があり、遺物も多く含むことから配石として調査を実施した。

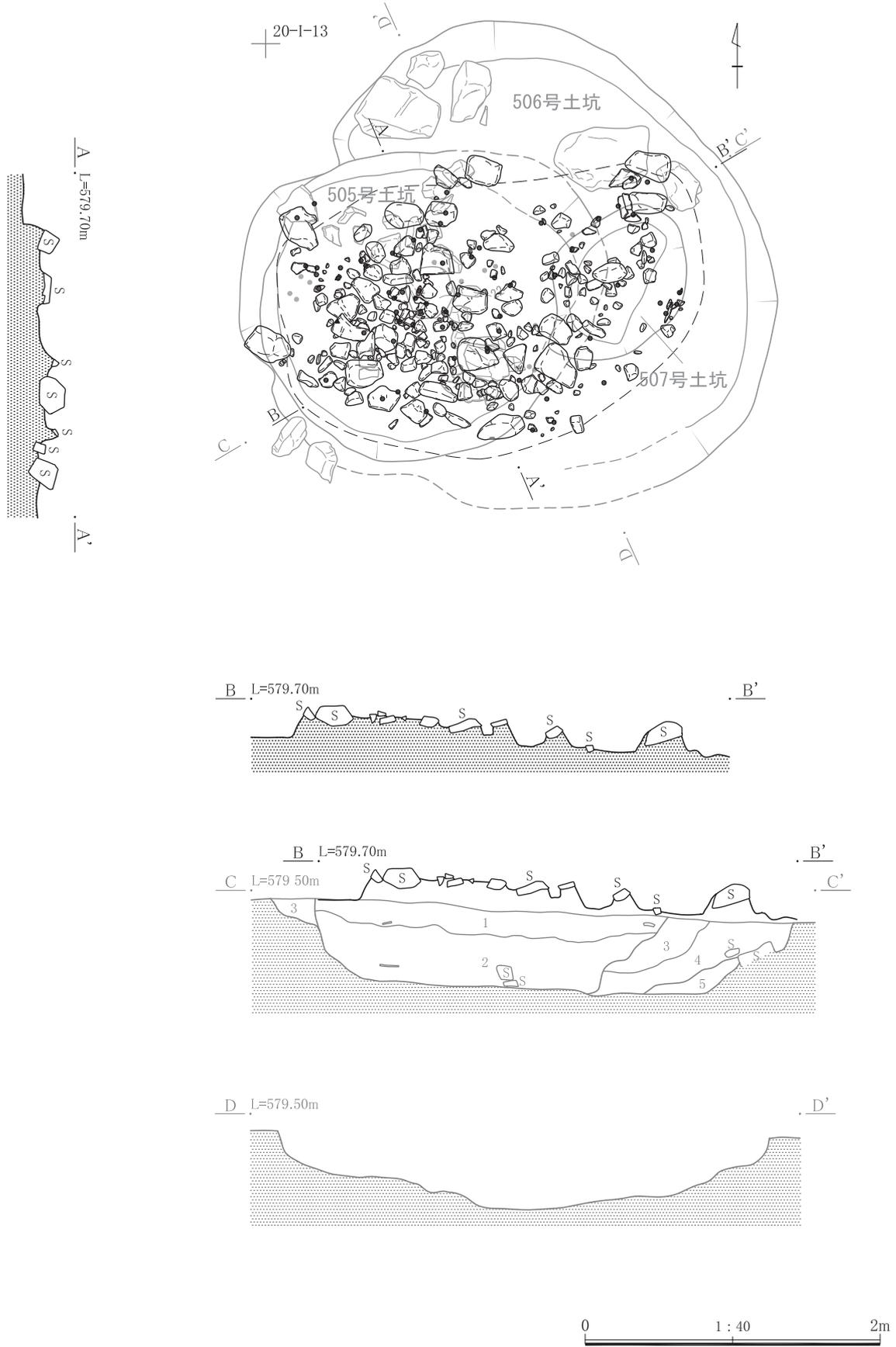
重複 20区522号土坑（加曾利E 3式期）と一部重複し、これより新しい。

形状 北東部をトレンチにより壊されているが、長軸308cm、短軸220cmほどの範囲に径5～50cm程の礫が集中し、集石状を呈している。石の配列に規則性は認められない。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。



第126図 20区23号~26号配石遺構分布図



第127図 20区23号配石



第128図 20区24号配石

第3章 発見された遺構と遺物

石材等 記録に不備があり、詳細は不明だが、使用された礫の大半は地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫であると思われる。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数48点出土しており、そのうち主な土器は加曽利E3式である。石器は加工痕ある剥片1点、台石1点のほかに、剥片3点、碎片1点が出土している。

所見 加曽利E3式期の集石遺構と考えられるが、性格は不明である。

20区25号配石

調査年度 平成15年度

位置 H-11グリッド

経過 表土掘削後の精査時に、20~30cm大の扁平礫数個を同一面上に水平に並べた状態で確認された。その中には川原石や石皿片も含まれており、礫の周りや周辺部には貼り床状に硬化した面も認められた。敷石住居を想定して調査したが、炉その他の施設は確認できなかった。

重複 重複する遺構はないが、北に20区23・24・26号配石が近接する。また、18~20号埋設土器（称名寺1式期）が周囲に点在する。

形状 床面のような硬化面に、20~30cm大を主体とする扁平礫が、長軸2.2m、短軸1.4mほどの範囲に水平に並べた状態で確認された。配石中には石皿の破片や未製品も使用されている。

下部遺構 配石下に、長軸2.73m、短軸1.26~2.12m、深さ30cmほどの不定型な掘り込みを確認した。その東側にある長軸95cm、短軸60cmの土坑は、配石面からの深さが60cmもあり、柱穴と考えてよい。なお、中央付近から横倒しの状態で、底部を欠落した以外は完存状態の三十稲場式鉢形土器が出土している。

石材等 石器以外はすべて地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は後期前半のものが総数83点出土して

おり、そのうち主な土器は称名寺2式である。

石器は石鏃1点、打製石斧1点、磨石3点、石皿未製品1点、石皿破片1点、多孔石1点のほかに、剥片1点、碎片5点が出土している。

所見 貼り床状の床面2箇所と扁平礫を平坦に敷いた敷石部、柱穴等が存在することから、本遺構は敷石住居の一部であると判断する。時期は、出土土器から称名寺式2式期に比定される。

なお、北側2mに近接する23号配石の礫と本列石の敷石はほぼ同じレベルにあり、時期も重なっている。両遺構は6mの範囲内に収まる位置にあり、同一住居の一部である可能性が考えられる。その場合、23号は柄鏡形住居の出入り口部対ピットになるであろう。

20区26号配石

調査年度 平成15年度

位置 H-12グリッド

経過 20区506号土坑調査後に、その壁と底面に露出する礫と、土坑北側にある礫2石で、方形に組む様子が看取され、配石として調査を実施した。

重複 506号土坑と重複し切られる。また南に23号配石が近接する。

形状 長さ40~60cmの礫4石とその隙間を埋める径10cmほどの礫が一部に隙間もあるが方形あるいは環状に配される。中央部は空白となっている。

下部遺構 配石のほぼ直下に長軸170cm、短軸128cmの浅い土坑が確認された。土坑底面は凹凸があり、数基の土坑が重複している可能性もある。特に上位配石の礫のかけていた部分は窪んでおり、時期の異なる土坑により壊されている可能性も考えられる。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

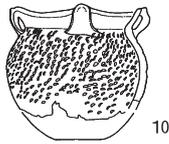
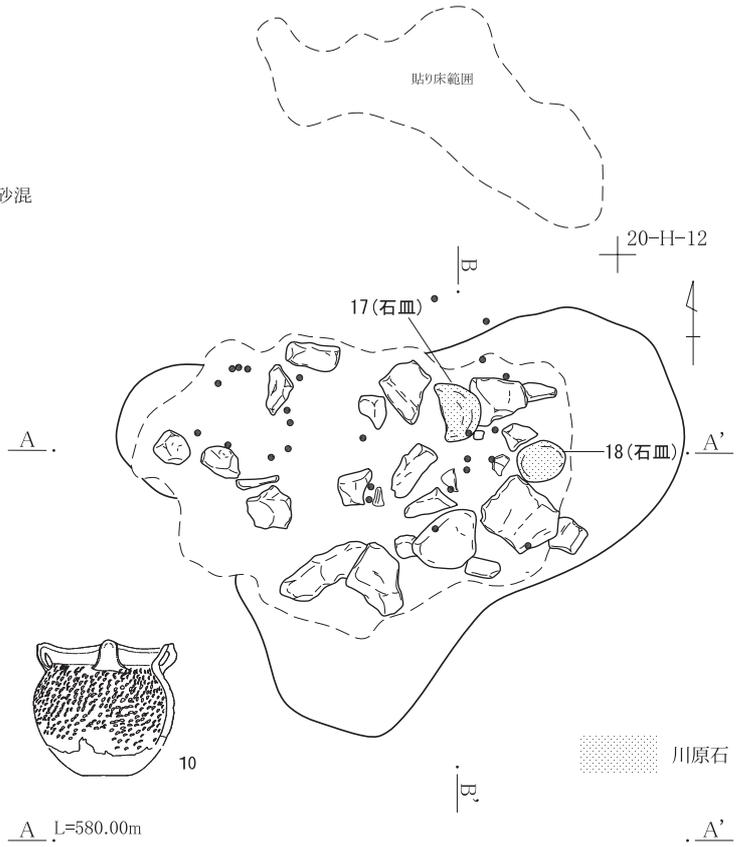
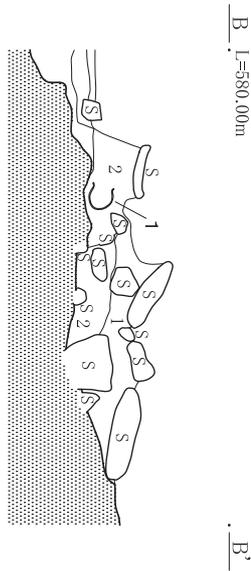
方位 ー

遺物 確認されていない。

所見 判断材料が少ないため、所見は保留したい。

20区25号配石

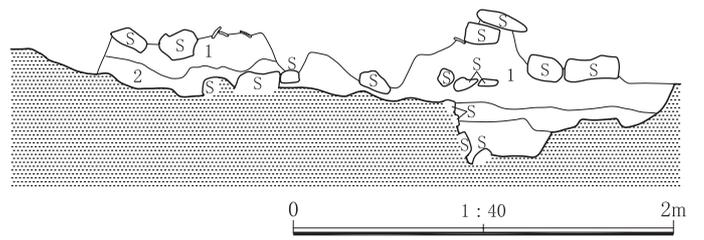
- 1、暗褐色土 砂質土
- 2、暗褐色土 砂質土、黄褐色砂混



川原石



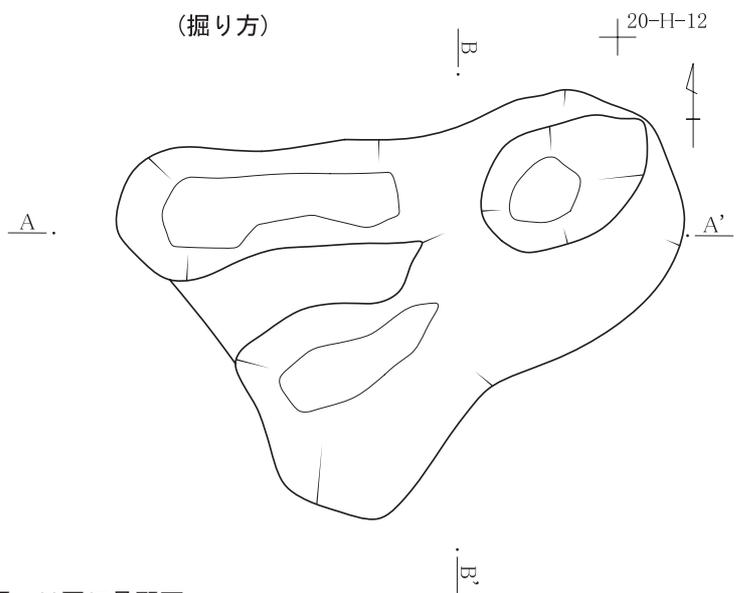
20区25号配石 礫確認状況



(掘り方)

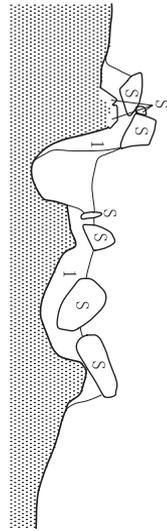


20区25号配石 掘り方



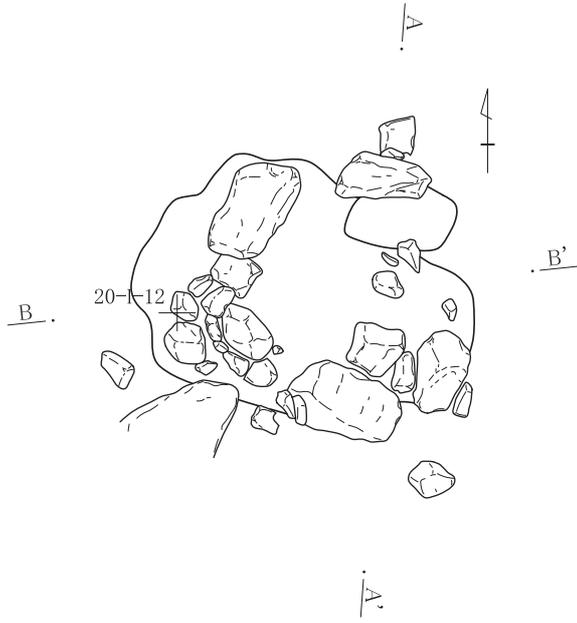
第129図 20区25号配石

20区26号配石

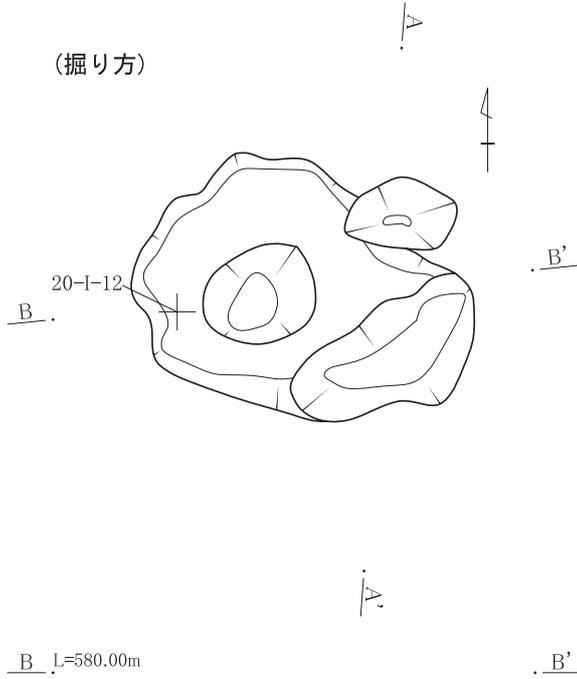


A
L=580.00m

A



(掘り方)



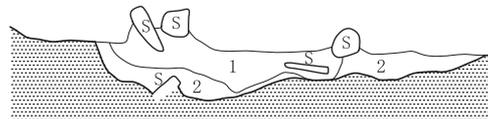
B L=580.00m

B'



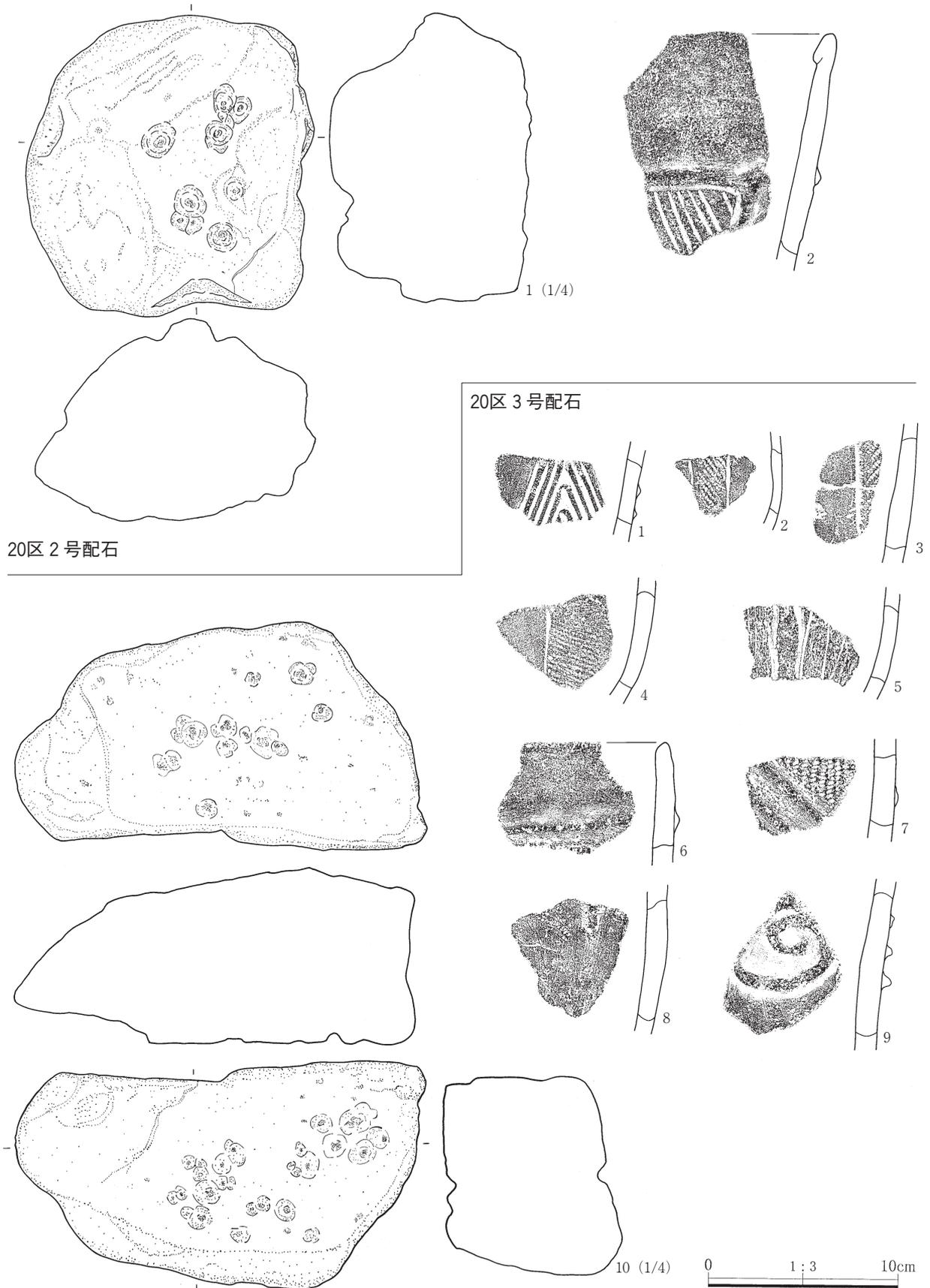
20区26号配石 (南から)

- 1、暗褐色土 砂質土
- 2、暗褐色土 砂質土、黄褐色砂混

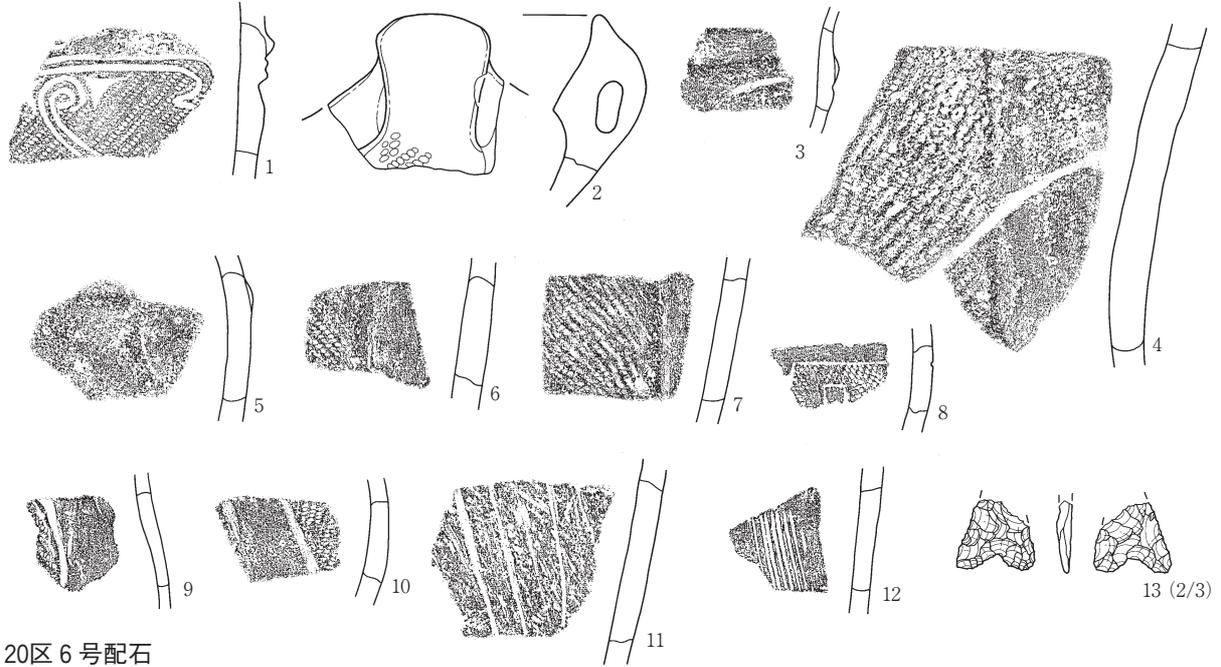


0 1:40 2m

第130図 20区26号配石

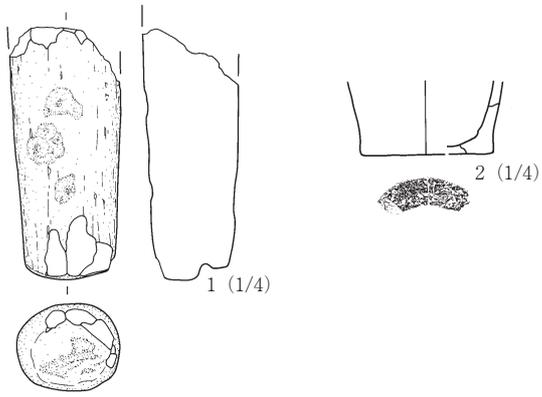


第131図 20区 2号・3号配石出土遺物

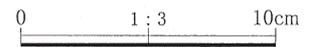
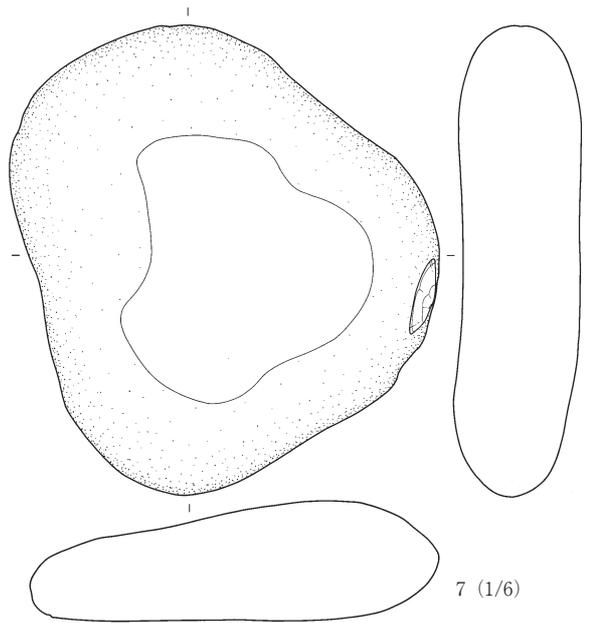
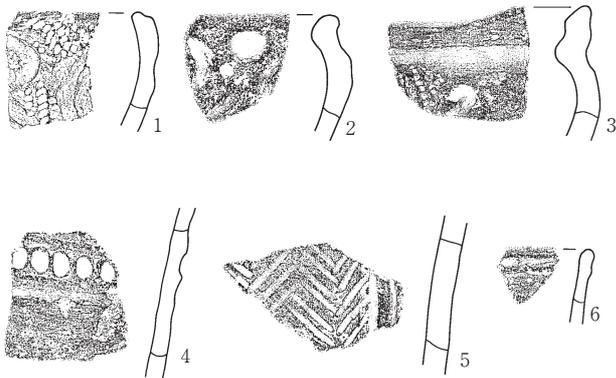


20区6号配石

20区9号配石

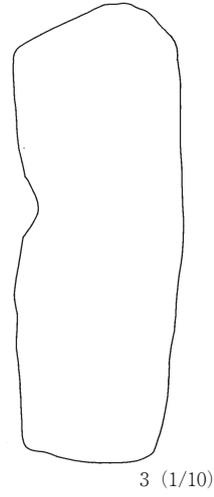
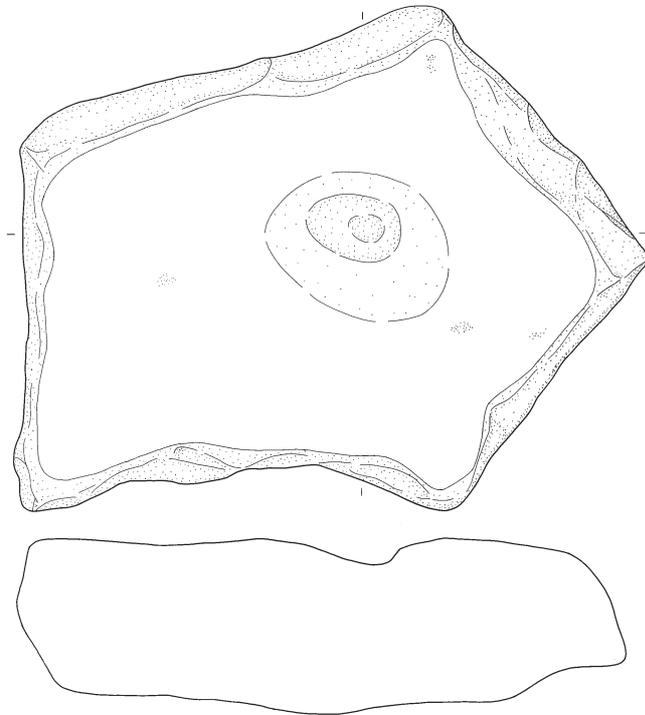
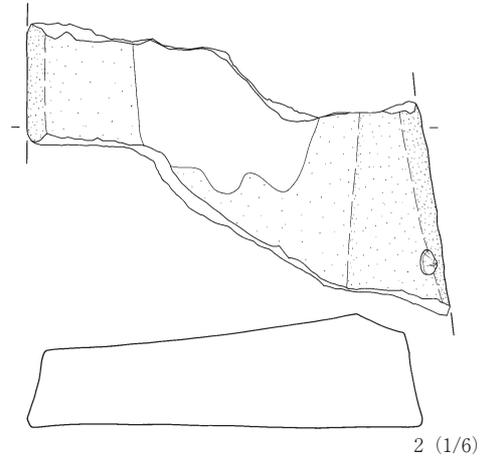
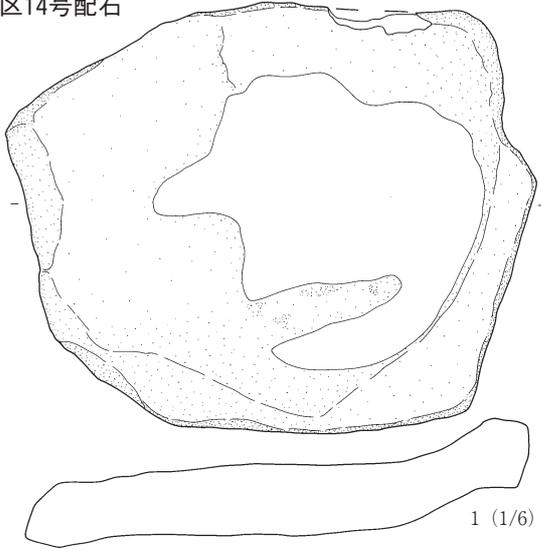


20区10号配石

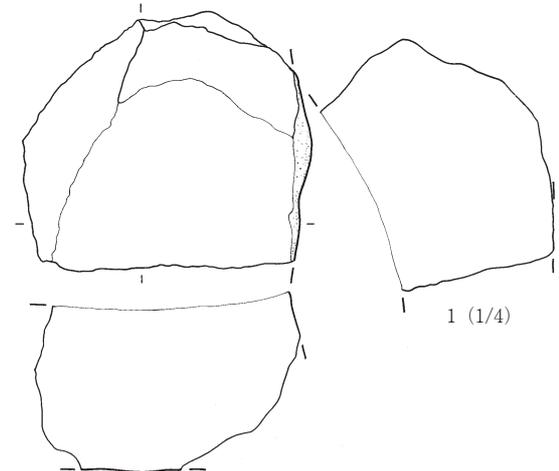


第132図 20区6号・9号・10号配石出土遺物

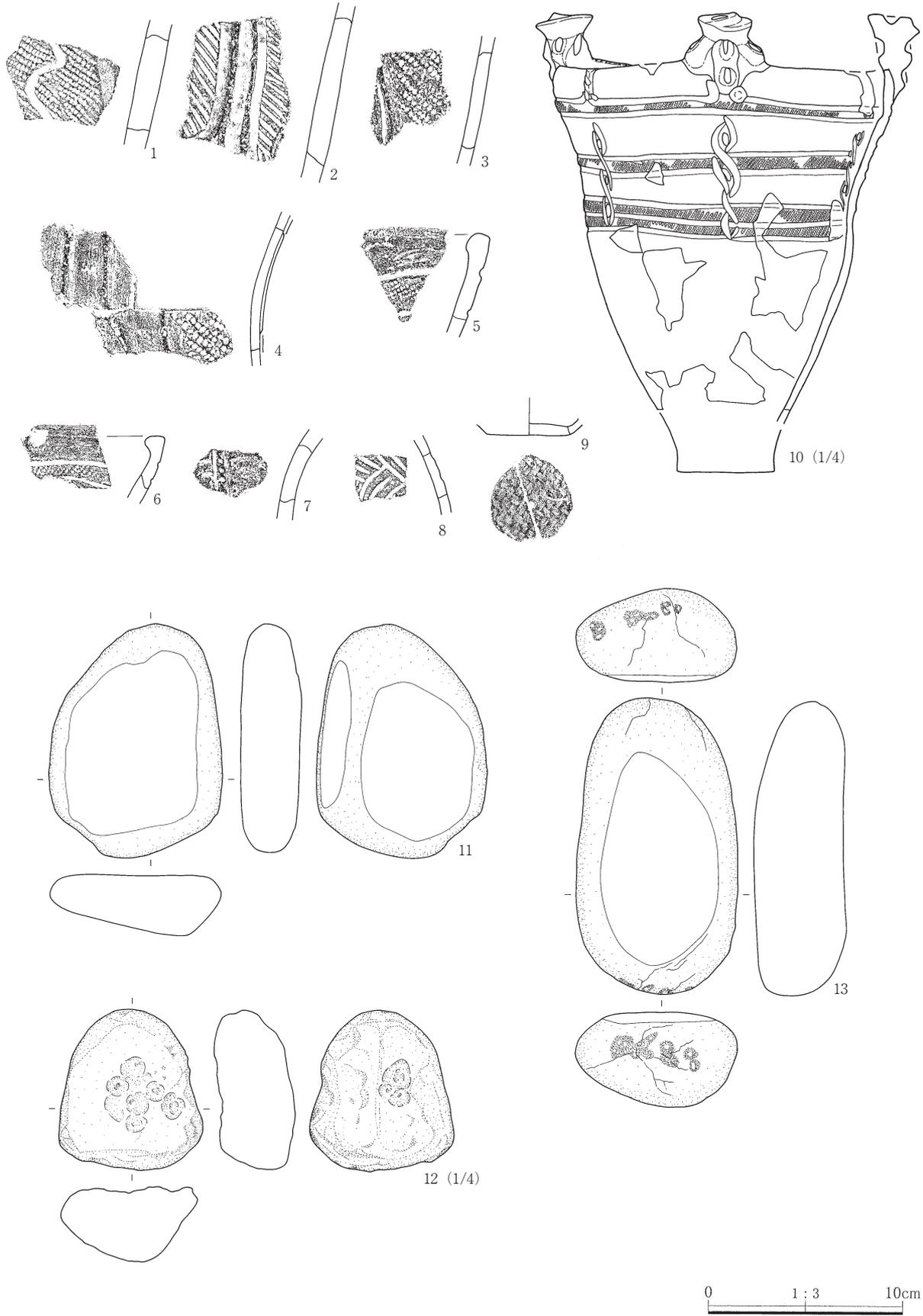
20区14号配石



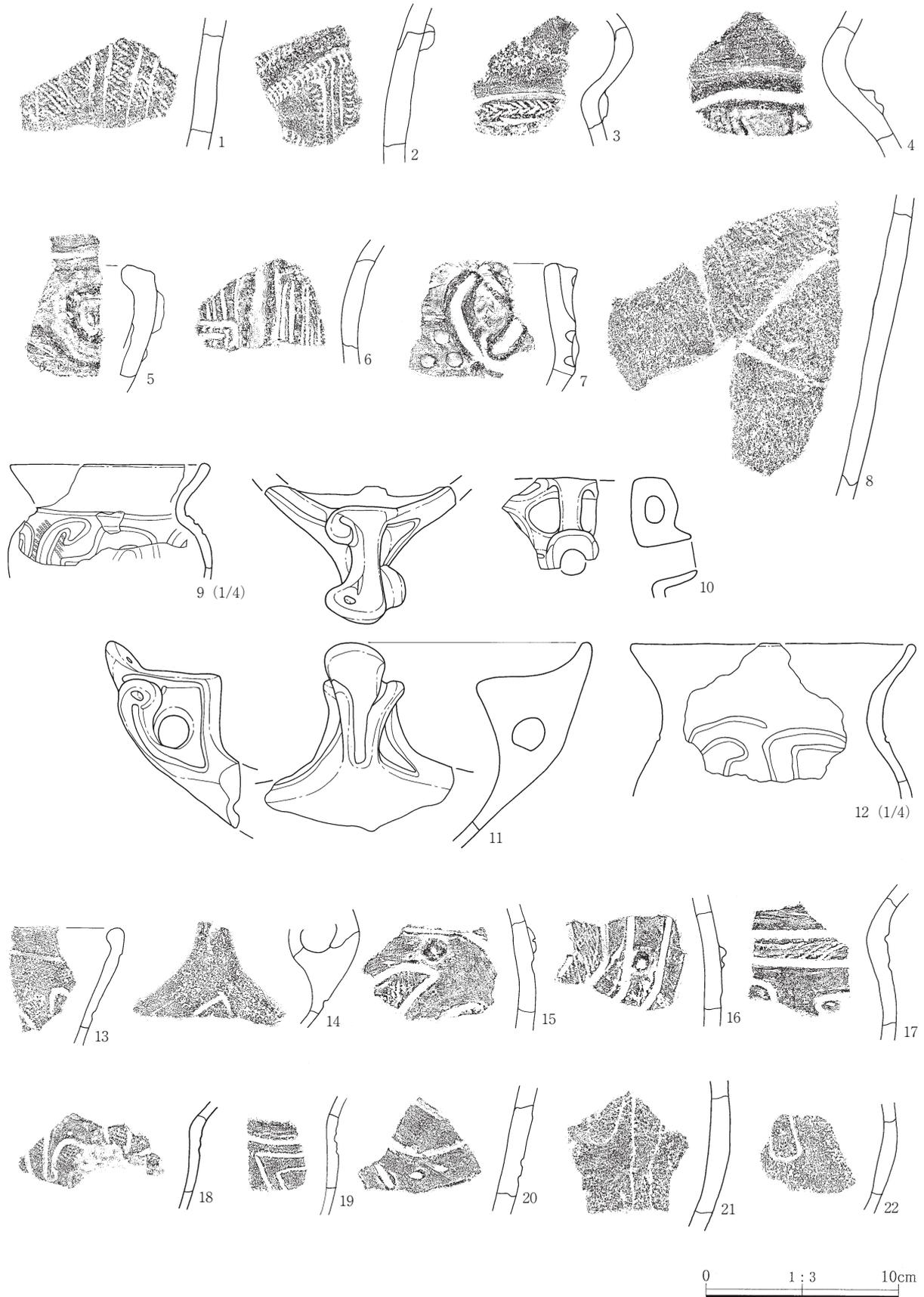
20区16号配石



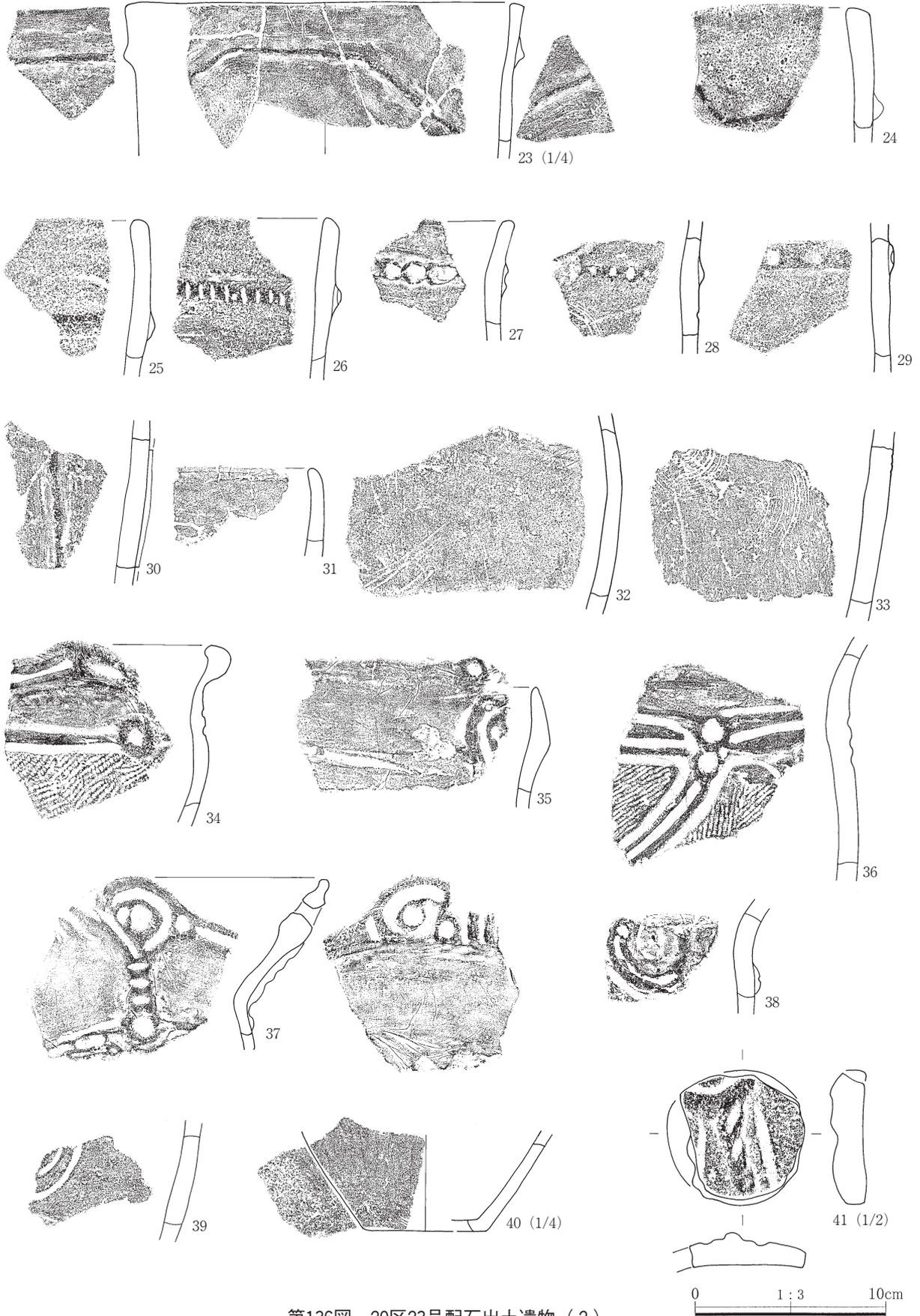
第133図 20区14号・16号配石出土遺物



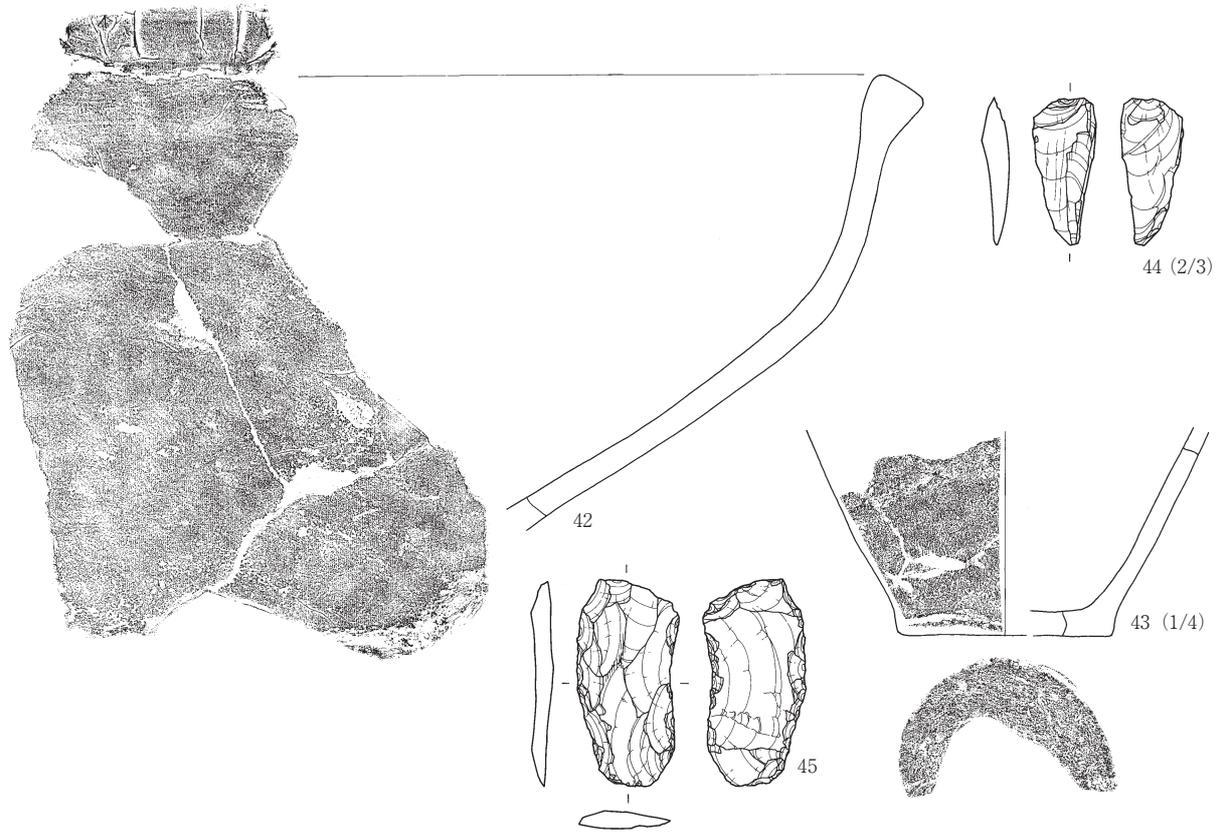
第134図 20区15号配石出土遺物



第135図 20区23号配石出土遺物(1)

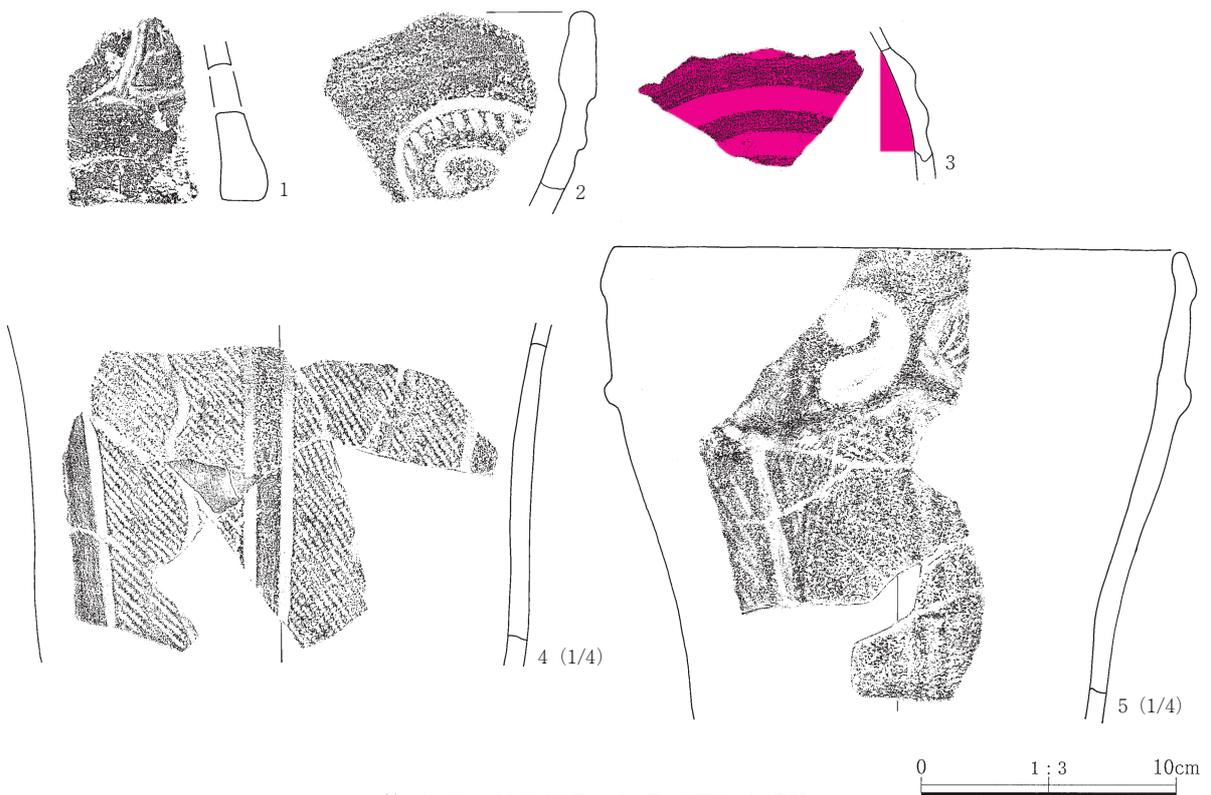


第136図 20区23号配石出土遺物（2）

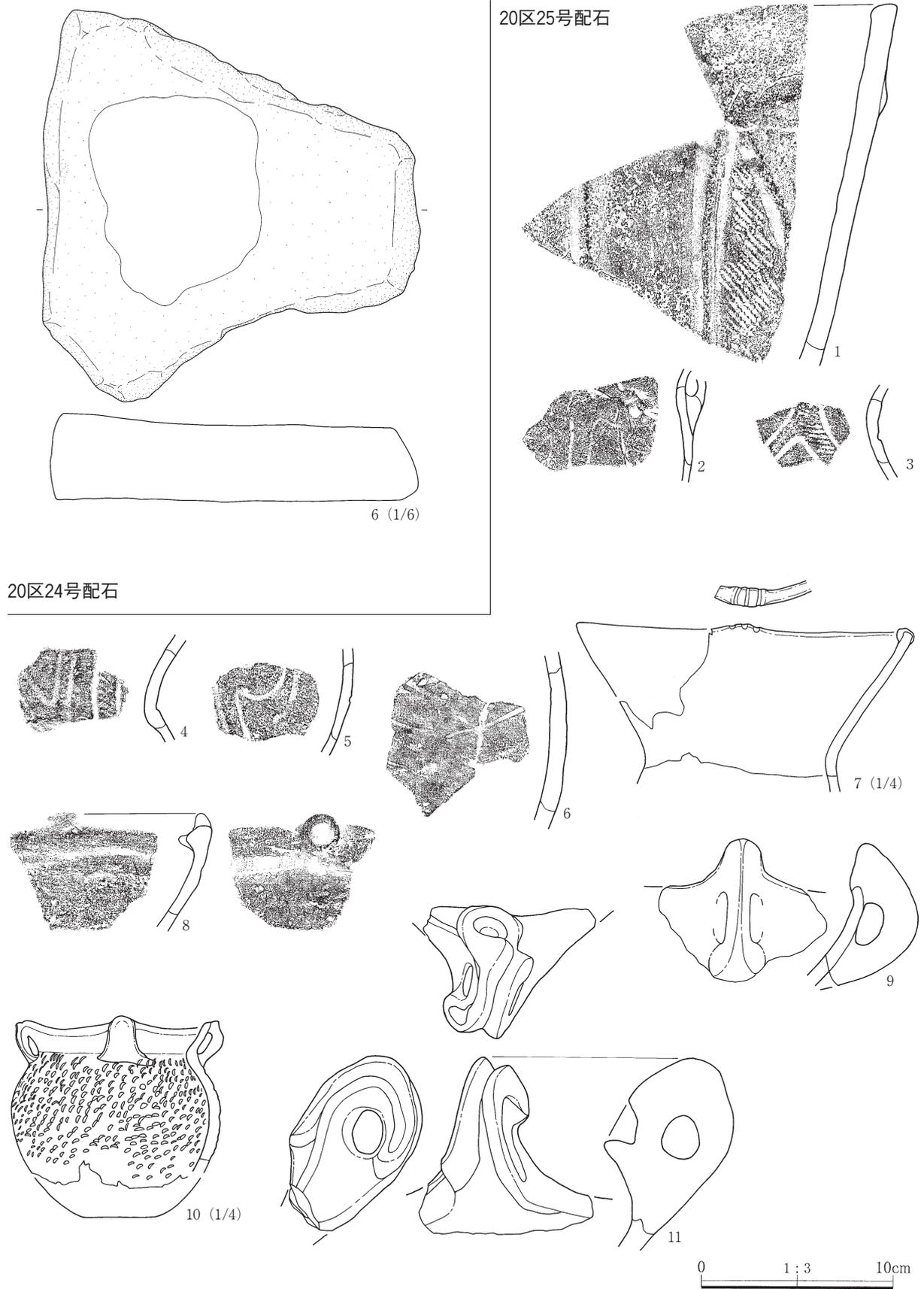


20区23号配石

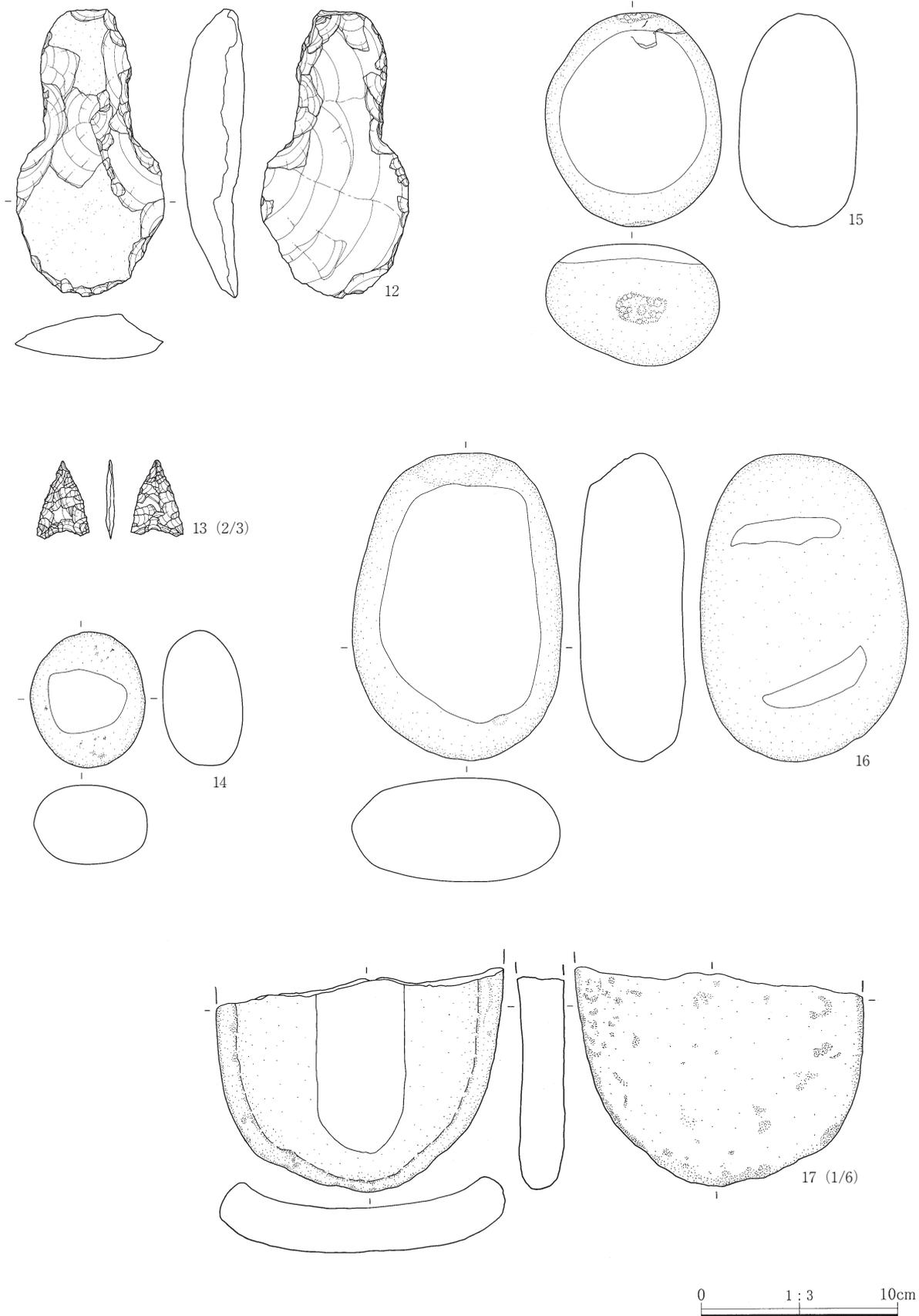
20区24号配石



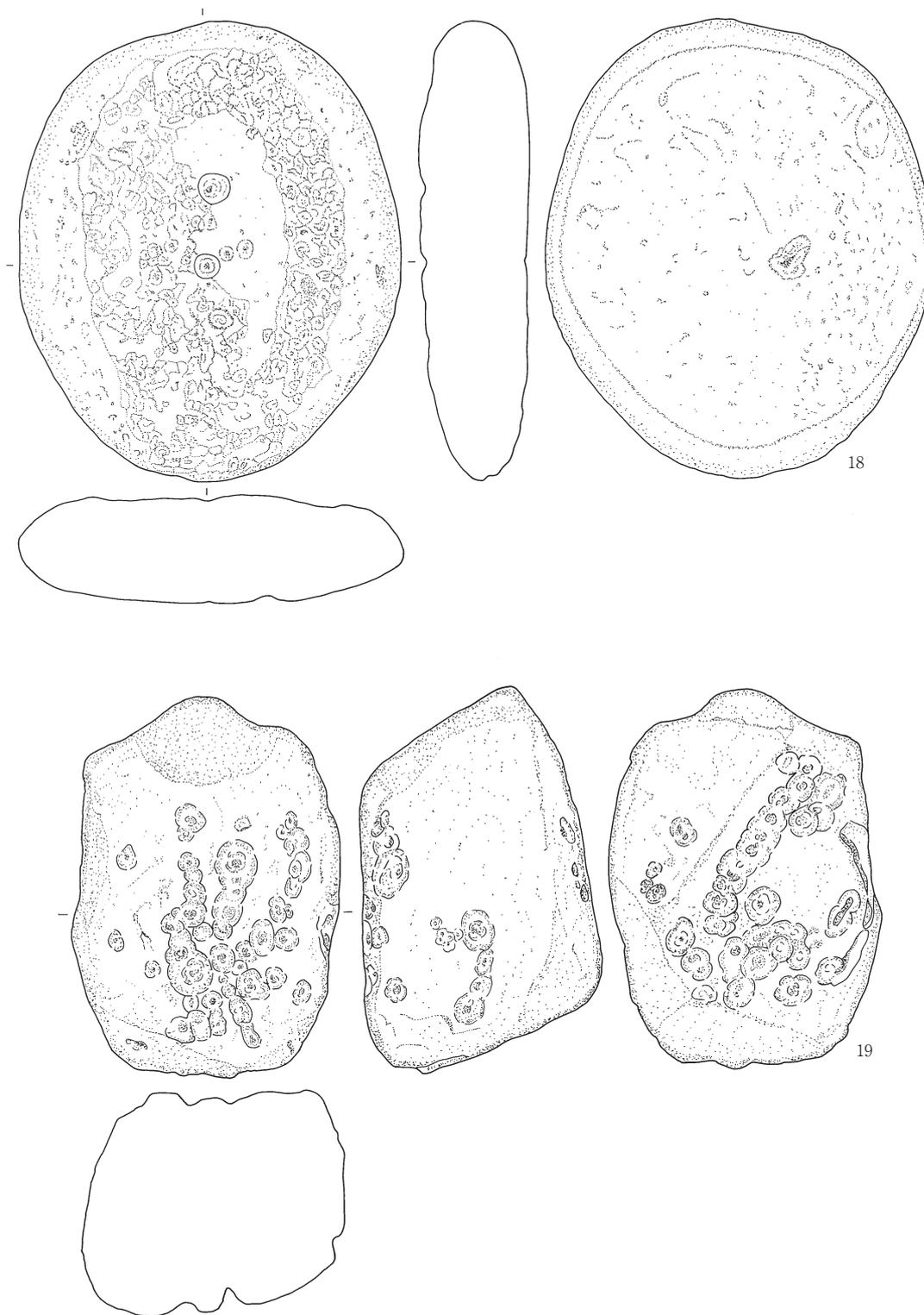
第137図 20区23号・24号配石出土遺物



第138図 20区24号・25号配石出土遺物



第139図 20区25号配石出土遺物（2）



第140図 20区25号配石出土遺物（3）

28区配石遺構

28区では、1号～17号までの17基の配石遺構が調査された。このうち、1号は1号住居の床面敷石の一部であることが判明し、欠番扱いとする。15号は住居の炉、16号は住居の出入り口施設に変更となり、すでに横壁中村遺跡（8）で報告済みである。

今回はそれらを除外した14基について報告する。これらのうち、2号～13号は1号～8号列石遺構と共に、本遺跡の発掘調査の開始当初に確認された一連の遺構で、表土直下の高いレベルで確認され、調査が行われている。

28区2号配石

調査年度 平成8～10年度

位置 H-1グリッド

経過 平成8年度に1号列石が確認された際に、その東端部にひときは大きな礫がのっており、周囲多孔石や磨石もあることから、列石と一体化した配石遺構とされた。調査は平成10年度に実施された。
重複 28区1号列石の東端部にのっており、列石と一体化した単位配石とされた。北側1mに2号住居（加曾利E1式期）、南側2mに18区2号住居（加曾利E3式期）、東側2.5mに2号土器埋設遺構（加曾利E1式期）がそれぞれ接近する。

形状 中央に長さ140cm、幅105cm、厚さ50cmの巨礫を水平に据えている。この礫の周囲および下には、径20～50cm程の礫が散在するが、この礫は下位の3石によってのみ支えられているような状態で検出されている。そのため礫下の土は締まりがなかったとの調査所見がみられる。

下部遺構 巨礫を支える礫3石の周囲及び下面から焼土が検出されている。焼土自体は、周囲の地山礫も被熱していることから、この場で焼土化したものである。しかし、配石の巨礫およびそれを支える3石には被熱の痕跡は無く、焼土の上に礫を据えた状態となっている。焼土化の直後に礫を据えたのか、時期差が存在するのかは不明である。

石材等 中央の巨礫は、地山に含まれる礫と同様な

粗粒輝石安山岩亜角礫、それを支える3石は扁平な礫が選択され、1石は川原石、他の2石は地山礫と同様である。また、周囲の礫はほとんどが地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫であるが、少数川原石や多孔石などの石器を含んでいる。

方位 -

遺物 巨礫下及び周囲から中期後半の土器片が数多く出土している。土器は総数72点が出土しており、主な土器は加曾利E3式であるが、中期後半から後期までの土器が混在しているというのが実情である。石器は石鏃1点、磨石1点、多孔石1点のほかに、石核2点、剥片7点、碎片2点が出土している。

所見 配石下に散布する焼土と土器をはじめとする出土遺物は、ここに住居が存在したことを示していると考えられる。この地区は加曾利E1式期と同3式期の住居をはじめとする遺構が密集しており、焼土の散布状況は近接する18区2号住居の炉周囲の状況と同じである。つまり、1号列石とこの2号配石は、これらの住居を削平・攪拌して築造されたと考えられる。問題はその時期であるが、少なくとも加曾利E3式期以後とすることができる。

28区3号配石

調査年度 平成8～10年度

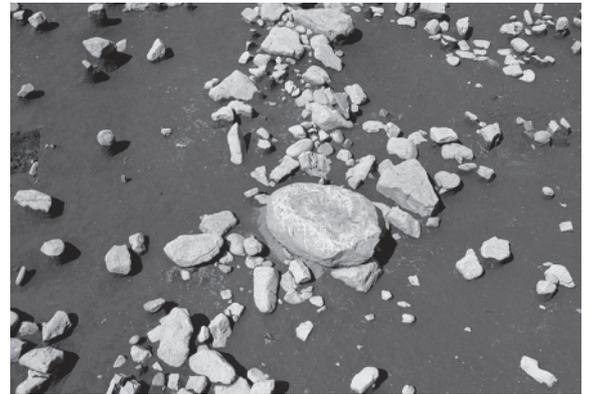
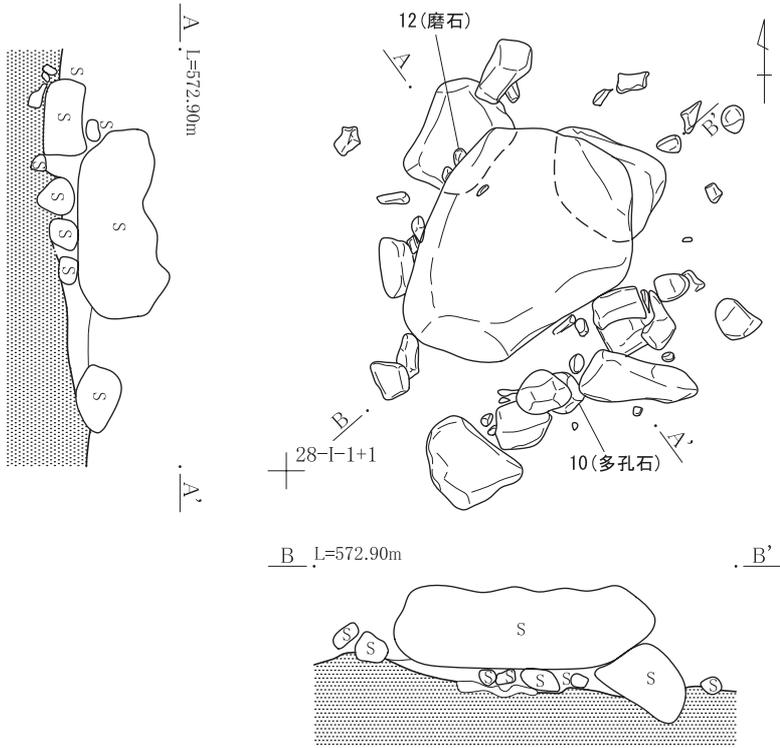
位置 P-2グリッド

経過 本配石立石は、表土掘削前から一部が現地表に露出しており、現在の地割りの地境石的に利用されていた。調査当初は近現代のものと想定していたが、表土掘削を進めていく中で、立石であることが判明し、これと関連する礫群を含めて配石として調査を実施した。

重複 東西に延びる28区6号列石のほぼ中間地点に位置する。立石を伴うため、列石と一体化した単位配石として調査した。

形状 長さ70cm、幅45cm、厚さ20cmの扁平な礫を中心に立てて立石とし、その周囲を礫で押さえるように圍繞している。立石は扁平な礫の平らな面をほ

28区2号配石

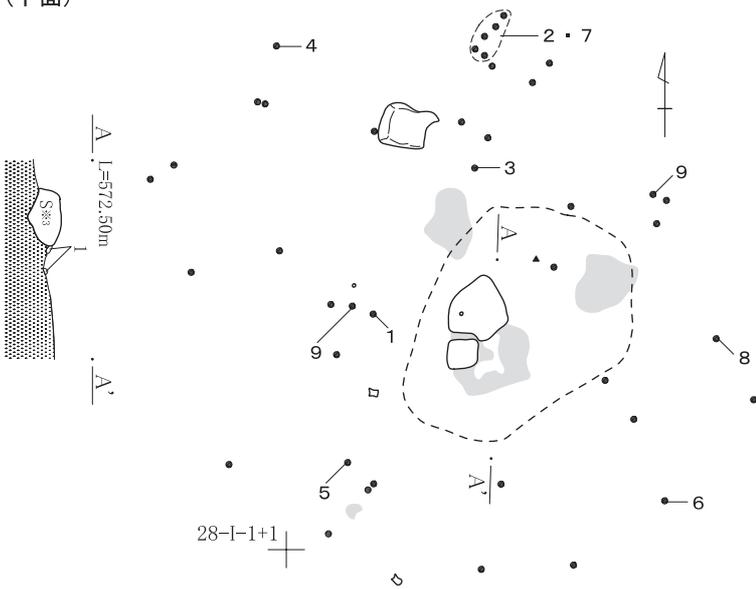


28区2号配石(東から)上方に延びる石列は1号列石。



28区2号配石 大型礫と下部の礫

(下面)



28区2号配石 大型礫下の状況

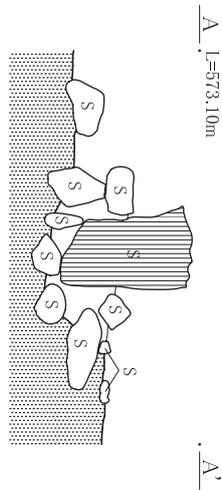


第141図 28区2号配石

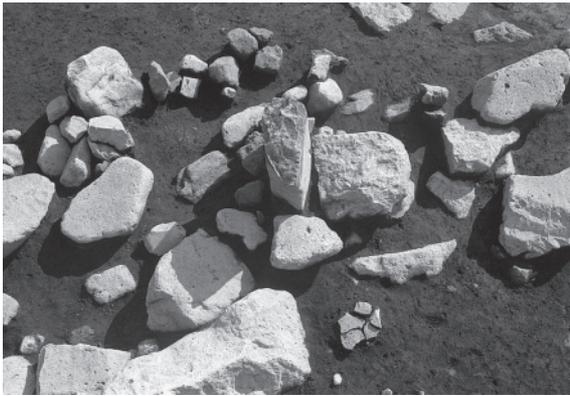
28区3号配石

- 1、黒褐色土 しまりを欠き
軽石を含まない。
- 2、暗褐色土 ややしまりあり。
白色・黄褐色軽石を少量含む。
- 3、暗褐色土 2よりも色調やや暗い。
軽石の混入が2よりさらに少ない。

川原石
縦位置



28区3号配石 (西から) 立石の頭部は現地表に出ていた。

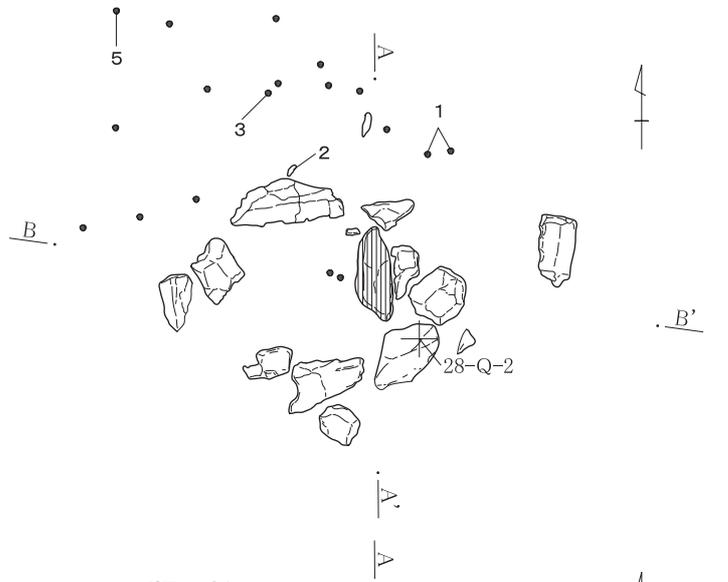
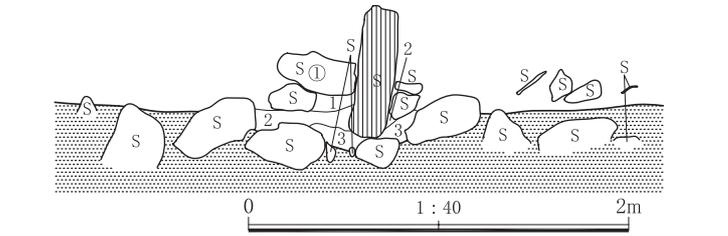
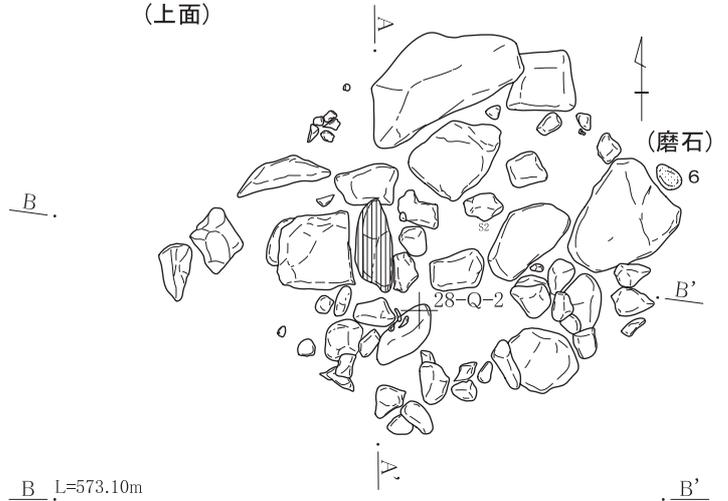


28区3号配石 (北から) 確認状況

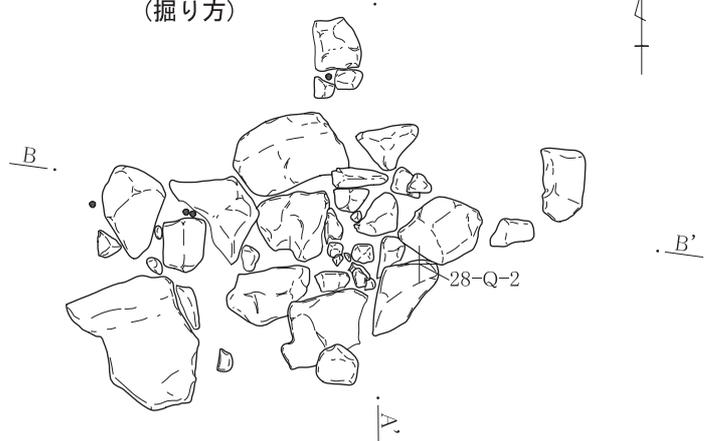


28区3号配石 立石の大きさ

(上面)



(掘り方)



第3章 発見された遺構と遺物

ぼ東西に向け、圍繞する礫の上面から約30cm程が屹立していた。ただし、この立石は調査前から地表に露出しており、上部が打ち欠かれた様子が観察されるため、本来の高さは現状より高かったことが想定される。また、立石の下には径10～20cm程の礫が敷き詰められている。立石の構築順序としては、調査時には明確な確認はできなかったが、旧地表を土坑状に掘り凹め、次に小礫を敷き、立石を立て、その立石を支えるように周囲に礫を配したものと考えられる。

下部遺構 下部遺構は確認されなかった。

石材等 立石を含め、全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 ー（立石の軸）

遺物 土器は中期後半のものが総数42点出土しており、主な土器加曾利E3式である。石器は磨石1点が出土している。

所見 この立石は、頭部を打ち欠かれながらも現表土に突き出ていたと言う。畑地内であれば当然撤去されたはずだから、開墾時からこの位置に地境が継続していたことになり、馬入れや道がここにあったと考えられる。

28区4号配石

調査年度 平成8～10年度

位置 Q・R-2グリッド

経過 28区8号列石の西側延長上に、列石とは異なる配置で礫が集積されていたため、列石と一体化した単位配石の可能性のあるものとして調査を実施した。

重複 28区8号列石の西端にほぼ接しており、北に7号配石が近接する。また、12号住居（未報告）は住居範囲は推定であるが、本配石より下位から検出されている。

形状 本配石は中央に礫のない空間を挟み、東側に径50～80cmのやや大型の礫、西側に10～30cmの礫を配している。全体の規模は、長軸256cm、短軸200cmほどである。8号列石と比較し、やや幅が広がる

が、礫の配列に規則性が見られない。8号列石が崩れたか、あるいは組み替えた可能性も考えられる。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 全て地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 礫の下及びその周囲から、中期後半から後期前半の土器が多量に出土している。総数は198点で、主な土器は加曾利E3式である。石器は削器1点、打製石斧2点、磨製石斧転用の敲石1点、磨石2点、剥片2点が出土している。

所見 礫は平坦面に揃えて並べられており、上面もほぼ揃っている。なお、出土遺物は、その内容から近接する12号住居の遺物であろう。

28区5号配石

調査年度 平成8～10年度

位置 Q・R-1グリッド

経過 28区6号列石の西端部に、巨礫を含む多量の大型礫が一定の範囲に集積した状態で確認されたため、列石と一連の単位配石として調査を実施した。

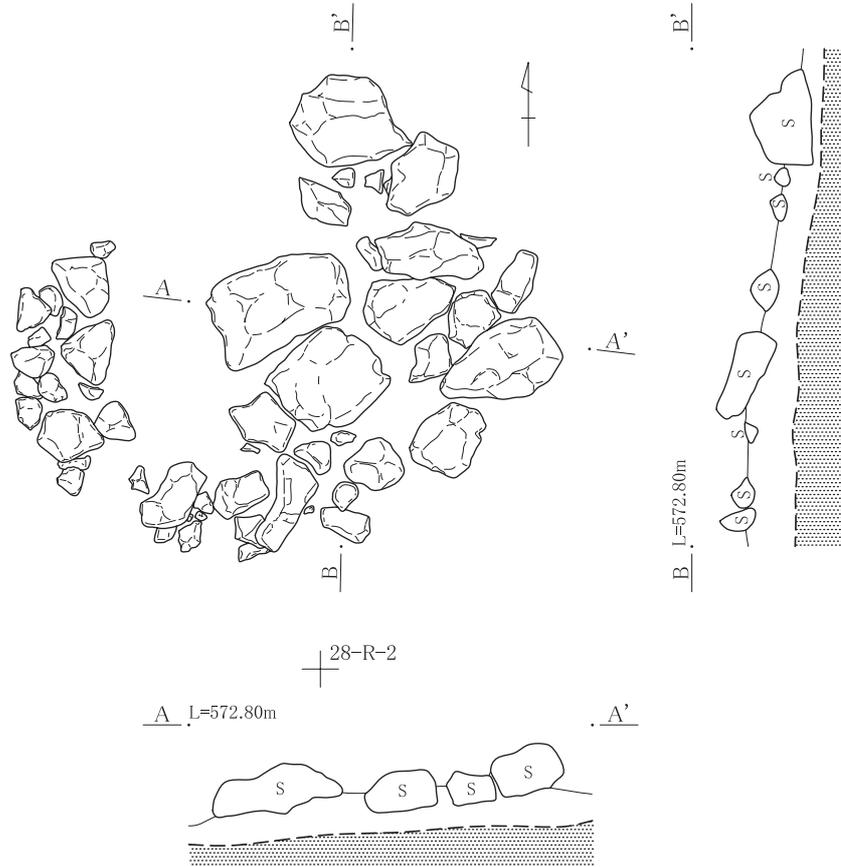
重複 6号列石の西端部に位置する。周囲には3～13号配石が散在する。

形状 本配石は、東側の巨礫を中心とする部分と、その西につながる粗粒輝石安山岩亜角礫の平らな面を水平に据えた部分とから構成される。

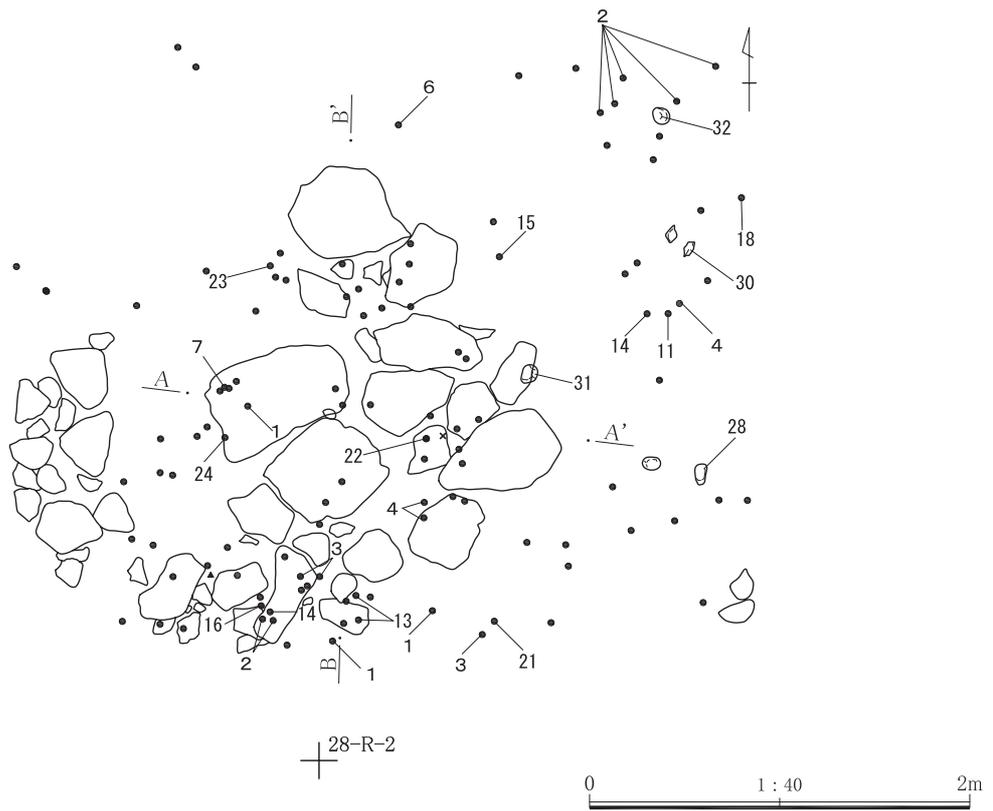
東側は、長さ112cm、幅66cm、厚さ56cmの直方体状を呈する巨礫を中心とし、その周囲に礫を巡らせている。周囲の礫は、いわゆる「鉄平石」や川原石などを含むやや扁平な礫を巨礫に沿うように立てて配し、その上にさらに20～30cm程の礫を環状に配している。

西側部分は平らな面を有する礫を水平に敷き詰めている。面の高にはややばらつきが見られるが、後世の土圧等の影響と考えられ、本来は水平であったものと考えられる。礫の配列は、東北東-西南西方向に3列並行で並べているように看取される。この配列は、28区8号列石に見られる礫の配置に類似し

28区4号配石

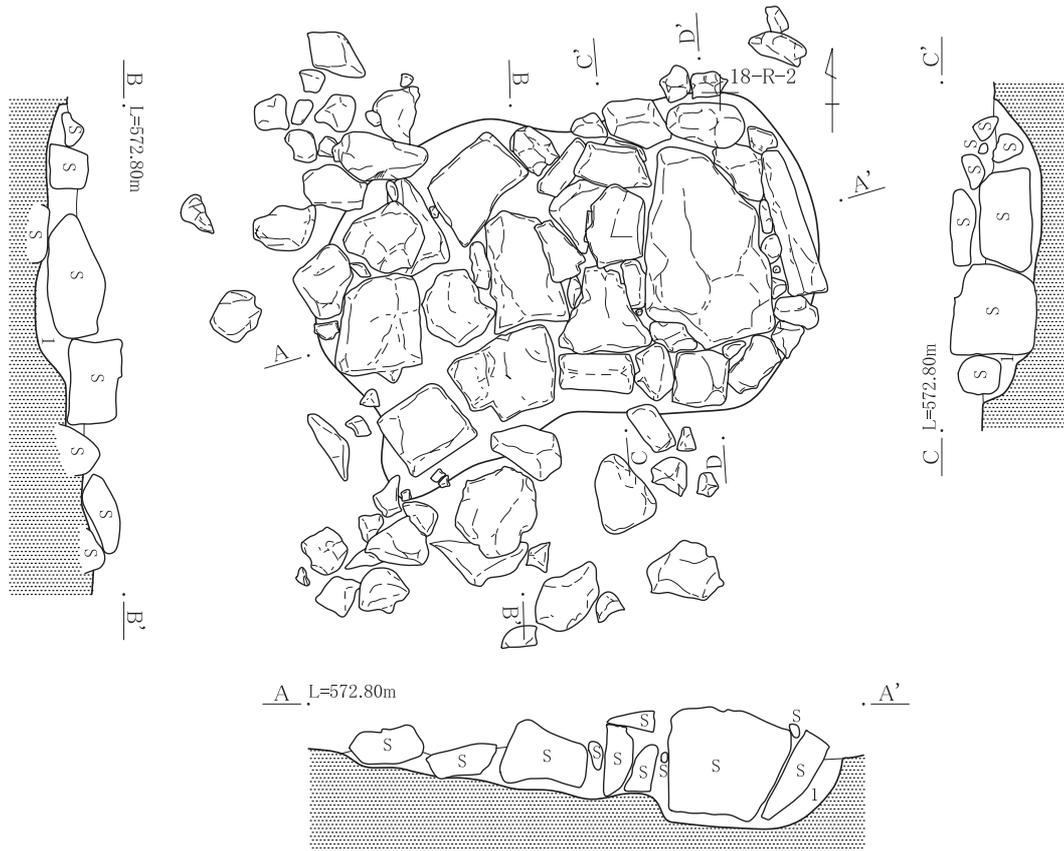


(下面)



第143図 28区4号配石

28区5号配石 (上面)



1、黒褐色土 ばさばさでしまりなし、軽石を含まない。

0 1:40 2m



28区5号配石 (南から)

ているが、この部分で途切れている。

下部遺構 長軸254cm、短軸142~160cm、最深部の深さ40cmほどの楕円形を呈する土坑状の掘り込みが確認された。巨礫直下が最も深く、礫を据えるための掘り方に相当するものと考えられる。

石材等 中央の巨礫など多くの礫は、地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用するが、巨礫の周囲の礫には、川原石や「鉄平石」も少数含まれる。

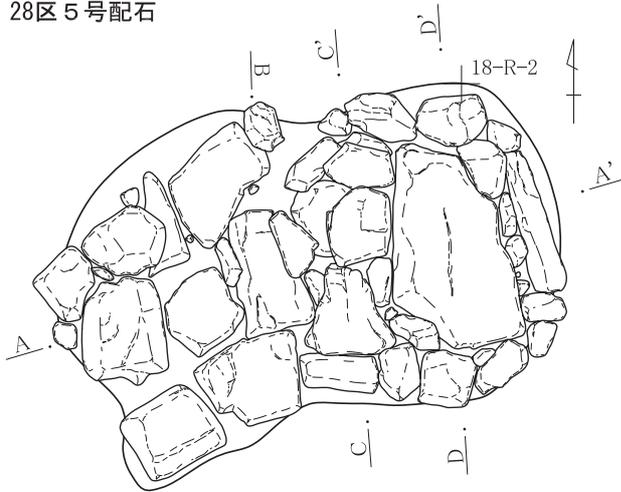
方位 —

遺物 出土遺物は少なく、土器は中期後半の小破片が20点のみで、石器も石棒の小破片1点と石核1点のみの出土である。

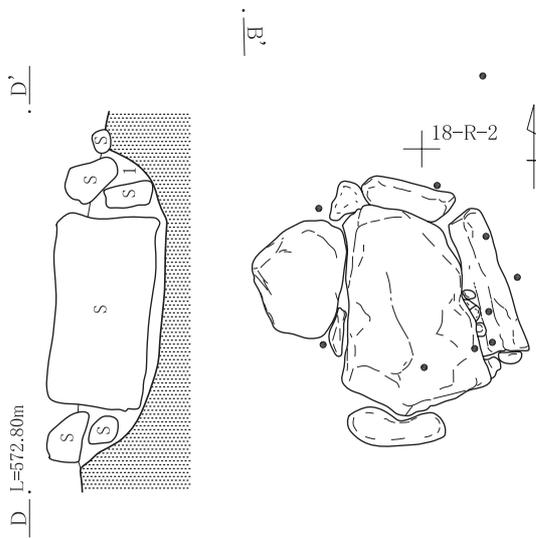
所見 本配石は、上面を平坦にすることを第一義として、大型礫を一定範囲に集積したもので、礫の

第144図 28区5号配石 (1)

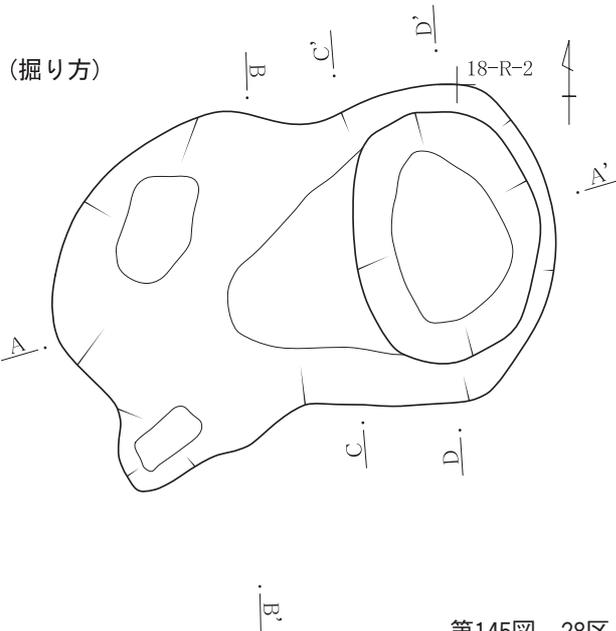
28区5号配石



28区5号配石 (南から)



28区5号配石 (南から) 掘り方調査



28区5号配石 (北から) 掘り方



第145図 28区5号配石 (2)

第3章 発見された遺構と遺物

厚みに合わせて掘り方を構築している様子が色濃く表れている。

28区6号配石

調査年度 平成8年度

位置 R-2グリッド

経過 巨礫を中心に礫が列状に集中する地点があり、配石として調査を実施した。西側に10号配石が接しており、一連の遺構の可能性もあるが、礫の密集具合から別遺構として調査した。

重複 東側の一部を12号住居と重複し、それを切る。西に28区10号配石が接する。

形状 長さ67cm、幅49cm、厚さ30cmの礫を中心に、その周囲に径5～30cm程の礫が集められ集石状を呈する。規模は、長軸180cm、短軸120cmほどである。中央の巨礫下からも遺物の出土があり、人為的な遺構と判断した。

下部遺構 礫の下からも遺物が出土するが、下部遺構は確認されなかった。

石材等 石棒などの遺物を少量含むが、ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 土器は中期後半のものを中心に総数67点が出土しており、主な土器は加曾利E3式である。石器は加工痕ある剥片1点、石棒を転用した砥石1点、剥片2点が出土している。

所見 大型礫を中心に小礫を集積したタイプで、10号配石に比べて礫の密集具合が高い。

28区7号配石

調査年度 平成8年度

位置 R-2グリッド

経過 丸い大型の川原石を中心に礫が集中し、遺物を多数含むことから配石として調査を実施した。その後の調査でこの配石の下から12号住居が確認された。

重複 本配石の下に12号住居(未報告)が重複し、

それを切る。南に28区4号配石が近接する。

形状 長軸135cm、短軸80cmほどの範囲に径5～40cmの礫が集中してみとめられ、集石状を呈している。中央からやや北西にずれた地点に丸い大きな川原石が1石認められるが、その他の礫の配列に規則性は認められない。なお、南側にも礫が集積された一群がある。

下部遺構 上位の配石を取り除いたところ、長軸146cm、短軸80～122cm、深さ13cmの土坑が確認された。先の配石に認められた川原石は、本土坑の中央やや西よりの地点にあたる。また、土坑北側には扁平な礫2石が壁に立て掛けられたような状況で検出されている。

石材等 少量の川原石を含むが、ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 - (下部遺構)

遺物 本配石で取り上げた遺物は多量にあるが、その大半は重複する12号住居のものであろう。土器は中期後半から後期前半のものが総数156点出土しており、主な土器は加曾利E3式である。石器は石鏃1点、削器1点、打製石斧1点のほかに、剥片2点、碎片3点が出土している。

所見 配石として扱ったが、遺物の出土状況から12号住居の覆土に廃棄された遺物の可能性も考えられる。

28区8号配石

調査年度 平成8・9年度

位置 R・S-3グリッド

経過 表土掘削後、ブロック状の礫が密集する地点があり、配石として調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められないが、南に13号配石が近接する。

形状 長軸210cm、短軸160cmほどの範囲に、径50～90cmのやや大型の礫が密集して据えられている。礫は、上下2段に積まれたようになっており、上面の高さは、ほぼ揃えられている。

下部遺構 配石の二段に積まれた下段の礫を調査中

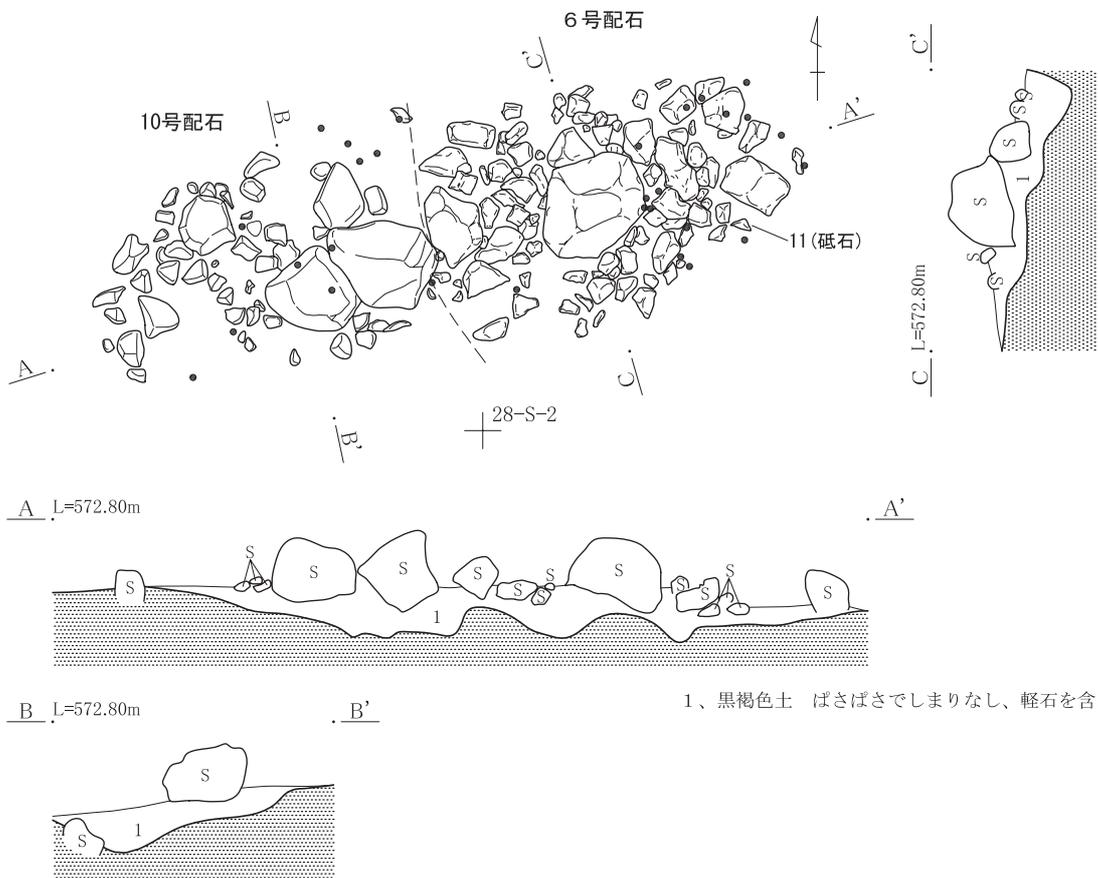
28区6・10号配石



28区10号配石(南から)



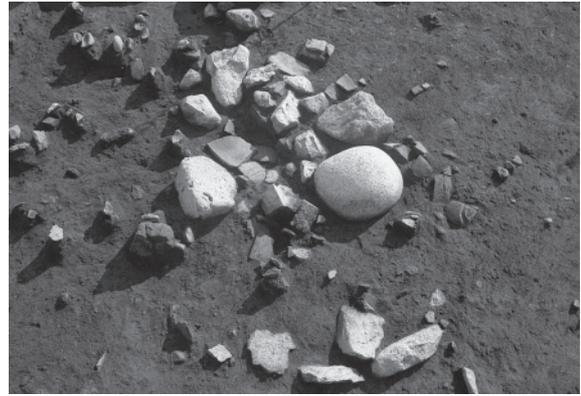
28区6号配石(南から)



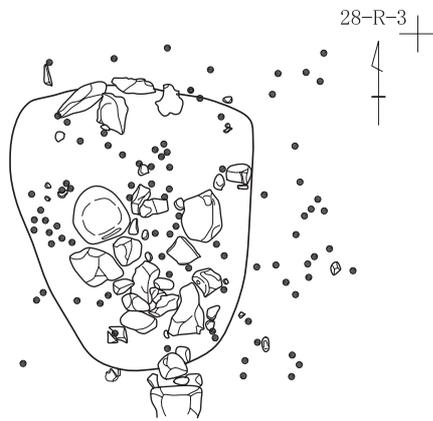
第146図 28区6号・10号配石

28区7号配石

(上面)

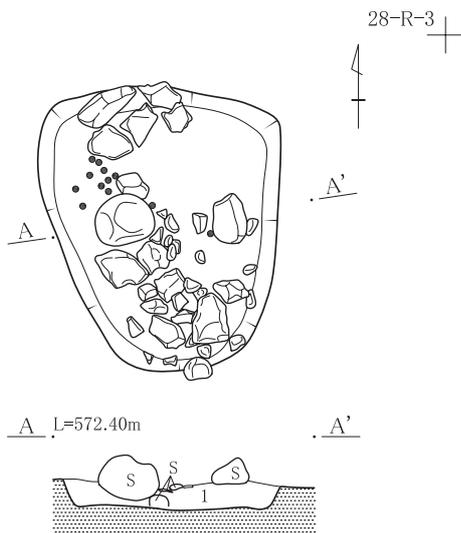


28区7号配石 (北から)



28区7号配石 (北から) 掘り方調査

(掘り方)



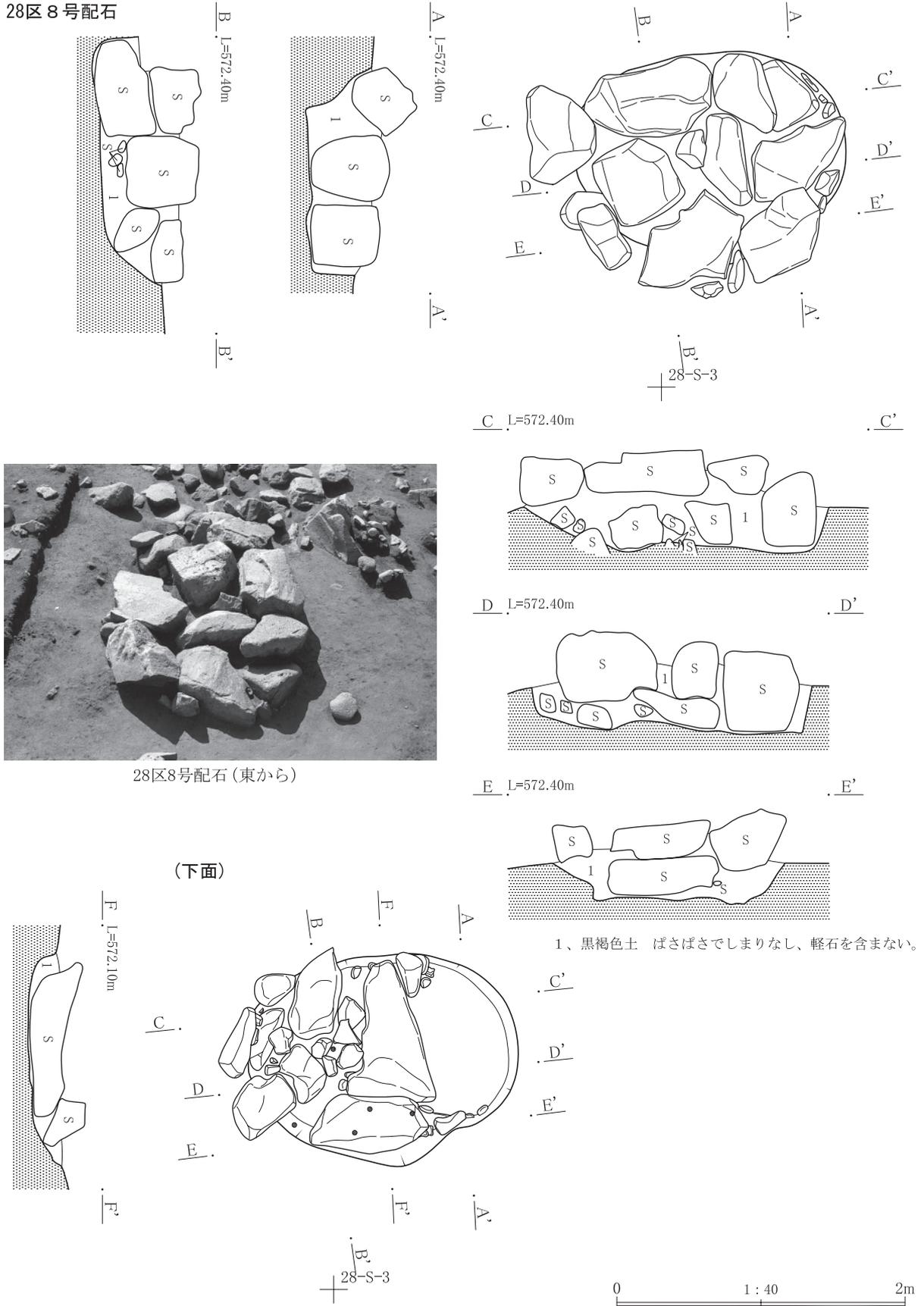
28区7号配石 (北から) 掘り方

1、黒褐色土 ばさばさでしまりなし、軽石を含まない。

第147図 28区7号配石

0 1 : 40 2m

28区8号配石



第148図 28区8号配石

第3章 発見された遺構と遺物

に、その礫を含む土坑状の掘り方が確認された。ほぼ上位の配石と同範囲であり、掘り方はさらに上方から切り込まれていたと考えられる。

石材等 ほぼ地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期のものが30点出土しており、石器は加工痕ある剥片1点、剥片1点、碎片1点が出土している。

所見 上面を平坦にすることを第一義として、大型礫を一定範囲に集積した状態は5号配石と共通しており、本配石では2段に組み合わせることで、上面の平坦化を調整している。

なお、本配石の掘り方は、断面図にも表れているように、さらに上方から切り込まれていたと考えられる。この地区の配石は表土層直下で確認されたものが多く、穴を掘り不要な礫を処分したようにも見える。

28区9号配石

調査年度 平成8年度

位置 S-1グリッド

経過 巨礫を中心に礫が集中することから配石として調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められないが、北に3～13号配石が近接する。

形状 中心に長径115cm、短径80cmの巨礫を据え、その周囲に径10～60cm程の礫を寄せ集めている。周囲の礫は、一部中央の巨礫に覆い被さるように積み重ねられている。全体の規模は長軸126cm、短軸140cmほどである。

下部遺構 配石の礫を除去中に、上位の配石とほぼ同範囲に掘り方を検出した。規模は長軸147cm、短軸124cm、深さ28cmほどで、礫は巨礫の包むようにぎっしり詰め込まれていた。

石材等 ほぼ地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期のものが8点出土しており、石器は打製石斧1点、剥片1点、碎片2点が出土している。

所見 巨礫を中心に礫を集積したタイプだが、掘り方内の礫を詰め込み、礫の形状を組み合わせる上面を平坦にする意図は本配石にも認められ、5号・8号配石と共通する。

28区10号配石

調査年度 平成8年度

位置 S-2グリッド

経過 6号配石と共に確認された。

重複 重複する遺構はないが、東に28区6号配石が接する。一連の遺構の可能性もあるが、礫の密集度合いから別遺構として調査した。

形状 長軸175cm、短軸110cmほどの範囲に、径10～60cmの大型礫と小礫が集中し集石状を呈する。礫の密集度合いは、隣接する6号配石と比較しやや散漫である。

下部遺構 礫の下からも遺物が出土するが、下部遺構は確認されなかった。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は中期後半のものを中心に総数24点が出土しており、主な土器は加曾利E3式である。石器は加工痕ある剥片1点、使用痕ある剥片2点、楔形石器1点が出土している。

所見 大型礫を中心に小礫を集積したタイプで、6号配石に比べて礫の密集度合いが散漫である。

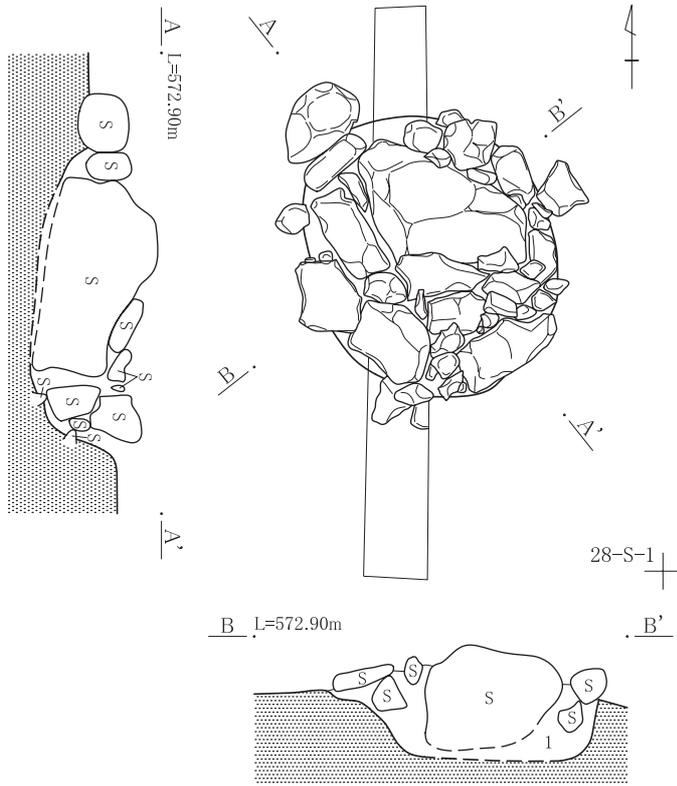
28区11・12号配石

調査年度 平成8・9年度

位置 S-2グリッド

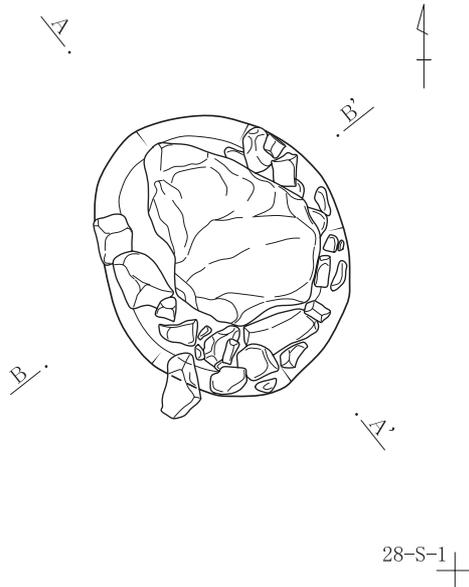
経過 表土掘削後、2石の巨礫を中心に礫が集中する箇所があり、配石として調査を実施した。調査時は、南側の巨礫を中心とする箇所を11号配石、北側の巨礫を中心とする箇所を12号配石として調査を

28区9号配石



1、黒褐色土 ばさばさでしまりなし、軽石を含まない。

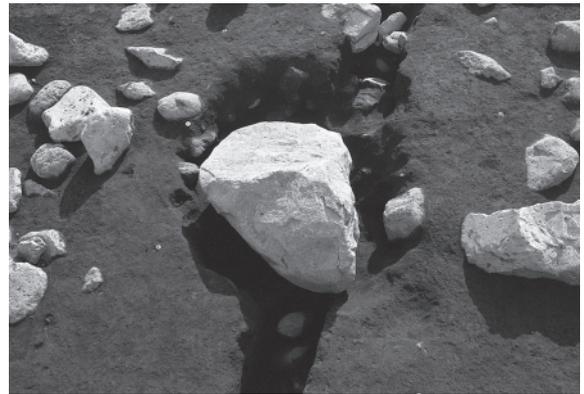
(下面)



28区9号配石(北から)確認状況



28区9号配石(東から)掘り方調査



28区9号配石(北から)掘り方調査

0 1 : 40 2m

第149図 28区9号配石

第3章 発見された遺構と遺物

実施したが、一連の遺構として扱う。

重複 重複する遺構は認められないが、東に3～13号配石が近接する。

形状 南北に2石の巨礫が並び、その周囲を20～40cm程の礫が圍繞する様相を呈する。南側の巨礫は長さ60cm、幅54cm、厚さ27cm、北側の巨礫は長さ112cm、幅69cm、厚さ70cmである。配石全体の規模は長軸162cm、短軸120cmほどである。

下部遺構 配石の礫を除去中に、上位の配石とほぼ同範囲に掘り方を検出した。中央の巨礫はこの土坑の底面にあり、配石を構築するための掘り方とみてよいだろう。

石材等 ほぼ地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが112点出土しており、主な土器は加曾利E3式である。石器は加工痕ある剥片1点、磨石1点が出土している。なお、12号配石側の巨礫の下から鉄滓(21)が1点出土している。

所見 1点のみであるが、巨礫の下から鉄滓が出土していることから、中世以降の可能性も考えられる。その場合、他の配石もその可能性が考えられることになり、遺構の種類としては配石ではなく、耕作時などに不要な礫を埋めて処分した土坑の可能性が想定される。

28区13号配石

調査年度 平成8年度

位置 R・S-2グリッド

経過 表土掘削後の精査中に、礫がやや集中する地点があり、配石として調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められないが、周囲に3～12号配石が近接する。

形状 1.5m四方の範囲に径10～40cm程の礫が存在する。東辺に1石直立する礫があるが、その他の礫の配置に規則性は認められない。

下部遺構 上位の礫とほぼ同範囲に掘り方状の落ち

込みが確認された。規模は、長軸136cm、短軸96～118cmである。

石材等 ほとんど地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 ー

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが8点出土しており、石器は石鏃1点、剥片3点、碎片3点が出土している。

所見 礫の配置は散漫で、形態は7号配石に類似する。

28区14号配石

調査年度 平成10・11年度

位置 W-5グリッド

経過 28区11号列石を精査中に、扁平な礫を立てて楕円形状に配させることから、配石墓の可能性を測定して調査を実施した。

重複 11号列石の北にほぼ接している。11号列石の形状から判断すると、11号列石の北端部を破壊して本配石が構築されている可能性がある。

形状 長軸200cm、短軸100cmほどの範囲内に礫が集積されており、その中を径10～55cm程の礫が圍繞する配石がある。圍繞する礫は長軸を揃えており、立位で用いられているものも認められる。北側に2段の石積み認められる箇所もあるが、その他は1段である。石積みは土坑底面から積まれたものではなく、壁の途中から認められる。内部上面にはやや散漫であるが径10～40cm程の礫が充填されている。配石の内部の南西端の位置には一石のみ扁平な川原石が配され、意図的な様相がうかがえる。配石内部の規模は長軸120cm、短軸45cm、深さ42cmである。

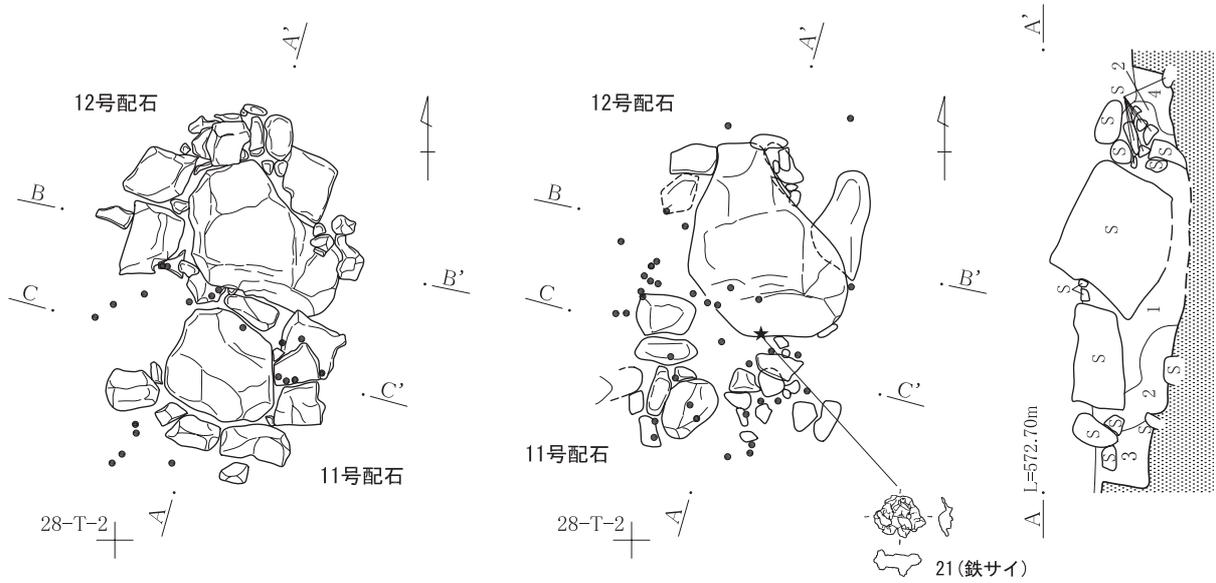
下部遺構 ー

石材等 周囲を圍繞する礫はほとんどが地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫であり、1石のみ「鉄平石」が使用されている。内部上面の礫も同様だが、1石のみ川原石が配されていた。

方位 N56度E

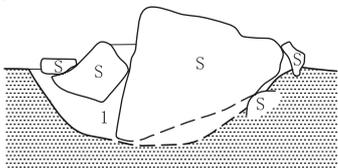
遺物 土器は中期後半から後期前半のものが33点

28区11・12号配石

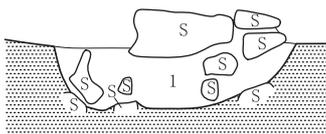


- 1、黒褐色土 小礫・黄色粒よりやや混入。しまり弱い。
- 2、黒褐色土 礫混入。1層よりやや粗粒。
- 3、黒褐色土 礫多く混入。(他遺構の覆土か)
- 4、黒褐色土 礫の混入なく、しまり弱い。

B L=572.70m . B'

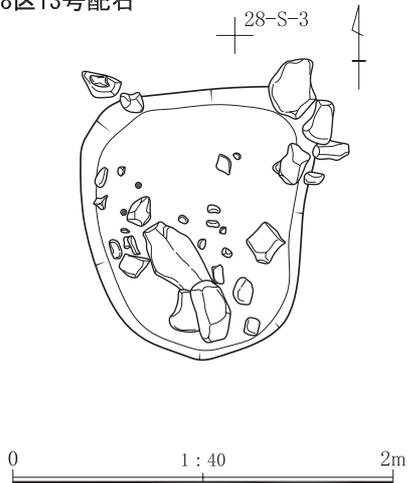


C L=572.70m . C'



28区11号・12号配石(北東から) 確認状況

28区13号配石

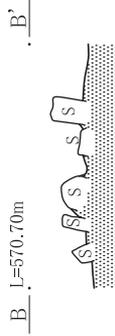
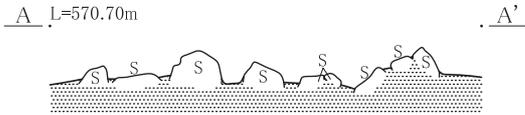
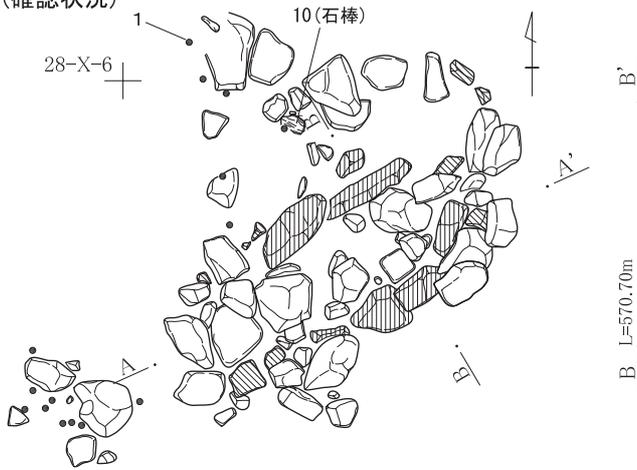


28区13号配石(北から)

第150図 28区11号~13号配石

28区14号配石

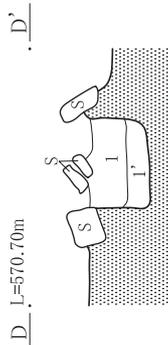
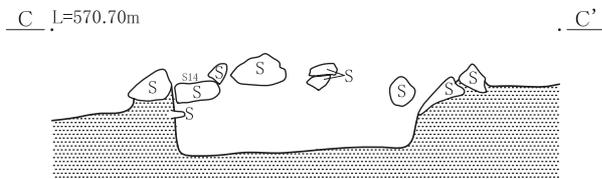
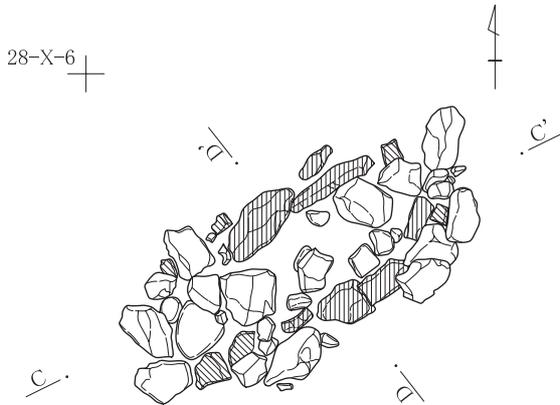
(確認状況)



28区14号配石(北から)南にのびる石列は11号列石



28区14号配石(北東から)確認状況



- 1、暗褐色土 ややしまりを欠き、軽石を含まない。
- 1'、暗褐色土 1に比べてややしまりあり、軽石を含む。



0 1 : 40 2m



28区14号配石(北東から)

第151図 28区14号配石

取り上げられているが、これらは大半が周囲からの出土である。加曽利B1式の壺状土器(1)も11号列石寄りの地点からの出土であるが、本配石に伴うものだったと考えたい。石器は、11号列石寄りの地点から石棒片1点、他に剥片3点が出土している。

所見 礫の配置等から、配石墓としてよいだろう。時期は加曽利B1式期に比定したい。

28区15号配石

調査年度 平成10年度

位置 X-1グリッド

経過 巨礫を中心に礫が集中することから、配石として調査を実施した。

重複 重複する遺構は認められない。

形状 長さ130cm、幅75cm、厚さ52cmの巨礫を中心とし、その周囲に径10~40cm程の礫を寄せ集めている。特に巨礫西側は扁平な礫が数段積み重ねられた状況を呈している。

下部遺構 下部遺構は認められなかった。

石材等 中央の巨礫を含めほとんどが地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫であり、若干川原石を含んでいる。また、石棒・磨石や多孔石などの石器も含まれる。

方位 -

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数141点出土しており、主な土器は称名寺式である。石器は磨石類5点、石棒片1点、多孔石1点、剥片1点が出土している。

所見 掘り方は確認できなかったが、巨礫を中心に扁平礫を重ねて上面を平坦に調整し、一定範囲に詰め込んだ状況が認められる。おそらく住居を破壊して構築したものであろう。土器石器含めて、同一時期の多用な個体を多量に保有するのは住居の特徴であり、本配石に含まれる板状礫は敷石に使用されていた可能性が高いと考える。

28区17号配石

調査年度 平成10年度

位置 Y-3グリッド

経過 28区東半部の調査が収束し、西半部の表土を除去して確認調査を実施した段階で、15号配石とともに最初に確認された遺構である。18号・20号住居の輪郭が見えはじめた段階で、10号~12号列石はまだ見えていなかった。

重複 北側を一部10号列石と重複し、それを切る。

形状 大型礫の周囲を細長い礫が取り巻き、その北側にはほぼ同じ大きさで小礫がめぐり、全体で楕円形状を呈する。礫が分布する範囲は長軸168cm、短軸98cmほどである。大型礫の周囲を取り巻く礫は、大型礫の縁に差し込むように立てて設置しており、南側の礫だけは平坦面に置いた状態であった。北半部を縁取る小礫も立てた状態で確認されている。

下部遺構 配石の輪郭に一致した楕円形の深い土坑が確認された。規模は長軸148cm、短軸92cm、深さ50cmである。底面がほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる形態の土坑で、下半部から多量の遺物が出土している。礫は土坑の上端部を縁取るように配置されていたことになる。

石材等 大半が地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫を使用している。

方位 N22度W

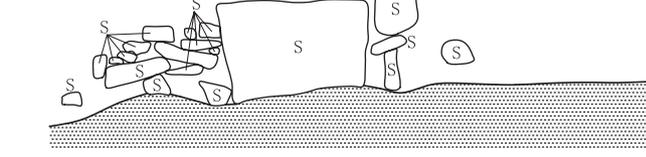
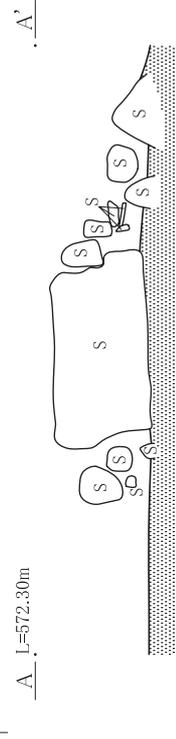
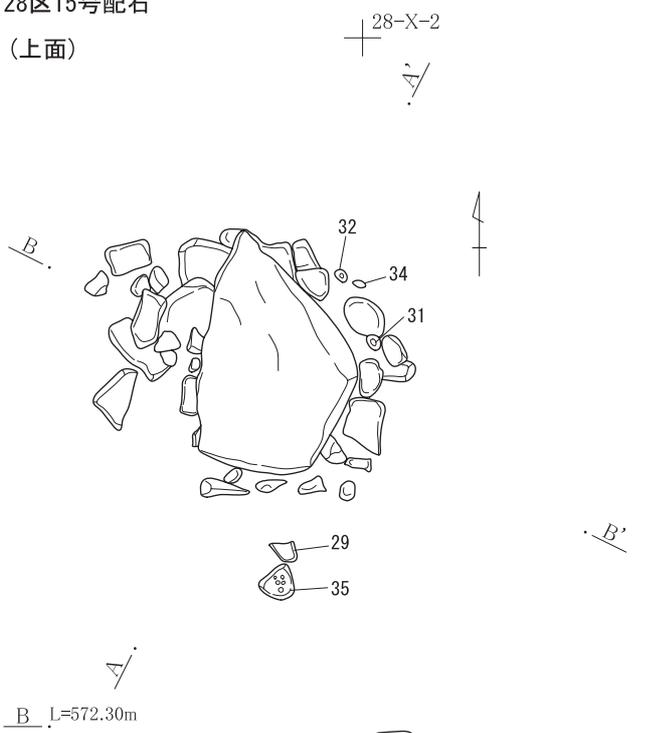
遺物 土器は中期後半から後期のものが86点出土しており、主な土器は堀之内1式~同2式である。石器は台石1点、多孔石1点、石核2点、剥片2点が出土している。

所見 下部土坑の形態と礫の配置から、墓の可能性が高いと判断する。時期は、出土土器から後期堀之内1式~同2式期に比定したい。なお、配石は墓の上面に伴う蓋石で、本来は北半部にもあったと想定したい。

大型礫を伴う点は9号配石や11号・12号配石と似ているが、それらが礫を詰め込むことに主眼を置いているのに対し、本配石は下部の深い土坑の上面に配置されている点で異質な遺構と判断したい。

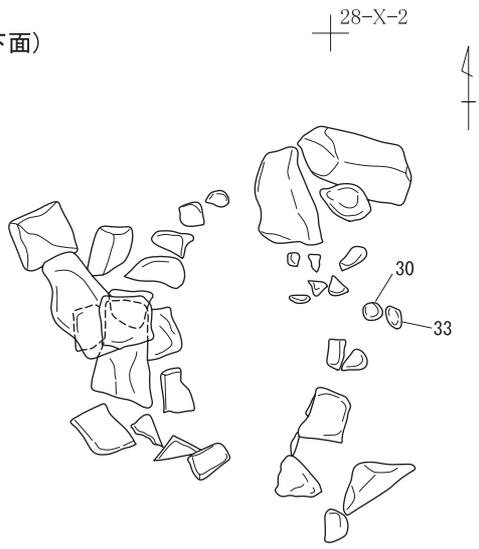
28区15号配石

(上面)

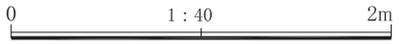


28区15号配石 (南東から)

(下面)



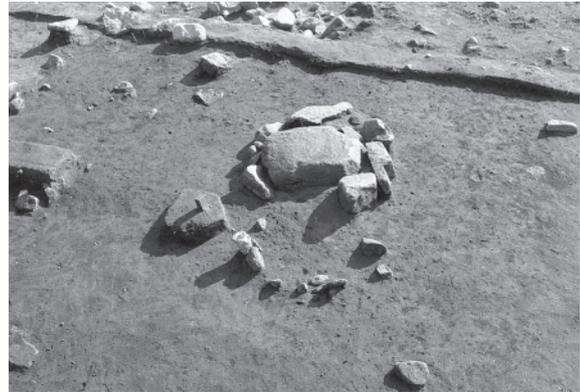
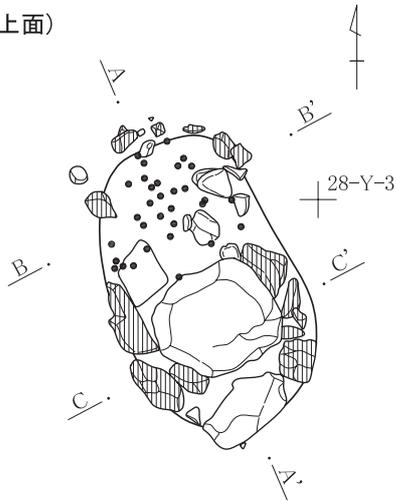
28区15号配石 (南から) 大型礫下の状態



第152図 28区15号配石

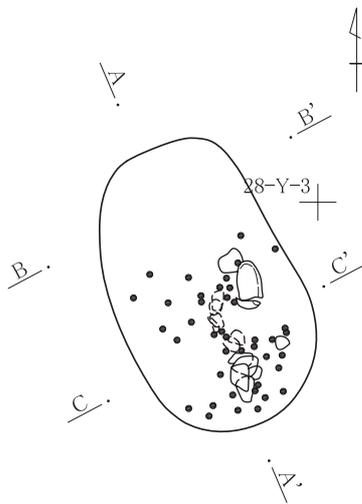
28区17号配石

(上面)



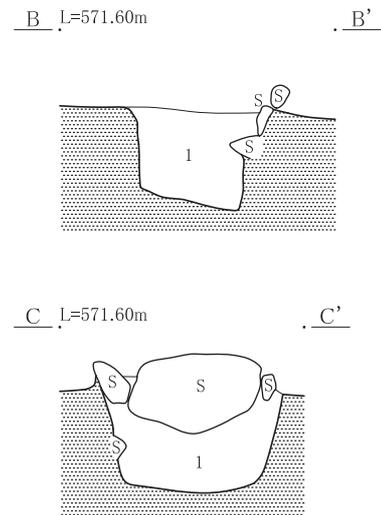
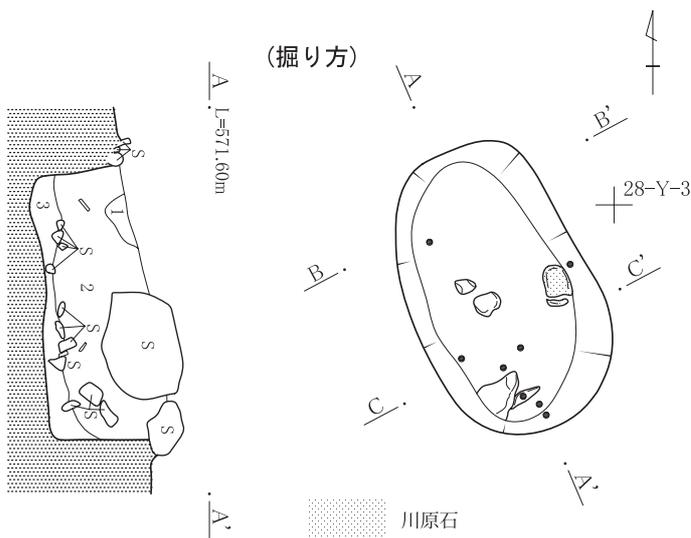
28区17号配石 (北西から)

縦位設置



28区17号配石 掘り方

(掘り方)

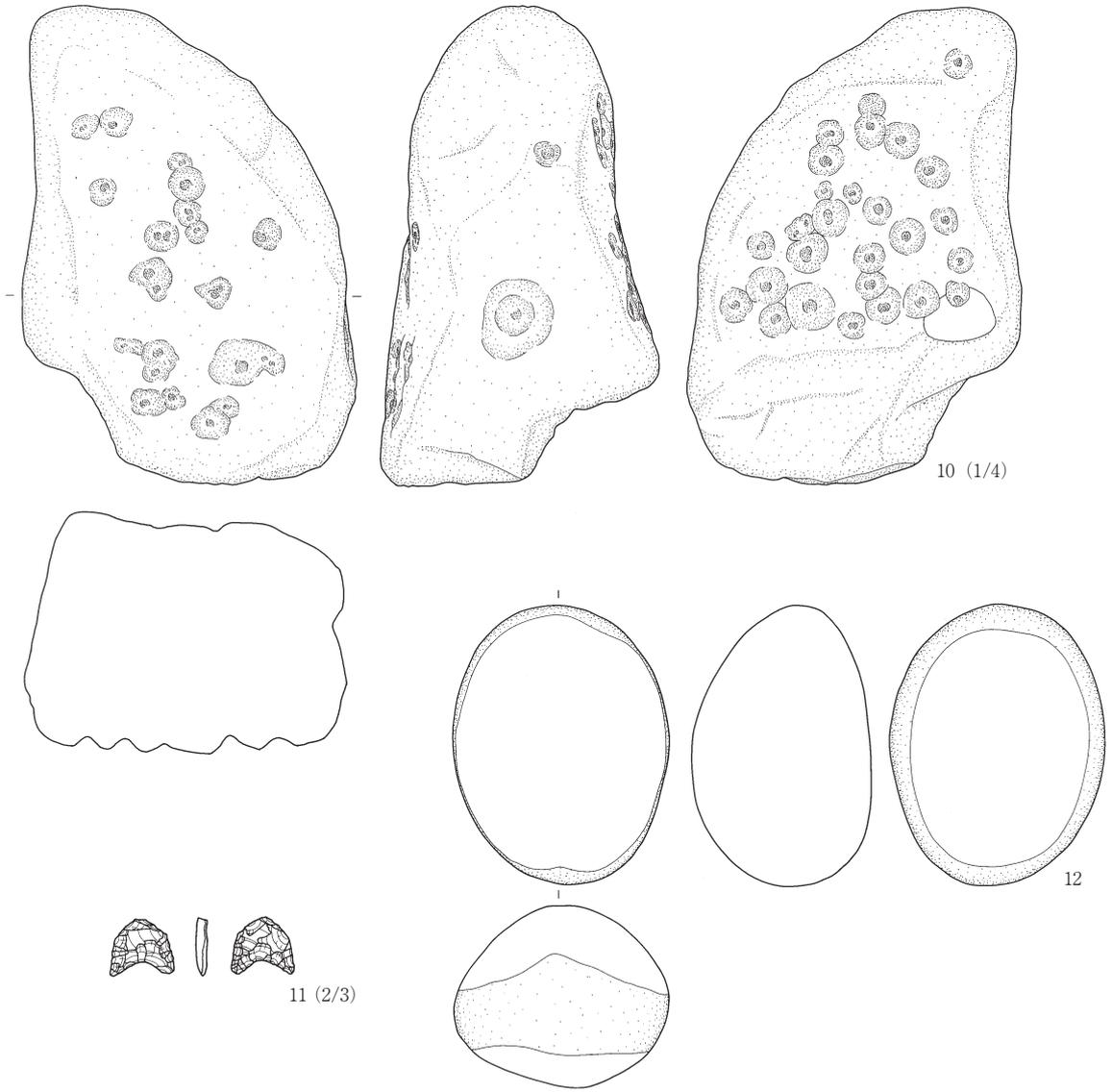
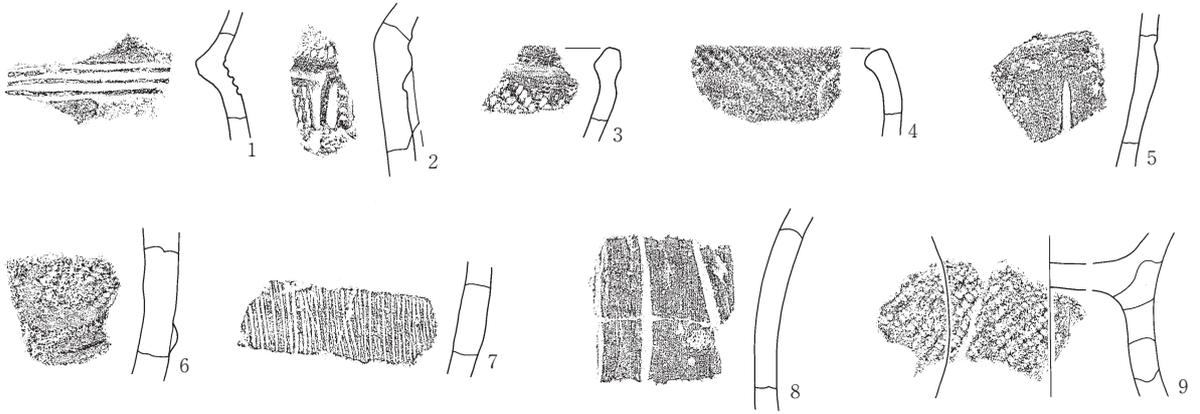


- 1、攪乱
- 2、黒褐色土 ややしまりあり。軽石を含まない。
- 3、黒褐色土 2よりやわらかく、色調やや暗め。軽石を含まない。

0 1:40 2m

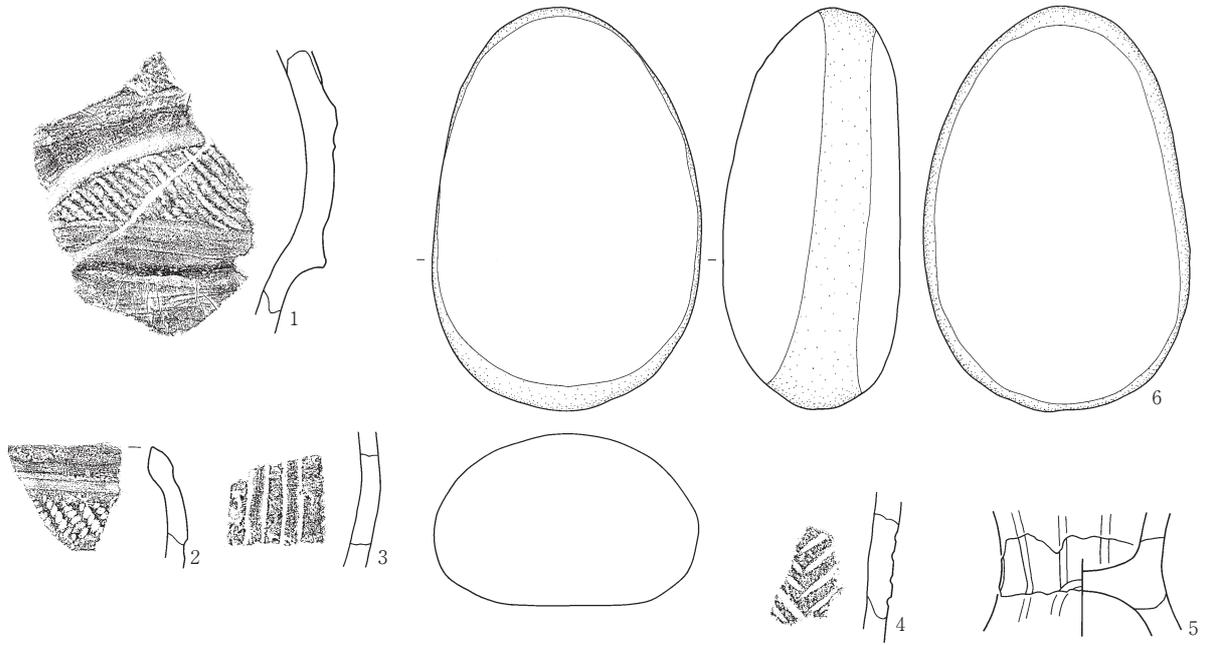
第153図 28区17号配石

第3章 発見された遺構と遺物



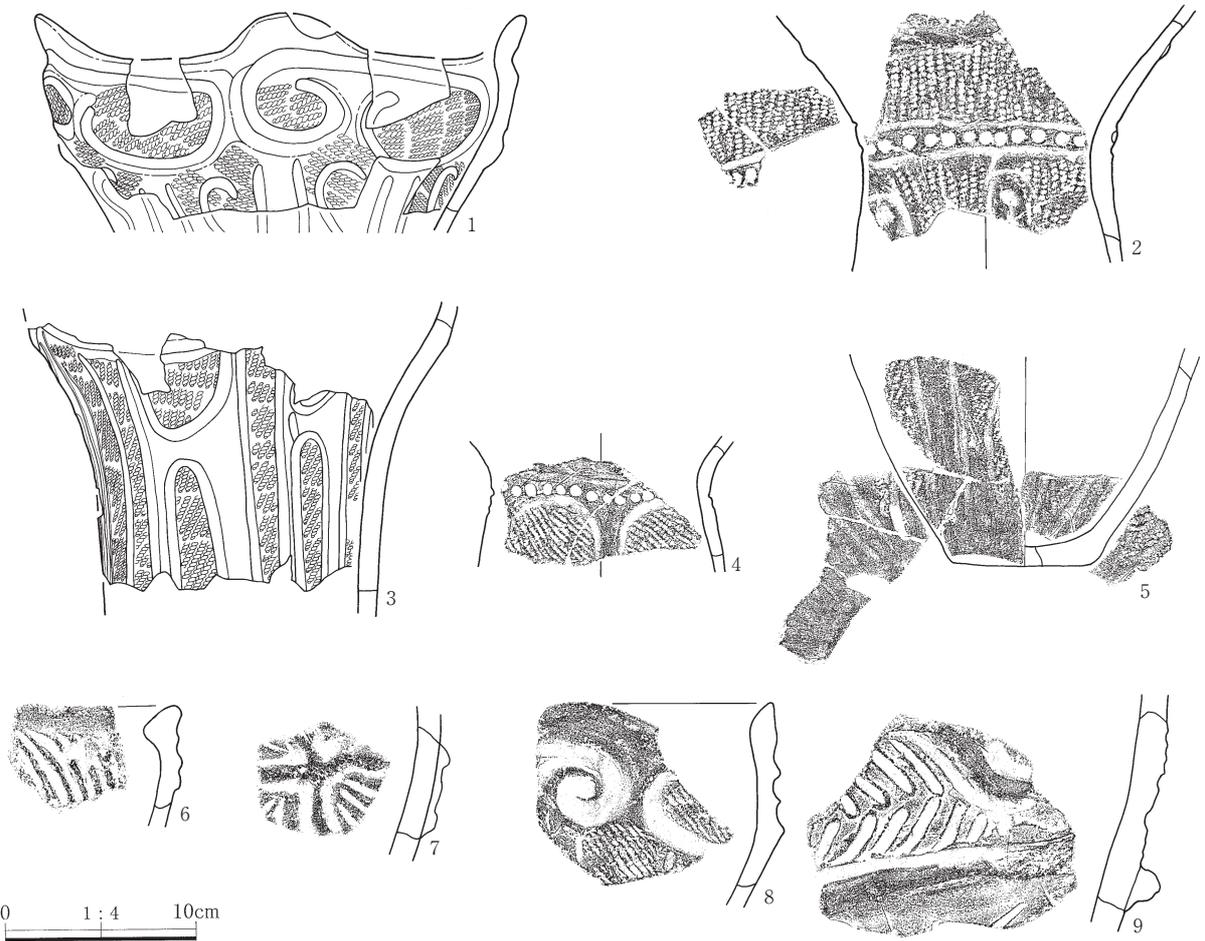
0 1:3 10cm

第154図 28区2号配石出土遺物



28区 3号配石

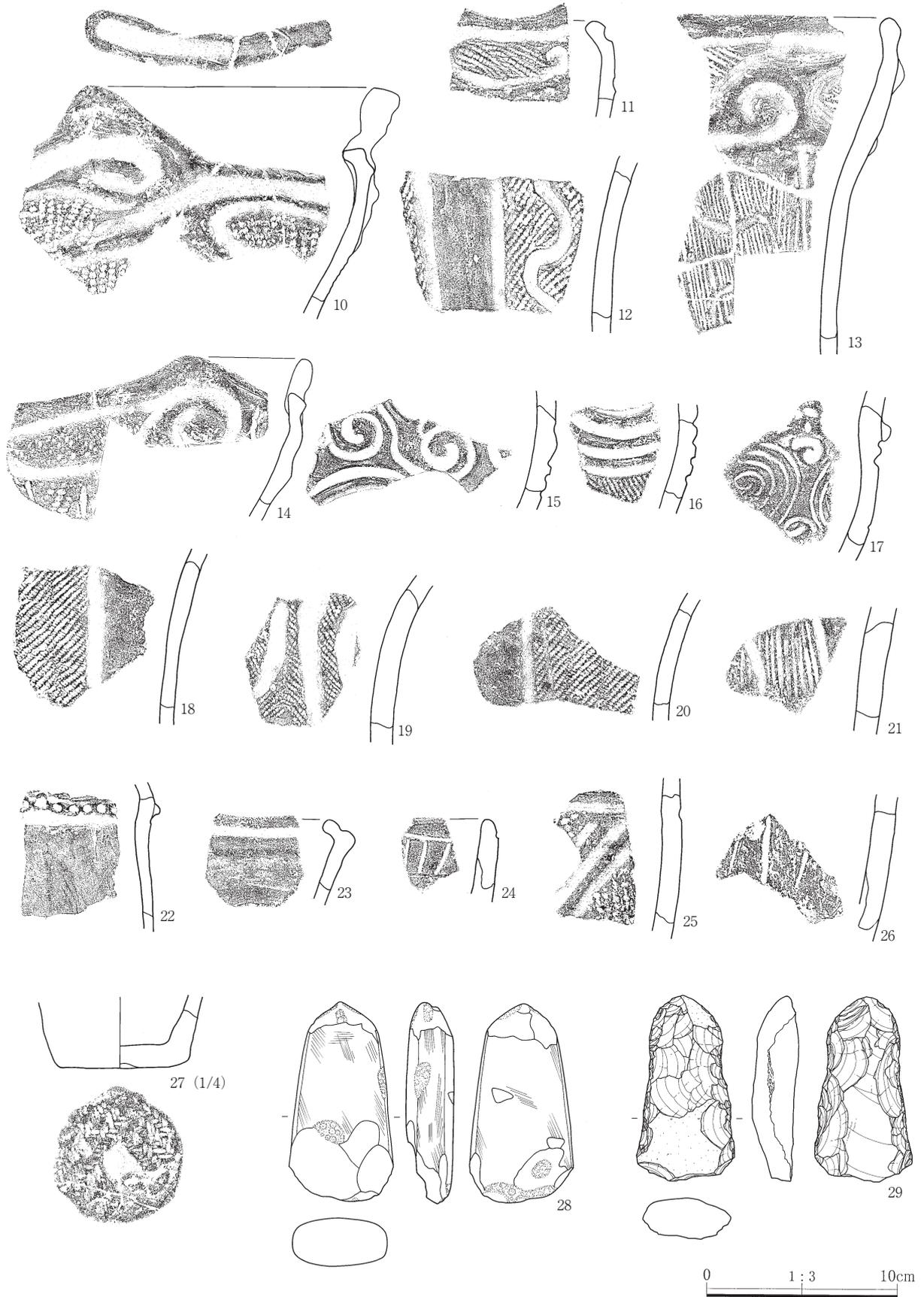
28区 4号配石



0 1:4 10cm

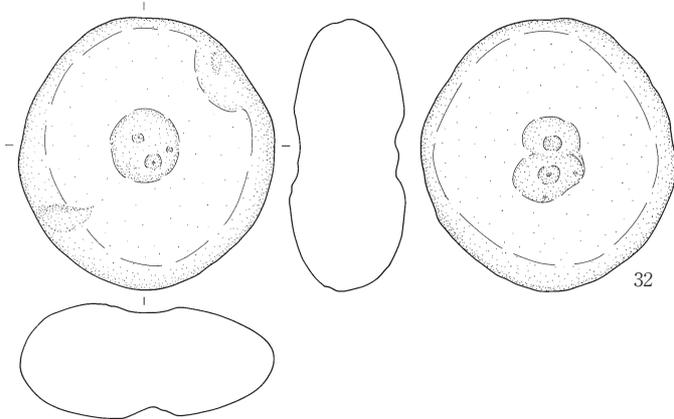
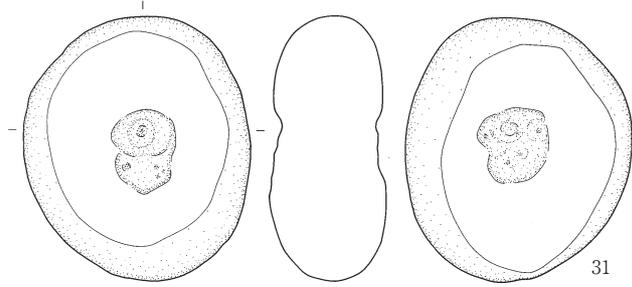
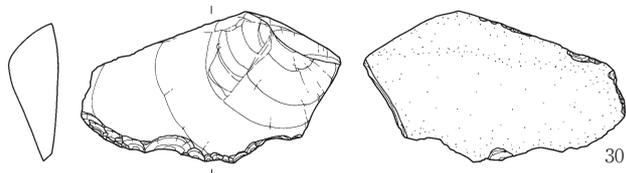
0 1:3 10cm

第155図 28区 3号・4号配石出土遺物

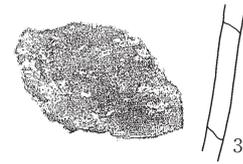
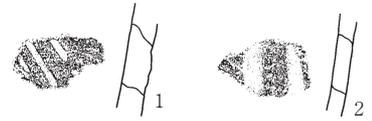


第156図 28区4号配石出土遺物

第4節 縄文時代の配石遺構

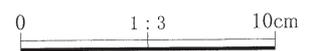
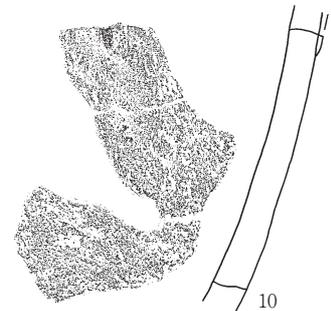
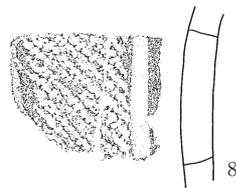
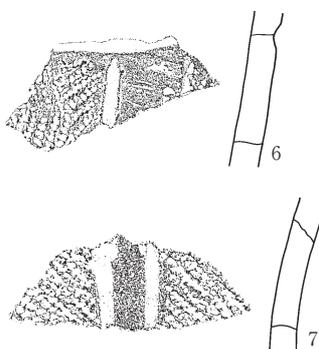
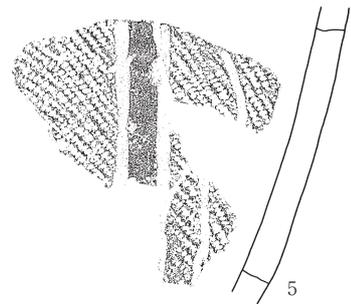
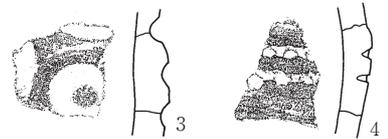
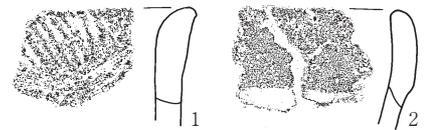


28区4号配石

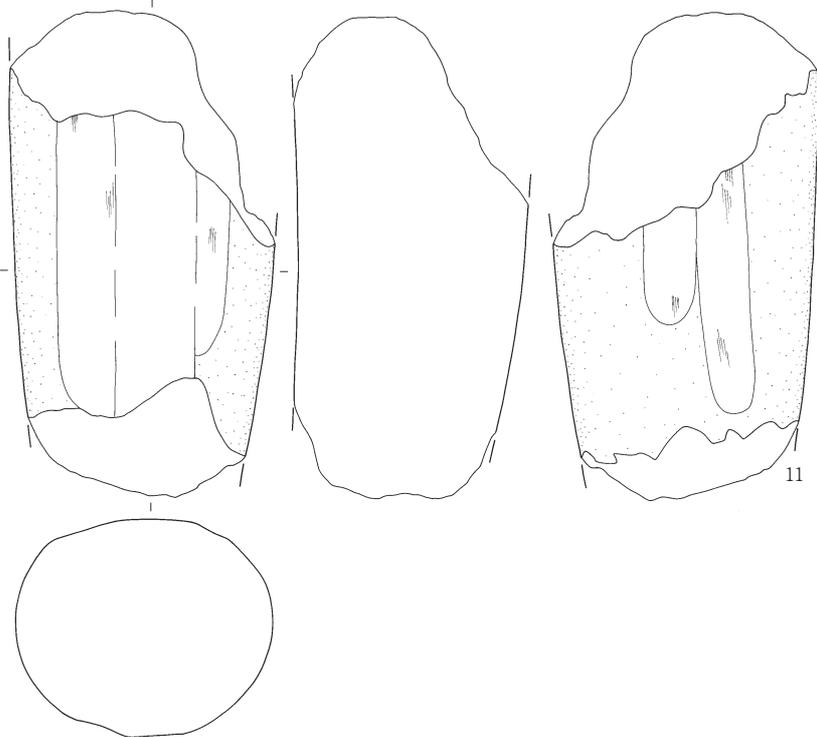


28区5号配石

28区6号配石



第157図 28区4号～6号配石出土遺物

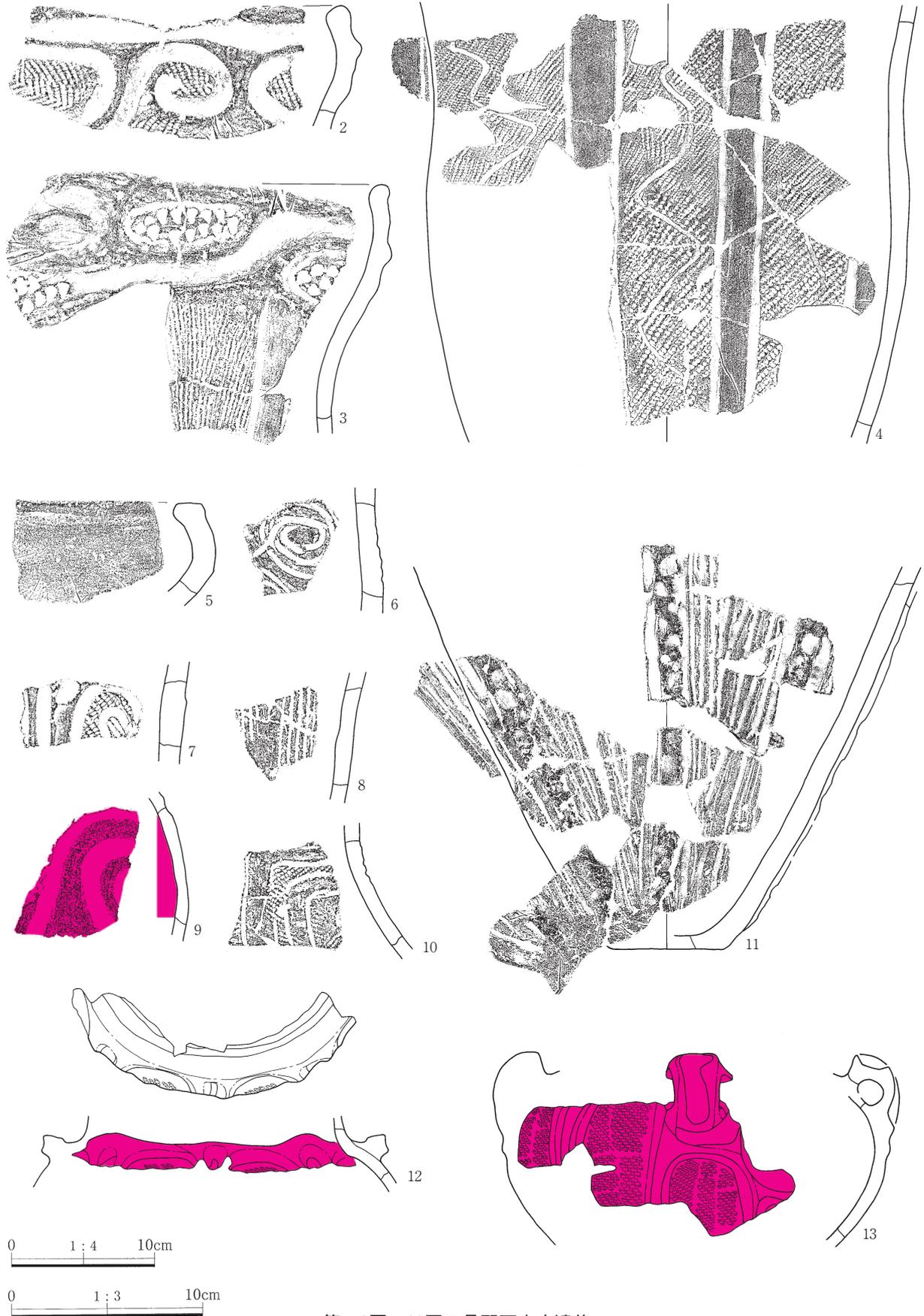


28区 6号配石

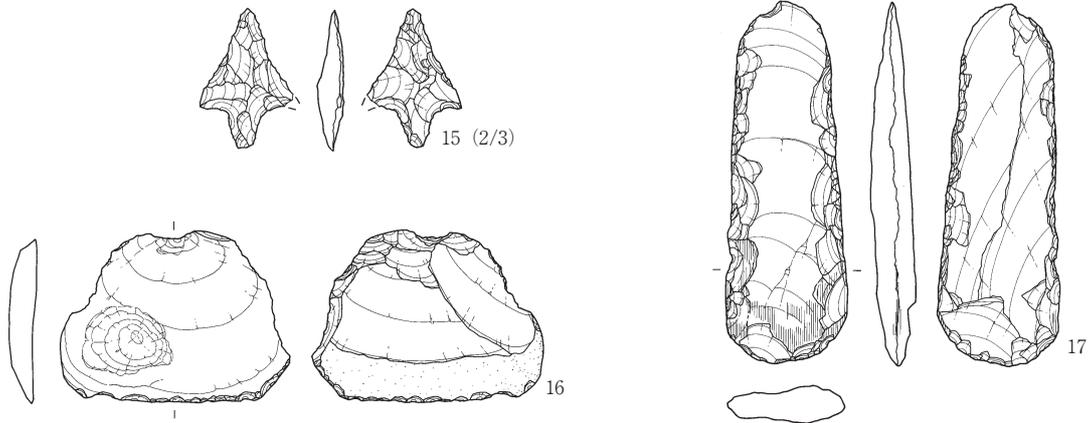
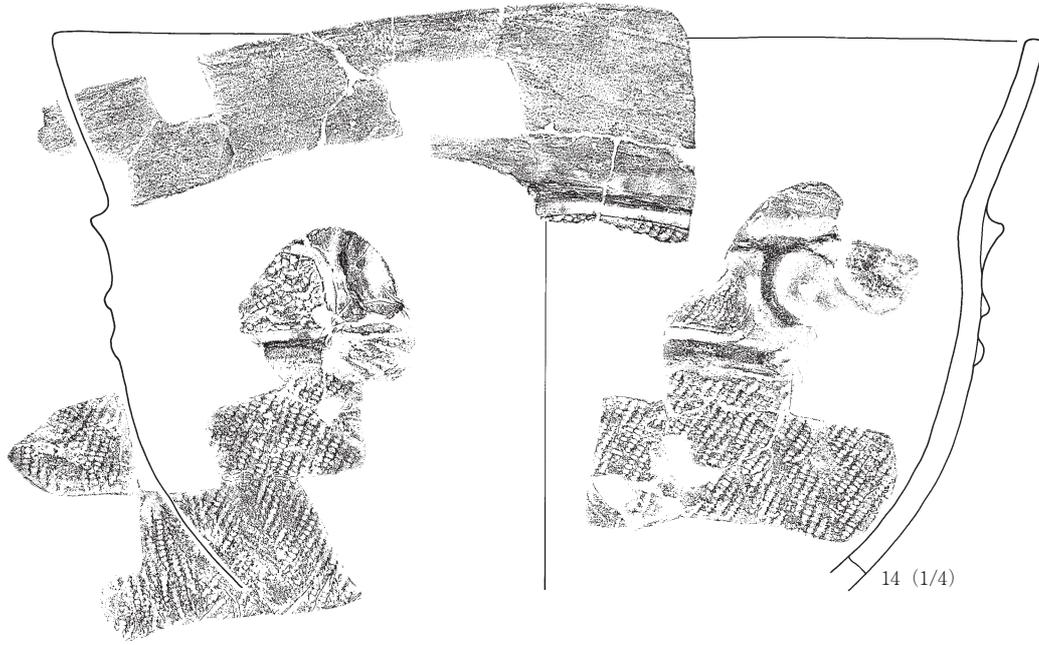
28区 7号配石



第158図 28区 6号・7号配石出土遺物

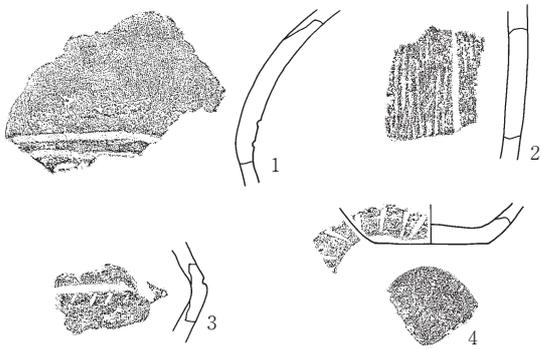


第159図 28区7号配石出土遺物

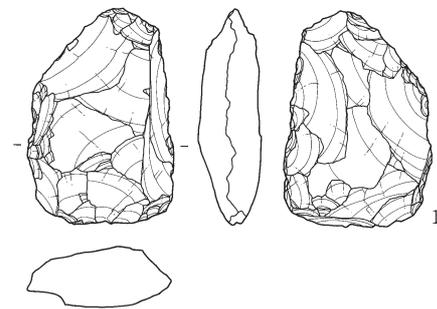


28区 7号配石

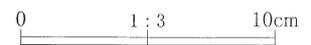
28区 8号配石

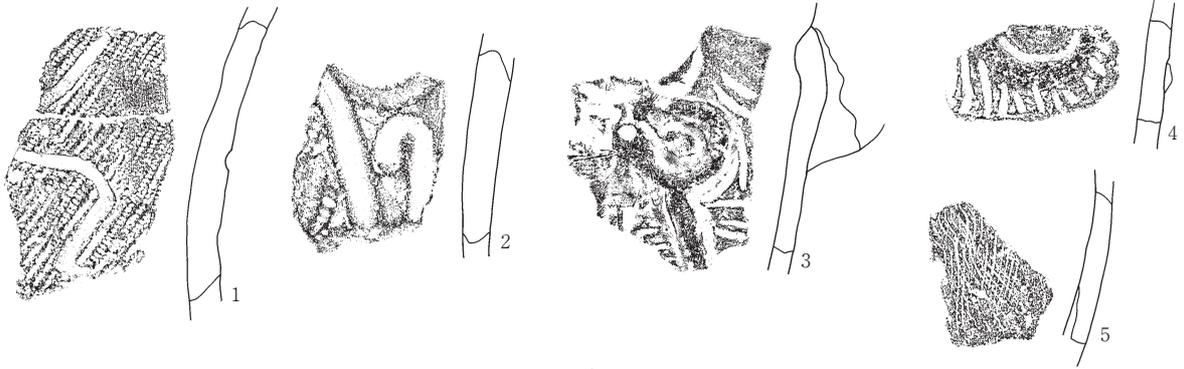


28区 9号配石



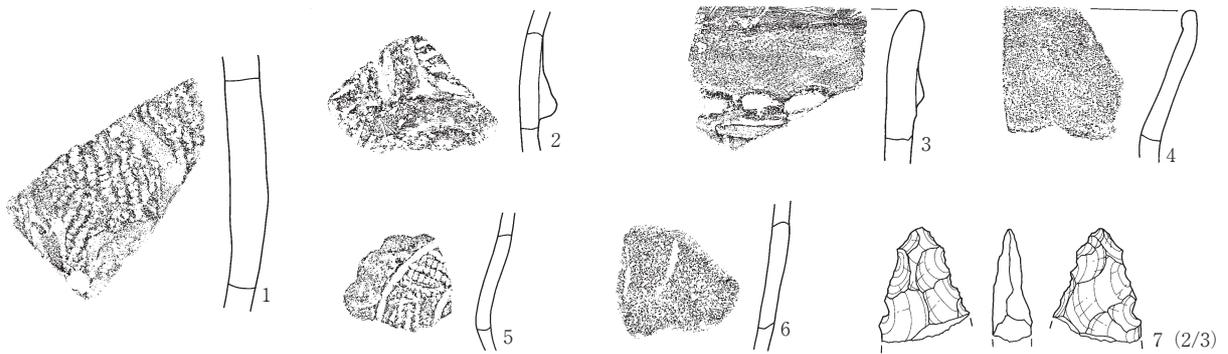
第160図 28区 7号～9号配石出土遺物



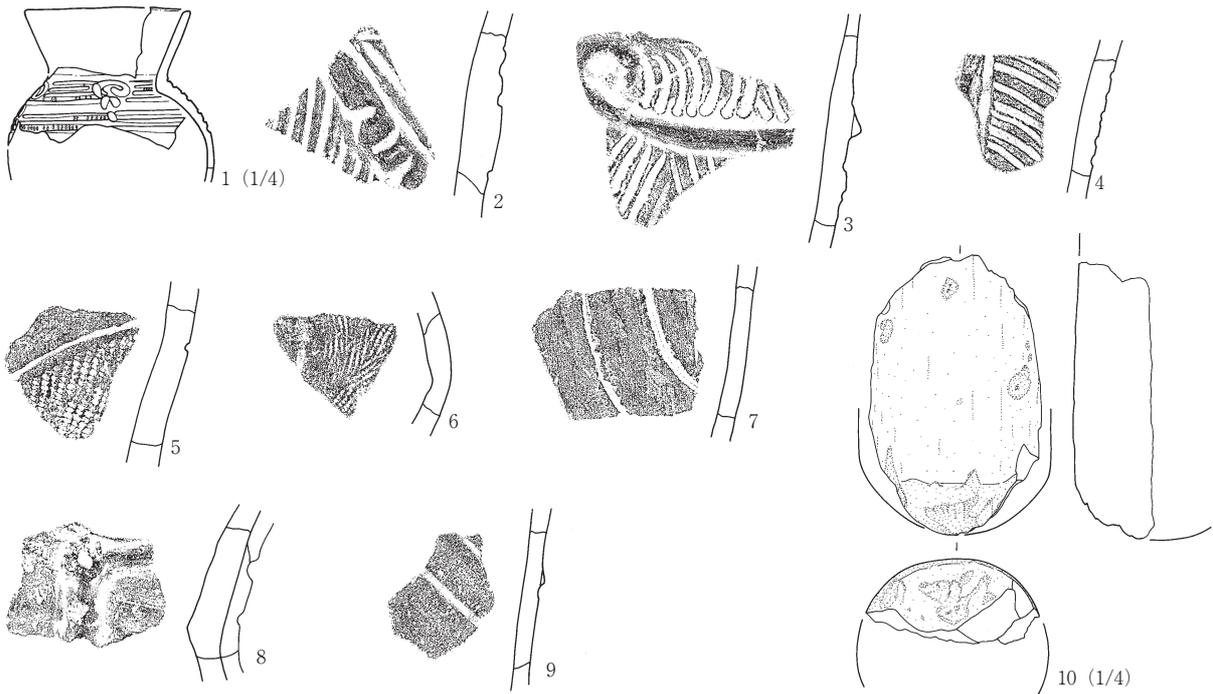


28区10号配石

28区13号配石

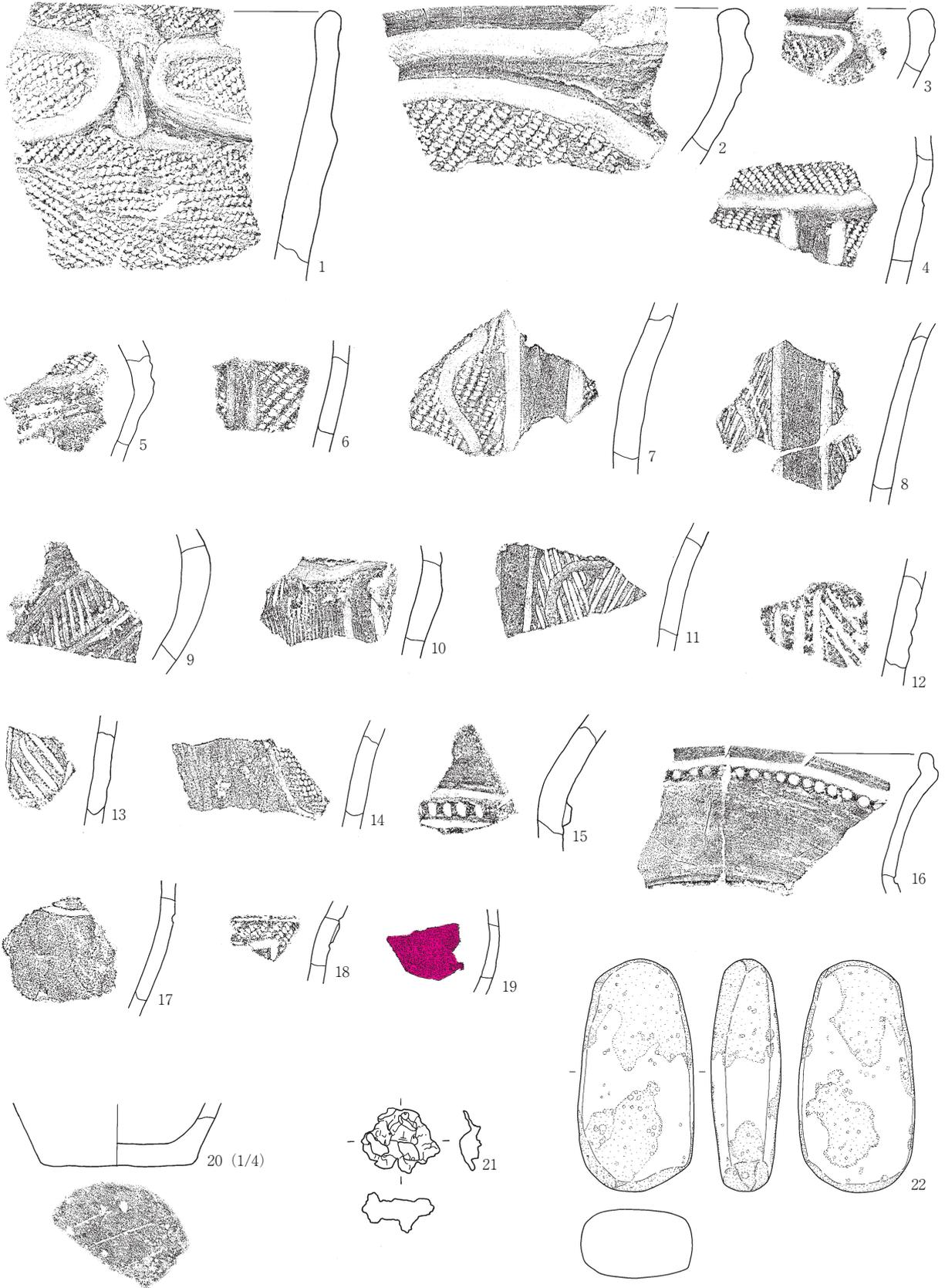


28区14号配石



0 1:3 10cm

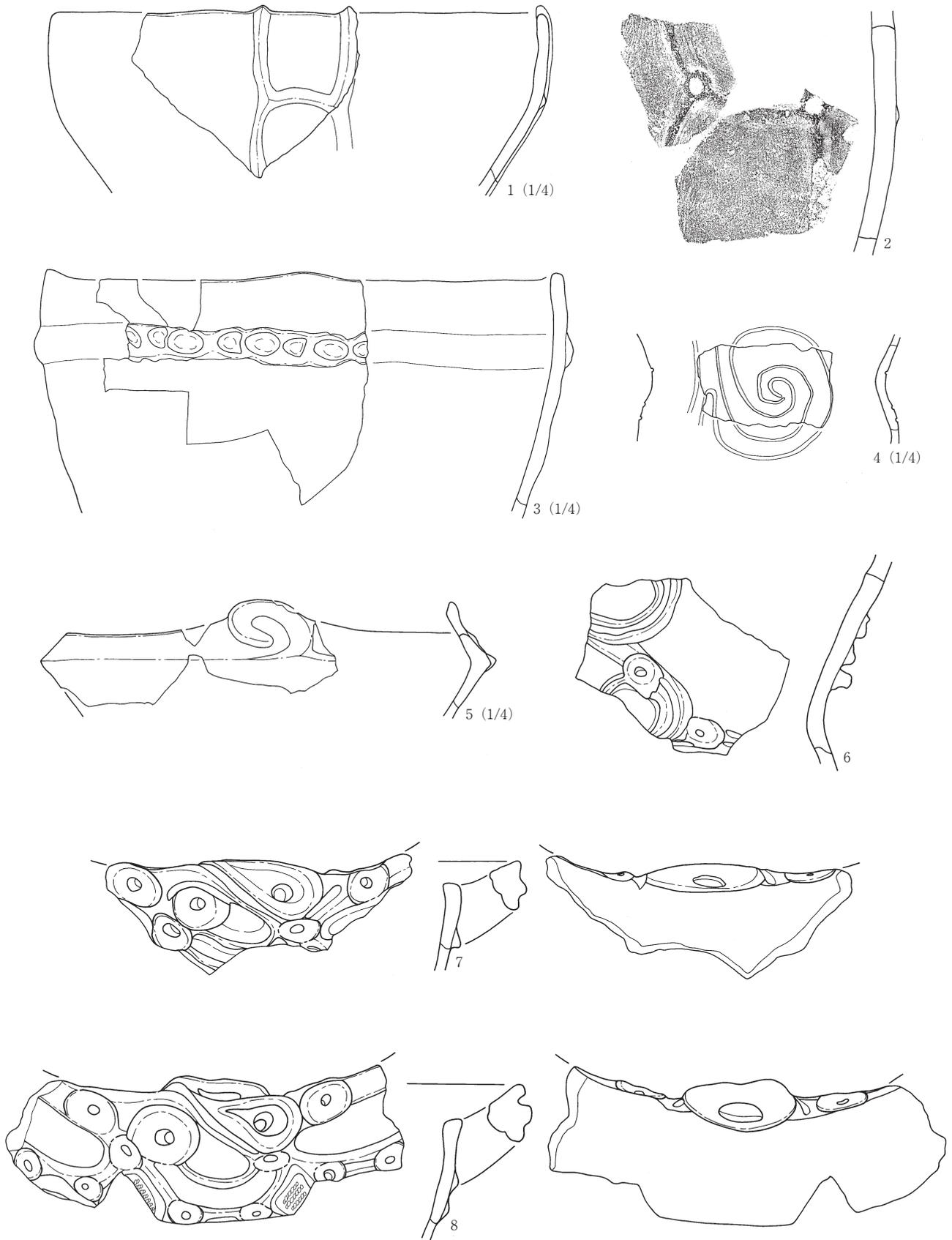
第161図 28区10号・13号・14号配石出土遺物



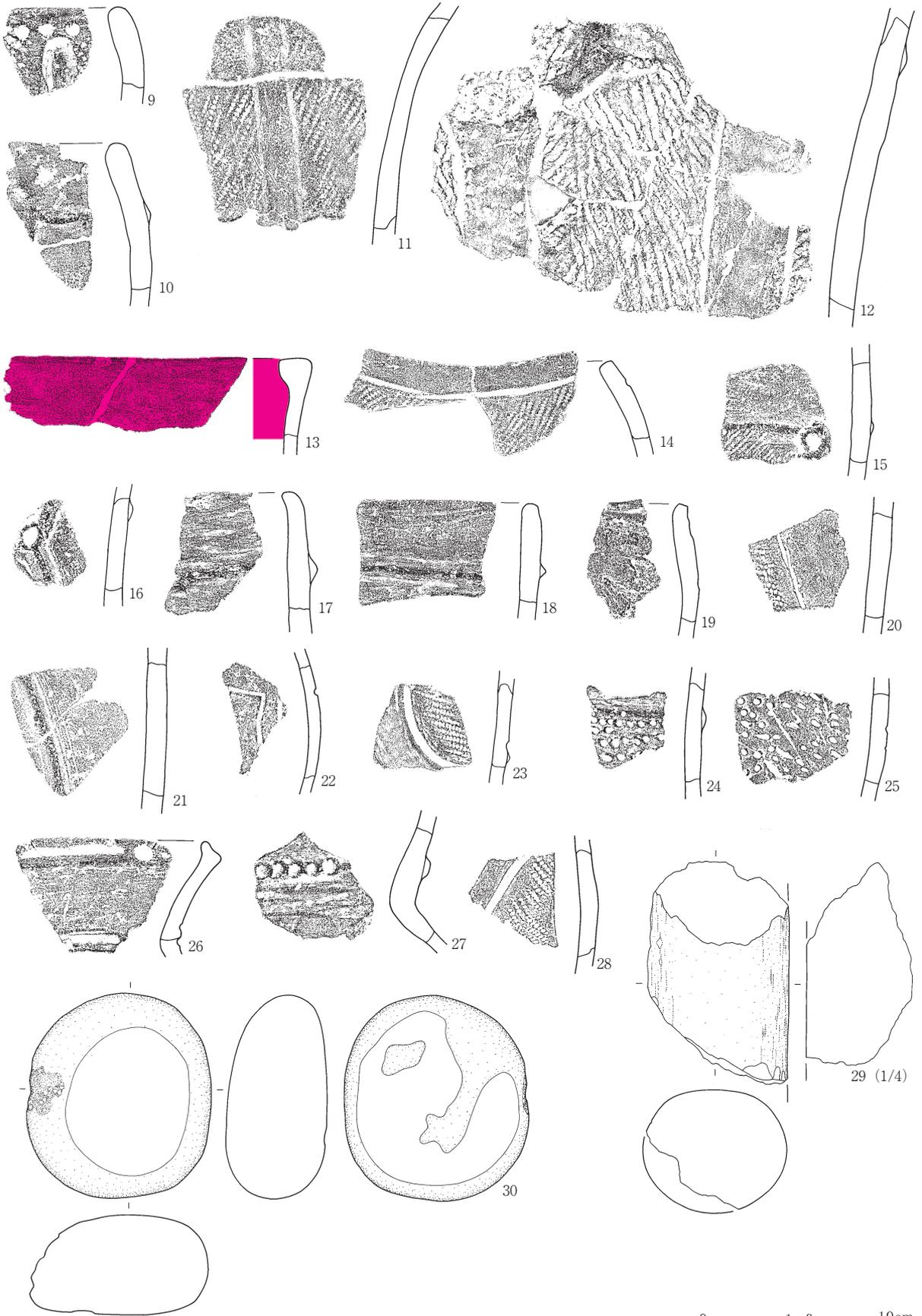
第162図 28区11号配石出土遺物

0 1:3 10cm

第4節 縄文時代の配石遺構

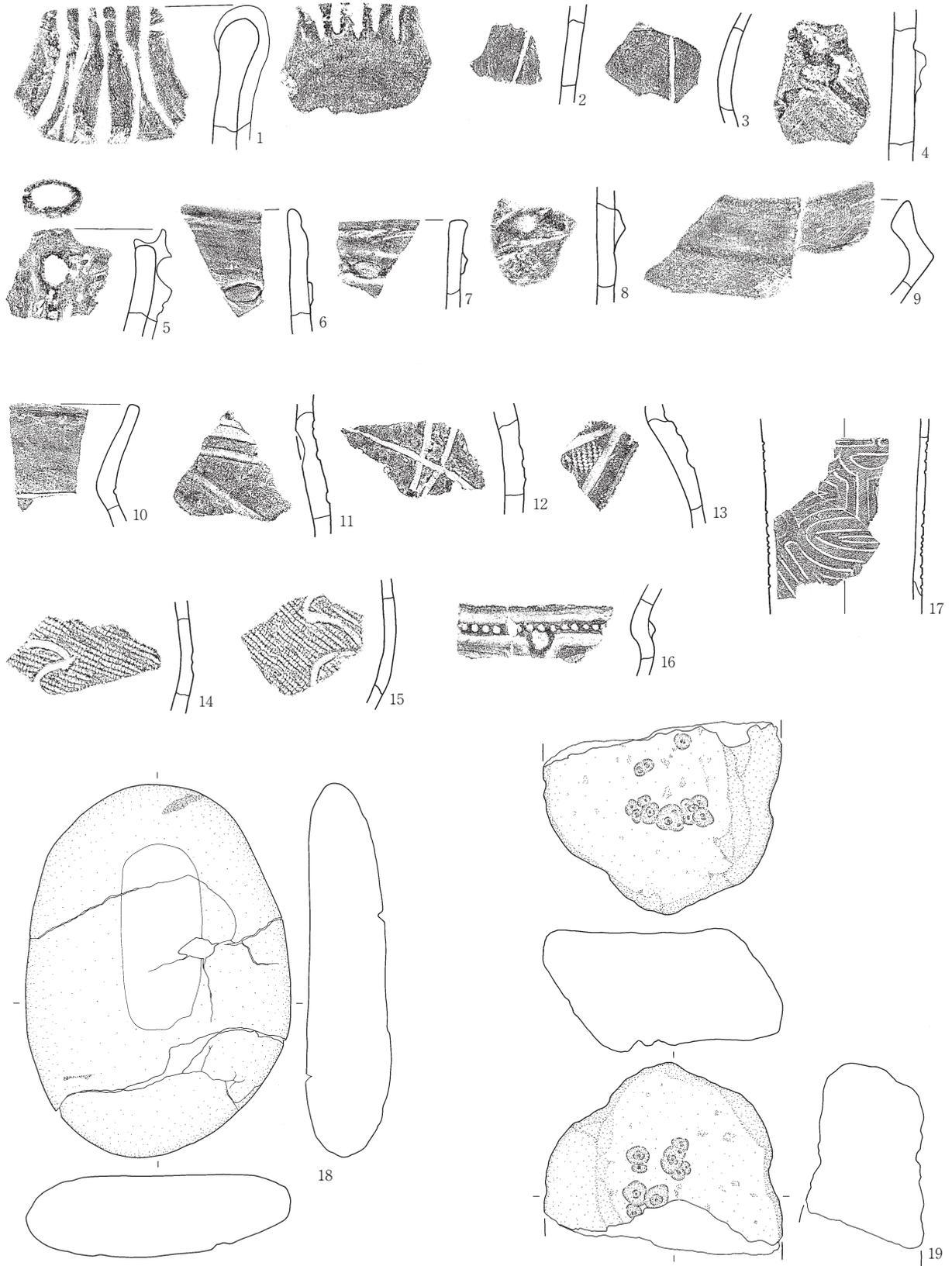


第163図 28区15号配石出土遺物(1)



第164図 28区15号配石出土遺物（2）

第4節 縄文時代の配石遺構



第165図 28区17号配石出土遺物

29区配石遺構

29区では、1号～55号までの55基の配石遺構が調査された。そのうち、6号は29区18号住居の出入り口部に、53号は30区34号住居の一部にそれぞれ変更となり、51号・52号・54号は欠番扱いとしたので、今回は50基の配石について報告する。

29区は北側の7割が吾妻川にあり、中央部を山根沢に伴う未調査区になっているため、調査範囲は限られている。また、山根沢の東西は地形が大きく異なり、東側は沢沿いの傾斜地～低地であるが、西側は沢沿いの低地が未調査区のため、東縁部以外は吾妻川に面した平坦地になっている。配石遺構は1号～5号までは東側の低地にあり、7号からは西側の平坦地に位置する。このうち、西半部の8号～44号は一定範囲に集中して配石墓群及びそれに付随する施設を構成していることが判明した。全体の構成等については第4章で取り上げるため、ここでは個別の事実記載に留める。

29区1号配石

調査年度 平成11年度

位置 C-4グリッド

経過 中期加曽利E4式期の12号住居を調査中に、その床面付近で確認された。本配石がある地点は後期堀之内1式期の7号住居もほぼ同一面で重複しており、本配石はどちらかの柱穴になると見ていたが、調査中に結論が得られなかった。

重複 7号及び12号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。

形状 直径60cm、深さ56cmの柱穴の周囲に、扁平な礫を敷き詰めたもので、その範囲は東西115cm、南北125cmである。

石材等 川原石が2石あり、その他は地山に含まれている礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は中期～後期のものが17点、石器は石核1点、剥片1点が出土している。

所見 位置関係から7号住居に伴う柱穴となる可能性が高く、礫は同住居の敷石であろう。

29区2号配石

調査年度 平成11年度

位置 C-4グリッド

経過 1号配石に続いて、7号住居の炉のすぐ東側で確認された。

重複 7号住居に重複し、切り合い関係は不明。

形状 直径40cm、長さ56cmほどの柱穴の周囲を縁取るように、長さ15cmほどの細長い礫の長軸を連ねた状態で配置されていた。使用されている礫はいずれも扁平なもので、板状礫も含まれている。

石材等 使用されている礫はいずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器細片が2点出土している。

時期 柱穴であるが、該当する住居が見あたらない。また、このような配石を伴う柱穴は本遺跡では確認されていない。単独の特別な施設の可能性も考えられる。

29区3号配石

調査年度 平成11年度

位置 C-3～D-2グリッド

経過 3号住居の出入り口部施設の追求調査で、3号列石と共に確認された。3号列石と2号列石の間にあり、両列石とは礫の質が異なることから、配石として区別された。

重複 住居や列石が近接するが、重複する遺構はない。

形状 2号列石と3号列石の間にあり、10cm～40cm大の礫が三角形状に集積された状態を呈する。その範囲は南北5m、東西1.6mほどで、集積された礫は雑然としており、規則性は認められない。

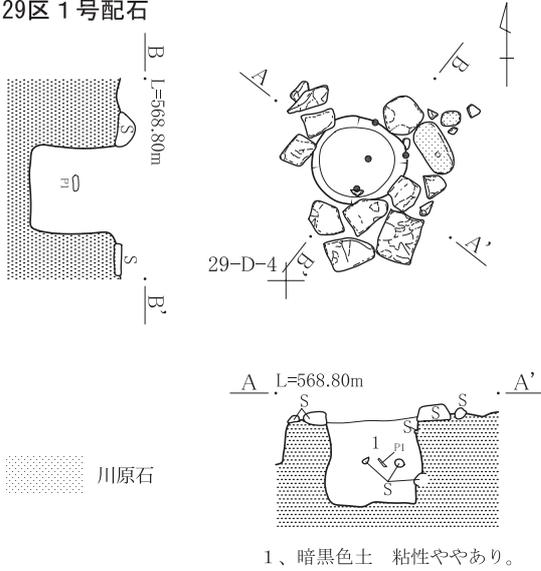
下部遺構 確認されていない。

石材等 詳細な記録はないが、ほとんどが地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが45点、石器は石鏃1点、磨石1点、剥片3点、碎片1点が出土している。

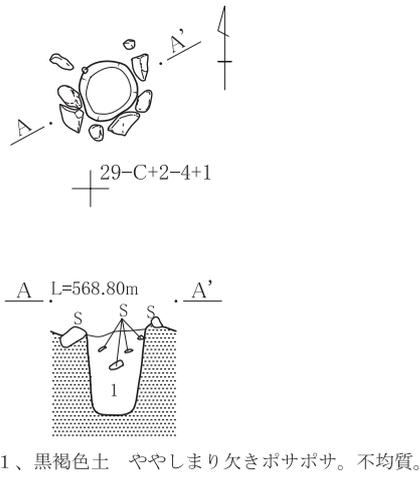
所見 3号住居の築造に伴って、あるいは4号住

29区 1号配石



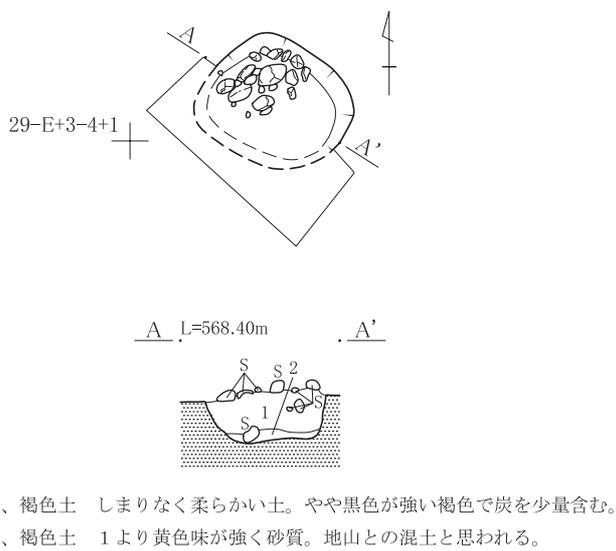
29区1号配石(北東から)

29区 2号配石



29区1号配石(北東から)掘り方調査

29区 4号配石



29区2号配石(北から)



29区4号配石

0 1:40 2m

第166図 29区 1号・2号・4号配石

第3章 発見された遺構と遺物

居の廃絶時に、出入り口部と2号列石を片付けた際の廃絶礫の可能性が考えられる。

29区4号配石

調査年度 平成11年度

位置 E-4グリッド

経過 4号列石の調査中に確認された。礫群からやや離れて一単位でまとまっている。

重複 中期の20号住居の上面に重複し、それを切る。

形状 10~15cm大の礫と小石が長軸40cm、短軸30cmほどの範囲に敷き詰められたような状態でまとまっている。礫は様々な形状のものがああり、統一性はない。

下部遺構 礫下に長軸74cm、短軸66cm、深さ26cmの楕円形の土坑が確認された。

石材等 いずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 - (掘り方)

遺物 土器は中期後半と後期前半の小破片が2点出土している。

所見 墓の可能性を想定したい。

29区5号配石

調査年度 平成11年度

位置 F-5グリッド

経過 4号列石の調査の最終段階で、4号列石の下から確認された。確認段階でははっきりしなかったが、列石の根石を残した段階で明瞭な状態で確認できた。

重複 4号列石と重複し、それに切られていると判断する。

形状 10cm~40cm大の礫を東西1.2m、南北3.2mほどの範囲に集積している。礫は雑残と集められた状態で、規則性は認められない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 使用された礫は、いずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 土器小片38点と剥片3点が出土している。

所見 確認されたレベルは若干低いだが、4号列石のライン上についており、4号列石の地形の可能性が考えられる。

29区7号配石

調査年度 平成10年度

位置 R-3グリッド

経過 山根沢の西側平坦地縁辺で確認された。沢沿いの地区は削平が及んでおり調査範囲から除外されたが、その縁から礫が2箇所にとまって出土した。

重複 重複する遺構はない。

形状 礫は南北に1.4mの距離で2箇所あり、北側の一群は15~30cm大の礫10数個が雑然と集合し、南側の一群は20~30cm大の礫6個が長方形の土坑の片側を縁取るように配置されていた。

下部遺構 南側の一群は長方形の土坑に伴うもので、土坑は長軸120cm、短軸62cm、深さ18cmである。

石材等 使用された礫は、いずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N5度W

遺物 いずれも北側の一群から出土したもので、土器は後期土器破片26点、石器は石皿1点、多孔石1点、剥片12点、碎片3点が出土している。

所見 配石墓であった可能性が高いと考える。おそらく北側の礫と遺物は、南側の土坑のものが削平時に移動したものであろう。

29区8号配石

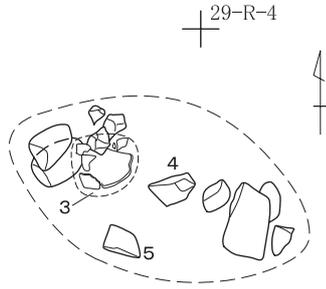
調査年度 平成11年度

位置 T-1グリッド

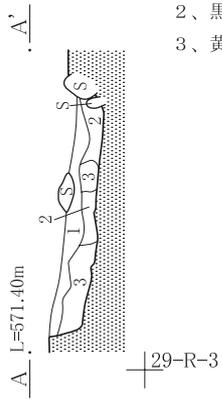
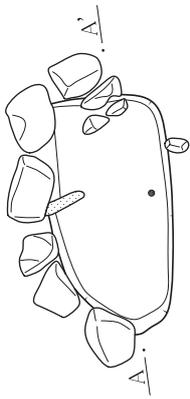
経過 表土掘削後の遺構確認で、大形の地山礫が集中する地点があり、その中に板石を立てて方形に組んだものや地山の扁平礫が立っていることから、配石として調査した。

重複 北西隅に18号配石が重複するが、切り合い関係は不明である。

29区7号配石



川原石



- 1、黒色土 軽石少量含む。
- 2、黒褐色土 地山小ブロックと軽石若干含む。
- 3、黄褐色土 地山黄色土ブロック含む。



29区7号配石(東から)



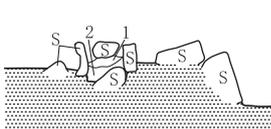
29区8号配石(南から)

29区8号配石



A L=572.40m A'

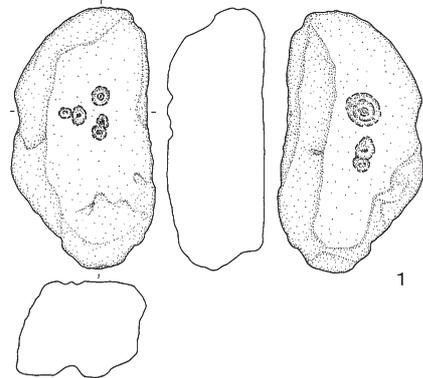
鉄平石
縦位設置



0 1:40 2m



29区8号配石 中央の方形石組みと多孔石



第167図 29区7号・8号配石

第3章 発見された遺構と遺物

形状 鉄平石2枚と扁平礫2枚を対向する位置に立てて、方形の区画を構成し、その中に多孔石を敷き込むように置いている。方形の区画は一辺30cmである。その周囲に点在する大型礫や縦位の礫は遺構とは認められない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 鉄平石以外は全て、地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 —

遺物 方形区画に入っていた多孔石が1点のみで、土器は出土していない。

所見 性格は不明だが、配石墓群を取り巻く位置にあり、それと関連する遺構と思われる。

29区9号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-2グリッド

経過 円礫をはじめ、礫が多量に分布する地点で確認された。当初は、長軸にあたる東西両端部の2石と、その上にある小口積み礫がいくつか見えているにすぎなかった。

重複 東側の一部を25号配石と重複し、これを切る。

形状 東西に長軸をとる長方形を呈する。中央部がやや南側に湾曲するのは、その後の変形であろうか。扁平礫を立てて1段平積みし、その上にある小口積みは一部で2段まで確認できるが、残っているものは少ない。

なお、底面ではほぼ平坦面に並ぶ礫が数個確認された。扁平礫ではないが、平坦部を揃えるように置かれており、石敷きだった可能性がある。

規模は、平積み内部で長軸108cm、短軸27cm、深さは上端の礫から35cmほどである。

石材等 円礫がいくつか使われており、それ以外は全て粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N83度W

遺物 土器は総数51点が出土しており、主な土器は加曾利B式である。石器は多孔石1点と剥片1点

が出土している。

所見 東西に長軸をとる配石墓で、底面に石敷きを伴っていた可能性がある。時期は加曾利B2式期に比定したい。

29区10号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-1・2グリッド

経過 8号配石のすぐ北東にあり、小振りな扁平礫10数個が立てた状態で確認されたため、配石として調査した。

重複 8号～12号配石が周囲に近接し、一部が接するものもある。

形状 15～40cm大の礫が直径1.8mほどの円形状にめぐっており、そのうち南西側の礫は立てた状態で折り重なるように配置されている。その内部には一段下がったところに大形の扁平礫が平坦面を上にして置かれていた。礫は大きなものは70cmもあるが、平坦面を揃えて配置された様子は認められない。

石材等 使用された礫は、いずれも地山に含まれるものと同様な粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は総数30点が出土しており、主な土器は加曾利B式である。石器は石鏃1点、碎片1点が出土している。

所見 配石墓群の周囲に備蓄された礫かもしれない。

29区11号配石

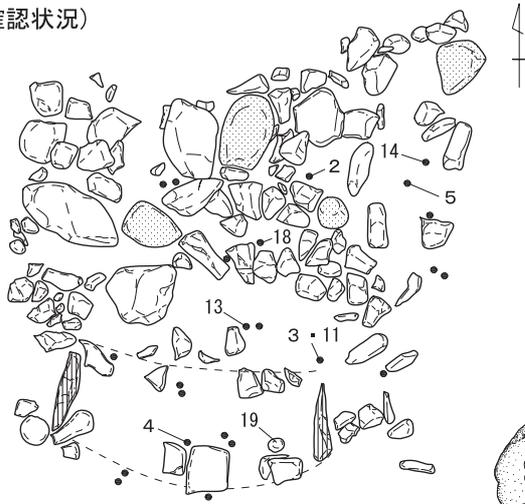
調査年度 平成11年度

位置 T-1・2グリッド

経過 10号配石のすぐ東にあり、北東隅の2石は10号と共有関係にある。縦位の礫が南北方向に長軸をとる長形状にめぐっており、配石として調査した。

重複 南半部を12号配石と重複するが、切り合っているのか、接しているのか、はっきりしない。第171図の掘り方図中の中央部を東西に延びる石列は、12号配石の一部になるかもしれない。なお、西側に10号配石が接する。

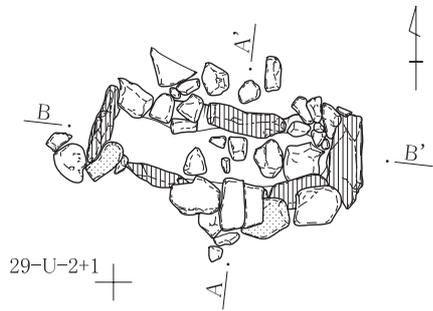
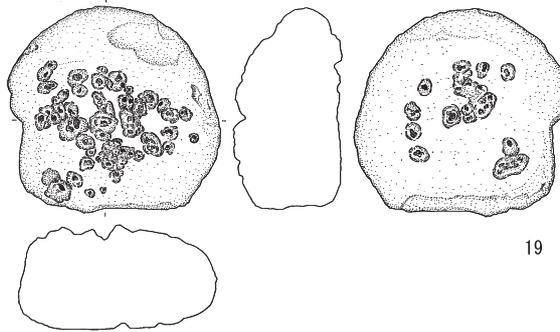
29区9号配石
(確認状況)



29-U-2+1



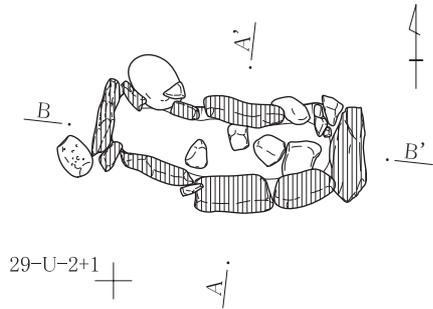
29区9号配石(東から)確認状況



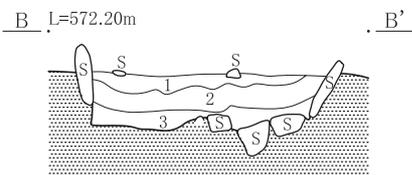
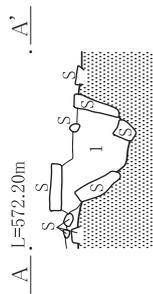
29-U-2+1



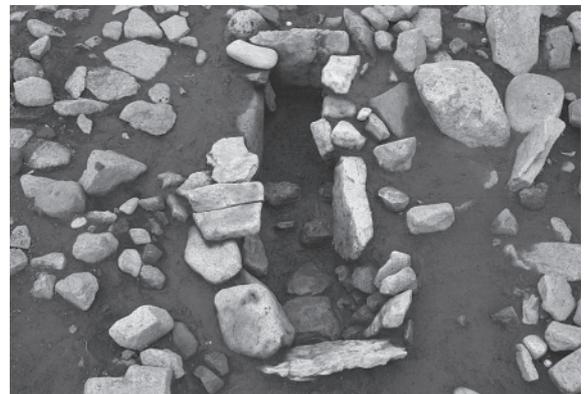
29区9号配石(南から)確認状況



29-U-2+1



- 1、黒色土 礫・軽石少量含む。
- 2、黒色土 砂礫・軽石若干混入。
- 3、黒褐色土 地山黄褐色ブロックと小礫混入。



29区9号配石(東から)

0 1:40 2m

第168図 29区9号配石

第3章 発見された遺構と遺物

形状 南北方向に長軸をとる長形状を呈する。扁平礫を立てて1段平積みし、その上にのる小口積みは一部確認できるが、残っているものは少ない。北側は地山に含まれる大きな扁平礫があり、配石は残っていない。

規模は、平積み内部で長軸160cm以上、短軸50cm前後、深さは上端の礫から30cmほどである。

石材等 使われている礫は、全て粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N19度W

遺物 土器は24点出土しており、時期が判明するのは加曾利B式である。石器は加工痕ある剥片1点、磨石1点が出土している。

所見 底面も不明瞭で残存状況は悪いが、東西方向に長軸をとる配石墓としてよいだろう。時期は加曾利B 2式～3式期に比定しておきたい。

29区12号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-1・2グリッド

経過 11号配石の東側に、直行方向に延びる石列があり、方形状に繋がることから、配石として調査した。この地点は配石墓群の周囲を取り巻く礫群が集積されており、周囲は石だらけの状況である。

重複 西側に11号配石が重複、あるいは接する。

形状 東西方向に長軸をとる長方形を呈する。扁平礫を立てて1段平積みし、その上にのる小口積みは残っておらず、確認できなかった。底面には小さな扁平礫がほぼ全面に敷かれており、ほぼ平坦な面を呈する。平積みの礫は厚手のものと薄手のものが使われており、一部に川原石も認められた。

規模は、平積み内部で長軸100cm、短軸38cm、深さは上端の礫から30cmほどである。

石材等 円礫がいくつか使われており、それ以外は全て粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N60度E

遺物 土器は17点が出土しており、主な土器は加曾利B 2式である。石器は出土していない。

所見 東西方向に長軸をとる配石墓で、底面には石敷きが伴う。時期は加曾利B 2式～3式期に比定したい。

29区13号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-2グリッド

経過 10号配石の北側で確認された。8号配石の確認時に、礫の上面形状がすでに見えていた。

重複 南側を25号配石と重複し、これを切る。西側に22号配石が接する。

形状 南北方向に長軸をとる細身の楕円形状を呈する。扁平礫を立てて1段平積みし、その上に小口積みがついていたと思われるが、残っておらず、確認できない。底面はほぼ平坦で、石敷きはない。平積みの礫は薄手のものが多用されており、2石を合わせて設置した部分も一部に認められるが、かなり欠落しており、配石内部に倒れ込んでいるものもある。

規模は、平積み内部で長軸130cm前後、短軸30cm、深さは上端の礫から30cmほどである。

石材等 円礫がいくつか使われており、それ以外は全て粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N18度E

遺物 土器は48点が出土しており、主な土器は加曾利B 2式～3式である。石器は石鏃1点、剥片3点、碎片3点が出土している。

所見 南北方向に長軸をとる細身の楕円形状を呈する配石墓で、時期は加曾利B 2式～3式期に比定されよう。

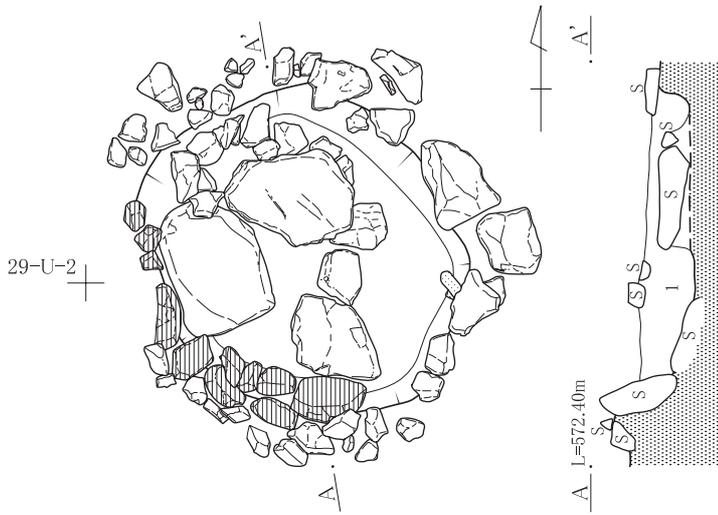
29区14号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-2グリッド

経過 13号配石の西側で確認された。9号配石確認時に、礫の上面の配置がすでに見えていた。当初は南北方向に長軸をとる長方形の配石と見ていたが、調査が進むなかで、北半部に東西方向に長軸をとる別の配石(15号)に切られていることが判明した。

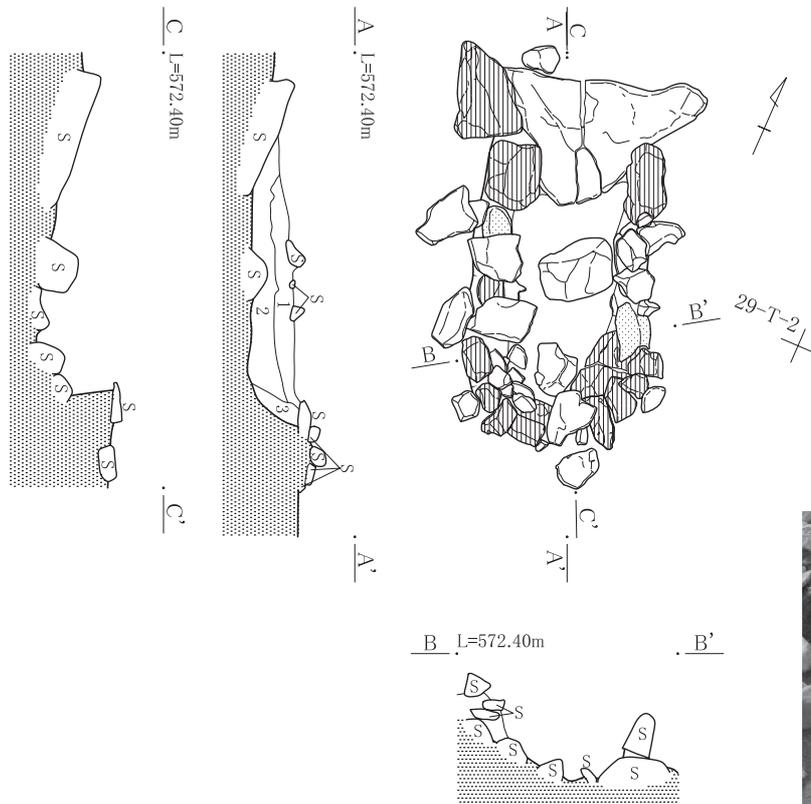
29区10号配石



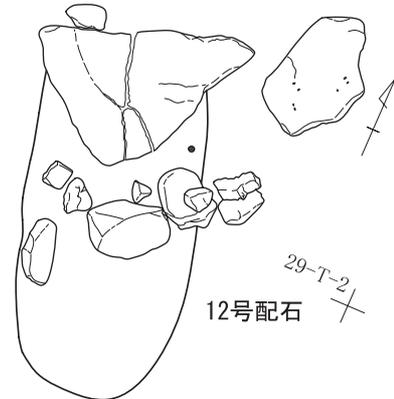
29区10号配石 (北東から)

1、黒色土 若干の軽石混入。黒味強い。

29区11号配石



(掘り方)

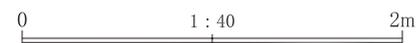


12号配石



29区11号配石 (北から)

- 1、黒褐色土 砂粒目立ちやや黒味を帯びる。
- 2、黒褐色土 1より砂粒大きく、若干地山を含む。
- 3、黒褐色土 地山黄褐色土主体とし混入物少ない。



第169図 29区10号・11号配石

第3章 発見された遺構と遺物

重複 北側を15号・22号・29号配石と重複し、22号・29号配石を切り、15号配石に切られる。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形あるいは隅丸長方形を呈する。扁平磔を立てて1段平積みし、その上に1段の小口積みがある。磔は厚手のものを多用しており、かなりしっかりと構築されている。平積み磔のうち、北辺の列は重複する15号配石のもので、それに取り付く東西両側の平積み磔は、15号の北辺の磔の間に違和感なく組み込まれている。これは、本配石の平積みを15号がそのまま再利用したか、あるいは本配石が15号の付属施設か、そのどちらかの可能性が考えられる。

なお、22号配石の図に記載されている長さ60cmの磔は、本配石の東辺の一部である。

石材等 円磔がいくつか使われており、それ以外は全て粗粒輝石安山岩亜角磔である。

方位 N17度E

遺物 土器は48点が出土しており、主な土器は加曾利B2式～3式である。石器は台石1点、石核1点、剥片5点が出土している。

所見 詳細な掘り方調査を実施していないので根拠は乏しいが、南北方向に長軸をとる楕円形あるいは隅丸長方形を呈する配石墓で、北半部を15号配石に改修・利用された可能性が高いと考える。時期は加曾利B2式～3式期に比定されよう。

29区15号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-2グリッド

経過 14号配石を調査中に、その北半部に重複するかたちで確認された。

重複 14号配石の北半部に重複する。

形状 東西方向に長軸をとる幅広の楕円形を呈する。扁平磔を立てて1段平積みし、その上に一段の小口積みがある。14号配石と同様に、磔は厚手のものを多用し、かなりしっかりと構築している。底面には小さな扁平磔を隙間無く丁寧に敷き詰めており、周縁部を少し高くして平積み磔にすりつける配

慮が伺える。

北東隅に細長い扁平円磔があり、不注意で外されてしまった。その後、この磔が立石ではないかと復元されたが、北辺の平積みに使用されていたと見るのが妥当であろう。なお、掘り方調査は残念ながら行われていない。

規模は、平積み内部で長軸145cm、短軸68cm、深さは上端の磔から30cmほどである。

石材等 円磔がいくつか使われており、それ以外は全て粗粒輝石安山岩亜角磔である。

方位 N86度W

遺物 土器は83点が出土しており、主な土器は加曾利B3式～高井東式である。石器は剥片5点、碎片2点が出土している。

所見 南北方向に長軸をとる楕円形の配石墓で、底面に石敷きが伴う。時期は高井東式に比定される。

29区16号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-3グリッド

経過 大小の磔が全面に展開する地区で確認された。川原石や扁平な磔が取り巻く中に、丸石状の大きな川原石と遺物が分布することから、配石を想定して調査を実施した。

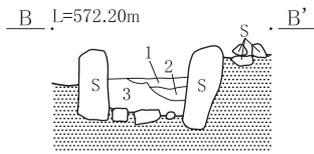
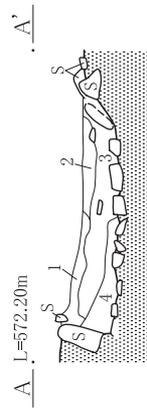
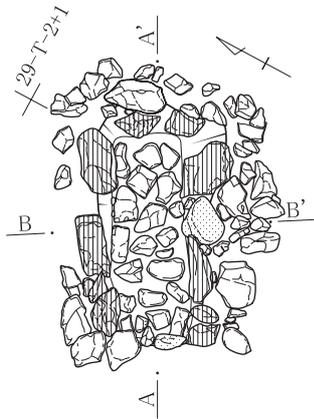
重複 配石墓群が密集する地区の北東にあり、周囲には多量の磔が分布している。重複する遺構はないが、南西に13号・15号配石が近接し、北西に17号配石が近接する。

形状 やや角がある不整形円形状、あるいは隅丸形状を呈する。扁平磔を立てて1段平積みし、その上に2～3段に重ねた小口積みがある。

平積みの磔はほぼ全周しており、高さの長短は上面にのる小口積みで調整している。また、一部に平積み磔を2石合わせて調整した部分もある。小口積みは最大3枚まで重ねた状態が確認できるが、欠落している箇所もある。

規模は、小口積みの磔も含めて東西180cm、南北最大246cm、平積み内部で東西100cm前後、南北110

29区12号配石



- 1、黒色土 微小礫若干含む。
- 2、黒褐色土 細粒で軟質。
- 3、黒褐色土 2と似るが微小礫多く含む。
- 4、黒褐色土 地山小礫多く含む粗粒。

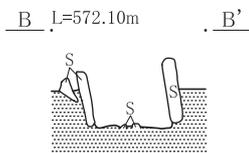
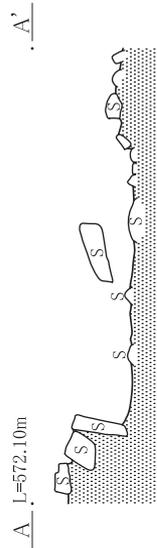
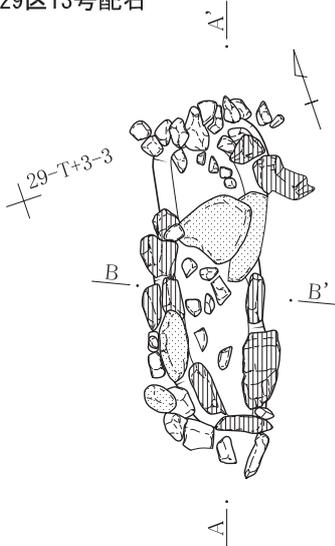


29区12号配石 (東から) 配石内の調査



29区12号配石 (東から) 底面の石敷き

29区13号配石



29区13号配石 (北から) 確認状況



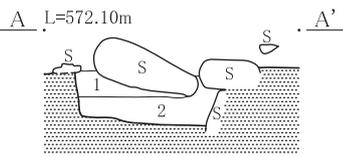
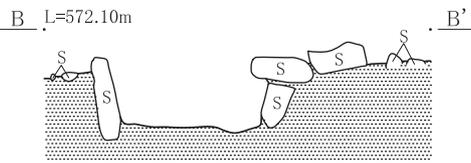
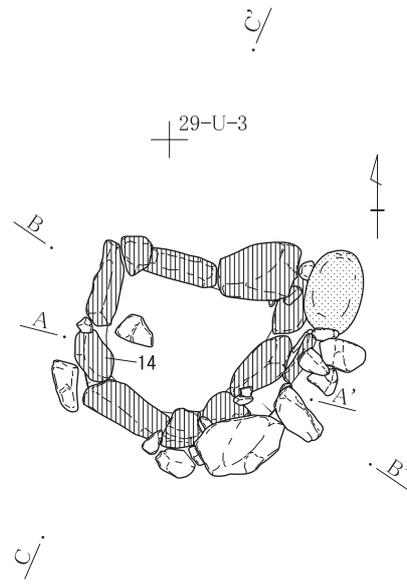
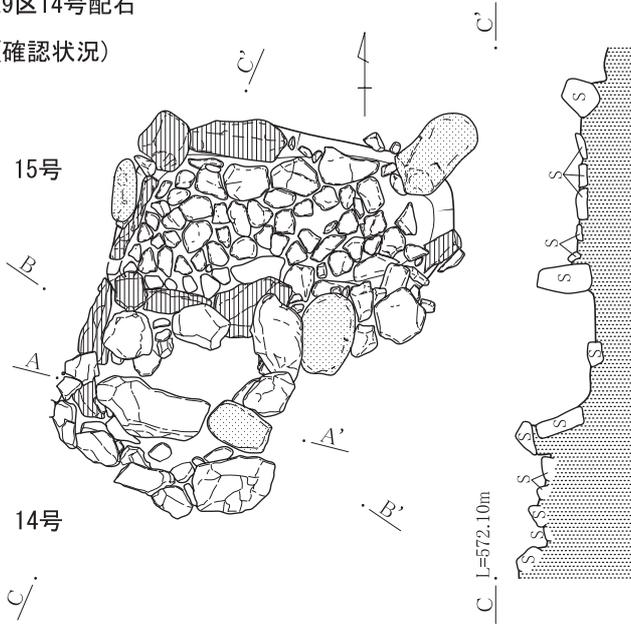
29区13号配石 (南東から)

- 川原石
- 縦位設置

0 1:40 2m

29区14号配石

(確認状況)

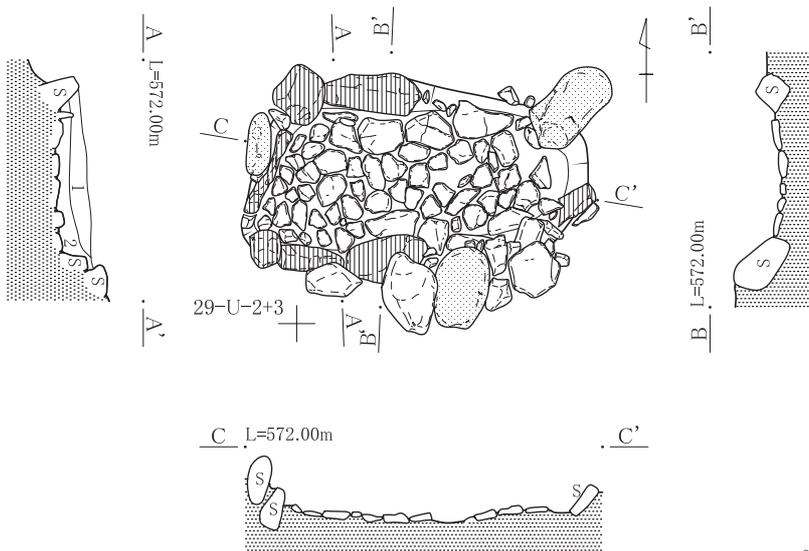


- 1、黒色土 若干の軽石を含みやや粗粒。
- 2、黒色土 黄色粒小礫を混入。1より細粒でやや黒味を帯びる。



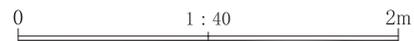
29区14号配石 (北から) 手前は15号配石

29区15号配石



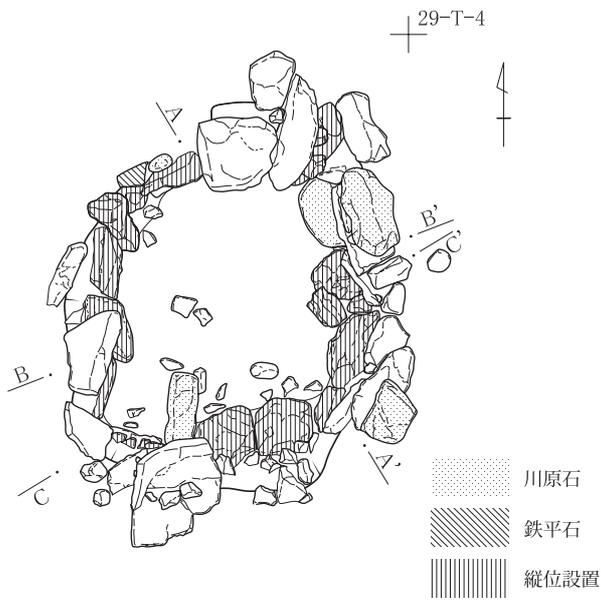
29区15号配石 (東から) 底面石敷きの状態

- 1、黒色土 細粒でわずかな軽石混入。
- 2、黒色土 細礫若干含む。やや軟質。

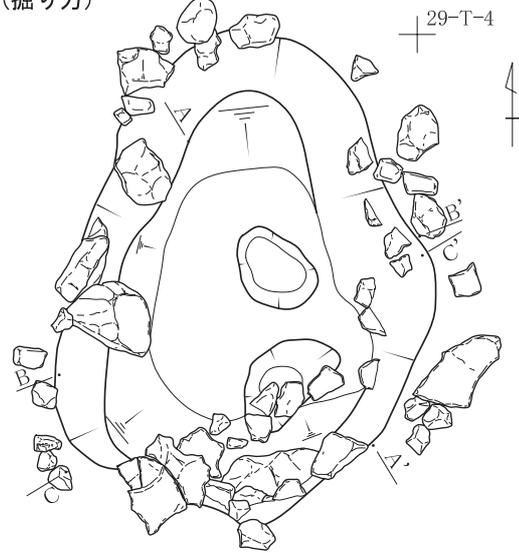


第171図 29区14号・15号配石

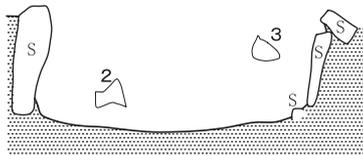
29区16号配石



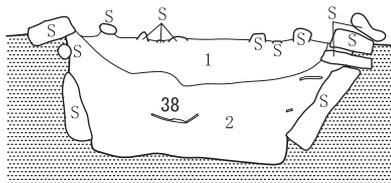
(掘り方)



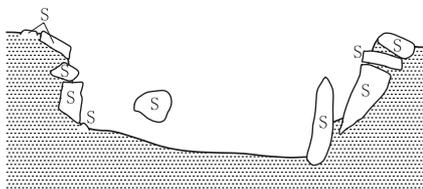
A L=571.80m A'



B L=571.80m B'



C L=571.80m C'



29区16号配石 (南から) 側縁の石組み状態



29区16号配石 (西から) 東側側縁の石組み状態

- 1、黒色土 礫と若干の軽石粒含む。
- 2、黒色土 拳大の礫・軽石粒、地山淡褐色土ブロック若干含む。

0 1:40 2m

第172図 29区16号配石 (1)

第3章 発見された遺構と遺物

cm前後、深さは上端の礫から70cmほどである。

下部遺構 掘り方調査で、底面に50×35cm前後の楕円形を呈する深さ15cmほどの穴が、南北に並んで2つ確認された。一つは中央付近に、もう一方は南側の隅に位置する。掘り方の規模は、東西190cm、南北250cmである。

石材等 川原石数個の他は、地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩垂角礫がしようされている。

方位 —

遺物 本配石は、大量の礫を詰め込んだような状態で埋没しており、埋没土中あるいはその下層から多量の遺物が出土した（第175図～第176図）。

土器は総数520点の出土があった。主なものでは、口縁部を欠損した全面研磨の注口土器（3）が、南東壁際の上層から多量の礫中から出土した。鉢形土器（5）もその付近からの出土である。ほぼ完形の赤色塗彩の透かし入り台付き鉢（2）と大型深鉢（38）の大破片は、礫混じり埋土下からの出土である。その他にも小型の台付き鉢（4）や丸底の壺（6）、無文の滑車形耳飾り（1）などが出土している。

石器は剥片・破片も含めると総数345点もの出土が認められた。出土位置を特定できないものが多いが、主な石器としては、石鏃12点、石鏃未製品16点、石錐7点、削器2点、加工痕ある剥片14点、打製石斧1点、磨石1点、楔形石器1点があり、他に石核12点、剥片239点、破片40点がある。このうち、石鏃類を主体とする小型石器及び多量に出土したその素材類は、地元産の珪質変質岩を材料としており、副葬品だった可能性が高い。なお、この他に覆土の水洗選別作業で5,705点の剥片類その他が得られている。詳細は表9参照。

所見 円形状あるいは隅丸方形状を呈する配石墓として問題はないだろう。時期は出土遺物から後期終末～晩期初頭に比定しておきたい。

単独の遺構としても貴重な資料であるが、後期後半の配石墓群からややはずれた位置にあり、本遺跡のその後を考える上でも重要な遺構と考える。



29区16号配石（北から）調査開始



29区16号配石 注口土器の出土状態



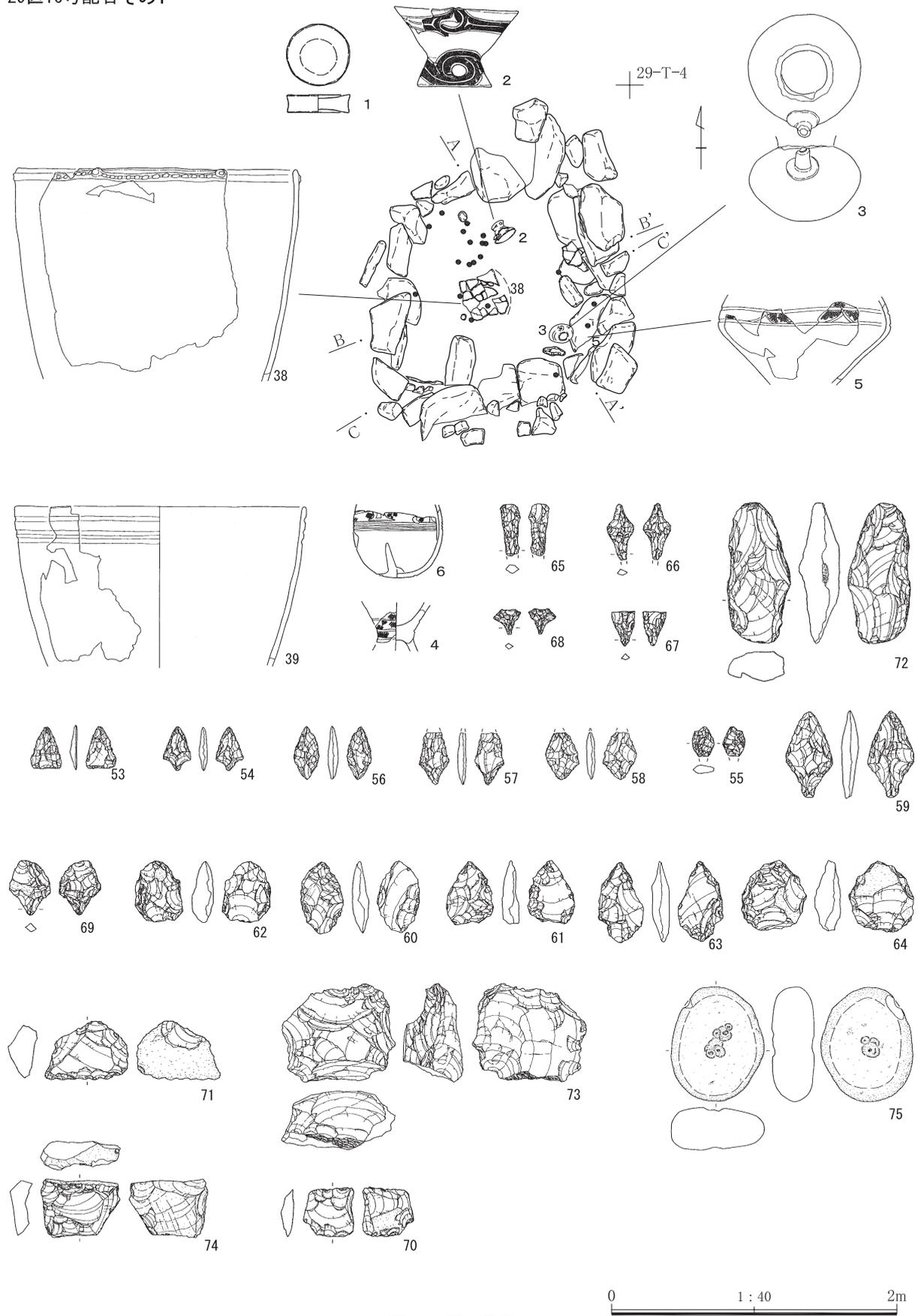
29区16号配石（北西から）遺物出土状況



29区16号配石（北から）台付き土器の出土状態

第173図 29区16号配石（2）

29区16号配石その1



第174図 29区16号配石 (3)

29区17号配石

調査年度 平成10年度

位置 T-3グリッド

経過 16号配石のすぐ北西、礫が多量に点在するなかに、長さ50cm前後の礫6個が並べた状態で確認された。立てて組んだ礫は確認できないが、配石として調査を進めたところ、並べた礫の下から人骨の一部が検出され、中世以降の墓の存在が判明した。墓は北半部に掘り方が確認されたが、その範囲は全体に及んでいない。

重複 北側に中世以降の墓があり、南端部の礫の下に14号土坑が重複する。

形状 南北方向に長軸をとる楕円形の土坑の周囲に、礫を配置した形状であったと想定する。

下部遺構 北半部を中世以降の墓に切られるが、南北に長軸をとる浅い土坑が確認された。規模は、幅83cm、深さ30cmほどである。

石材等 周囲に川原石が1点ある以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N9度E

遺物 土器は小破片が11点出土したのみで、石器は石鏃1点、石鏃未製品1点、削器1点、剥片3点、碎片1点が出土している。

所見 周囲に扁平な大型礫も多くあり、配石墓だった可能性もあるが、現状では土坑としておきたい。

29区18号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-1グリッド

経過 8号配石の周辺調査で確認された。良好な状態ではないが、板状の礫や扁平な礫がいくつか立てた状態で残っており、その下から楕円形の掘り込みも確認できた。

重複 8号配石に接するが、切り合い関係は不明である。

形状 扁平礫が散乱した状態で確認されており、配置等は判然としないものが多い。礫の下部で東西

方向に長軸をとる幅の狭い楕円形状の土坑が確認された。礫のいくつかはこの土坑の縁にあり、立てて設置したものもある。

下部遺構 散乱する礫の下で、東西方向に長軸をとる楕円形状の土坑が確認された。規模は長軸156cm、短軸54cm、深さは立てた礫の上面から30cmほどである。西側を中心に礫が多く散乱しており、判然としない部分もあるが、底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

石材等 使用されている礫は、いずれも地山に含まれている礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N73度E

遺物 土器は加曾利B1式等の小破片が8点が出土しており、石器は剥片が1点出土している。

所見 残存状態は悪いが、下部の土坑の形状とそこに残る僅かな扁平礫の存在、および散乱する扁平礫の存在などから、配石墓であった可能性が高いと考える。時期は、出土遺物から加曾利B1式期を想定しておきたい。

29区19号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-1グリッド

経過 33号配石の東辺の上に乗った状態で確認された。この地区は配石墓が重複あるいは接した状態で密集しており、大型礫や川原石も数多く分布している。本遺構は大型の扁平な川原石3枚が密着して敷かれたような状態で確認されたことから、配石として調査された。

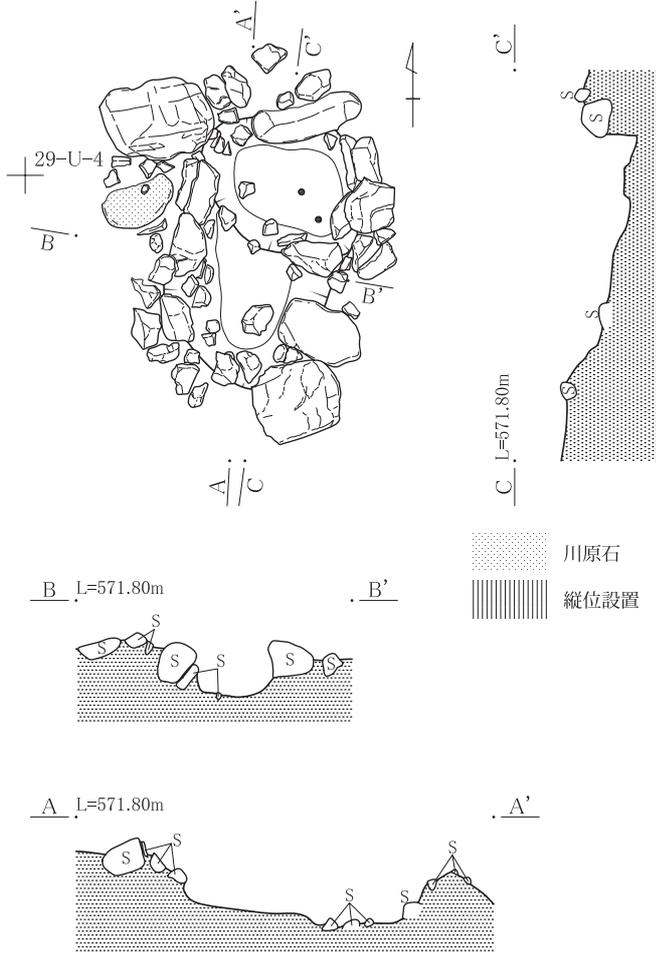
重複 33号配石の東辺に一部重複し、その上の上っている。北西に31号配石、北側に32号配石が接近する。

形状 長さ30~40cm、厚さ10cmほどの扁平な川原石3枚が、接するようにはほぼ同一面に並べて敷かれていた。北側30cmほどのところにややいびつな丸石状の川原石があるが、その他は小振りな地山礫があるのみであった。

下部遺構 確認されていない。

石材等 いずれも川原石である。

29区17号配石

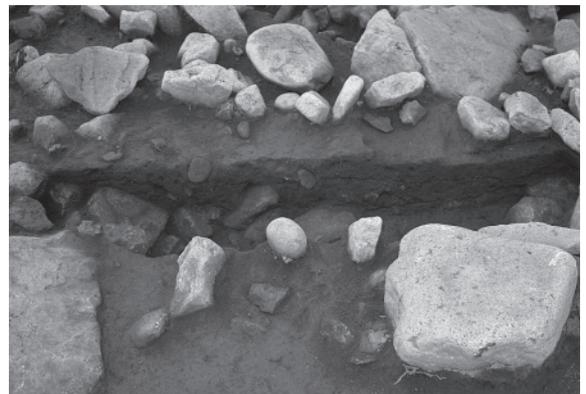
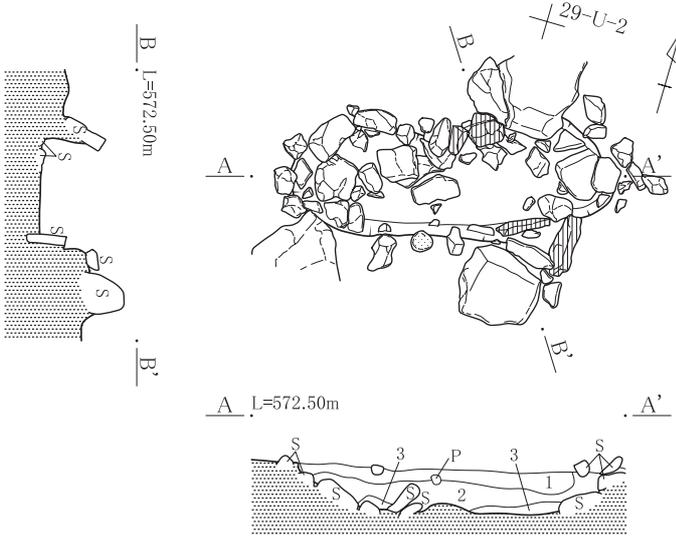


29区17号配石(西から)



29区18号配石(西から)

29区18号配石



29区18号配石(南から)

- 1、黒色土 砂粒混入し黒味強い。
- 2、黒色土 小礫、地山土をブロック状に含む。
- 3、黒褐色土 地山黄褐色土を主体とし締まりあり。

0 1:40 2m

第175図 29区17号・18号配石

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 確認されていない。

所見 重複する33号は残っている礫が少なく、本配石の礫がその一部だった可能性が考えられる。

29区20号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-2グリッド

経過 配石が密集する位置にあり、河原石や扁平礫が集積された状態で確認された。その一角に東西方向に礫が抜けている場所があり、調査の結果、下部に楕円形状の土坑が確認された。

重複 北側に24号配石、南側に32号配石が接しているが、切り合い関係は不明である。

形状 礫は東西160cm、南北80cmほどの範囲に集積しており、側縁を立てた状態のものが多い。側縁の方向は、長軸となる東西方向に揃えて置いたものが多く、そのうち内幅30cm前後の間隔で立てた礫が北辺に3個、南辺に1個あり、これが下部の土坑に収まっており、本遺構の礫に該当する。南辺その他にも礫が多く存在するが、適当な形状のものは見あたらない。長軸方向の礫がないため、下部土坑から推定せざるを得ないが、規模は礫の内側で長軸120cm前後、短軸30cm前後と推定される。なお、北辺の礫の外側に沿う扁平礫は、本配石に接する24号配石のものであろう。

下部遺構 東西方向に長軸をとる、幅の狭い楕円形の土坑が確認された。規模は長軸120cm、短軸44cm、深さは側縁を立てた礫の上から40cmほどである。

石材等 川原石以外は、いずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N63度W

遺物 土器は加曾利B式～高井東式が17点出土しており、石器は石核1点が出土している。

所見 東西方向に長軸をとる長楕円形状の配石墓と判断する。時期は高井東式期に比定したい。

29区21号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-2グリッド

経過 20号配石の北側で確認された。縦位あるいは平坦面に置いた状態の扁平礫が数多くあり、その間を充填するように小礫が一面に敷き込まれていた。このように下部土坑の上面に小礫を敷き込んだ事例は、西側で確認された48号配石でも認められた。

その小礫を取り除き、下部を調査すると、南側の扁平礫に沿って東西方向に長軸をとる楕円形の土坑が確認された。北側の扁平礫沿いでは、浅い落ち込みが認められるに留まった。

重複 南側に24号配石が、北側に23号配石が接するが、切り合い関係は不明である。

形状 下部土坑から判断すると、北側の礫のうち、並んで立てた礫2石と平坦面に並べた3石は23号配石に伴うものであろう。その内側に立てた1石は本配石に伴う可能性が高い。南側では、東西に並べて立てた3石は24号配石のもので、その北側に接して立つ1石と平坦面に置いた厚手の礫は、本配石に伴うだろう。長軸にあたる東西方向の礫としては、西側に厚手の礫が置かれているが、土坑の上面にあり、動いている可能性が強い。

以上のように、本配石も伴う礫が少ないが、下部土坑から推測される規模は、長軸110前後、短軸40前後、深さ30前後であったと推定される。

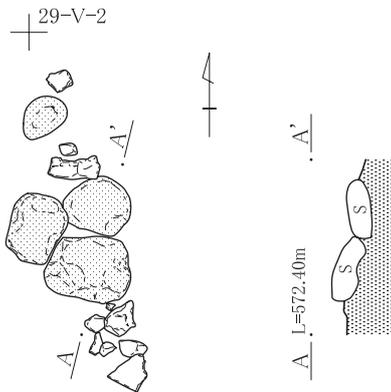
下部遺構 南側の礫に沿って東西方向に長軸をとる長楕円形の土坑が確認された。規模は長軸110cm、短軸52cm、深さは縦位礫の上面から29cmほどである。なお、北側の浅い落ち込みは西半部に半円状のやや深い部分があり、この部分に南北方向に長軸をとる土坑が重複していた可能性もある。

石材等 川原石も少量使われているが、それ以外はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N80度W

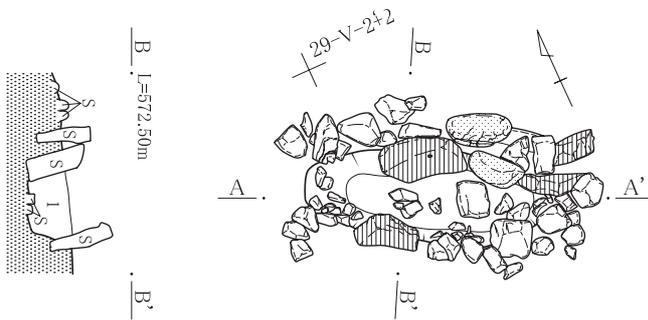
遺物 土器は堀之内2式～加曾利B2式までのものが総数30点出土しており、主な土器は加曾利B1式である。石器は打製石斧1点、剥片1点が出土している。

29区19号配石



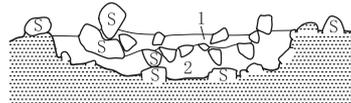
29区19号配石 (北から)

29区20号配石

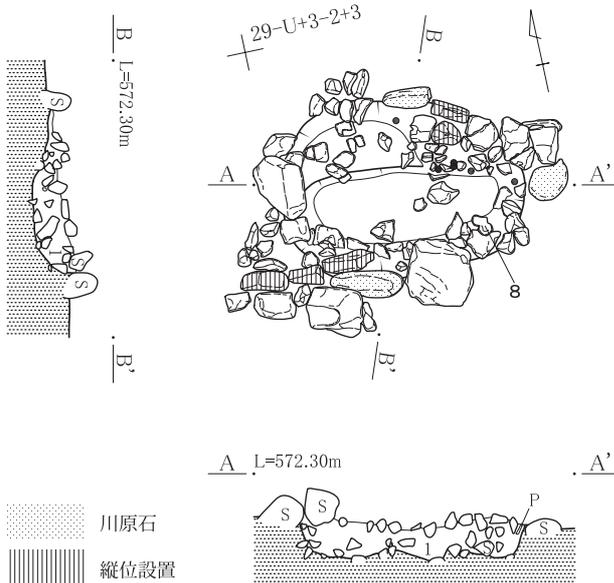


29区20号配石 (東から) 右手は24号配石

- 1、黒色土 礫・軽石粒混入。
- 2、黒色土 小礫、地山土をブロック状に含む。



29区21号配石



29区21号配石 (東から) 小礫が面をなす。



29区21号配石 (東から) 掘り方

0 1:40 2m

第176図 29区19号~21号配石

第3章 発見された遺構と遺物

所見 東西方向に長軸をとる長楕円形状の配石墓の可能性が高いと判断する。時期は加曽利B 1式期に比定したい。

29区22号配石

調査年度 平成11年度

位置 T-2グリッド

経過 13号・14号・15号配石の調査が終了し、磔を取り去って整理している段階で、配置の異なる縦位の大型磔が数多く確認された。それらは方形に組み合わせたものや、直線上に並ぶものなどがあり、複数の配石が含まれていることが想定された。そのうち、東西に長軸をとるものを22号配石、南北に長軸をとるものを29号配石とした。

重複 14号・15号・29号配石と重複し、それらに切られる。また、東側に13号配石が接近する。

形状 東西方向に長軸をとる長方形を呈する。本配石の磔は東側にあるコの字状に配置された縦位の磔3石だけであり、その西側を遮る長さ60cmの大型磔は、14号配石の東辺の磔にあたる。

下部遺構 東西方向に長軸をとる長方形の土坑が確認された。西側を29号配石に切られているため、長軸の長さは不明だが、短軸78cm、深さは立てた磔の上面から32cmほどである。

石材等 いずれも地山に含まれる磔と同様の粗粒輝石安山岩亜角磔が使用されている。

方位 N74度W

遺物 確認されていない。

所見 東西方向に長軸をとる長方形の配石墓であったと判断したい。重複する3基の配石に切られており、加曽利B式期に比定しておきたい。

29区23号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-2グリッド

経過 21号配石と26号配石の間で確認された。21号の北辺にある立てた磔2石と平坦面に置いた磔3石、および26号の南辺にある平坦面に置いた磔を繋

いで、楕円形状にめぐる磔の配置が確定した。

重複 重複する遺構はないが、南側に21号配石が、北側に26号配石が接する。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形状の形態を呈する。立てた磔は南辺に2石、北辺に1石、東辺に1石のみで、その他の磔は平坦面に置かれた状態である。置かれた磔は大半が扁平磔で、その下に平積み磔がないことから、これらの磔が平積み磔だった可能性が高いと考える。規模は、磔の内側で長軸148cm、短軸68cm、深さは立てた磔の上面から30cmほどであるが、平坦面に置かれた磔を平積みに復元すると、さらに縮小するであろう。

下部遺構 東西方向に長軸をとる楕円形状の土坑が確認された。底面に地山の磔があり、埋土1層の下面が底面となるであろう。規模は長軸156cm、短軸82cm、深さは立てた磔の上面から30cmほどである。

石材等 平積みに使用されたと考えられる長さ50cmほどの大型磔が川原石であり、それ以外は全て地山に含まれる磔と同様の粗粒輝石安山岩亜角磔が使用されている。

方位 N53度W

遺物 土器は堀之内2式～加曽利B 2式のものが66点出土しており、主な土器は加曽利B 2式である。石器は剥片14点、碎片2点が出土している。

所見 東西方向に長軸をとる楕円形の配石墓と判断する。時期は加曽利B 2式期に比定したい。

29区24号配石

調査年度 平成10年度

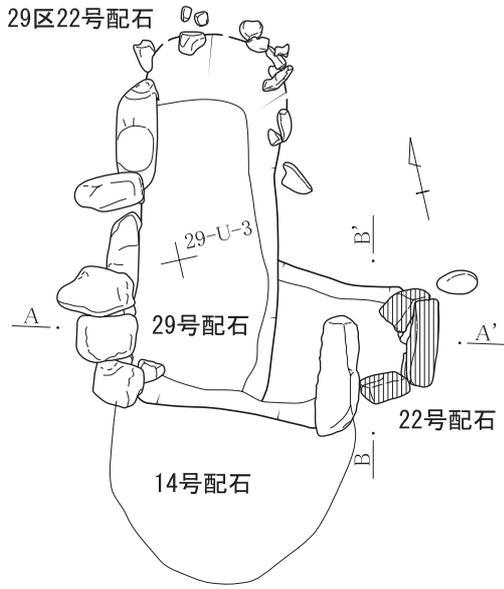
位置 U-2グリッド

経過 20号配石と21号配石の間で確認された。

重複 南側に20号配石、北側に21号配石が接する。

形状 東西方向に長軸をとる舟形を呈する。平積み磔は南辺5～6石、北辺に2石、長軸にあたる西辺に1石が残っているが、その他ははっきりしない。規模は、平積み磔の内側で長軸150cm前後、短軸50cm、深さは平積み磔の上面から30cmほどである。

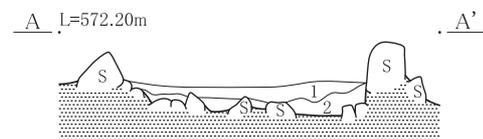
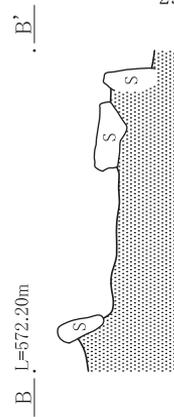
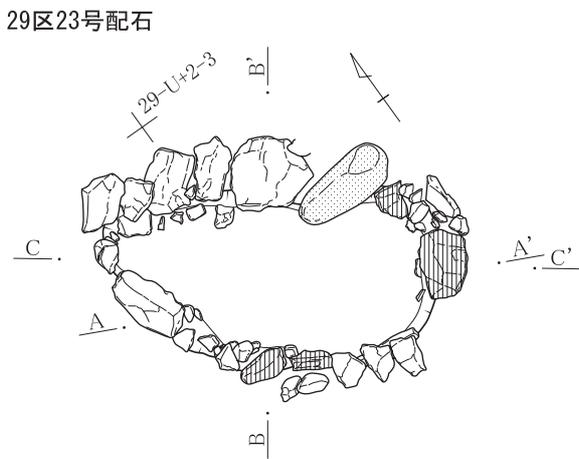
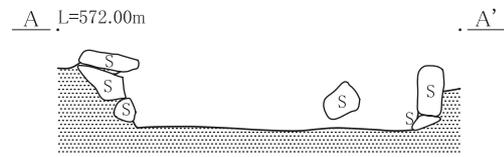
下部遺構 東西方向に長軸をとる長楕円形状の土坑



29区22号配石 (西から)



29区23号配石 (南東から) 右手奥は26号配石



- 1、黒色土 黒味強く、礫の混入少ない。
- 2、黒色土 地山礫の混入目立つ。

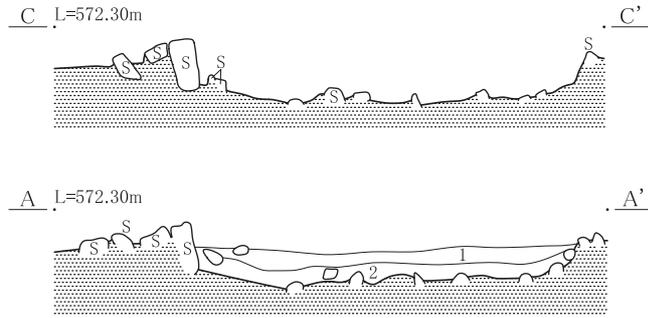
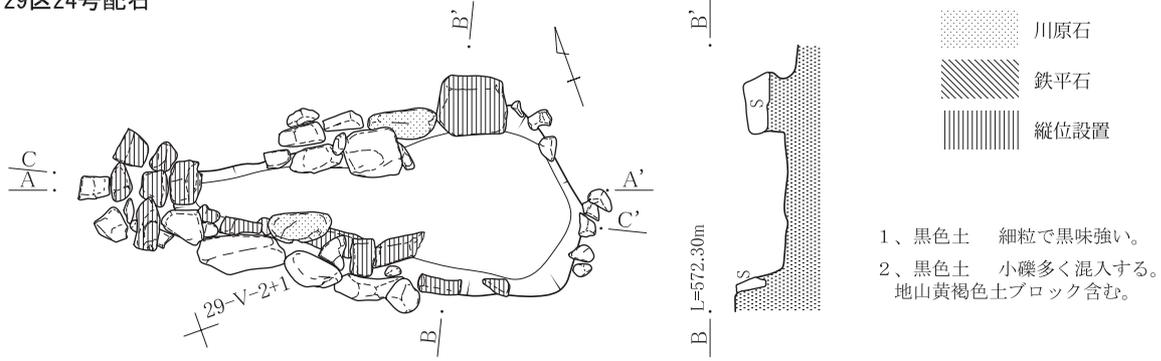


29区23号配石 (南西から) 埋没状況

0 1 : 40 2m

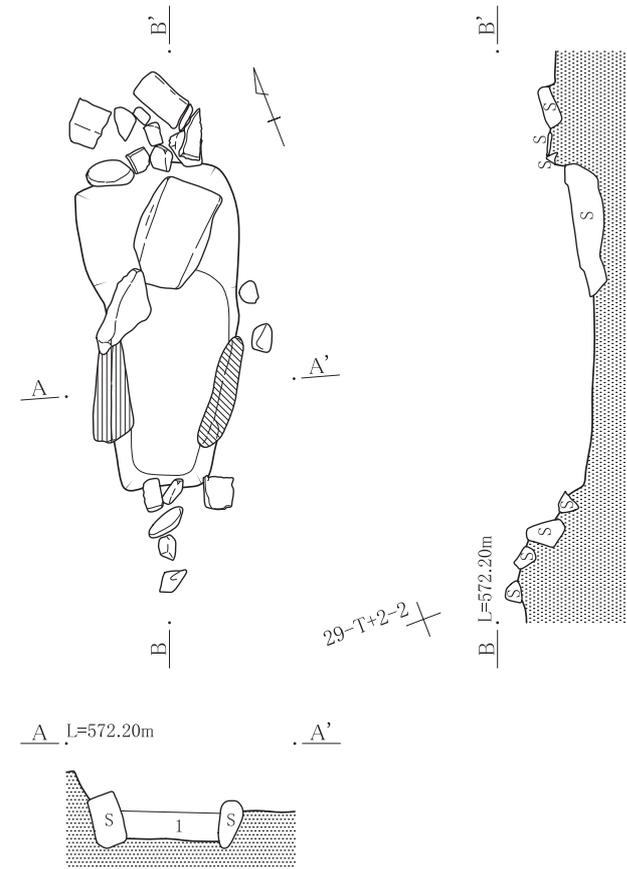
第177図 29区22号・23号配石

29区24号配石



29区20号・24号配石(東から)左が20号、右が24号

29区25号配石

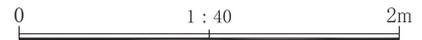


29区24号配石(東から)底面の状態



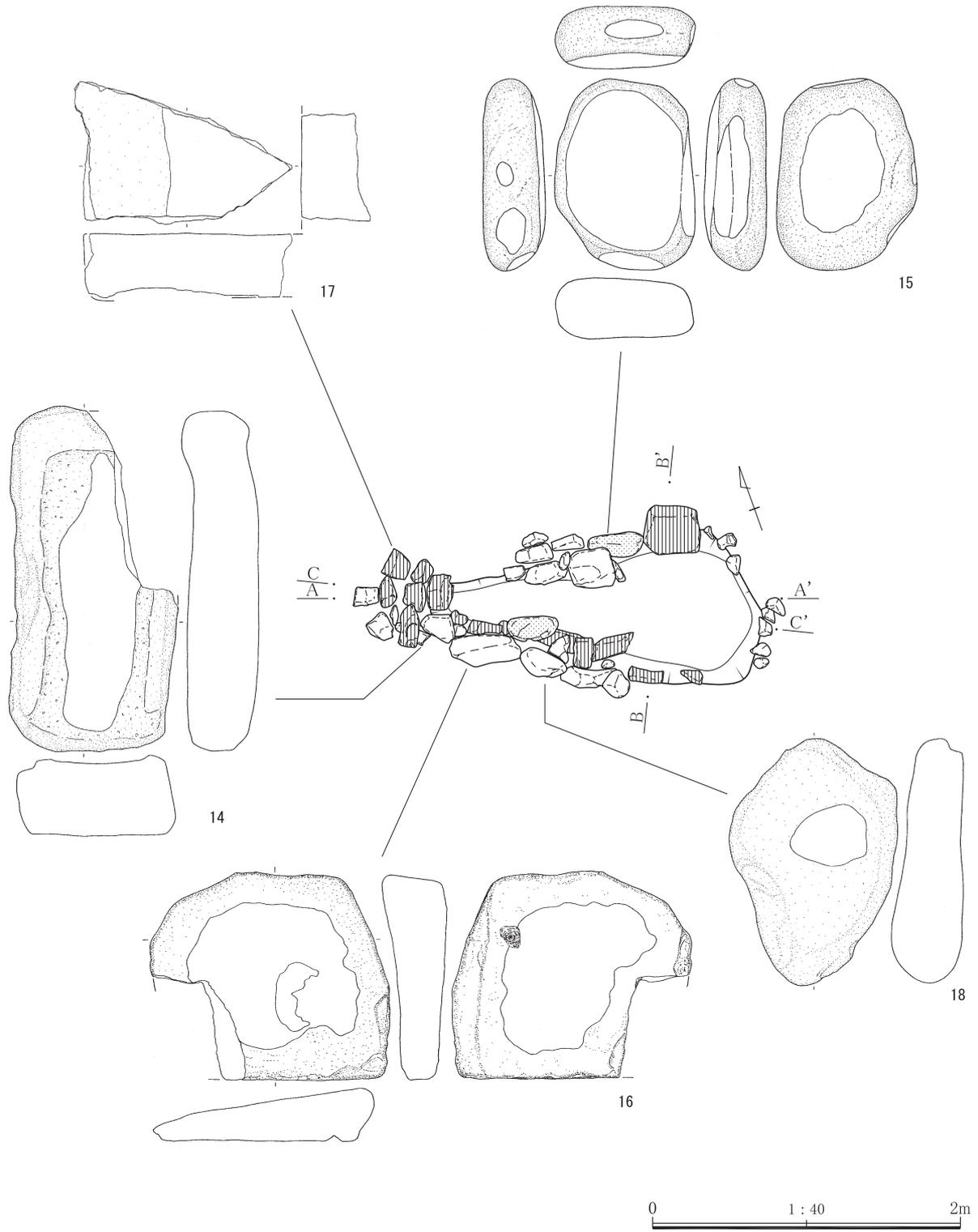
29区25号配石(南から)

1、灰黄色土 軽石・小石を少量含み、しまっている。両側の石の周辺には黒褐色土が入る。



第178図 29区24号・25号配石

29区24号配石



第179図 29区24号配石

第3章 発見された遺構と遺物

が確認された。東端部分はやや掘りすぎており、西側ははっきりしないが、長軸180cm前後、短軸80cm前後、深さ30cmほどであったと推測する。底面には地山礫が多量に認められた。

石材等 川原石がいくつか使われている以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N69度W

遺物 土器は堀之内2式～加曽利B2式のものが52点出土しており、主な土器は加曽利B2式である。石器は平積み礫等に数多く使われており、石皿1点、台石4点を取り上げているが、このうち台石2点(16・18)は20号配石の平積み石である。

所見 東西方向に長軸をとる舟形の配石墓と判断する。時期は加曽利B2式期に比定したい。

29区25号配石

調査年度 平成11年度

位置 T-2グリッド

経過 9号および13号配石の調査が終了し、礫をはずした段階で、立ったままの平積み礫2石と大きな扁平礫2石が確認された。

重複 9号・13号配石と重複し、これらに切られる。

形状 南北方向に長軸をとる舟形を呈するものと思われる。横転した大きな扁平礫2石も平積みに使われていたと考えられる。残っていた礫は少ないが、下部土坑から推測すると、規模は長軸130前後、短軸30～50cm、深さは平積み礫の上面から28cmほどであったと思われる。

下部遺構 南北方向に長軸をとる長形状の土坑が確認された。規模は長軸170cm、短軸80cm、深さは30cmほどである。

石材等 鉄平石が1石使われているが、その他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N25度E

遺物 確認されていない。

所見 東西方向に長軸をとる舟形の配石墓と判断

する。時期は加曽利B2式期に比定したい。

29区26号配石

調査年度 平成10・11年度

位置 U-3グリッド

経過 遺構確認段階では、東辺の平積み礫の上面が南北方向に並んで見えたが、その他の礫は目立たなかった。東辺の礫の両側を掘り下げると、東側の一面から川原石を使用した石敷きを確認され、その直上から赤色に塗彩されたほぼ完存状態の耳飾り(1)が検出され、さらに大型の土器破片(26)も確認された。

配石の調査が終了し、掘り方調査の段階で、南側に本配石とは別の平積み礫が確認された。この配石は東西方向に長軸をとる舟形を呈しており、調査段階では未明名だったので、整理段階で55号配石とした。

重複 55号配石と重複し、これを切る。また、南端を23号配石とせつするが、切り合い関係は不明である。

形状 ほぼ南北に長軸をとる幅広長方形を呈し、底面には15～20cm大の扁平な川原石を主体にほぼ全面に敷かれていた。

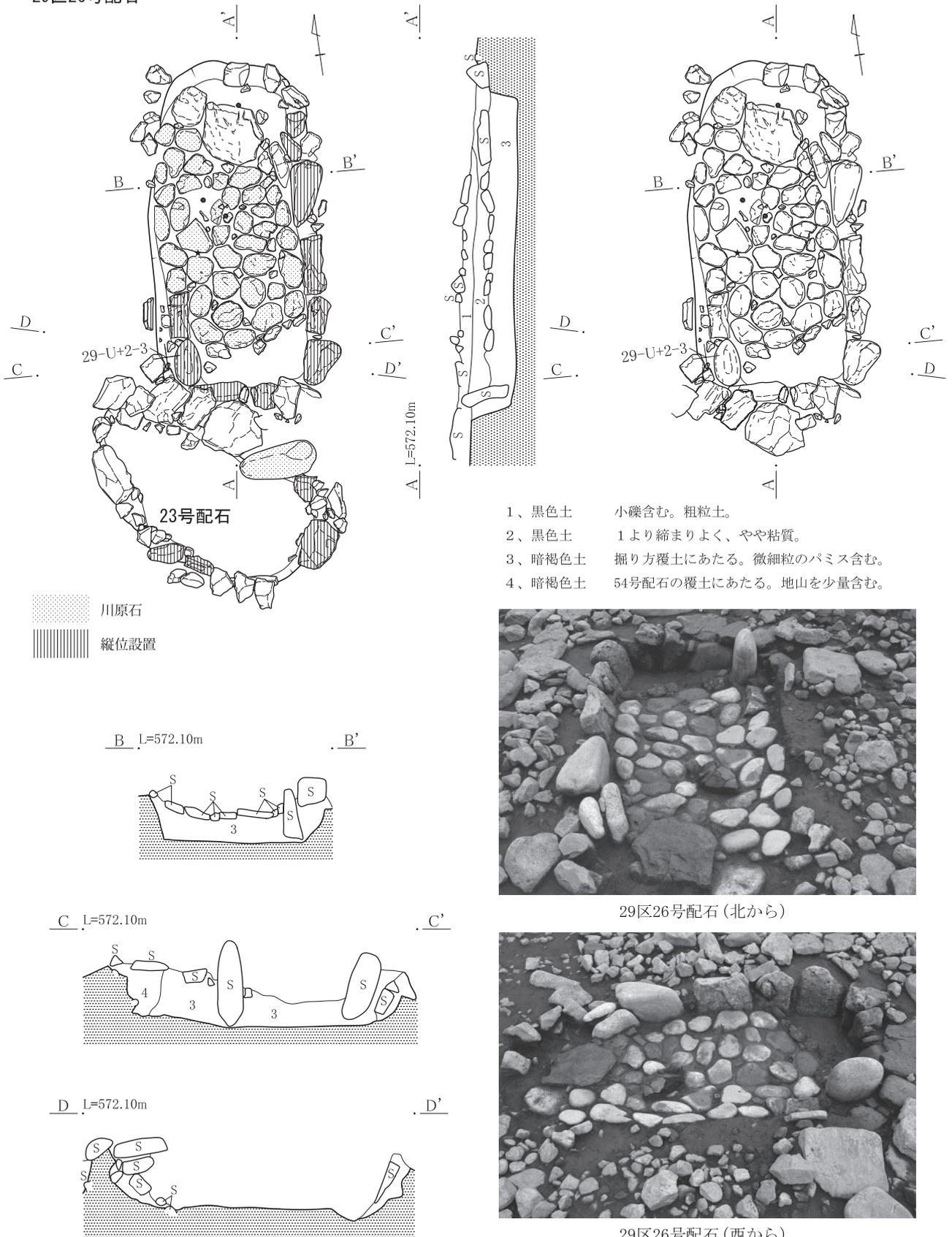
平積み礫は北西側の約半分を失っているが、その他はよく揃っている。礫は舟形のものに比べて厚手に礫が使用され、しっかりと組んでいる。小口積みの礫は残っていない。

底面の石敷きの礫は、大きさを揃えた川原石が使用されており、特別な配慮が伺える。北側に扁平礫が2石使われているが、用意した川原石が足りなかったのであろうか。また、南端部に石敷きがない空間があるが、その西側の平積み礫には、他の平積み礫より10cm以上高い長さ60cmの大きな円礫が使われており、特別な空間だった可能性もある。

規模は、平積み礫の内側で長軸190前後、短軸70cm、深さは平積み礫の上面から20cm前後である。

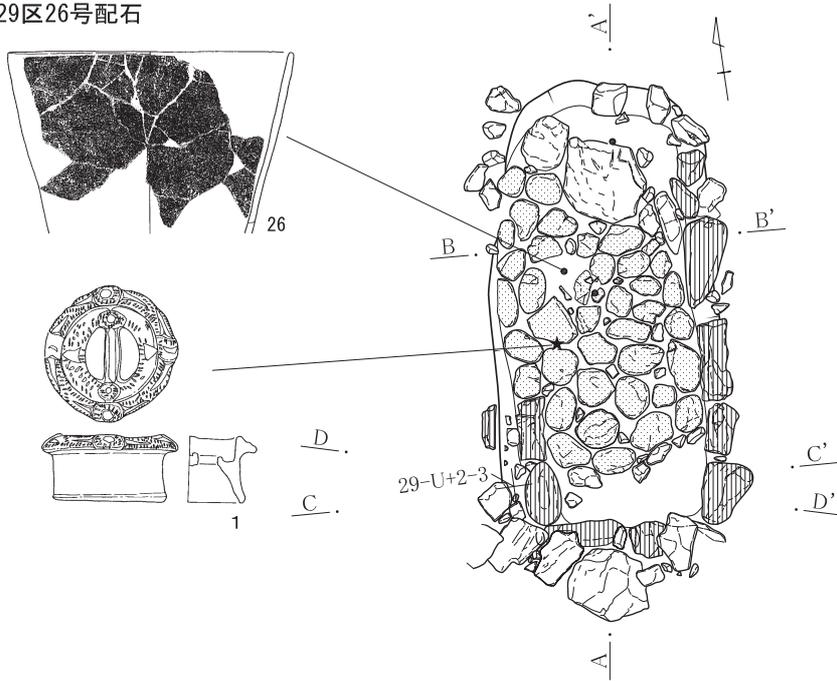
下部遺構 礫の下から隅丸長方形の掘り方が確認された。規模は長軸226cm、短軸115cm、深さ30～40cmほどである。配石の底面に敷かれた石敷きは、掘り

29区26号配石

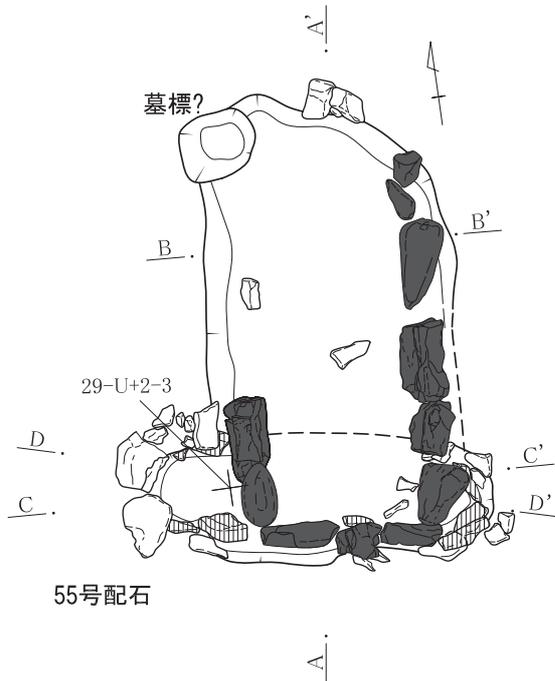


第180図 29区26号配石 (1)

29区26号配石

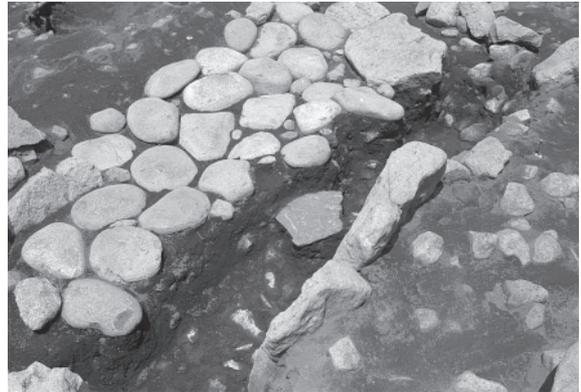


(掘り方)



55号配石

-  川原石
-  縦位設置
-  縁石



29区26号配石 (南東から) 底面石敷きと掘り方



29区26号配石 (南から) 掘り方調査。手前は55号配石。

0 1:40 2m

第181図 29区26号配石 (2)

方底面から15cm前後も上にあり、平積み礫の高さの中間付近に設置されていたことになる。

また、掘り方北西隅で径35~40cm、深さ67cm（掘り方底面からの深さ36cm）の柱穴状の円形ピットが確認された。柱痕は確認されていないが、墓標等の表示が存在した可能性もある。

石材等 底面の石敷き以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩垂角礫が使用されている。

方位 N6度E

遺物 石敷きの底面付近から出土した耳飾り（1）と対をなす耳飾り（2）が、本配石の調査に伴って出土した。2の出土地点ははっきりしないが、両者が1対の関係にあることは間違いない。耳飾り2は縁を一部欠損するが、双方ともほぼ完存状態で、1対での出土は希である。双方とも共通した文様が施されているが、対向する位置に施された三日月と満月は90度ずらした位置に配置されている。また、双方とも文様部分には赤色塗彩が明瞭に残る。

土器は堀之内2式から高井東式の破片が総数272点が出土しており、主な土器は高井東式である。石器は石鏃1点、加工痕ある剥片1点、打製石斧1点、磨石類1点、台石2点の他に、石核1点、剥片19点、碎片6点が出土している。なお、この他に土製円盤が2点出土している。

所見 ほぼ南北に長軸をとる幅広長方形の配石墓と判断する。本配石墓には底面に石敷きが施されており、北西隅に墓標を想定させる木柱が立てられていた可能性がある。また、埋土中から1対の赤色塗彩耳飾りが出土しており、副葬品と見られる。時期は高井東式期に比定されよう。

29区27号配石

調査年度 平成11年度

位置 U・V-3グリッド

経過 26号配石の西側で確認された。確認時には、長さ50cmほどの大型礫数個が東西に並んでおり、その周囲にも大型礫が点在していた。配石は良好な状態で残っており、上面から順次礫を取り外しながら

記録し、側面図についても記録を残すことができた。

なお、掘り方調査の段階で北西側に別の配石が重複することが判明し、39号配石とした。

重複 北西側に39号配石が重複し、これを切る。
形状 東西方向に長軸をとる長方形を呈する。平積み礫はほぼ完全な状態で残っており、南壁と北壁には大型の扁平礫を横長に置いて各3石づつ配置し、東壁には方形状の扁平礫1石を、西壁には方形状の扁平礫2石をくの字状に組み合わせて配置している（第185図）。

平積み礫の上面には、扁平礫や不定型な礫の小口を組み合わせて2~4段の小口積みを乗せ、上面の高さを調整している。小口積みは、上面の礫をじょじょに内側に置くことで、上面の空きを小さくする傾向が看取されるが、これは蓋石の設置を容易にするための工夫であろう。

なお、中央よりやや西側で、長大な扁平礫2石が配石内に片側を落とした状態で確認された（第184図・断面D）。礫は長軸を南北方向に揃えて、北端を北壁上の小口積み礫の上に乗せ、南端を配石内に落とした状態だった。2石のうち、1石は長さ67cm、幅28cm、厚さ11cmの大型礫で、その長さで確認状況から、蓋石だった可能性が高い。

規模は、礫の内側で長軸170cm、短軸52~64cm、深さは小口積み礫の上面から65cmである。

下部遺構 礫の下で楕円形状の掘り方が確認された。規模は長軸240cm、短軸100~120cmで、底面は小礫を多量に含む地山を掘り込んで構築されている。北西側が突出しているのは、重複する39号配石の輪郭にあたる。

なお、北東側の39号配石との交点付近に、楕円形状の浅いピットが確認された。規模は長軸38cm、短軸28cmで、本配石の北辺を掘り抜いている。深さは記録が残っていない。この部分に該当する平積み礫と小口積み礫に、柱状のものが抜けた痕跡は見当たらない。39号配石に伴う痕跡かもしれない。

石材等 川原石も比較的多く使われているが、その他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩



29区27号配石(東から)西側に天井石の一部が残る。



29区27号配石(東から)側縁上の平積み石



29区27号配石(北から)平積み石上の小礫を取り除く。



29区27号配石(東から)上面の平積み石を外す。

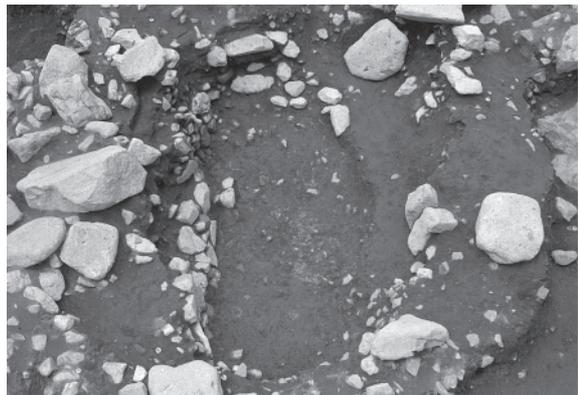
亜角礫が使用されている。

方位 N83度E

遺物 土器は堀之内1式から高井東式の破片が総数355点出土しており、主な土器は加曾利B2式～高井東式である。石器は石鏃15点、石錐1点、加工痕ある剥片4点、楔形石器1点、打製石斧1点、台石1点の他に、石核2点、剥片47点、碎片20点が出土している。このうち、台石1点は構築礫に使用されていたものである。なお、この他に覆土の水洗選別作業で剥片類6,370点とその他の遺物が検出されており、そのうちの70%以上が3層からの出土であった。

土器は埋め土中から多量に出土しているが、小片も多く、周囲から混在したものも含んでいるものと思われる。石器は、単体の配石としては29区16号配石に次いで多く出土しており、特に石鏃の出土数は最多である。

所見 東西に長軸をとる長方形の配石墓と判断する。1段平積みの礫の上に小口積みの礫を2～4段重ねて上面の高さを調整しており、蓋石が設置され



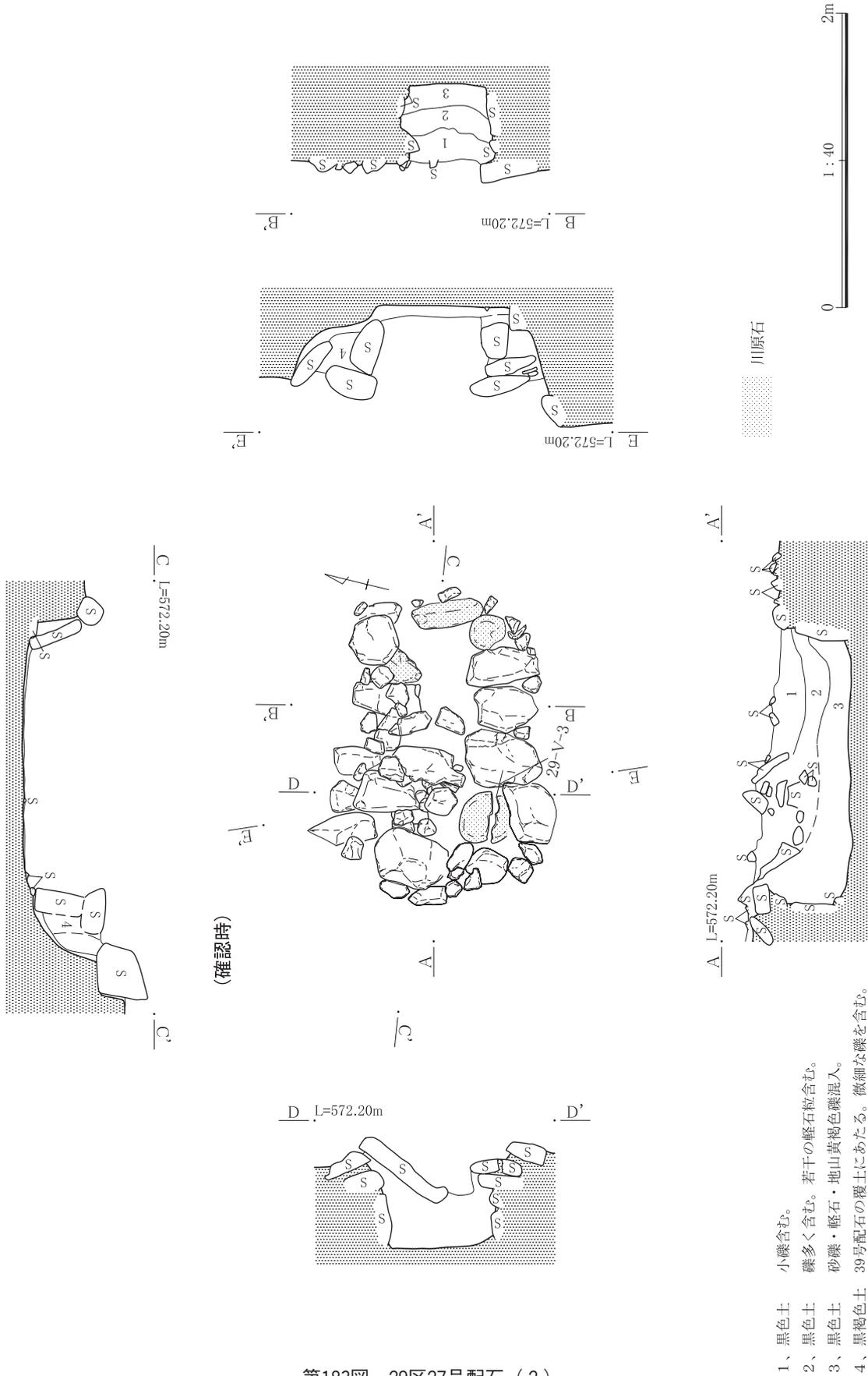
29区27号配石(東から)掘り方



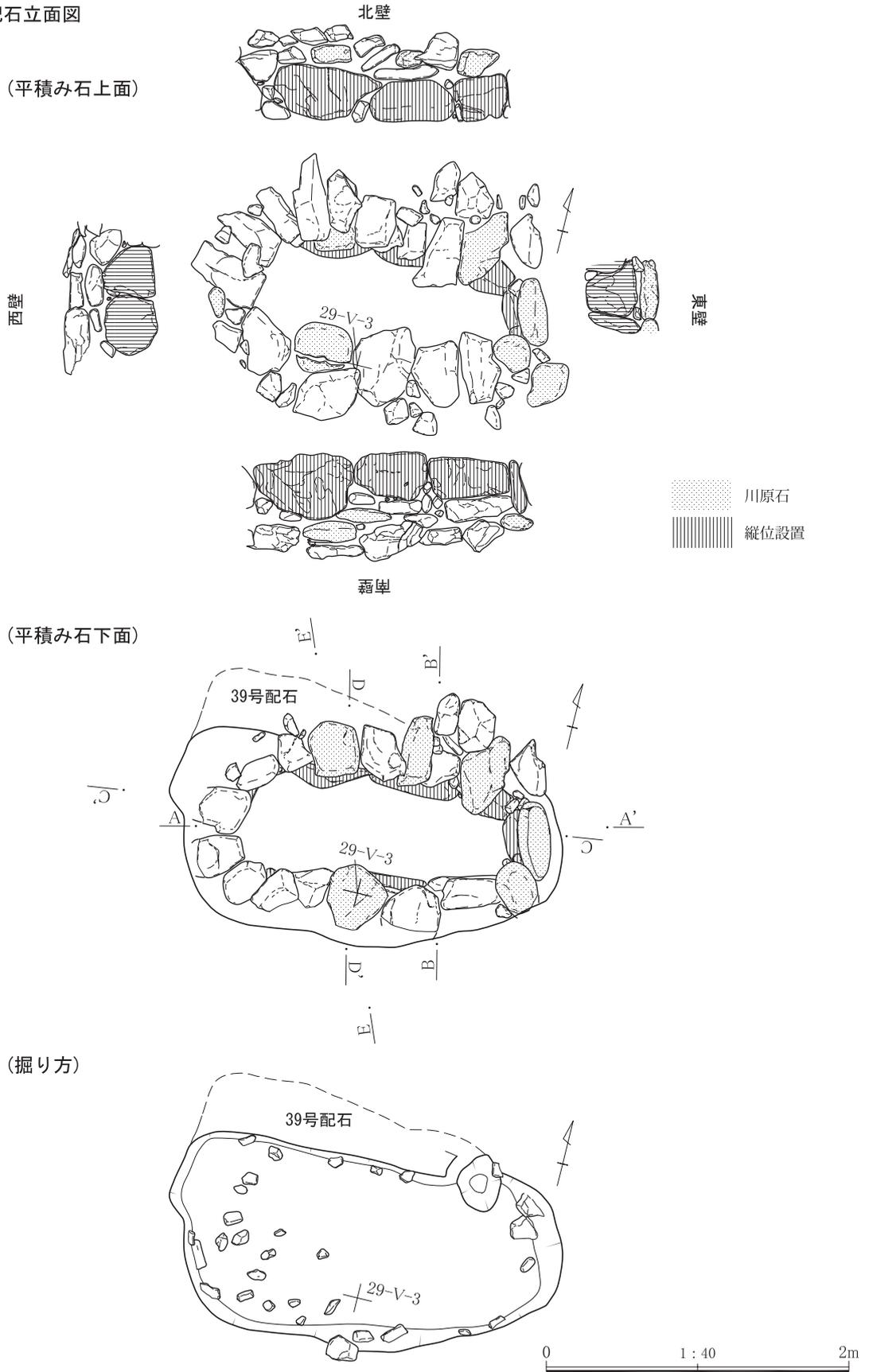
29区27号配石(北から)掘り方

第182図 29区27号配石(1)

29区27号配石



29区27号配石立面図



第184図 29区27号配石 (3)

ていた可能性が高い。残存状態が良好で、本遺跡配石墓の本来の形態を伺える貴重な遺構である。また、石鏃15点をはじめとする小型石器類とその素材類は、副葬品だった可能性が高い。時期は加曾利B3式～高井東式期に比定されよう。

29区28号配石

調査年度 平成11年度

位置 U-3・4グリッド

経過 27号配石の北側で確認された。周囲は足の踏み場が無いほどに様々な礫が密集しており、その中に楕円形状の礫のない空白部があり、その傍らに大きな丸石が置かれていた。空白部を掘り下げると楕円形状の浅い落ち込みがあり、その周囲を精査すると、土偶や小さな丸石、石棒片などが検出された。

重複 30号配石の中にあるが、切り合い関係は不明である。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形状の土坑の周囲に、多量の礫が密集している。

下部遺構 東西方向に長軸をとる楕円形状の土坑が確認された。規模は長軸220cm、短軸110～140cm、深さは30cmほどである。底面はやや凹凸はあるがほぼ水平である。中央部の北側寄りに直径90cm前後、深さ30cmほどの円形状の落ち込みがあり、その上面から土器、丸石、磨石類、石棒片等が多量に出土した(第187図)。また、その北側の礫の下から中空土偶の体部(18)、小さな丸石が川原石や鉄平石と共に出土した。

石材等 丸石、川原石、鉄平石が数多く集積されており、それらと共に地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N71度E

遺物 土器は堀之内式から高井東式までの破片が総数53点出土しており、主な土器は加曾利B2～高井東式である。石器は敲石1点、磨石類4点、石棒破片1点、剥片1点、碎片1点の他に、土偶破片1点が出土している。

土偶は加曾利B式から高井東式期に特徴的な山形

土偶で、北辺の礫の下から、頭部側を下にした状態で出土した(第188図)。山形土偶では希な中空の作りで、頭部と大きくせり出した腹部以下を欠損している。右腕は腰に当てており、左腕の表現が気になるが、二の腕から先は欠損している。腕部の表裏に山形土偶に特徴的な丸い貼付文が付けられている。その他の文様は現状では認められないが、内外面とも丁寧に調整されており、表面はかるく研磨されている。なお、赤色塗彩は確認できない。

所見 扁平礫も多量に使われており、配石墓の可能性もあるが、現状では断定できない。土偶や石棒と共に多量の丸石が集積しており、墓前での何らかの行為を行った場所を想定したい。時期は加曾利B2～3式期に比定しておきたい。

29区29号配石

調査年度 平成11年度

位置 T-3グリッド

経過 14号・15号配石の調査が終了し、礫を取り去った段階で、22号配石と共に確認された。当初は22号配石の西壁にあたると考えていたが、南北に延びる平積み礫とそれに伴う掘り方が確認されるに至った。

重複 14号・15号・22号配石と重複し、22号を切り、14号・15号に切られる。

形状 西壁の礫と掘り方から、南北方向に長軸をとる長方形の形状が想定できる。南西部の上面にのる小口積みの3石は、16号配石調査時にすでに存在しており、16号配石に伴うものであろう。本配石の西壁の平積み礫は、16号配石の平積み礫の裏側にあり、その方向は16号より北にある。

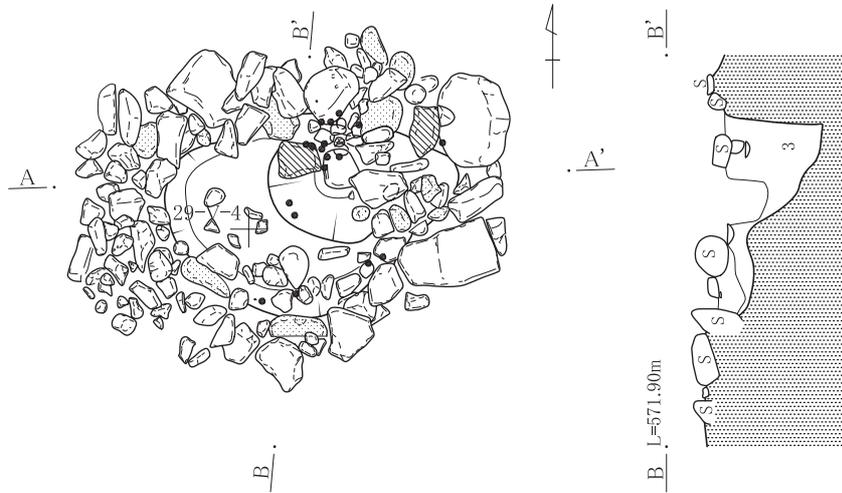
下部遺構 西壁の平積み礫3石以外は、掘り方のみの確認である。規模は長軸188cm、短軸86cm、深さは平積み礫の上面から42cmである。

石材等 いずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

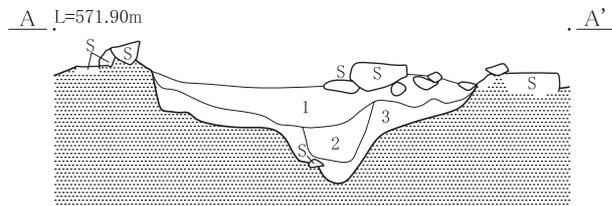
方位 N16度E

遺物 土器は加曾利B1式から安行式までの破片

29区28号配石

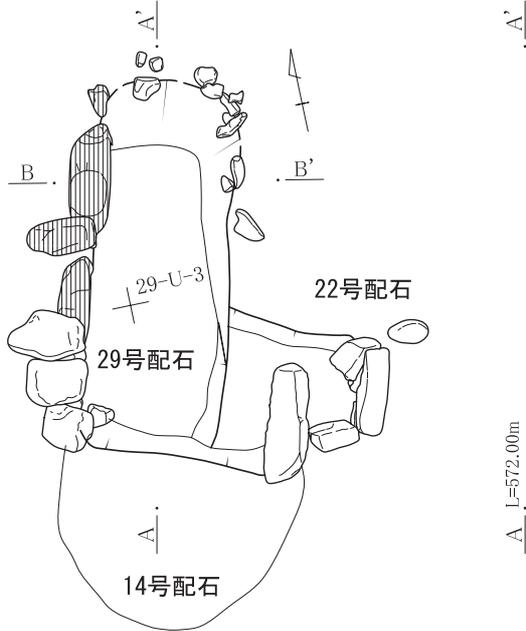


- 1、黒褐色土 砂礫含み、やや軟質。
- 2、黒褐色土 軟質。
- 3、黄褐色土 2層と地山砂礫土の混土。

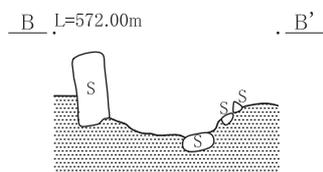


29区28号配石 (東から) 確認状況

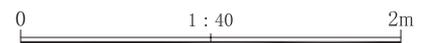
29区29号配石



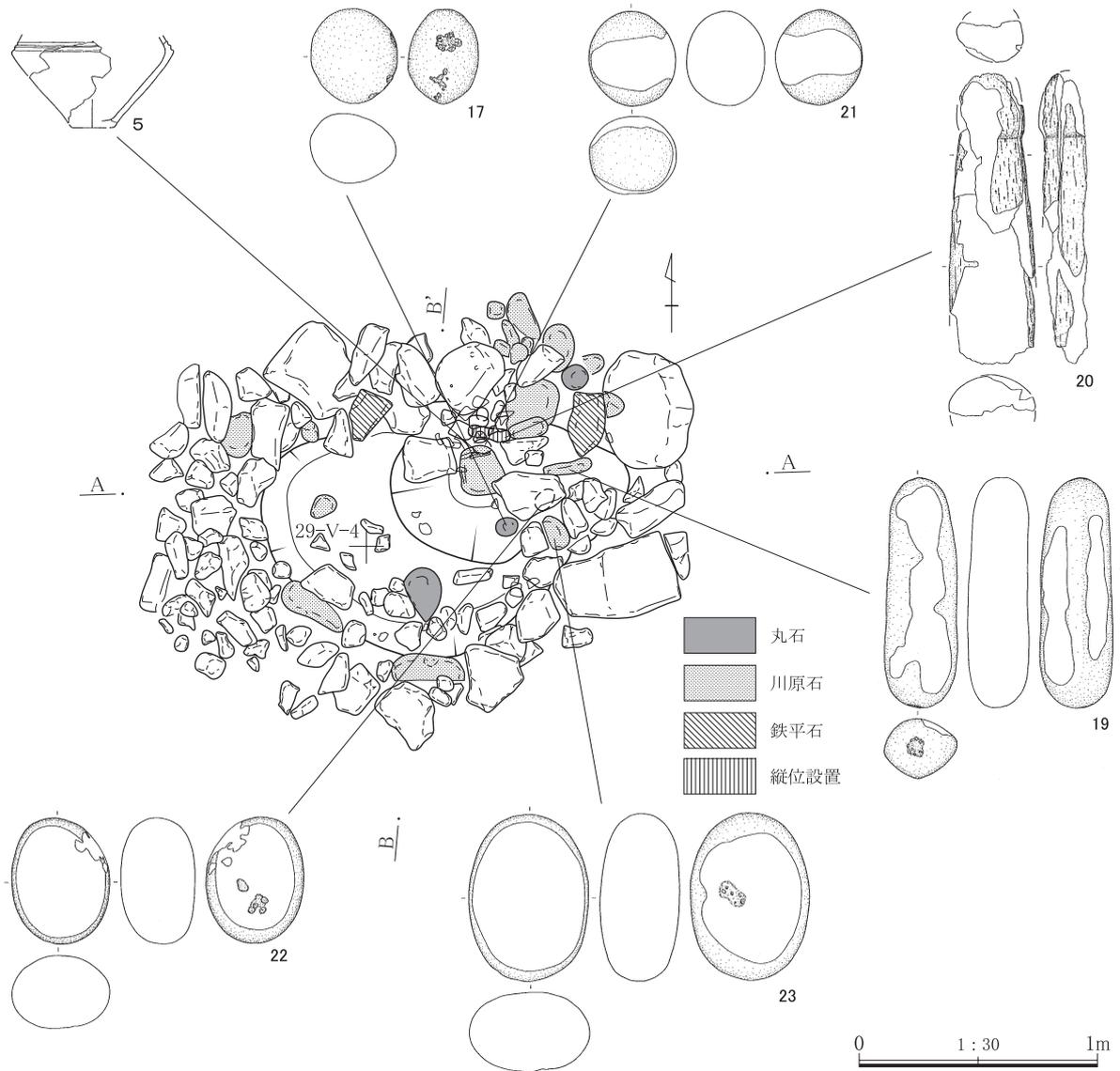
29区29号配石 (東から)



- 川原石
- 鉄平石
- 縦位設置



第185図 29区28号・29号配石



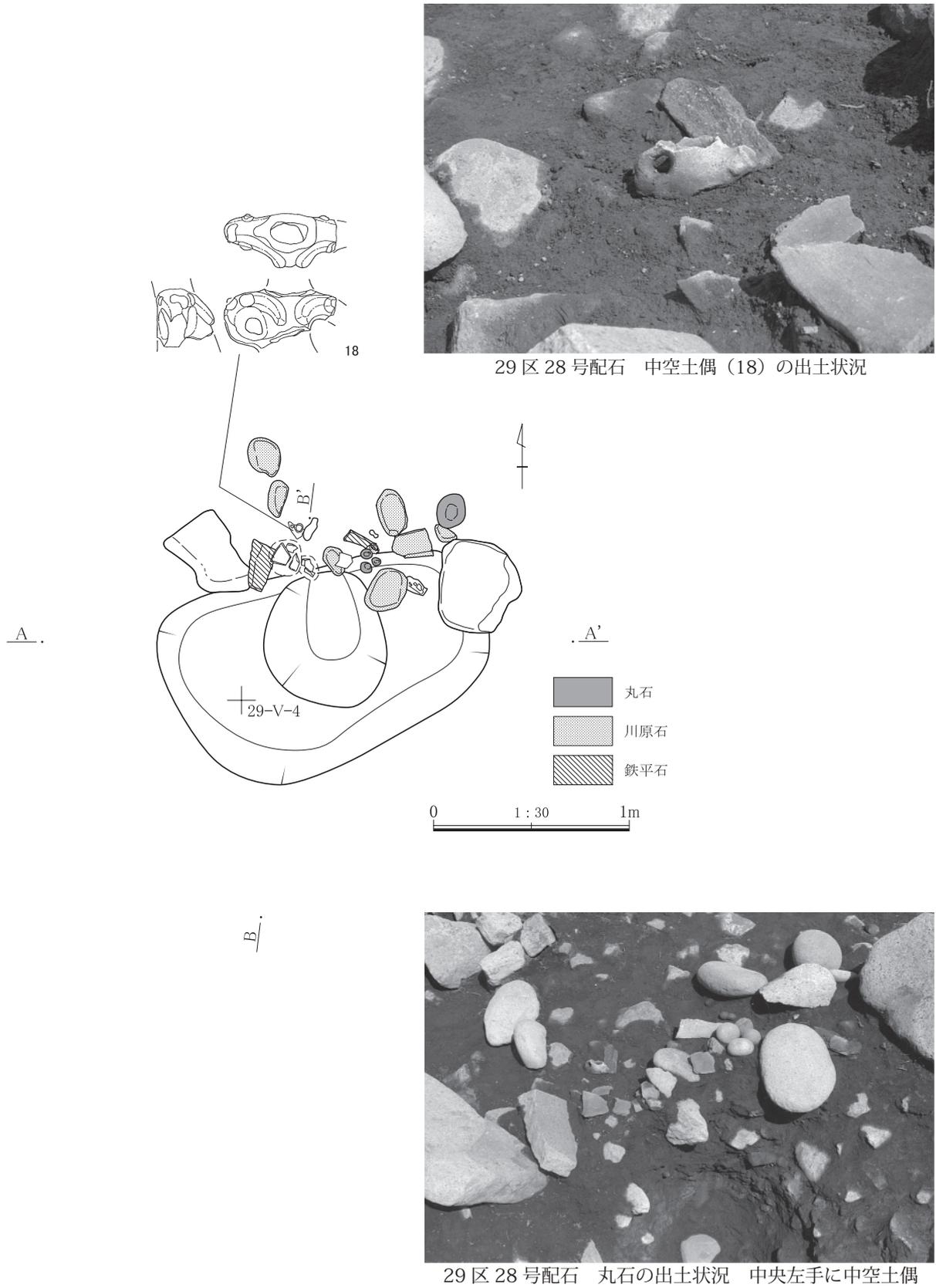
第186図 29区28号配石 (1)



29区28号配石 (東から) 確認状況



29区28号配石 (西から) 遺物出土状況



29区28号配石 中空土偶(18)の出土状況

29区28号配石 丸石の出土状況 中央左手に中空土偶

第187図 29区28号配石(2)

が32点出土しており、主な土器は加曾利B式である。石器は石鏃未製品1点、石錐1点、敲石1点、剥片11点が出土している。

所見 南北に長軸をとる長方形の配石墓と判断する。時期は、重複関係から、加曾利B式期に比定しておきたい。

29区30号配石

調査年度 平成10年度

位置 U・V-4グリッド

経過 表土掘削後の遺構確認段階から様々な礫が多量に密集する地点であり、個別配石を検討しながら精査を進めたが、確認には至らなかったため、密集する範囲を一連の配石として認定した。

重複 南西部に28号配石、その上方に40号配石が重複するが、切り合い関係は不明である。また、北東部の礫の下で15号土坑が確認されている。

形状 東西7m、南北6mほどの範囲に大小様々な礫が密集する。この範囲には大小の丸石や川原石、扁平礫などの、配石に必要な礫が集積されており、その間に磨石類、石棒、石冠などが点在する。分布する礫のうち、大型のものは地山に含まれるものも多く、その間に有用な礫や石器類が集積されているように見える。そのなかで、石棒や石冠は配石では認められないものであり、この場所が特異な場であった可能性を示唆している可能性も考えられる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 石器類や川原石が数多く集積されているが、圧倒的多数を占めるのは地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 土器は後期後半期を主体に総数174点が出土しており、そのうち文様を持たない粗製系土器の出土が目立っている。その分布は配石の南半部に偏っており、特に粗製系土器は配石の南縁に認められる(第189図)。

石器は石鏃4点、石鏃未製品1点、加工痕ある石器2点、敲石2点、磨石類8点、台石1点、砥石1

点、石棒片6点、石冠1点、丸石7点の他に、石核4点、剥片28点、碎片8点が出土している。

このうち、小型の丸石4点(22・23・24・26)と石棒(20)は28号配石のすぐ北側に集中しており、28号配石の一部であった可能性が高い。また、石冠(18)は長さ22.8cmの完存品で、その出土位置は40号配石の範囲内にある(第190図)。

所見 配石墓群周囲を取り巻く礫群の一部であり、特にこの地点は墓群の北側に位置する特別な場所であったと考えられる。時期は、墓群が形成された加曾利B式期～高井東式期を中心に、その後も晩期初頭まで継続された可能性が高いと考える。

29区31号配石

調査年度 平成10年度

位置 V-1・2グリッド

経過 20号配石の南西部で確認された。配石の周囲上面に大小様々な礫があり、それらを取り除いた面で本配石の小口積み礫が確認できた。小口積み礫はかなり乱されており、東側は平積み礫を含めて失っている。

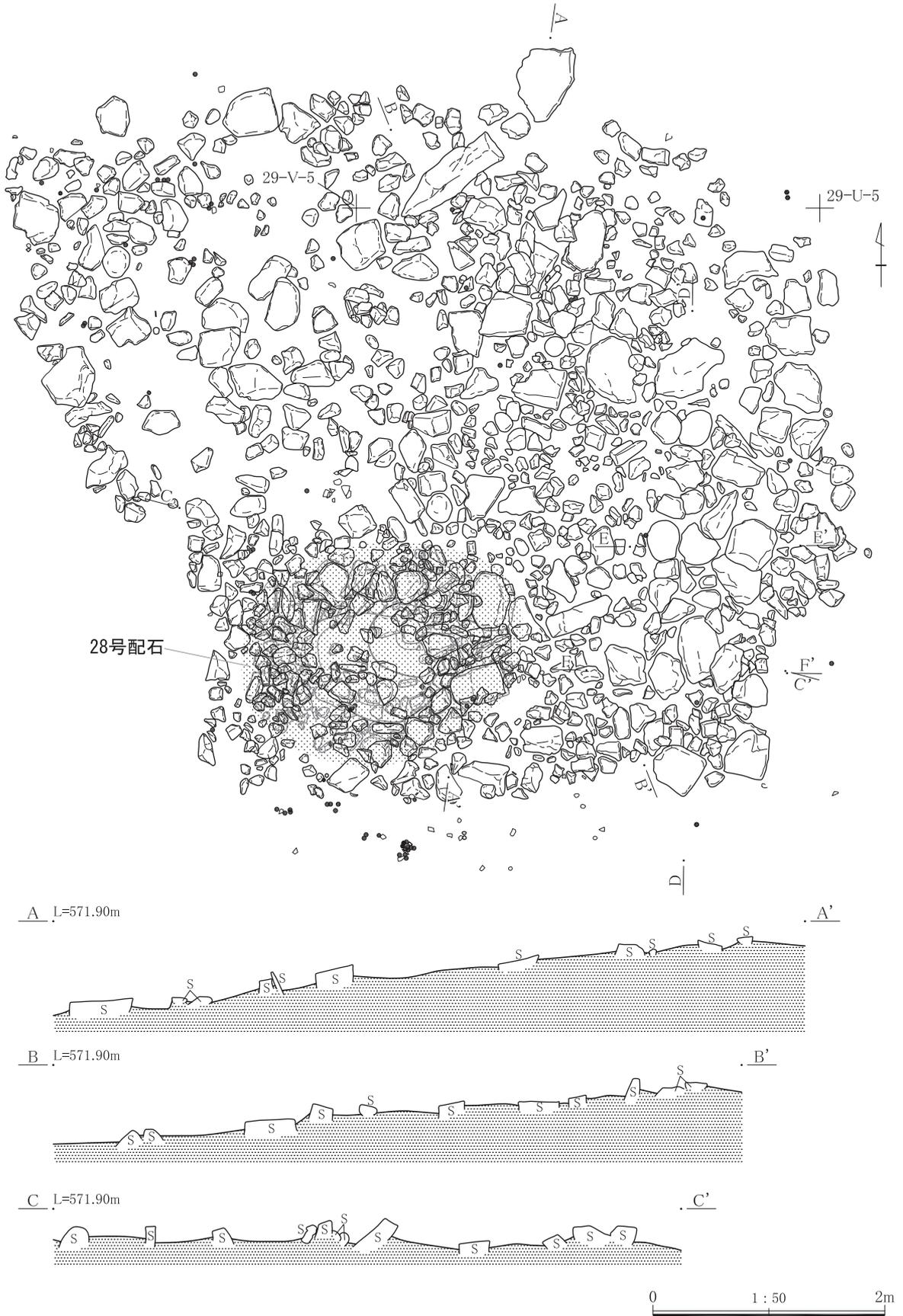
重複 南東隅を33号配石と重複し、南西隅を32号配石と、北西隅を34号配石とそれぞれ接するが、切り合い関係は不明である。

形状 東西方向に長軸をとる舟形の形状で、西側は幅が狭く、東側が広い撥形を呈するものと思われる。東端部は礫を含めて失っており、判然としない。平積み礫は、北辺に6石、南辺に5石があり、北辺では棒状の幅の狭い礫を幅広の礫の間に挟んで、模様積みのような効果を表出している。なお、短軸の幅が狭い西壁には、大型の扁平な川原石1石を配置している。平積みの上面にのる小口積み礫は、扁平礫を重ねた1～2段が残っており、やや小型の礫が多いためか、大型の礫は横長に置いて配置している。

規模は、平積み内側で長軸150cm以上、短軸35～65cm、深さは小口積み礫の上面から40cmである。

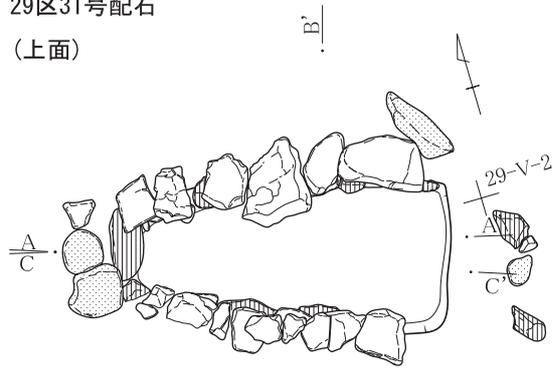
下部遺構 掘り方調査は実施されていない。

石材等 川原石が数石使われているが、その他は地



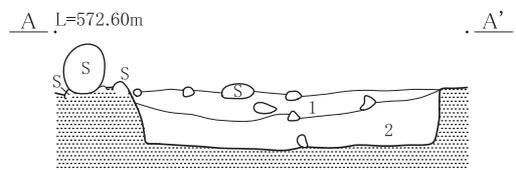
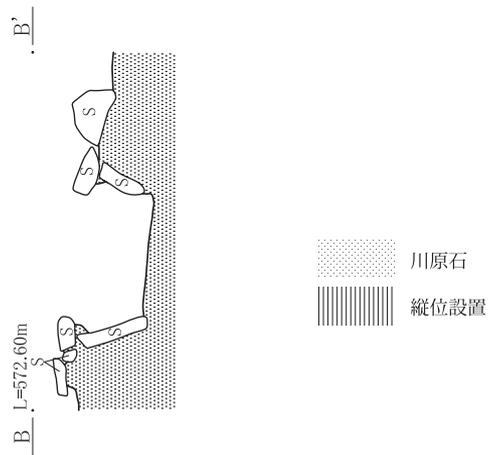
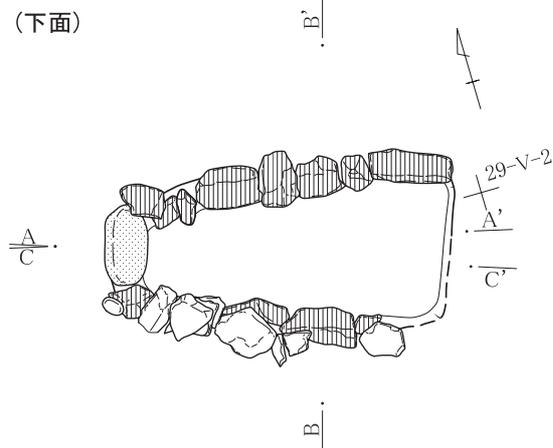
第188図 29区30号配石 (1)

29区31号配石
(上面)



29区31号配石(南から) 埋没土の調査

(下面)



- 1、黒色土 礫を混入。
- 2、黒色土 礫を混入。軽石やや目立つ。



29区31号配石(南から)

0 1 : 40 2m

第191図 29区31号配石

第3章 発見された遺構と遺物

山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N74度W

遺物 土器は後期後半の小片が65点出土しており、主な土器は加曽利B 1～2式である。石器は使用痕ある剥片1点、剥片2点、碎片1点が出土している。

所見 東西方向に長軸をとる舟形の配石墓と判断する。時期は加曽利B 1～2式期に比定されよう。

29区32号配石

調査年度 平成10年度

位置 U-1・2グリッド

経過 31号配石の東側で確認された。精査のなかで、立てた状態の礫が直線的に並ぶことから、長方形の形状を想定して調査を実施した。

重複 北側を20号配石と、西側を31号配石と、南側を19号・33号配石とそれぞれ接しているが、切り合い関係は不明である。

形状 南北方向よりかなり西に振れた方向に長軸をとる、幅の狭い長方形の形状を呈するものと想定する。平積み礫が残存しているのは西辺の一部と南端部で、東辺と南端部には明瞭な痕跡がない。規模のうち計測できるのは、礫の内側で長軸142cm以上、深さは平積み礫の上面から30cmのみである。

下部遺構 掘り方調査は実施していないが、周囲の礫の状態と埋土の観察をもとに、長軸144cm、短軸53cmの長方形の掘り込みを確認した。

石材等 礫はいずれも、地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N33度W

遺物 土器は後期を中心に44点出土しており、主な土器は加曽利B 2式である。石器は剥片2点、碎片1点が出土している。

所見 欠落した部分が多いが、南北方向に長軸をとる幅の狭い長方形の配石墓の可能性が高い。時期は加曽利B 2式期を想定しておきたい。

29区33号配石

調査年度 平成10年度

位置 U・V-1グリッド

経過 32号配石の南側で確認された。周囲に扁平礫その他が点在しているが、本配石に伴うものは少ない。本遺構は南北に長軸をとる長方形の掘り方による確認である。

重複 北側を19号・31号配石と一部重複し、32号配石が接するが、切り合い関係は不明である。なお、19号配石は本配石の上ののっている。

形状 礫は、掘り方の縁にいくつか認められるが、いずれも小片であり、付随的な礫であろう。

下部遺構 南北に長軸をとる長方形の掘り方が確認された。周囲及び底面には礫混じりの地山があり、掘り方の確認は比較的容易であった。規模は長軸182cm、短軸66～80cm、深さ36cmほどである。

石材等 礫はいずれも、地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N 8度W

遺物 土器は加曽利B 2式から高井東式の破片が48点出土しており、石器は石鏃1点、剥片11点、碎片2点が出土している。

所見 礫の大半を失っているが、掘り方の形態と周囲の状況から、配石墓の可能性は高いと考える。時期は高井東式期に比定しておきたい。

29区34号配石

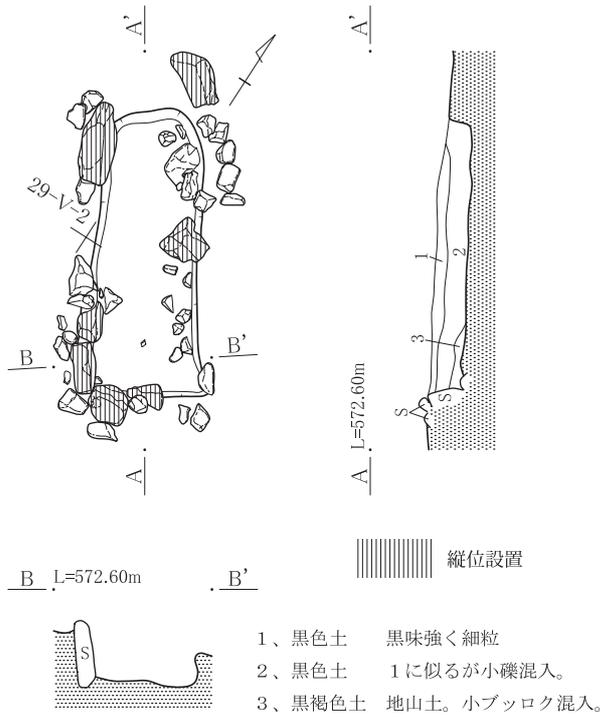
調査年度 平成10年度

位置 V-2グリッド

経過 31号配石の北西側で確認された。周囲には大きな丸石や大型の扁平礫が数多く点在する。礫は北東側の一部を欠落するが、その他は比較的良く残っている。配石内の北西に、他の礫より僅かに高い柱状の礫があり、調査時には配石内の立石と見られていた。なお、南半部の掘り方調査で、西壁の平積み礫の裏側から小さな扁平礫4石が確認された。

重複 南西隅を31号配石と接し、北東隅を35号配石と接するが、切り合い関係は不明である。

29区32号配石

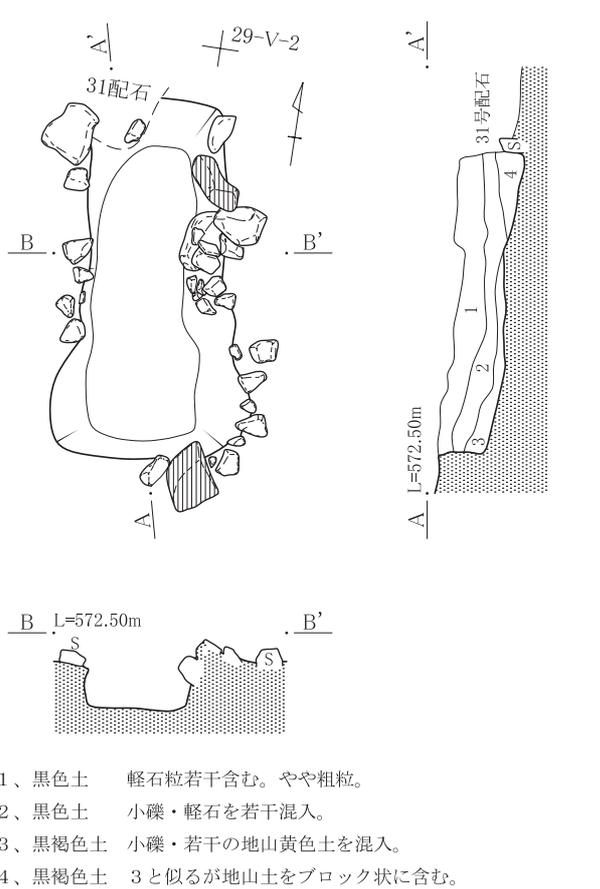


29区32号配石（東から）埋没土の調査



29区32号配石（東から）

29区33号配石



29区33号配石（東から）埋没土の調査

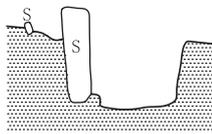
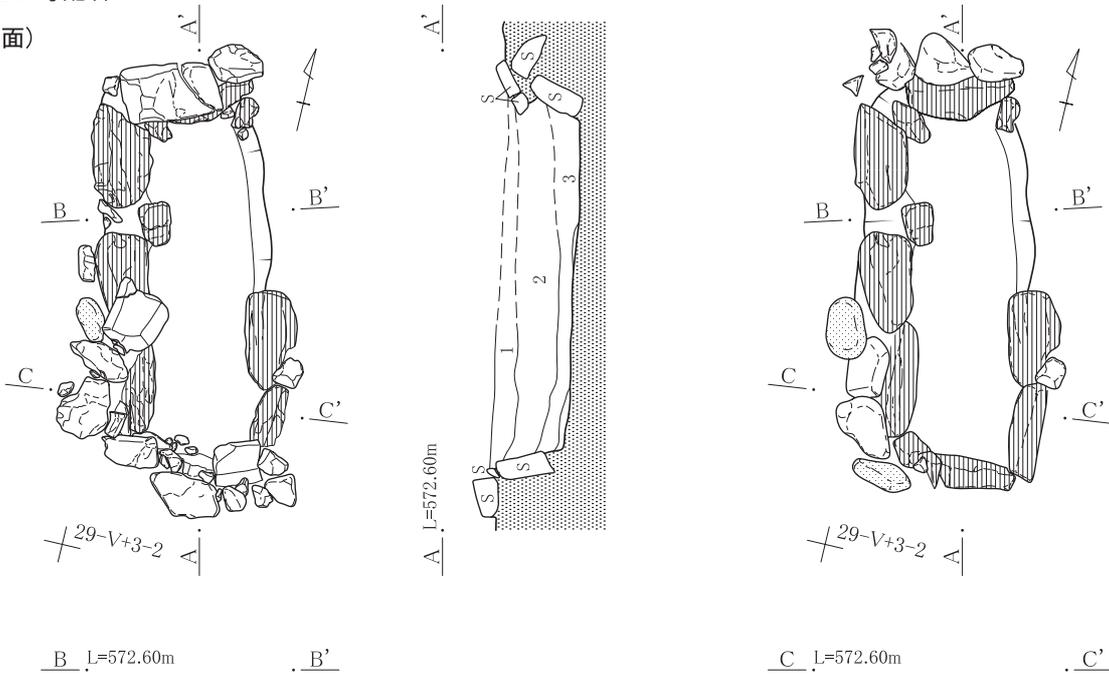


29区33号配石（東から）

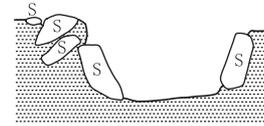
0 1:40 2m

29区34号配石

(上面)



- 1、暗褐色土 小礫含む。
- 2、暗褐色土 小礫・軽石多く含む粗粒土。
- 3、暗褐色土 小砂・小礫多く含む。

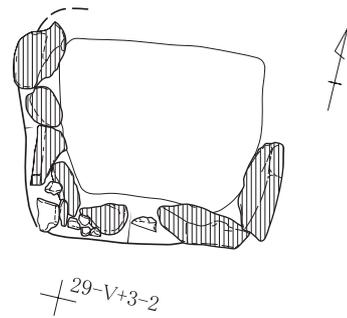


29区34号配石 (北東から)



29区34号配石 (東から) 手前東側に大きな丸石

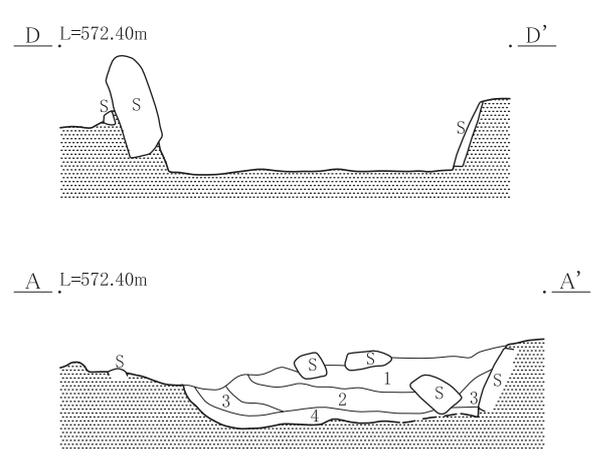
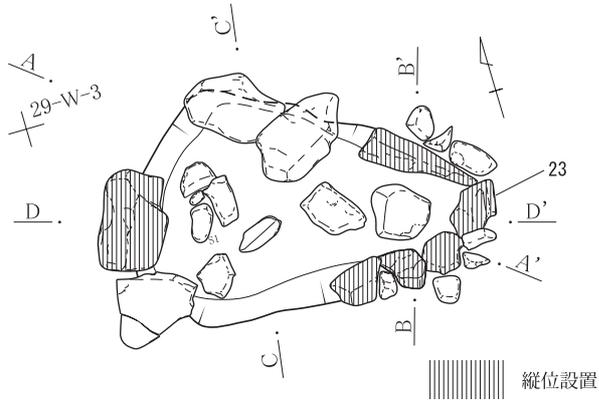
川原石
縦位設置



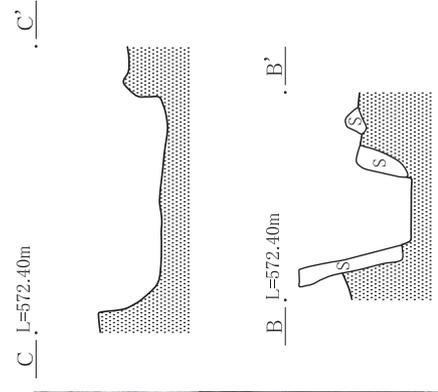
0 1 : 40 2m

第193図 29区34号配石

29区35号配石



- 1、黒色土 若干の軽石混入。
- 2、黒色土 1より軽石の混入多い。
- 3、黒褐色土 小礫・地山黄色土粒若干混入。
- 4、黒褐色土 地山黄色土と小礫を多く混入。



29区35号配石(北から) 確認状況



29区35号配石(北から)



29区35号配石(西から)



29区35号配石(東から) 左手は34号配石

第194図 29区35号配石

第3章 発見された遺構と遺物

形状 南北方向に長軸をとる長方形を呈する。平積み礫は、大きな扁平礫の長辺を横にして、短軸となる南北壁に1石ずつ、長軸となる東西壁に3～4石を配置しているが、東壁の北半部は残っていない。扁平礫の間には柱状礫を銕んでその間を調整しているが、西壁の柱状礫があたかも立石のように見えるのは、大型扁平礫2石は外側にずれて開いているためであろう。平積み礫の上のの小口積み礫は、北辺と南辺周囲で1～2段が確認できた。

規模は、平積み礫の内側で長軸170cm、短軸45～50cm、深さは小口積み礫の上から40cmほどである。

下部遺構 掘り方全体の把握はされていないが、南半部で西壁の平積み礫の裏側から、小振りな扁平礫数石が貼り付けたような状態で確認されている。

石材等 小口積み礫に川原石がいくつか使われているが、その他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N14度W

遺物 土器は堀之内1式から高井東式の破片が206点出土しており、主な土器は加曾利B2式から高井東式期である。石器は石鏃3点、石錐1点、使用痕ある剥片1点、台石1点の他に、剥片23点、碎片9点、及び土製円盤1点が出土している。

所見 南北方向に長軸をとる長方形の配石墓と判断する。時期は高井東式期に比定されよう。

29区35号配石

調査年度 平成11年度

位置 V-2グリッド

経過 34号配石の北側で確認された。確認当初は、東側の平積み礫の中央に一抱えもある大きな丸石がのっていたが、その段階の記録は残念ながら残っていない。西半部はかなり乱されいて、厚手の礫が散在しており、その下から東側の平積み礫を起点に東西に長軸をとる掘り方が確認できた。

重複 南側に34号配石が接する。

形状 東西方向に長軸をとる舟形状の形態をとるものと思われる。東側に薄手の扁平礫を使用した平

積み礫5石がV字状に配され、西側に厚手の扁平礫1石が残る。東側の礫は薄手で長軸を立てて使用しているのに対し、西側の礫は厚手で横位に使用しており、しかも礫の下端の位置が高いことから、平積み礫ではないだろう。西半部には似たような扁平礫が散布する。長軸の規模ははっきりしないが、短軸は30～40cm、深さは平積み礫の上面から50cmほどであろう。

下部遺構 南北方向に長軸をとる舟形状の掘り方が確認された。この掘り方は西側の立てた礫を西壁と想定して調査しており、西半部の形状は判然としないが、長軸方向の長さは大凡150cm前後であったと思われる。

石材等 いずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N75度W

遺物 土器は堀之内2式から加曾利B3式の破片が34点出土しており、主な土器は加曾利B2～3式である。石器は石皿片1点、台石1点、剥片5点、碎片1点が出土している。

所見 西半部の形態は判然としないが、南北方向に長軸をとる舟形状の配石墓と判断する。時期は加曾利B2式期に比定されよう。

29区36号配石

調査年度 平成11年度

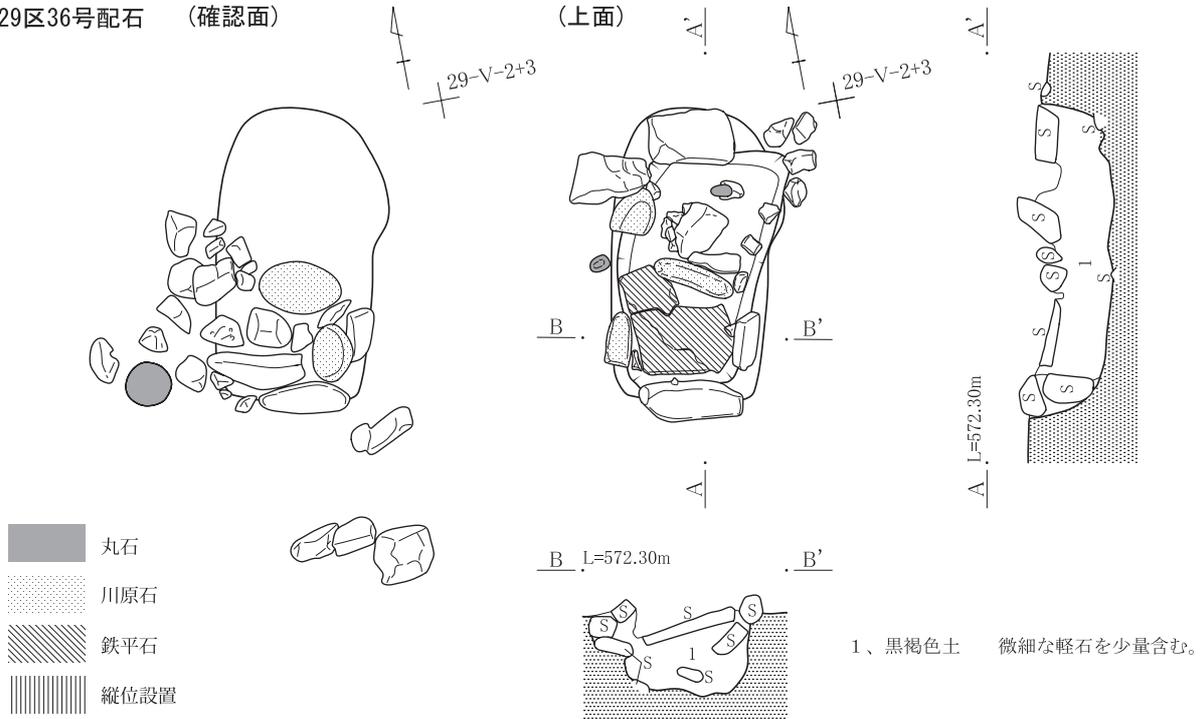
位置 V-2グリッド

経過 35号配石の東側で確認された。確認当初は、細長い扁平礫や丸石・川原石が方形状に集積されていた(確認面の図)。上面から礫をはずすと、方形に組んだ扁平礫のなかに方形の鉄平石が敷いたように置いてあり(上面の図)、さらに取り除くと、南北方向に長軸をとる長方形の掘り方が確認できた。

重複 重複する遺構はないが、周囲を取り巻くように配石墓が近接する。

形状 南北方向に長軸をとる長方形を呈する。平積み礫は南壁以外はほとんど失っており、長軸となる東西壁にずれた状態でいくつかの礫が残存してい

29区36号配石 (確認面)



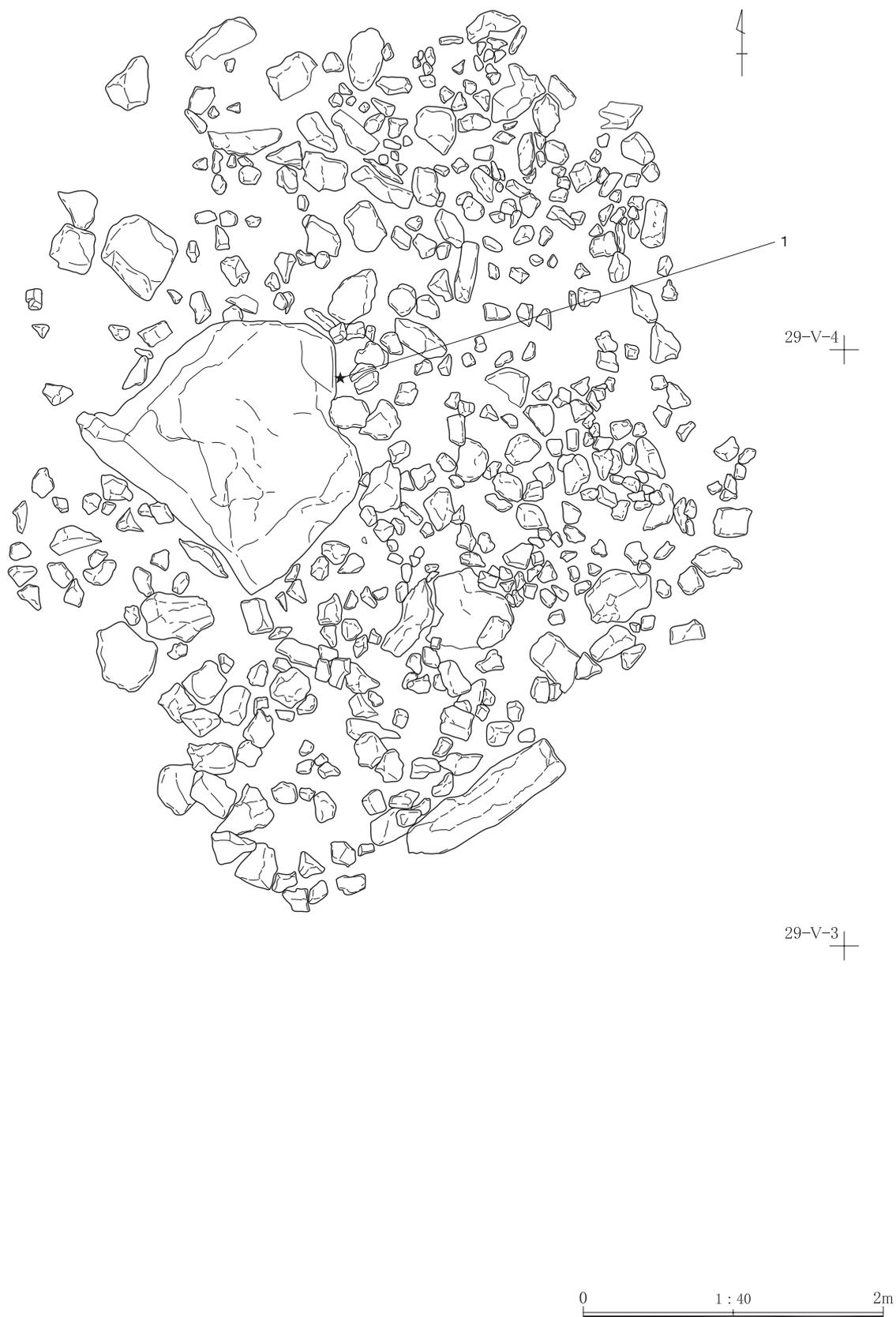
29区36号配石(西から) 上面の蓋石



29区36号配石(南から) 全景確認

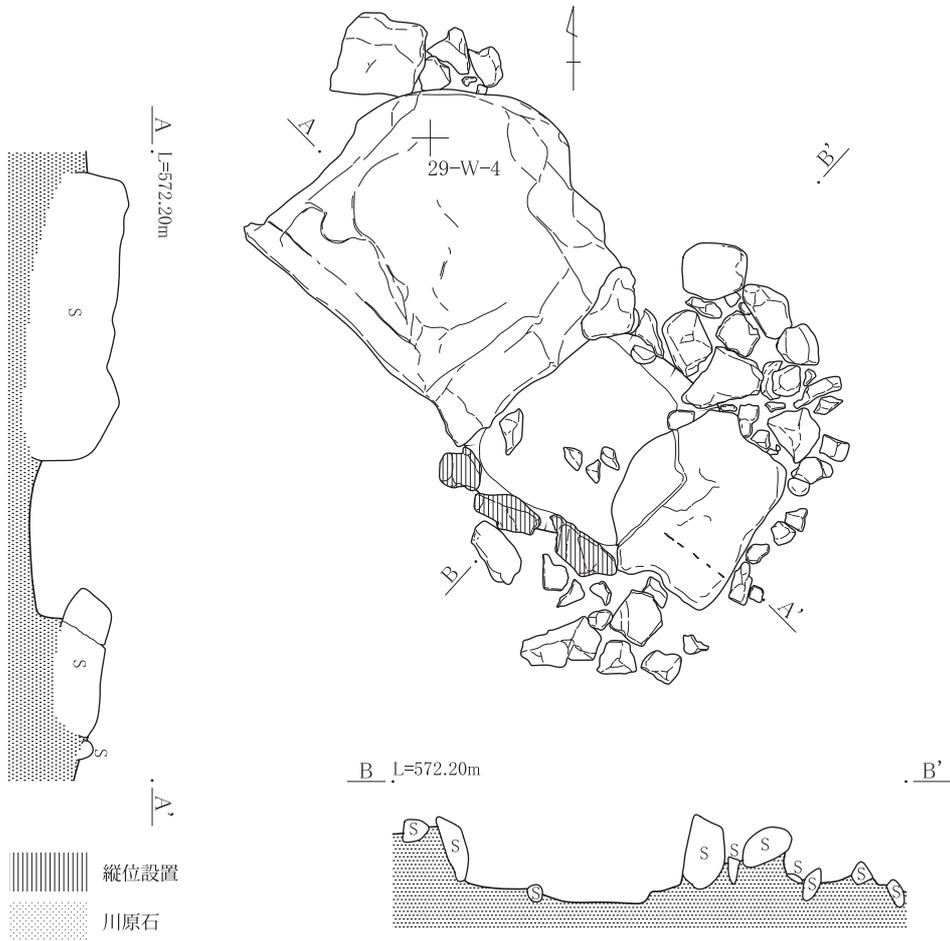
第195図 29区36号配石

29区37号配石

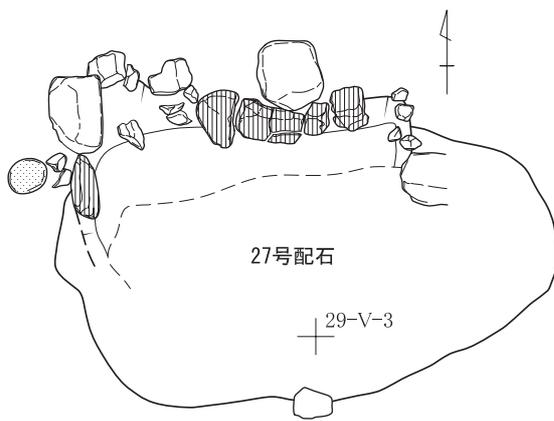


第196図 29区37号配石

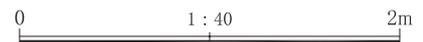
29区38号配石



29区39号配石



29区39号配石(南東から)北側縁の状態



第197図 29区38号・39号配石

第3章 発見された遺構と遺物

た。その上にある小口積み礫も、南壁の1石以外は現況を留めない。掘り方から想定される規模は、平積み礫の内側で長軸120cm、幅40cm、深さ40cmほどであったと考えられる。

下部遺構 組んだ礫はほとんど残っていないが、掘り方は明瞭な状態で確認できた。規模は長軸156cm、短軸80cm、深さ42cmほどである。

石材等 川原石が数多く使われ、鉄平石も1石あったが、その他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N11度E

遺物 土器は堀之内2式から加曾利B2式の破片が35点出土しており、石器は加工痕ある剥片が1点、磨石が1点、碎片が1点出土している。

所見 南北方向に長軸をとる長方形の配石墓と判断する。時期は加曾利B2式期に比定されよう。

29区37号配石

調査年度 平成11年度

位置 V-3・4グリッド

経過 30号配石の西側に1辺1.5mの巨礫があり、その周囲にも5m四方の範囲に礫が集積していることから、配石として調査を実施した。

重複 巨礫の南東の一群を38号配石、巨礫の北東の一群を41号配石とした。

形状 巨礫を中心に5m四方ほどの範囲に礫が集積されているが、配置等に規則性は確認できない。なお、巨礫は地山中の礫の一部が見えているに過ぎないが、その北東際から耳飾り破片が1点出土した。

下部遺構 確認されていない。

石材等 礫はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 巨礫の北東際から出土した耳飾り片1点を除いて、特に本配石に伴う遺物はない。

所見 配石とは認めがたいが、配石墓群を取り巻くスペースとして活用された可能性は高く、また耳飾り片が出土していることから、巨礫が目印として

活用された可能性も考えられる。

29区38号配石

調査年度 平成11年度

位置 V-3グリッド

経過 37号配石の調査中に確認された。

形状 1辺1.5mの巨礫の北東に長さ1mほどの大型礫があり、その間に浅い落ち込みが確認された。規模は長軸100cm、短軸60~80cm、深さ30cmほどで、その南辺に厚手の扁平礫3石を立てて並べたような状態で確認された。

石材等 礫はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 -

遺物 確認されていない。

所見 配石とは認めがたい。

29区39号配石

調査年度 平成11年度

位置 V-3グリッド

経過 27号配石の掘り方調査で確認された。

重複 27号配石に切られる。

形状 東西に長軸をとる長形状を呈すると思われる。平積み礫は、北壁の5石と西壁の1石が残っており、かろうじて東壁の掘り方が確認できた。想定される規模は、平積み礫の内側で長軸135cm、深さ30cmほどである。

下部遺構 掘り方の一部が確認された。

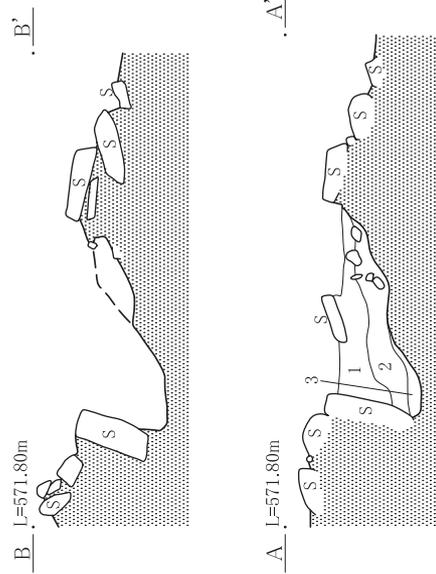
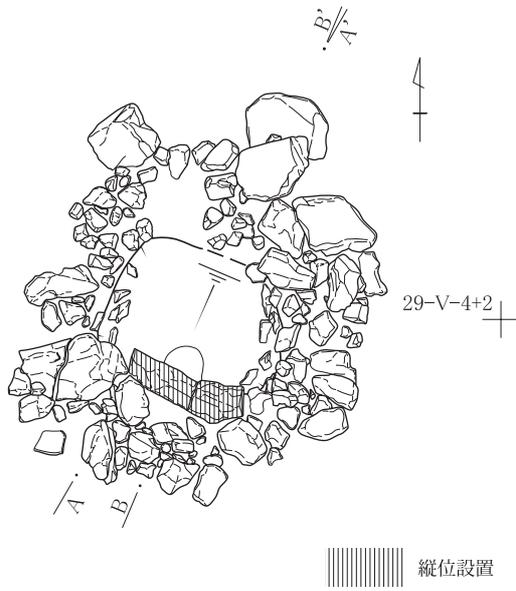
石材等 礫はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫で、小振りな礫が使われている。

方位 N85度E

遺物 土器は加曾利B2式から高井東式の破片が29点が出土しており、主な土器は高井東式である。石器は加工痕ある剥片1点、磨石1点、剥片4点が出土している。

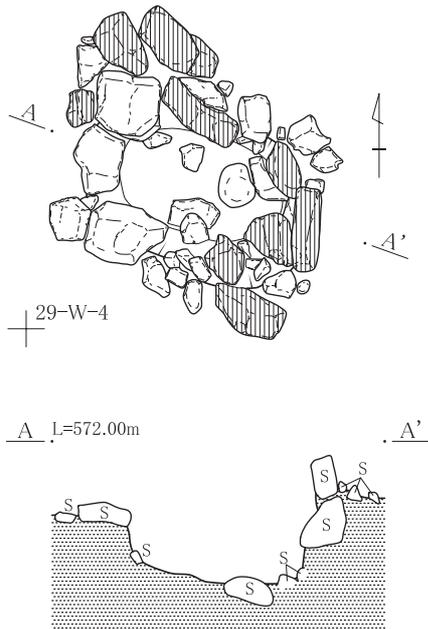
所見 東西方向に長軸をとる長形状の配石墓と判断する。時期は高井東式期に比定されよう。

29区40号配石



- 1、黒色土 若干の軽石を含む。
- 2、黒色土 1と近似するが細粒でややしまりあり。
- 3、黒色土 地山土を混入し、やや粘性あり。

29区41号配石



29区40号配石 (北から)

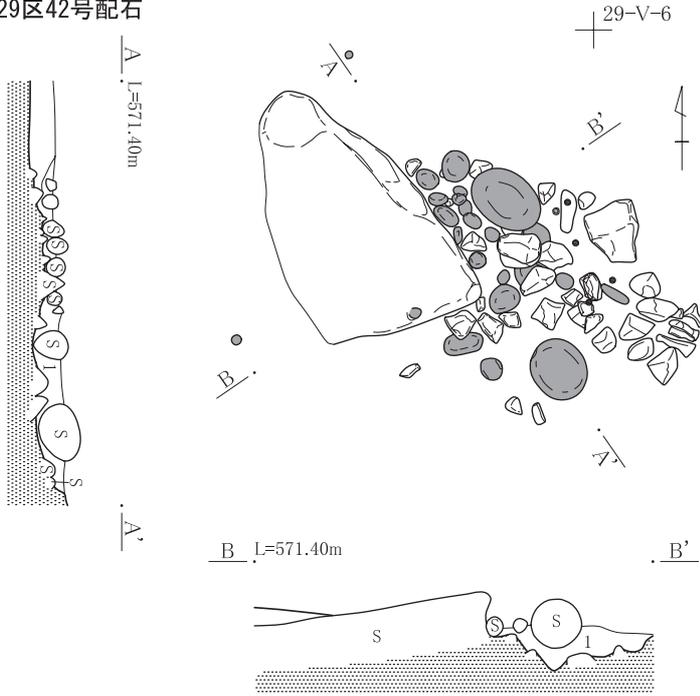


29区41号配石 (西から)

0 1:40 2m

第198図 29区40号・41号配石

29区42号配石

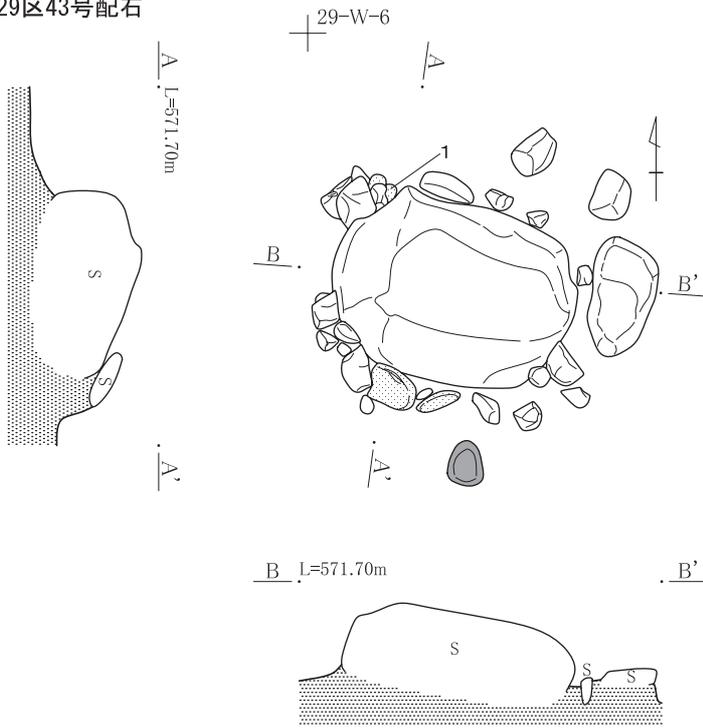


29区42号配石 (北東から) 確認状況



29区42号配石 (北東から) 集積された丸石

29区43号配石



29区43号配石 (東から)

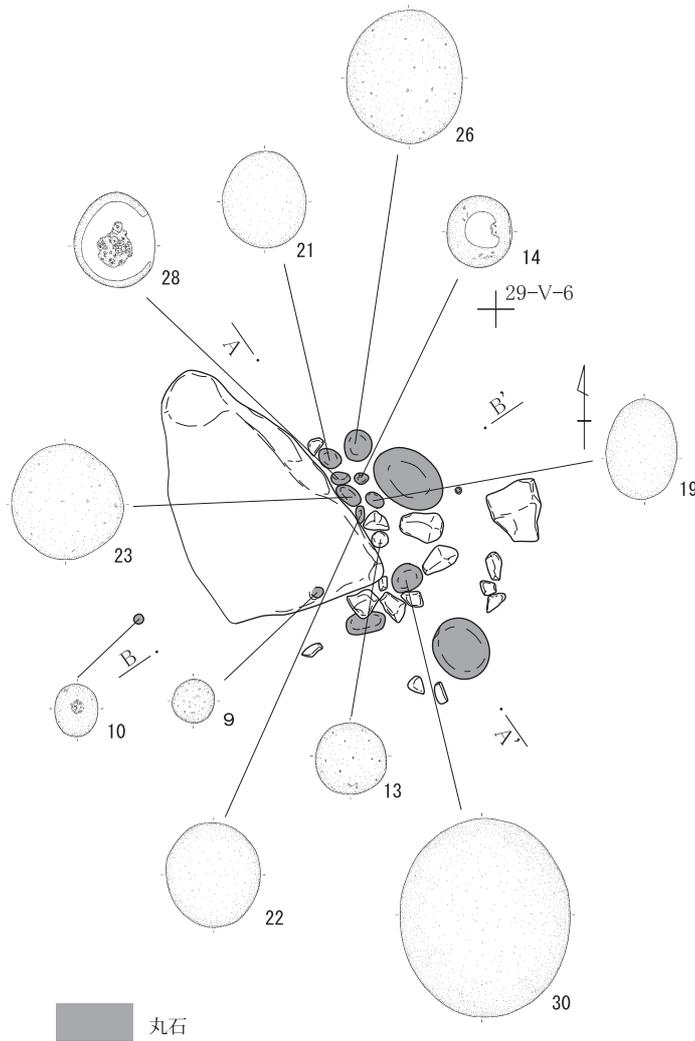
■ 丸石
 ■ 川原石

0 1:40 2m

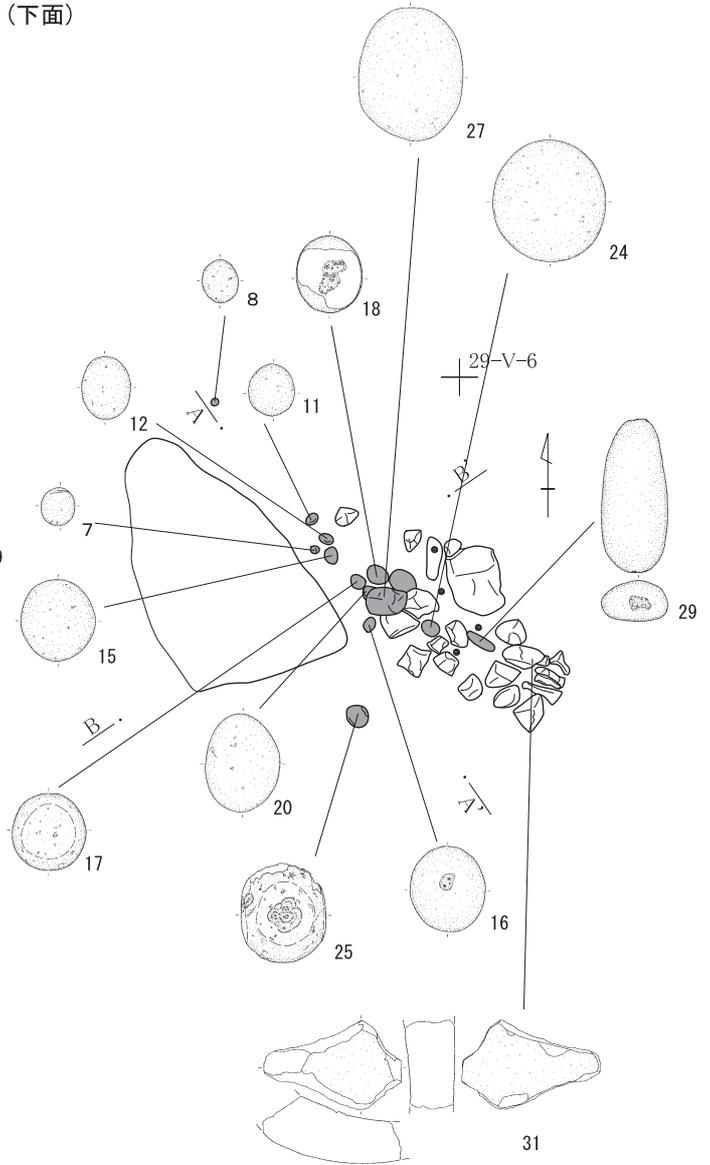
第199図 29区42号・43号配石

29区42号配石

(上面)



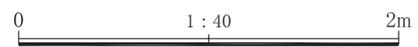
(下面)



29区42号配石 (北東から)



29区42号配石 (北から) 丸石下の状況



第200図 29区42号配石

29区40号配石

調査年度 平成10年度

位置 V-4グリッド

経過 30号配石内の西側で確認された。礫が密集するなかで長さ60cmの大きな扁平礫が測縁を立てた状態で確認され、その北側に80cm四方の礫のない空白があることから、配石として調査した。

形状 長さ60cm、幅36cmの大型扁平礫は、長軸を東西方向にして立ててあり、北側の空白の周囲には小礫が密集している。その周囲には20~40cm大の礫が点在するが、配置等に規則性は認められない。

下部遺構 大型扁平礫の北側の空白部を掘り下げると、礫の北側際が最も深い不定型な落ち込みになっていた。

石材等 大型扁平礫も含めて、礫はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩垂角礫である。

方位 ー

遺物 土器は後期中葉頃の破片が13点出土しており、石器は剥片2点が出土した。

所見 大型の地山礫が抜けた穴ではないかと思われる。地山の大型礫の周囲に小礫が集積することが多い。

29区41号配石

調査年度 平成10年度

位置 V-4グリッド

経過 37号配石内の巨礫の北東で確認された。厚手の扁平礫が数多く集中することから、配石として調査した。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形状に礫が分布し、東側から北側にかけて立てた状態のものが多い。礫は長さ30~40cmの一定の大きさのものが集積しているが、平積み礫とするには規則性が乏しい。

下部遺構 礫の取り巻く内部に空白があり、楕円形状の掘り方が確認された。規模は長軸118cm、短軸80cm、深さは最深部で63cmほどで、底面はややでこぼこしている。

石材等 礫はいずれも地山に含まれる礫と同様の粗

粒輝石安山岩垂角礫である。

方位 ー

遺物 確認されていない。

所見 配石墓の可能性もあるが、形状に規格性が感じられない。

29区42号配石

調査年度 平成10年度

位置 V-5グリッド

経過 30号配石の北側で確認された。

重複 西側に43号配石が隣接する。

形状 長さ1.5mの三角形の大きな地山礫の南東側に、大小様々な丸石が多量に集積されていた。大きな地山礫は上面が平坦で、北西側が低く沈み、南東側が高く浮いており、この浮いた側をあたかも岩陰に見立てたように、丸石を配置している。まず礫際の最奥部に小さな丸石を集積し、その外側に中位の丸石を並べ、さらに外側に一抱えもあるような大きな丸石を配置している。

石材等 丸石と石器以外は全て、地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩垂角礫である。

遺物 土器は中期~後期の破片が26点出土しており、石器は加工痕ある剥片1点、敲石2点、磨石類6点、石皿片1点、剥片3点の他に、丸石16点が出土している。

なお、丸石は4cmほどのものから30cmを超えるものまであり、形状も球形に近いものから、やや扁平なものまで様々である。

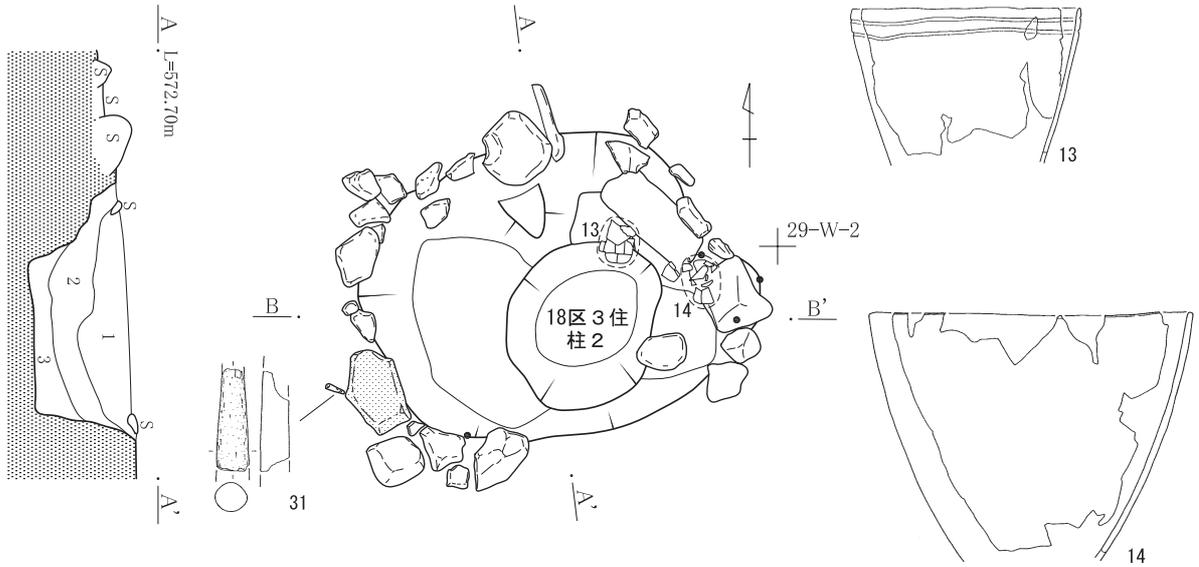
所見 配石墓群で使用する丸石を備蓄していた場所、あるいは配石墓群での儀礼に際して丸石を手向けた場所、などが想定される。土器の伴出が少なく、時期の特定は困難だが、遺構の性格等を考慮すれば後期後半の配石墓群の形成期からその後の祭祀行為の時期までの時間幅を想定しておきたい。

29区43号配石

調査年度 平成10年度

位置 V-5グリッド

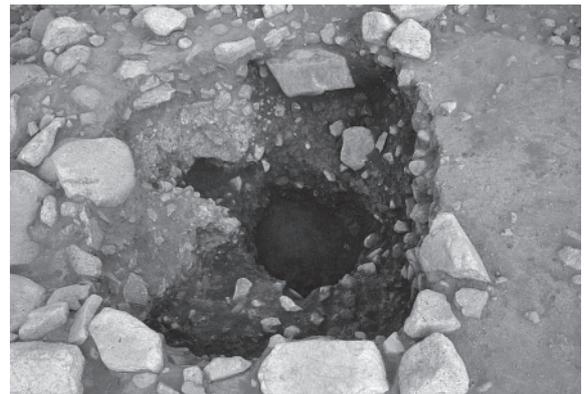
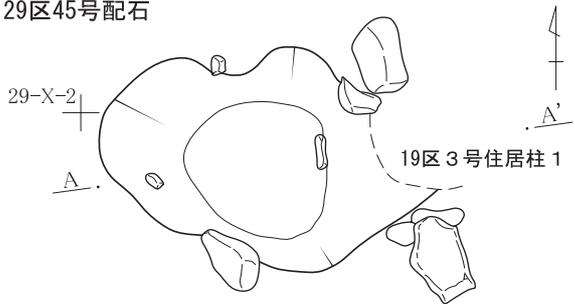
29区44号配石



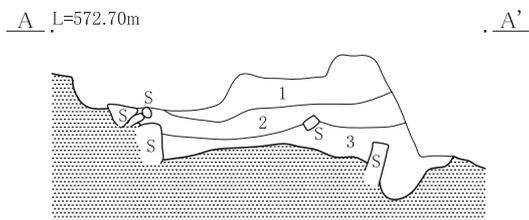
川原石

- 1、黒褐色土 拳大の礫多く含む。
- 2、黒褐色土 礫の混入少ない。
- 3、黒褐色土 地山黄色土粒を混入。

29区45号配石



29区44号配石(西から) 底面の柱穴は18区3号住居の柱2

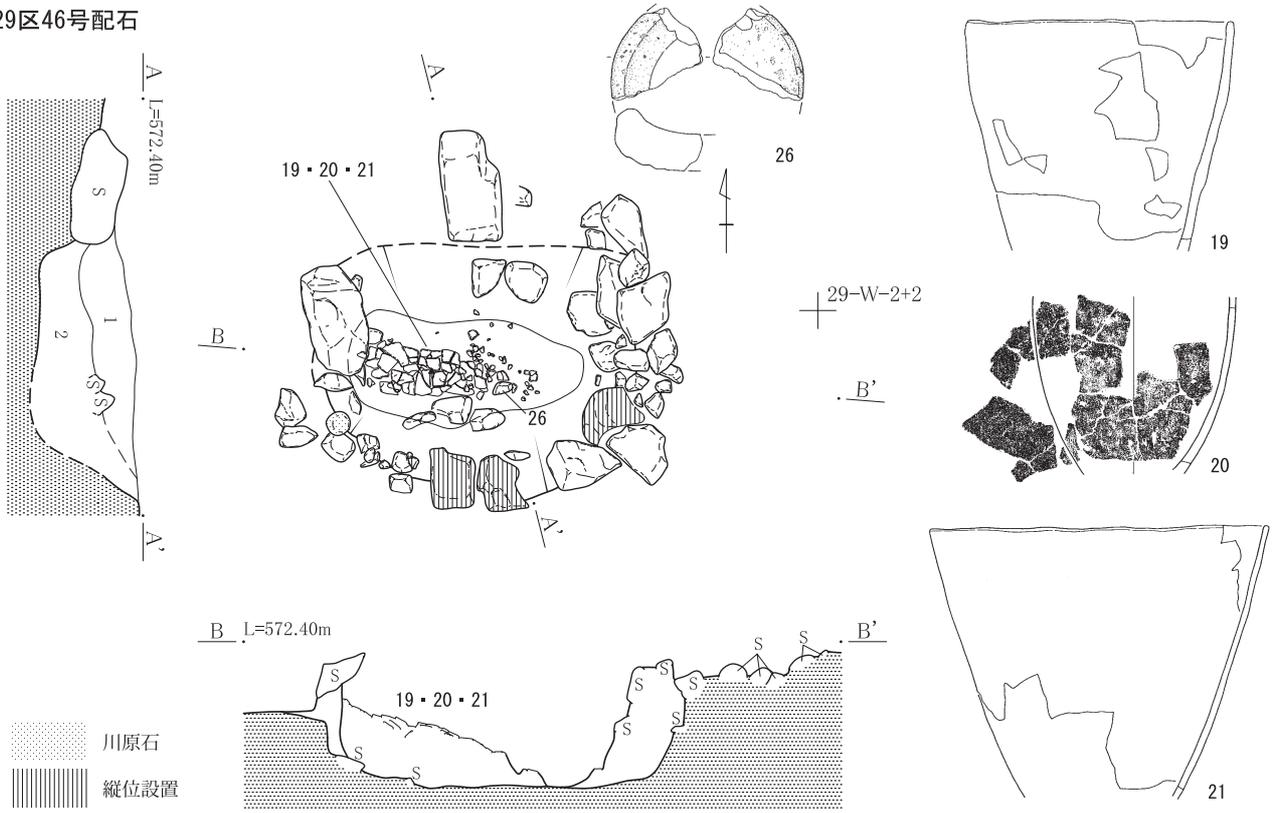


- 1、黒色土 小礫・砂粒含む。
- 2、黒色土 礫を多く含む。
- 3、黒色土 礫・黄色軽石を混入。

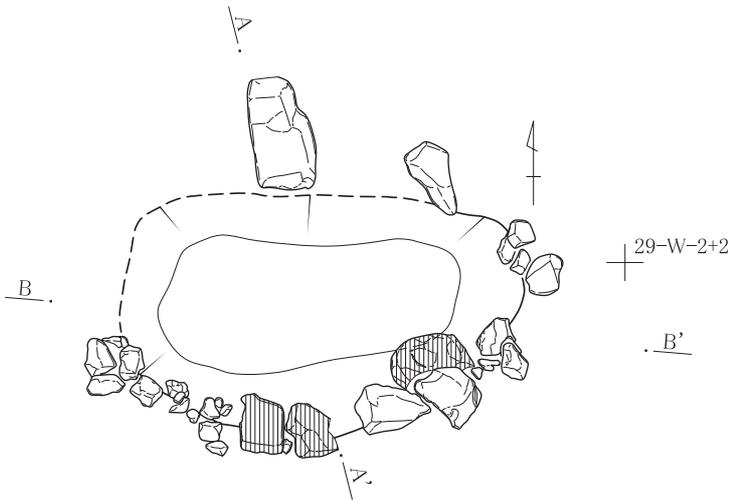
0 1:40 2m

第201図 29区44号・45号配石

29区46号配石



- 1、黒褐色土 若干の小礫混入。
- 2、黒褐色土 やや大きめの礫と地山の黄褐色土を含む。



29区46号配石(東から) 深鉢出土状況

0 1:40 2m

第202図 29区46号配石

経過 42号配石の西側で確認された。

重複 重複する遺構はないが、東側50cmに42号配石が接近し、西側1mに29区1号掘立柱建物が近接する。

形状 長さ120cmの楕円形をした大きな地山石の周囲に、扁平礫や川原石・丸石が取り巻くように置かれていた。この地山礫は42号と同様に上面に平坦面があり、42号とは逆に平坦面は北西が高く、南西が低い状態で地山中に座っている。川原石2石と丸石1石は、地山礫の南側に置かれている。

石材等 川原石・丸石以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 地山礫の端に置かれていた川原石の一つが多孔石であり、その他の遺物は確認されていない。

所見 配石墓群の周囲にある上面が平坦な巨礫として、42号配石と共に何らかの行為で活用された可能性が考えられるが、具体的な内容を示す証拠は得られていない。

29区44号配石

調査年度 平成10年度

位置 W-1グリッド

経過 配石墓群の西側で確認された。確認時は周囲に大型の川原石や扁平礫が多量に分布しており、配石墓群の一面と区別がつかない状態であった。そのなかに、楕円形状の大きな土坑が確認され、その周囲に30~40cm大の扁平礫が数個配置されたような状態であることから、配石とされた。

重複 土坑の中央にある深い穴が、その後の調査で19区3号住居の柱穴（柱2）であることが判明した。本配石は19区3号住居（堀之内2式期）を切る。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形の大型土坑で、その周囲に扁平礫数個が置かれた状態で確認された。土坑の規模は東西175cm、南北150cm、深さ40~50cmほどであるが、写真も含めてよく観察すると、土坑は中央の北側にある高い部分で東西に分けられ、さらに南北に2つずつの掘り込みが認められる。つまり、この土坑は東西の2つずつの柱穴が集合し

たもので、その中央に19区3号住居の柱2が重複していることになる。

石材等 周囲の礫は、川原石1石以外は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は称名寺式から高井東式までの破片が総数203点出土しており、主な土器は高井東式である。石器は加工痕ある剥片1点、磨石2点、石棒1点、石核1点、剥片16点、碎片5点があり、他に土製円盤が1点が出土している。このうち、石棒（31）は後期的な細身タイプの欠損品で、西側縁の円礫に接して出土している。

所見 本遺構は、ほぼ同一場所に建て替えられた柱穴の集合と考えられる。中央に重複する19区3号住居は堀之内2式期に比定されるが、3号住居の範囲内には加曽利B式~高井東式の土器が多量に散布しており、それ以後の安行式段階の土器も少量出土している。本遺構でも高井東式が多く出土しており、共通する部分を持っている。

以上のことから、本遺構は19区3号住居の建て替えに伴う出入り口部柱穴の可能性と、加曽利B式期に配石墓群を造営する段階かそれ以降に19区3号住居跡地が削平され、墓群周縁での儀礼等に伴って造られた施設の可能性が考えられる。

29区45号配石

調査年度 平成10年度

位置 W-1グリッド

経過 44号配石の西側で確認された。

重複 東側を44号配石と19区3号住居柱1と重複、南側を29区19号土坑と重複、西側を3号住居柱11とそれぞれ重複するが、切り合い関係は不明である。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形状の土坑の周囲に、長さ30~40cm大の扁平礫が数個確認された。土坑の規模は東西170cm前後、南北90~115cm、深さ40~50cmほどで、平面形はかなり歪んでいる。

石材等 全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は中期から後期の破片が192点出土し

第3章 発見された遺構と遺物

ており、主な土器は高井東式である。石器は石鏃2点、石鏃未製品2点、使用痕ある剥片1点、石核1点、剥片27点、碎片5点が出土している。

所見 遺構の状況は44号配石と共通する部分が多く、44号配石と一連の遺構である可能性が高い。

29区46号配石

調査年度 平成10年度

位置 W-2グリッド

経過 44号・45号配石の北側で確認された。40～60cm大の大型礫が集積したなかに大きな土坑状の落ち込みがあり、掘り下げると粗製深鉢が横転した状態で出土した。

重複 重複する遺構はない。

形状 東西方向に長軸をとる楕円形状を呈する。掘り方の南辺と東辺に30cm大の厚手の扁平礫があり、北辺と西辺には長さ60cm大の礫が1石ずつ残る。南辺の礫は掘り方の傾斜に沿って斜めに傾いているが、その他の礫は平坦に置いた状態である。掘り方内にも小振りな扁平礫が数個落ち込んでおり、その下位から粗製深鉢3個体（19～21）が折り重なって横転した状態で確認された。

下部遺構 東西に長軸をとる長方形の掘り方が確認された。規模は長軸200cm、短軸122cm、深さは55cmほどで、底面はほぼ平坦である。

石材等 若干の川原石と、地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N87度W

遺物 土器は堀之内1式から高井東式の破片が177点出土しており、主な土器は高井東式である。石器は石鏃2点、加工痕ある剥片3点、石皿辺1点、台石1点、多孔石1点、剥片37点、碎片23点の他に、小玉1点と軽石製品1点が出土している。

所見 掘り方の規模・形状及び長軸のとり方は配石墓と共通しているが、配石墓に特有の石組みが1石として残っていないことから、土坑墓の可能性も考えられる。時期は高井東式期に比定されよう。

29区47号配石

調査年度 平成9年度

位置 X-1グリッド

経過 45号配石の西側で確認された。周囲に大型礫は少ないが、10～15cmほどに打ち欠いた鉄平石が集積した地点があり、精査すると方形に並ぶことから、配石として調査した。

重複 19区3号住居と一部が重なり、本遺構が住居を切る。

形状 1辺80cmほどの隅丸方形に、10～15cmほどに打ち欠いた鉄平石を斜めに建てて囲っている。鉄平石は南辺と東辺に良く残っているが、北辺と西辺には少なく、その部分には他の小礫を集積している。礫で囲った内部は炉のように落ち込んでいるが、焼土等は確認されていない。

石材等 鉄平石は粗粒輝石安山岩である。

方位 -

遺物 土器は堀之内1式から安行式までの破片が34点出土しており、主な土器は高井東式である。石器は削器1点、多孔石1点、が出土している。

所見 内部に焼土は認められないが、形状から判断すると住居の炉の可能性もあると思われる。使われた礫は異なるが、平面形状と規模は高井東式の30区36号住居の炉と近似している。時期は高井東式期に比定されよう。

29区48号配石

調査年度 平成10年度

位置 X-3グリッド

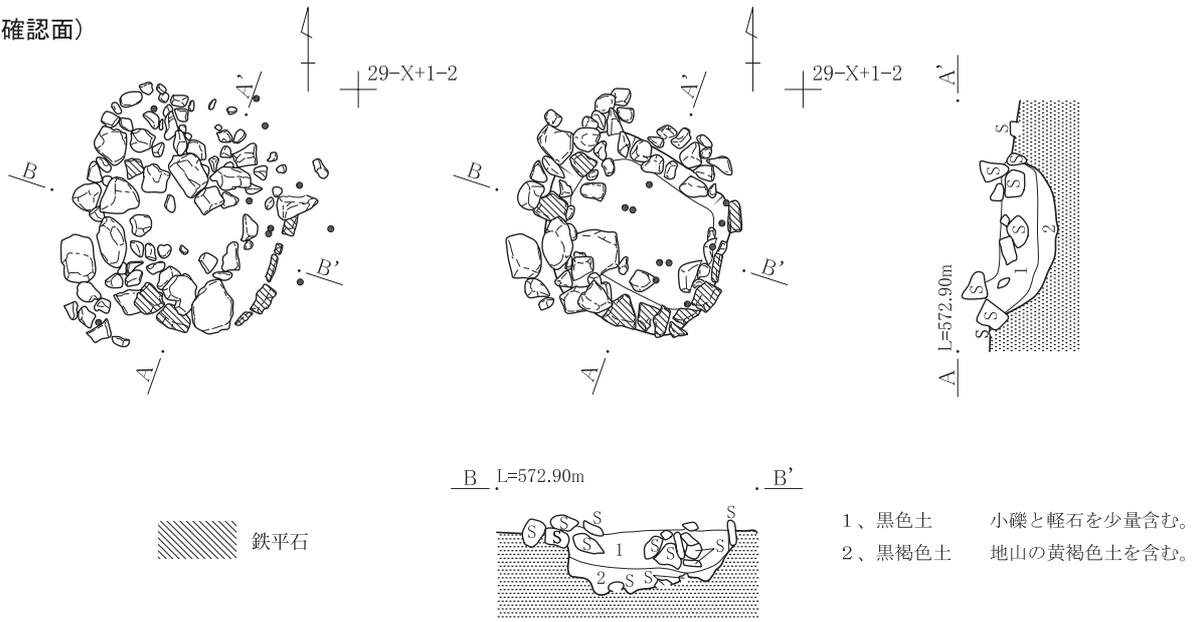
経過 47号配石の北側5mで確認された。楕円形状に並んだ礫の内側に小礫を敷き詰めたように全面を覆った状態で確認され、小礫の下から多量の土器破片が出土した。

重複 52号配石が西側に近接する。

形状 長軸2m、短軸1mほどの楕円形状に10～50cm大の礫が縁取り、その中を小礫が全面を覆っていた。縁に並べた礫は15～20cm大のものが主体で、内部に向かって落ち込むように傾斜したものが多い。

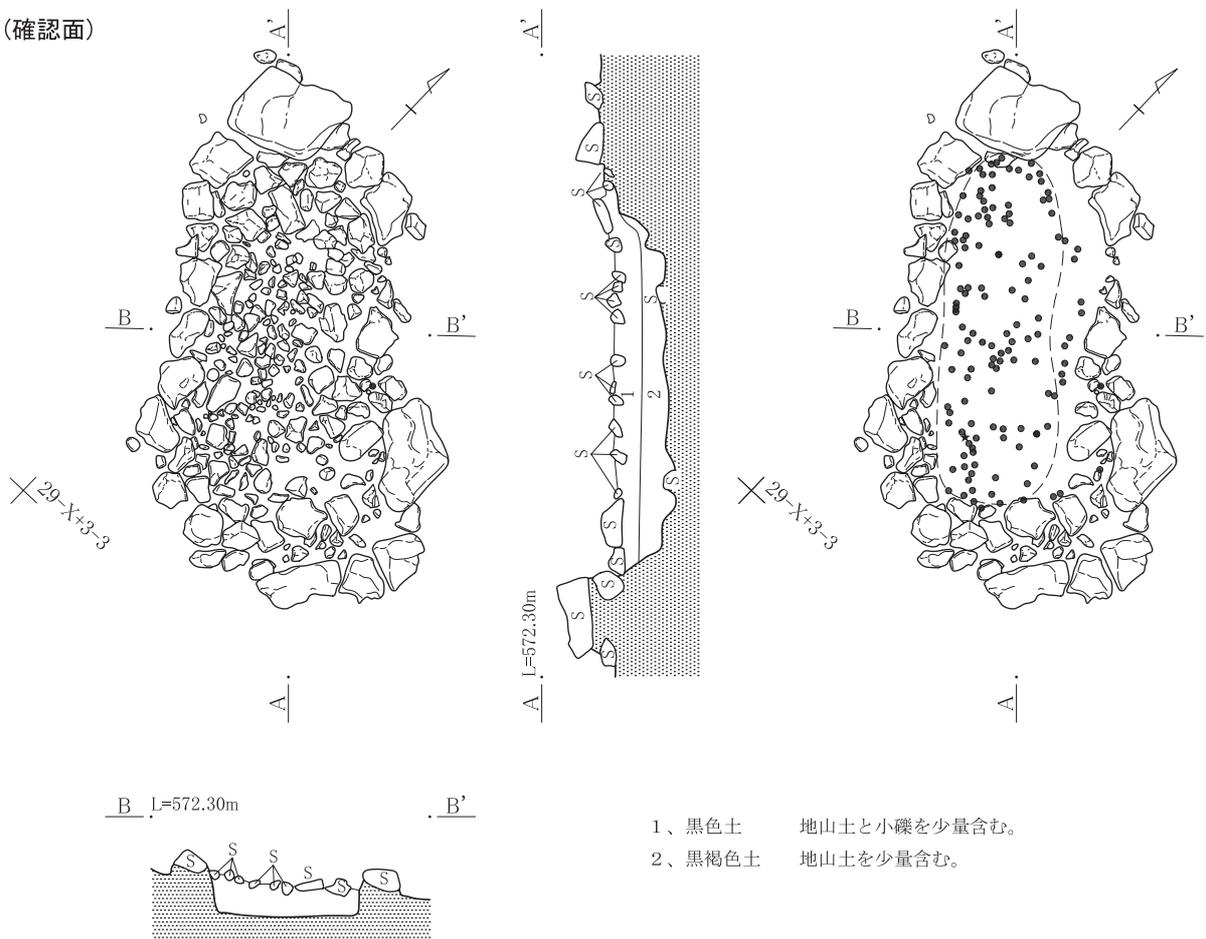
29区47号配石

(確認面)



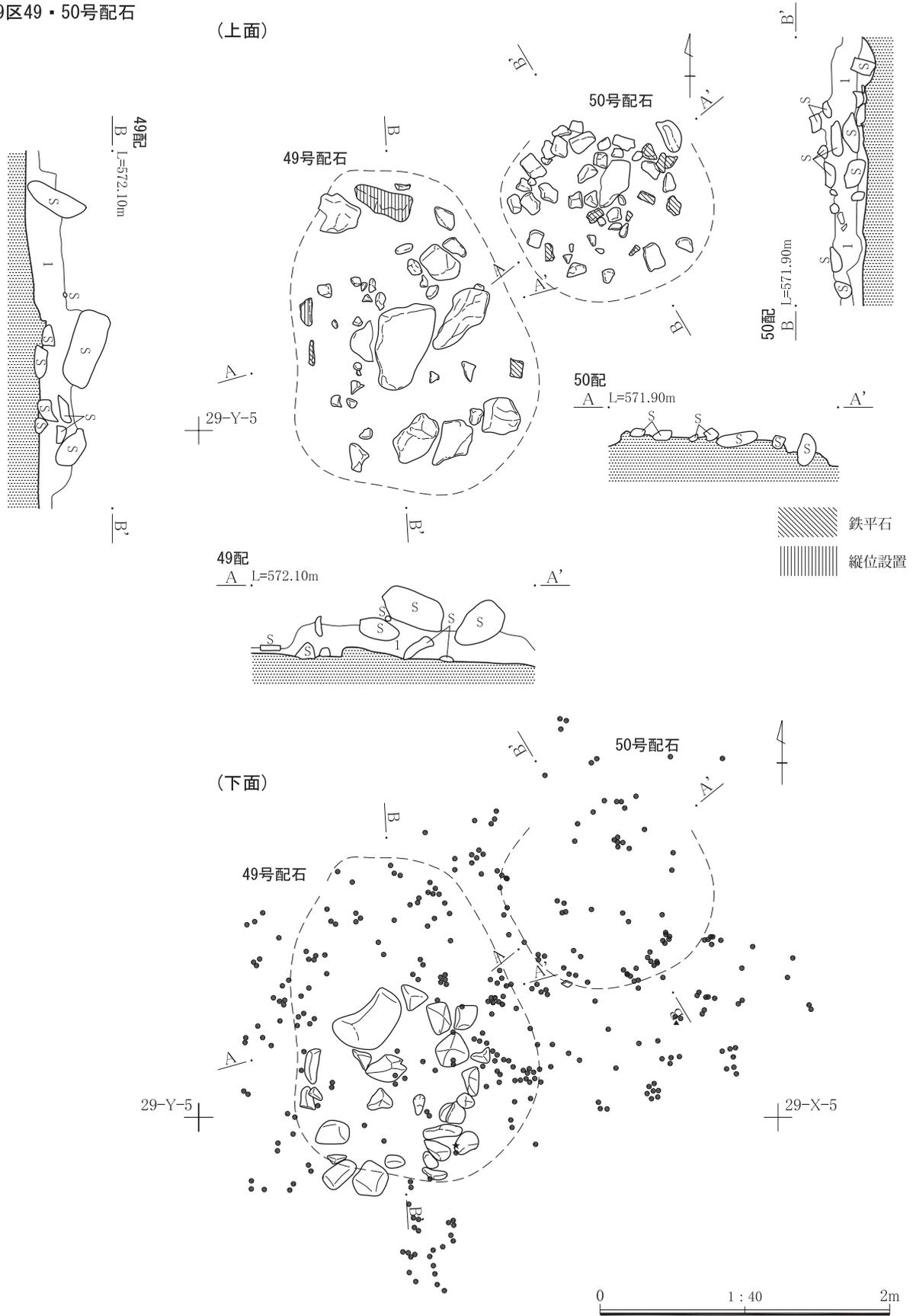
29区48号配石

(確認面)



第203図 29区47号・48号配石

29区49・50号配石



第204図 29区49号・50号配石

下部遺構 縁に並べた礫の内側に、楕円形の土坑が確認された。規模は長軸180cm、短軸74cm、深さは縁の礫上面から50cmほどである。

石材等 礫は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N43度W

遺物 土器は総数125点が出土しており、大半が高井東式である。石器は石鏃1点、石核1点、剥片21点、碎片1点があり、他に耳飾り小片が1点出土している。

所見 土坑の形態と周囲に礫を配していることから、土坑墓の可能性が高いと判断する。時期は高井東式期に比定されよう。

29区49号・50号配石

調査年度 平成10・11年度

位置 X-5グリッド

経過 大小様々な礫が多量に分布するなかに、大型の扁平礫を中心に礫が集まった地点があり、鉄平石も含まれていることから、配石として調査した。

重複 北東に29区1号掘立柱建物が近接する。

形状 49号は長さ60cmの扁平礫を中心に長軸2m、短軸1.5mほどの範囲に大型の礫が集まり、50号は長さ35cmの礫を中心に直径1.2mほどの範囲に小振りな礫が集積している。両者は3m四方の範囲に接近し、礫の下層には多量の遺物が分布している。

下部遺構 確認されていない。

石材等 鉄平石を除いて、礫は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 両配石を含めて、土器は中期から晩期初頭の破片が総数234点が出土しており、石器は石鏃2点、加工痕ある剥片3点、磨製石斧1点、楔形石器1点、石核3点、剥片40点、碎片4点があり、その他に耳飾り1点、土製円盤4点が出土している。

所見 礫の下層に遺物が多量に集積しており、土器は大半が高井東式であることから、同期の住居の可能性が高いと判断する。配石としたものは、覆土

中に廃棄されたものであろう。

29区55号配石 (第182図)

調査年度 平成9年度

位置 X-5グリッド

経過 26号配石の掘り方調査の際、南壁の平積み礫がさらに東西に続いており、その延長を確認すると、東西方向に長軸をとる別の配石であることが判明した。

重複 23号・26号配石と重複し、23号と接する部分の平積み礫が残っていることからこれを切り、26号に切られる。

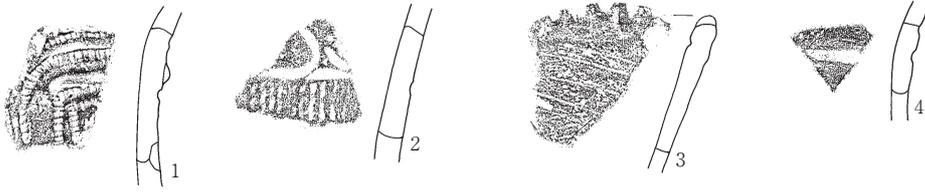
形状 東西方向に長軸をとる舟形を呈する。26号に切られている部分以外は平積み礫が残っており、西側部分では上面にのる小口積み礫も1～2段残っていた。規模は、平積み礫の内側で長軸154cm、短軸30cm、深さは小口積み礫の上から46cmである。

石材等 礫は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N80度W

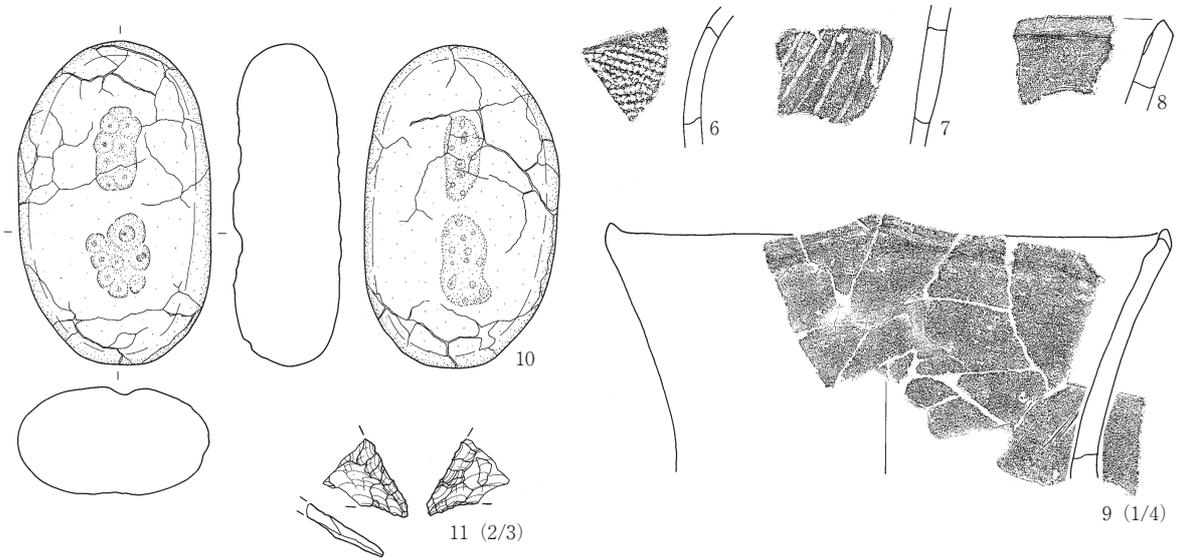
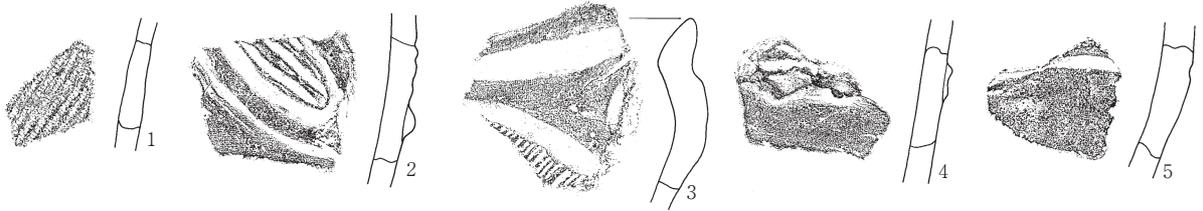
遺物 確認されていない。

所見 東西方向に長軸をとる舟形の配石墓と判断する。時期は、重複関係から23号配石と26号配石の間に比定できる。

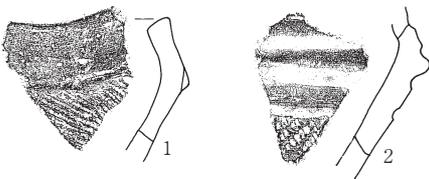


29区 1号配石

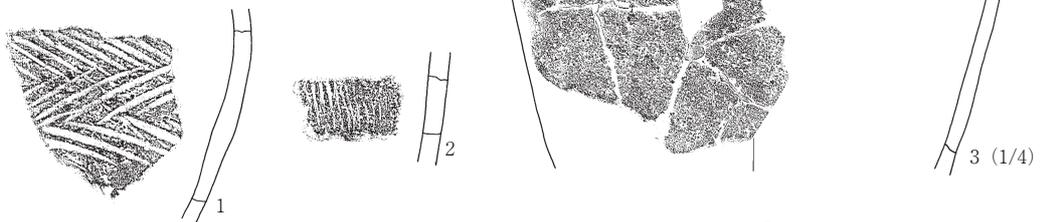
29区 3号配石



29区 4号配石

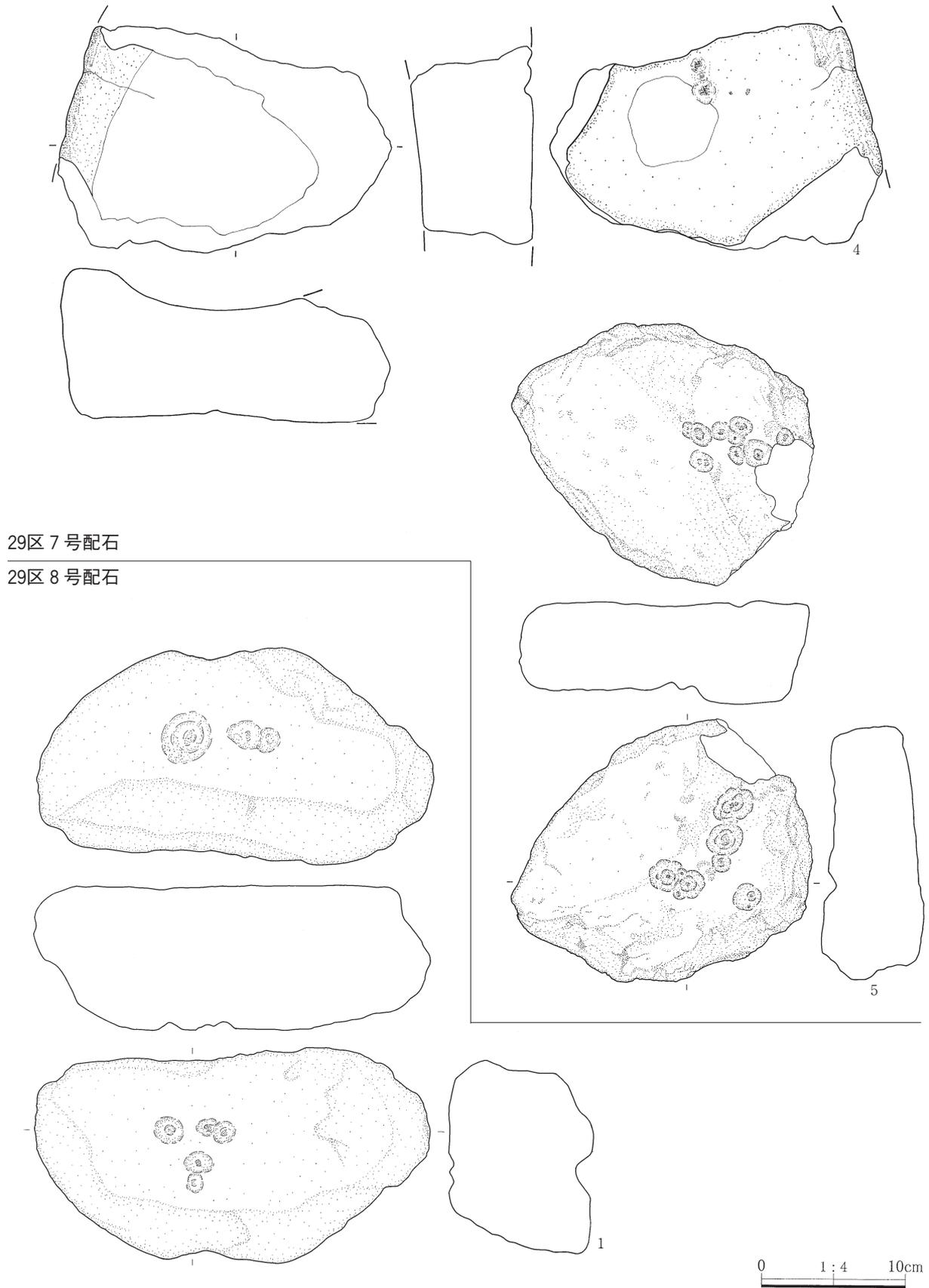


29区 7号配石



0 1:3 10cm

第205図 29区 1号・3号・4号・7号配石出土遺物

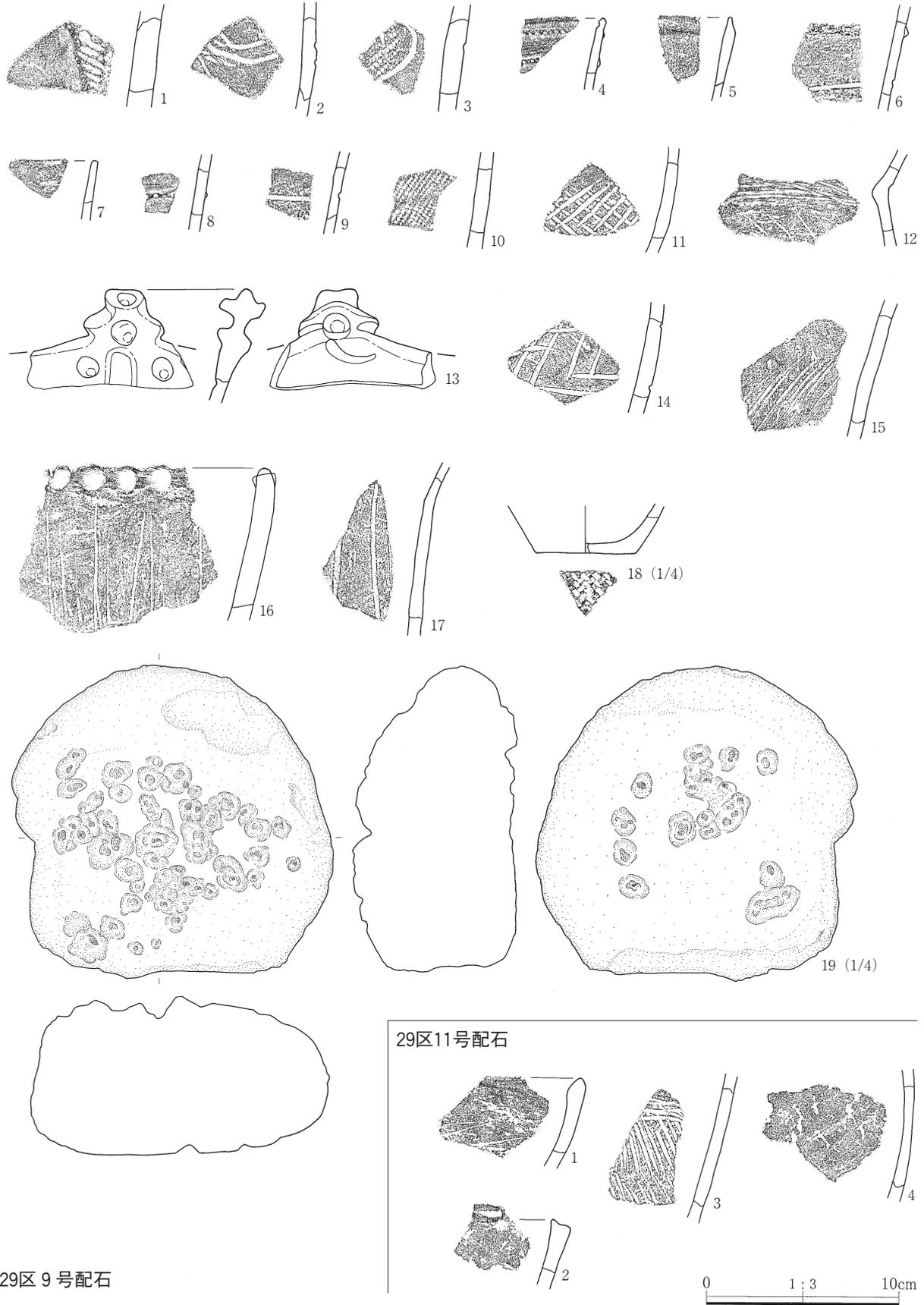


29区 7号配石

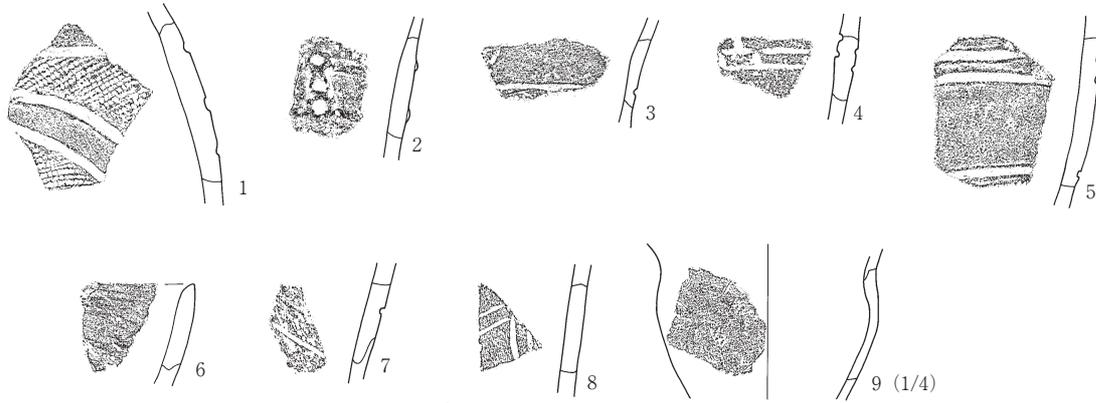
29区 8号配石

第206図 29区 7号・8号配石出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

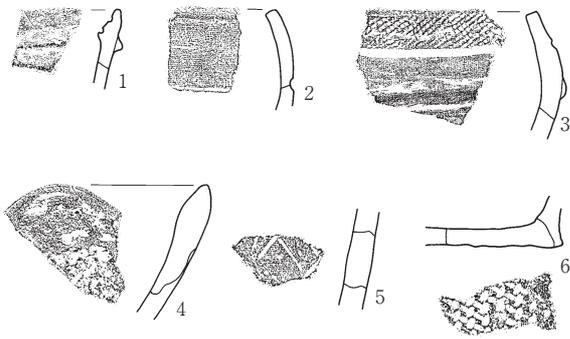


第207図 29区 9号・11号陪石出土遺物

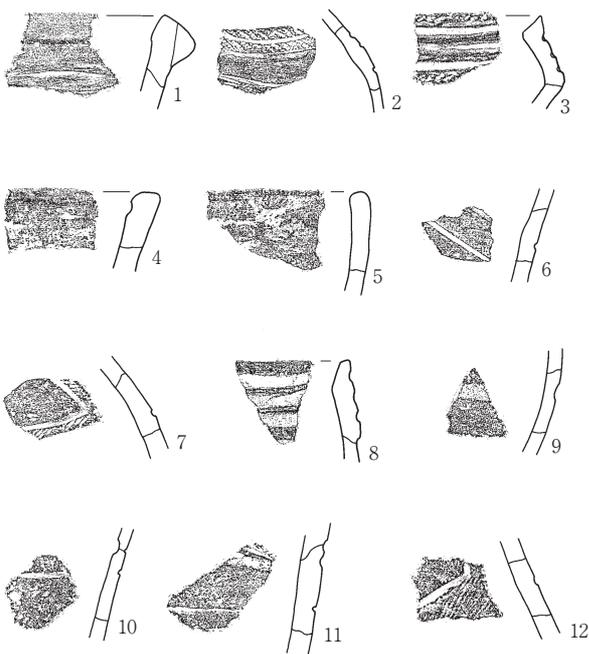


29区10号配石

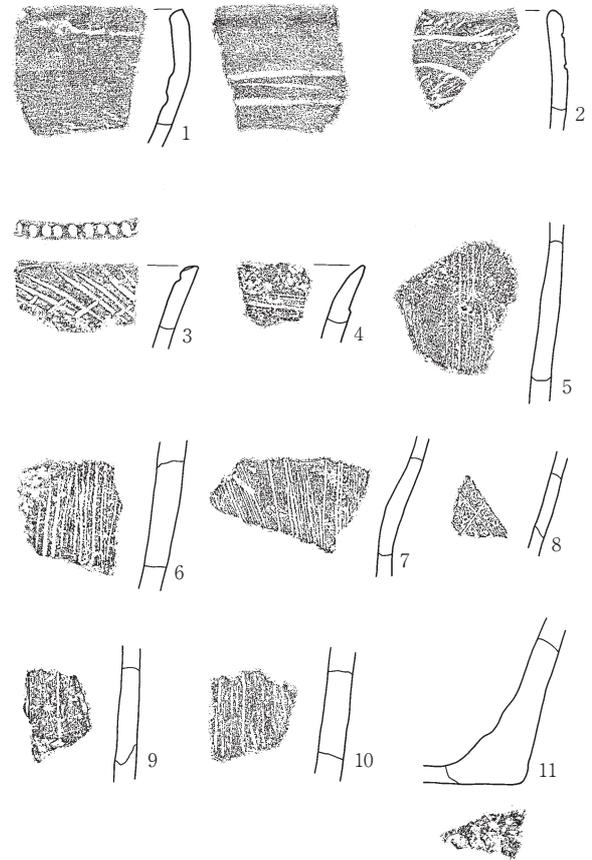
29区12号配石



29区15号配石



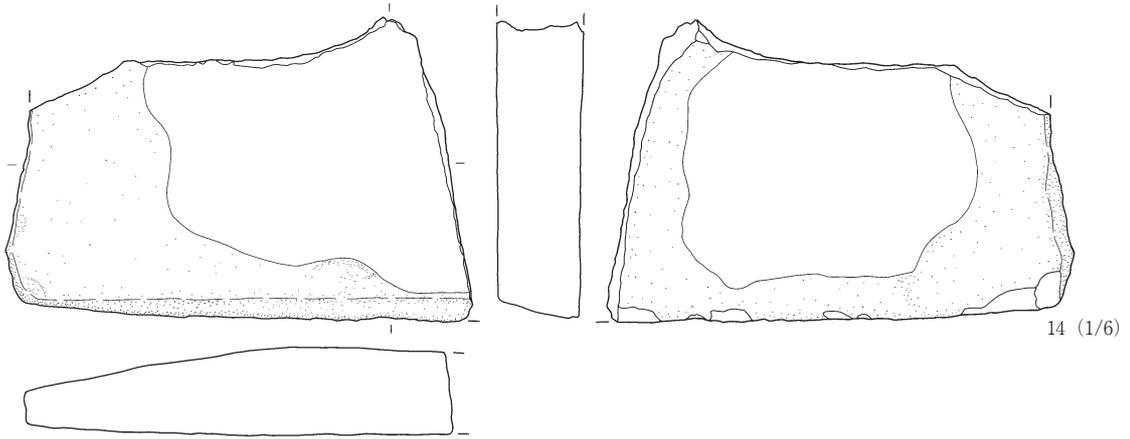
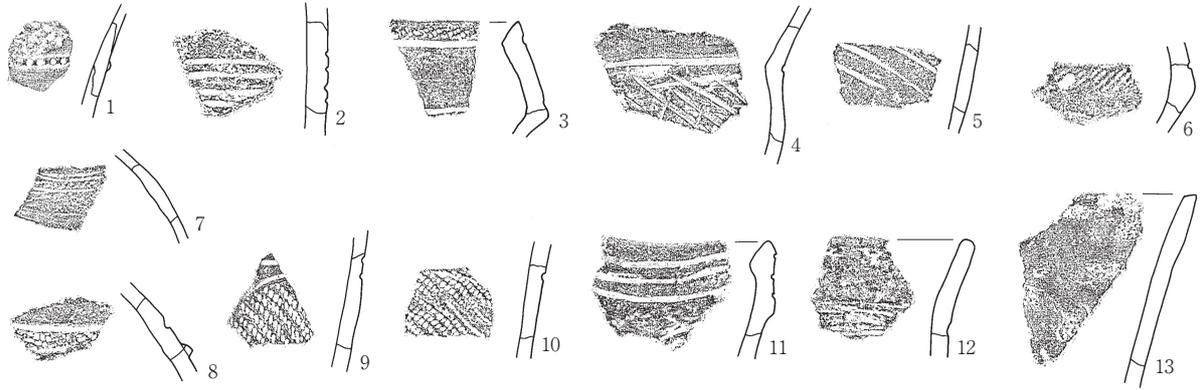
29区13号配石



0 1 : 3 10cm

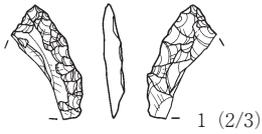
第208図 29区10号・12号・13号・15号配石出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

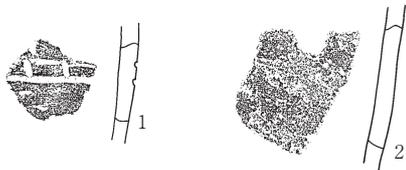


29区14号配石

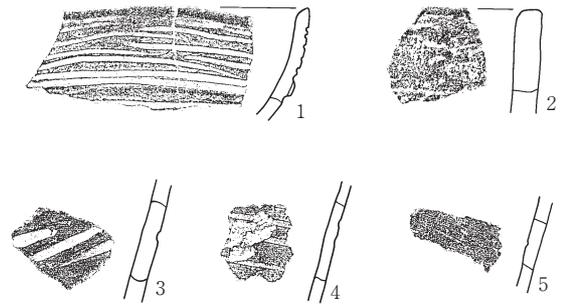
29区17号配石



29区18号配石

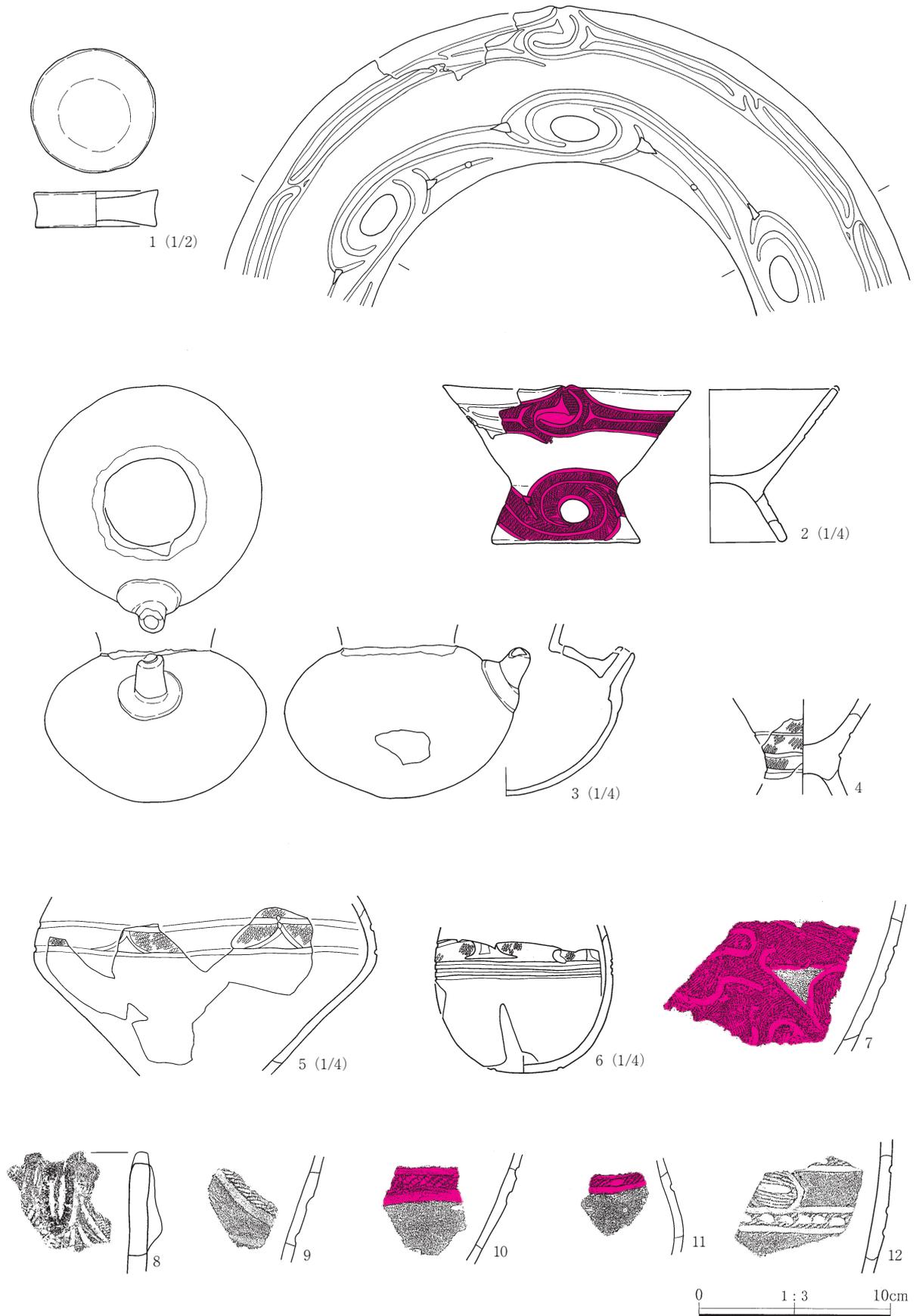


29区20号配石



0 1:3 10cm

第209図 29区14号・17号・18号・20号配石出土遺物

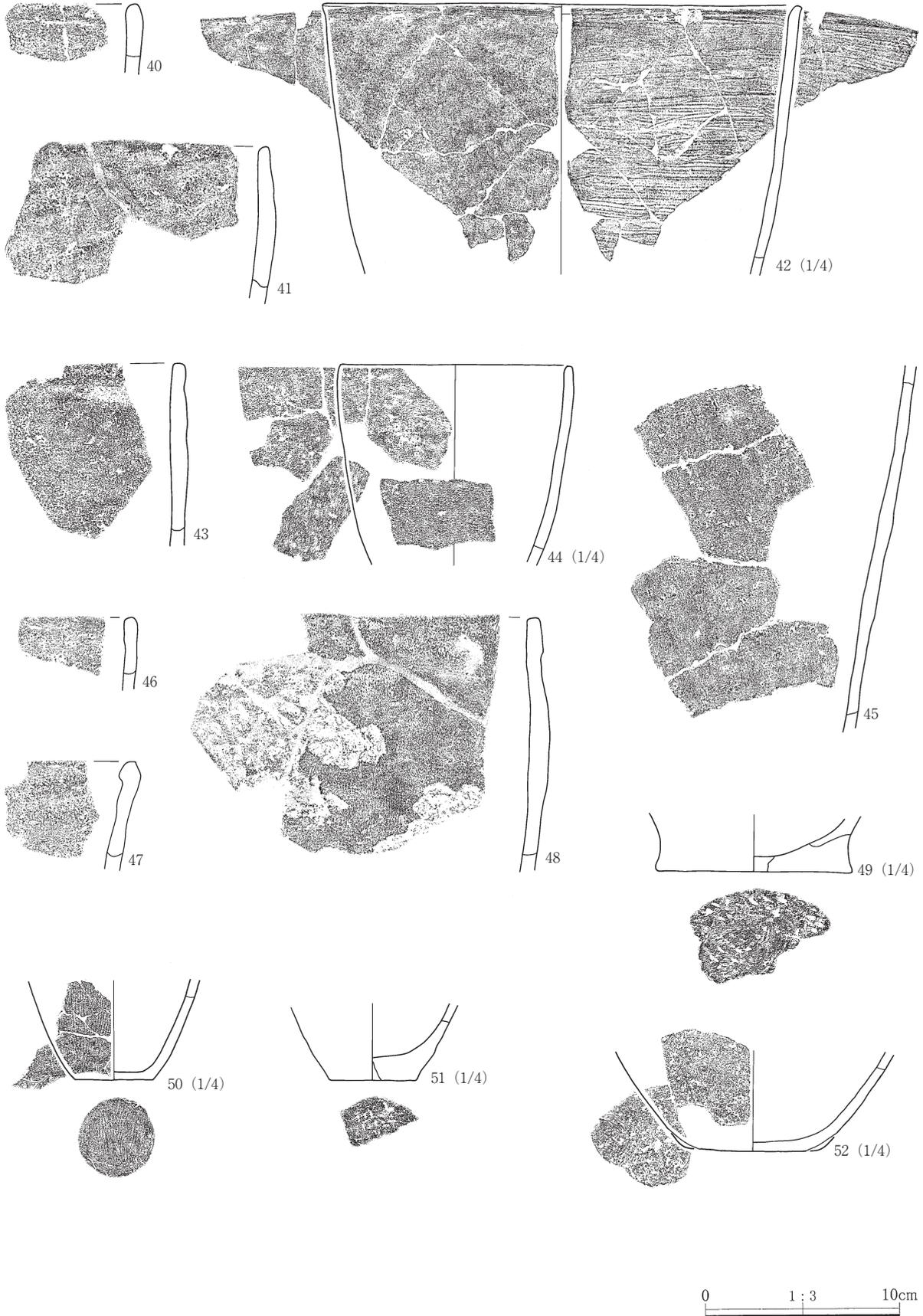


第210図 29区16号配石出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

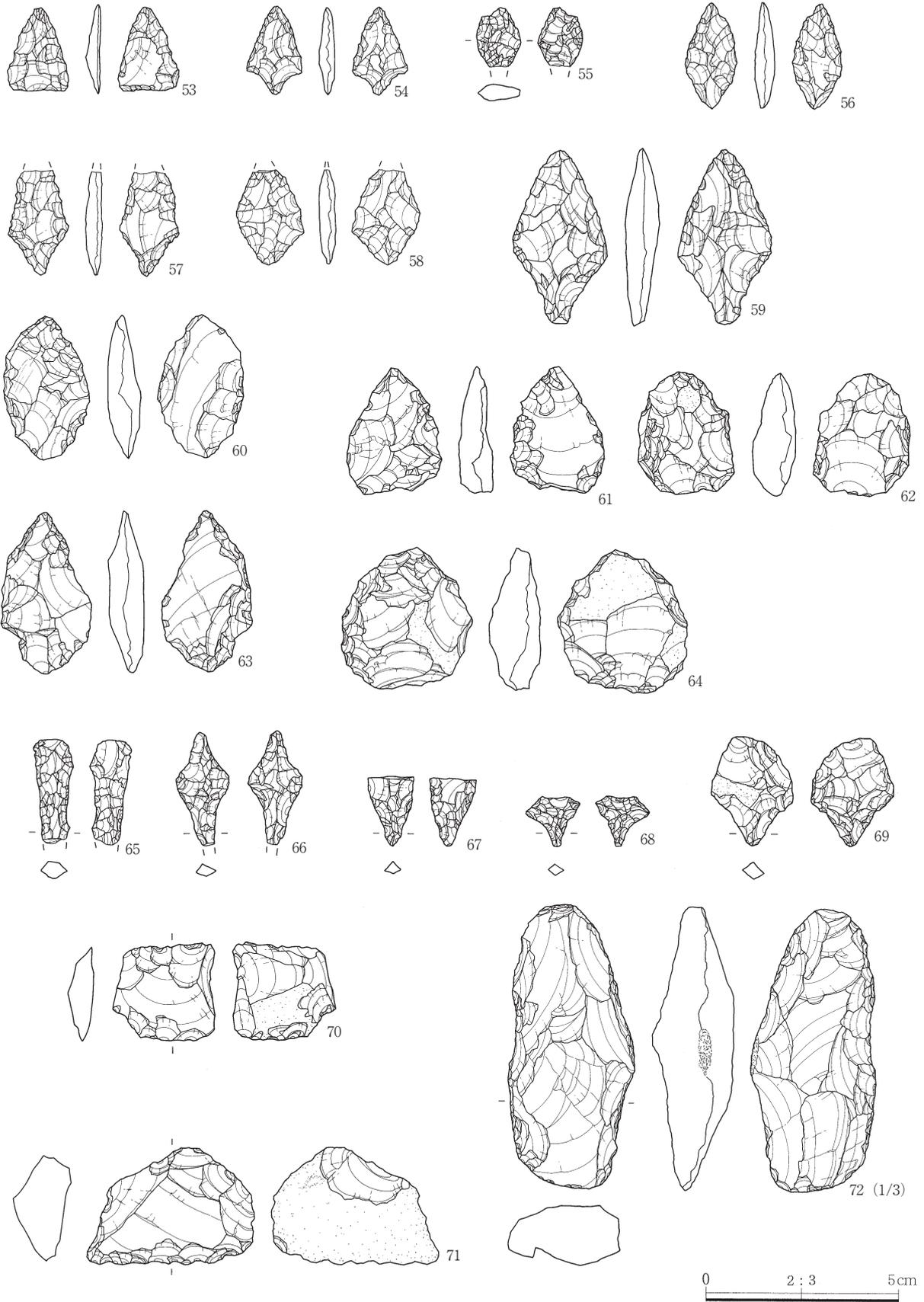


第211図 29区16号配石出土遺物（2）

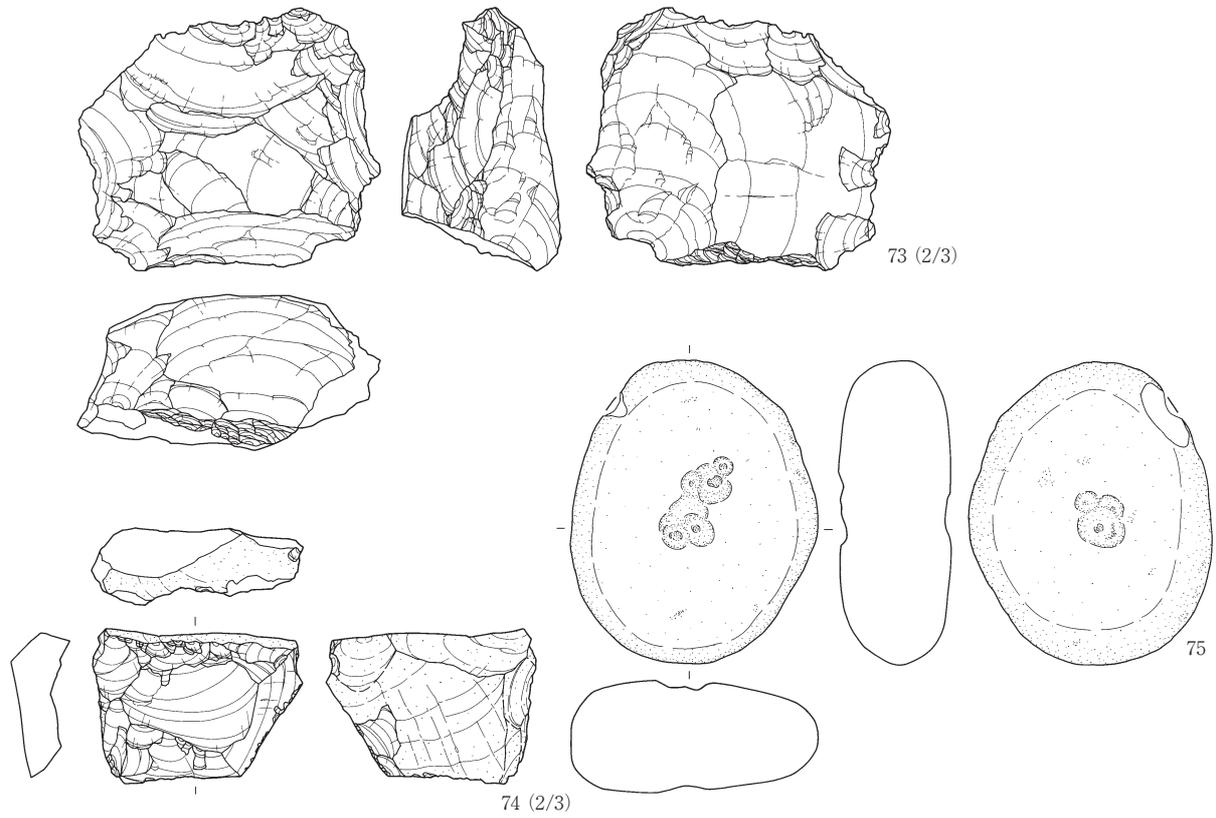


第212図 29区16号配石出土遺物（3）

第3章 発見された遺構と遺物

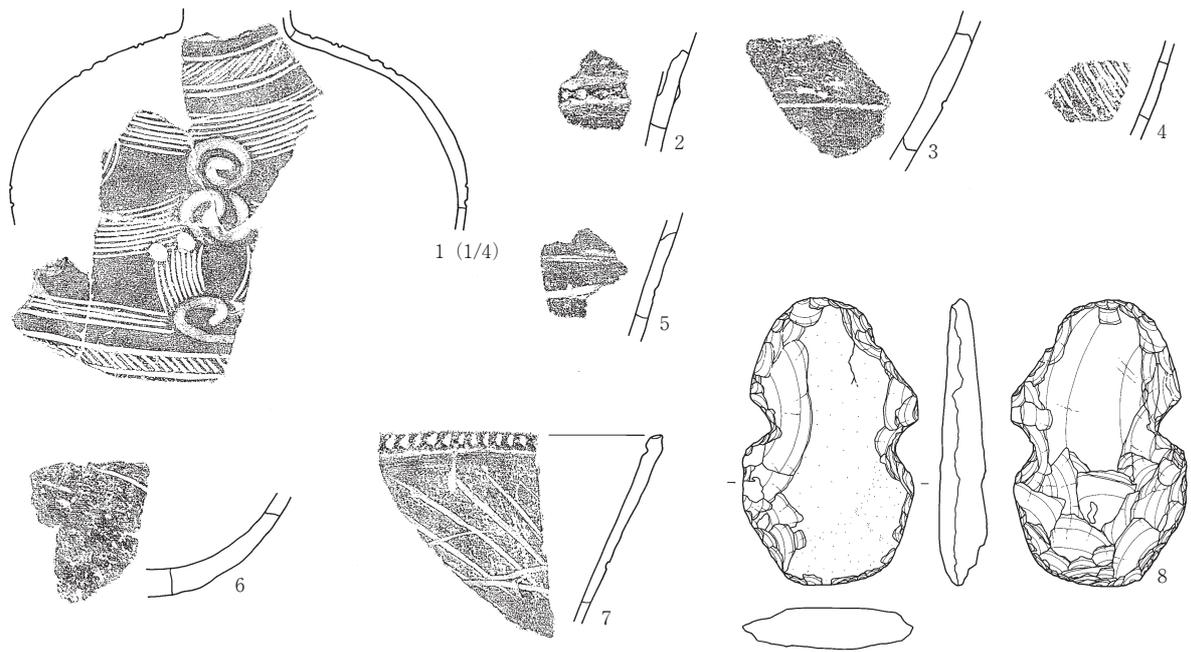


第213図 29区16号配石出土遺物（4）



29区16号配石

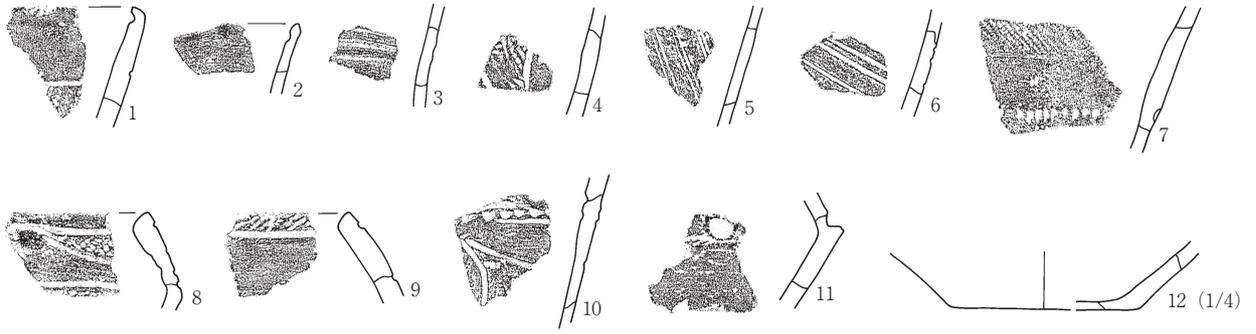
29区21号配石



0 1:3 10cm

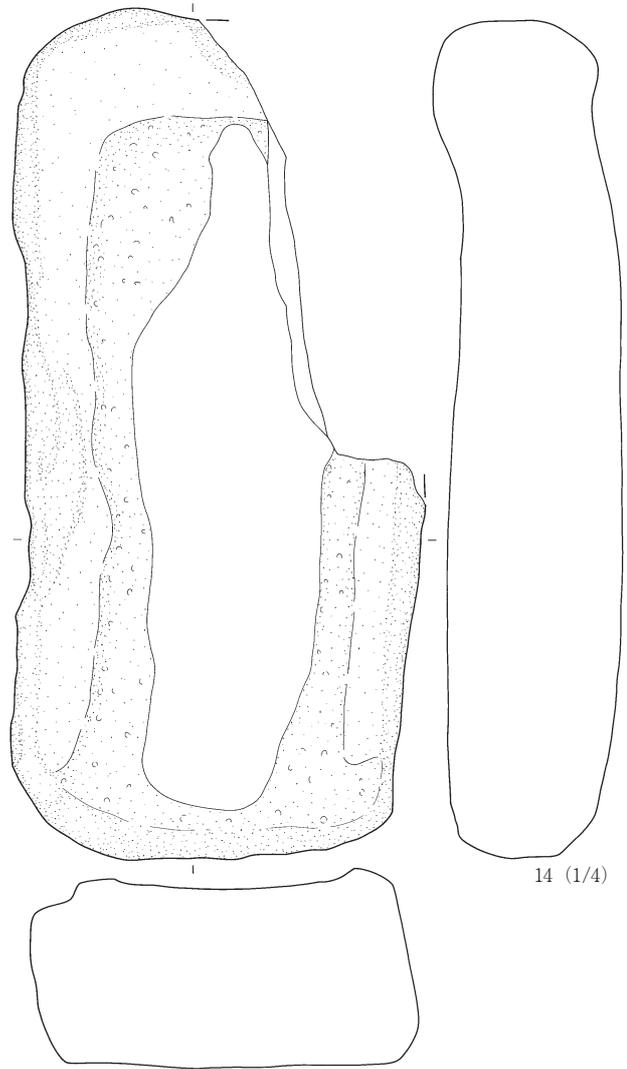
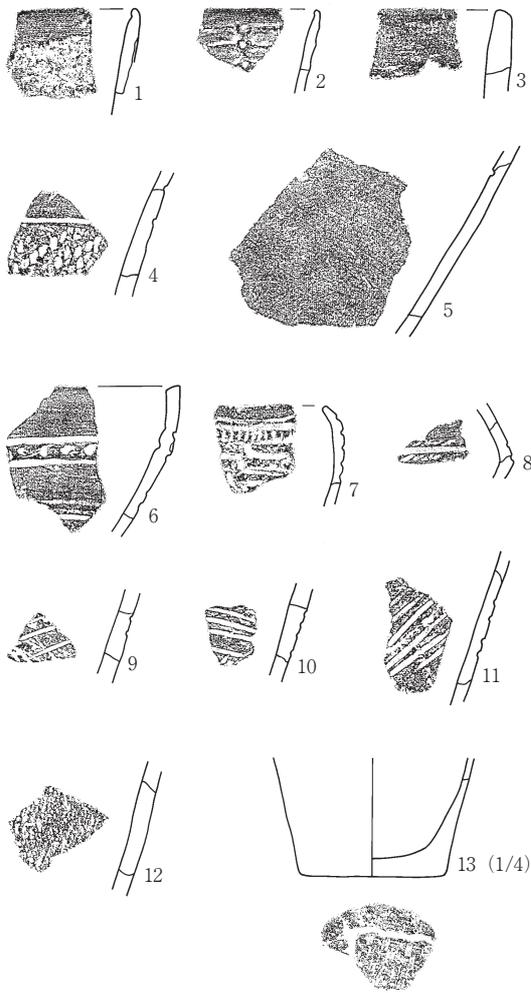
第214図 29区16号・21号配石出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



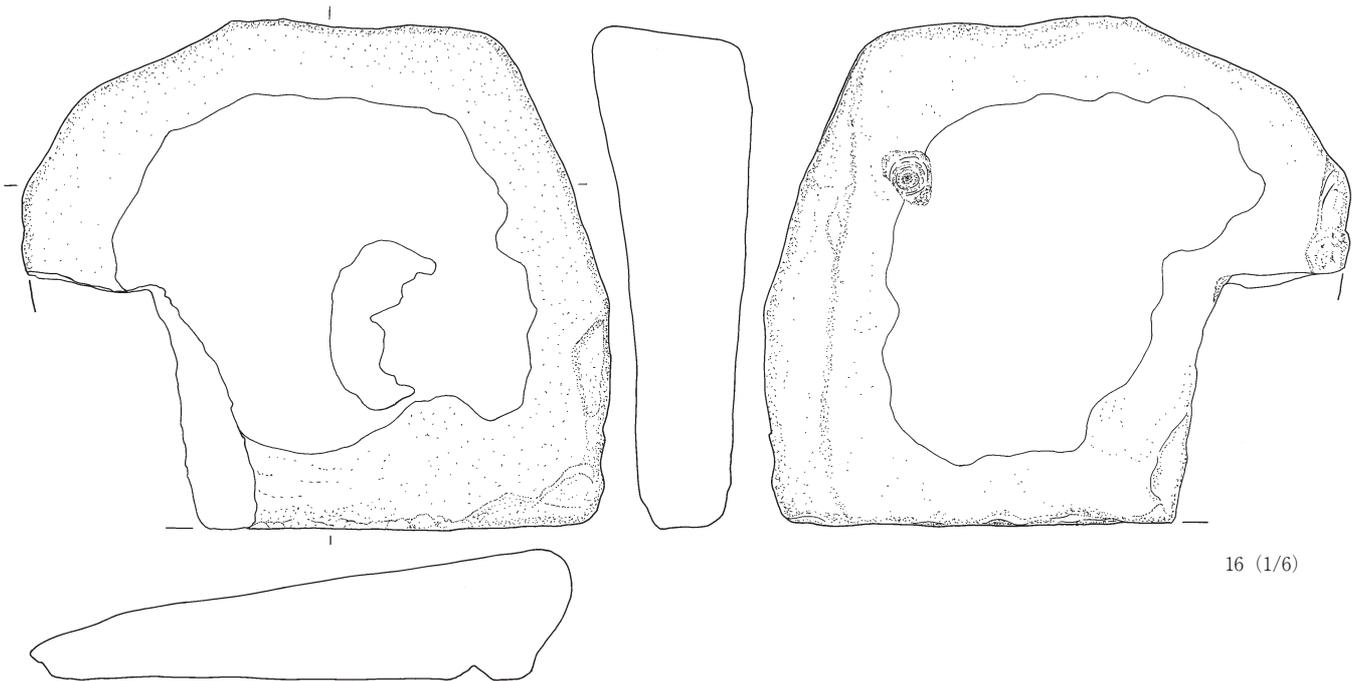
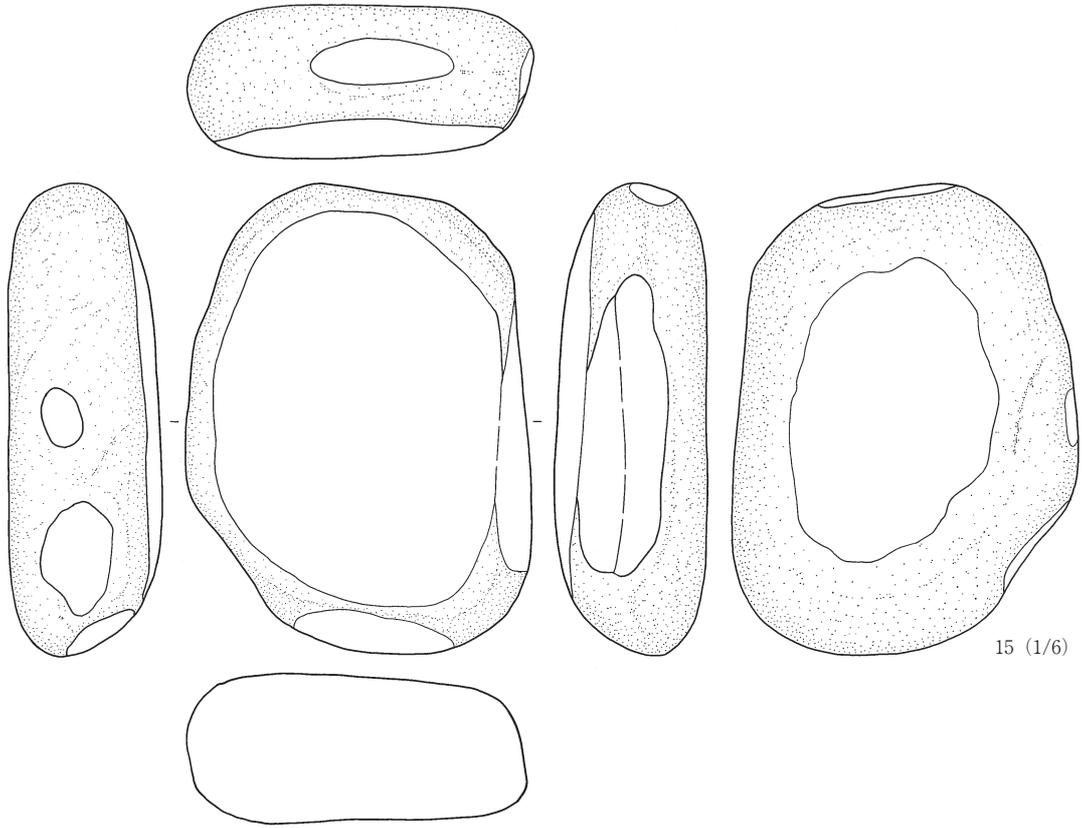
29区23号配石

29区24号配石

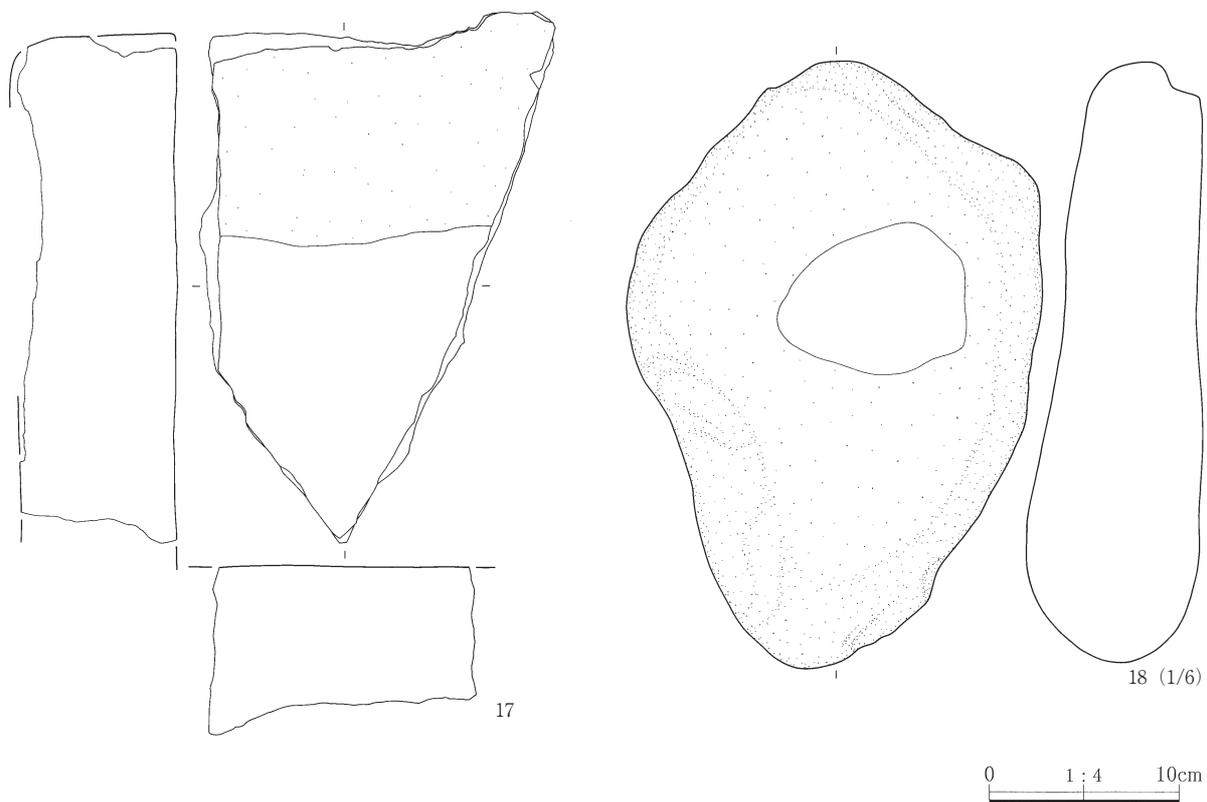


0 1:3 10cm

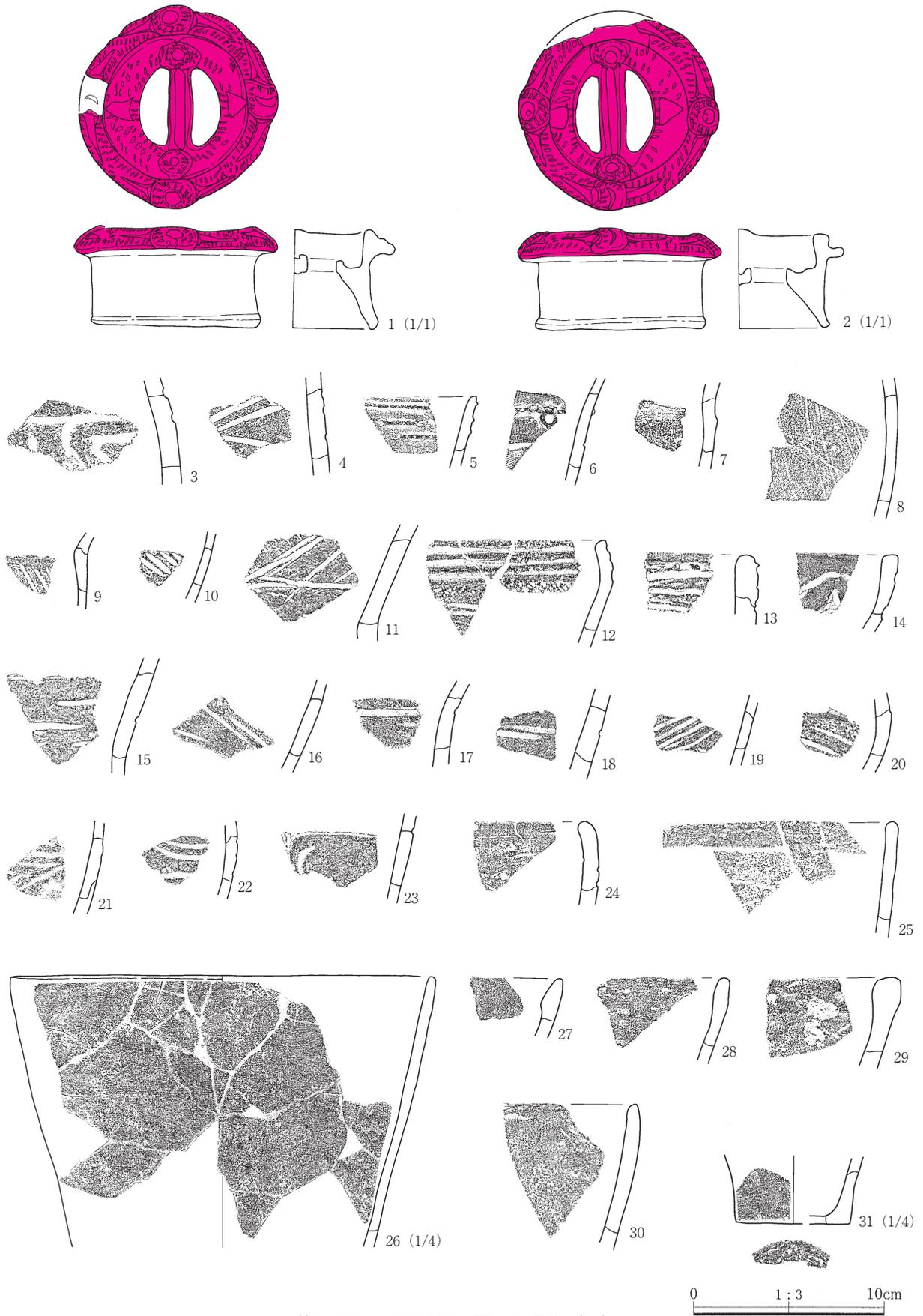
第215図 29区23号・24号配石出土遺物



第216図 29区24号配石出土遺物（2）

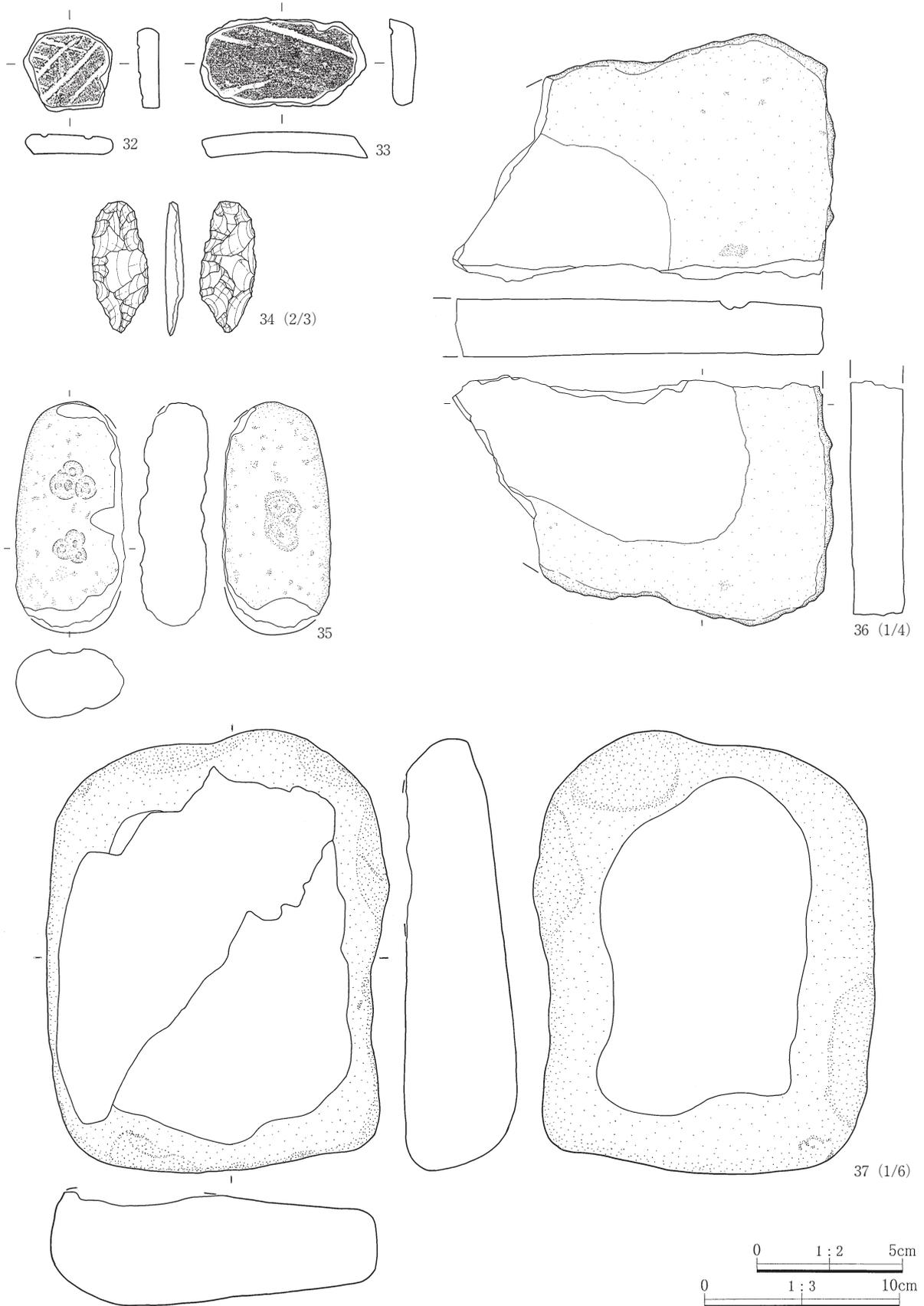


第217図 29区24号配石出土遺物（3）



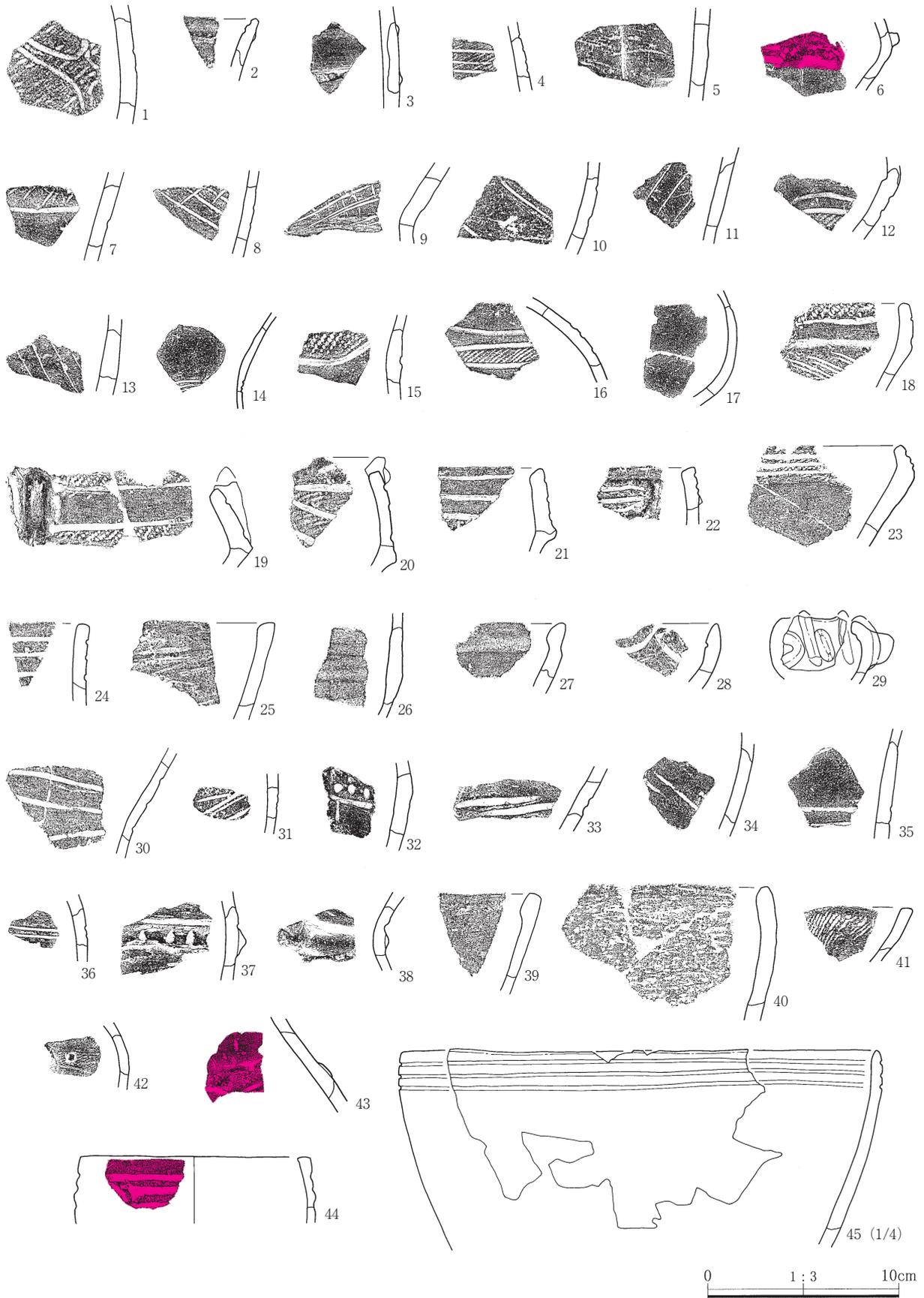
第218図 29区26号配石出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



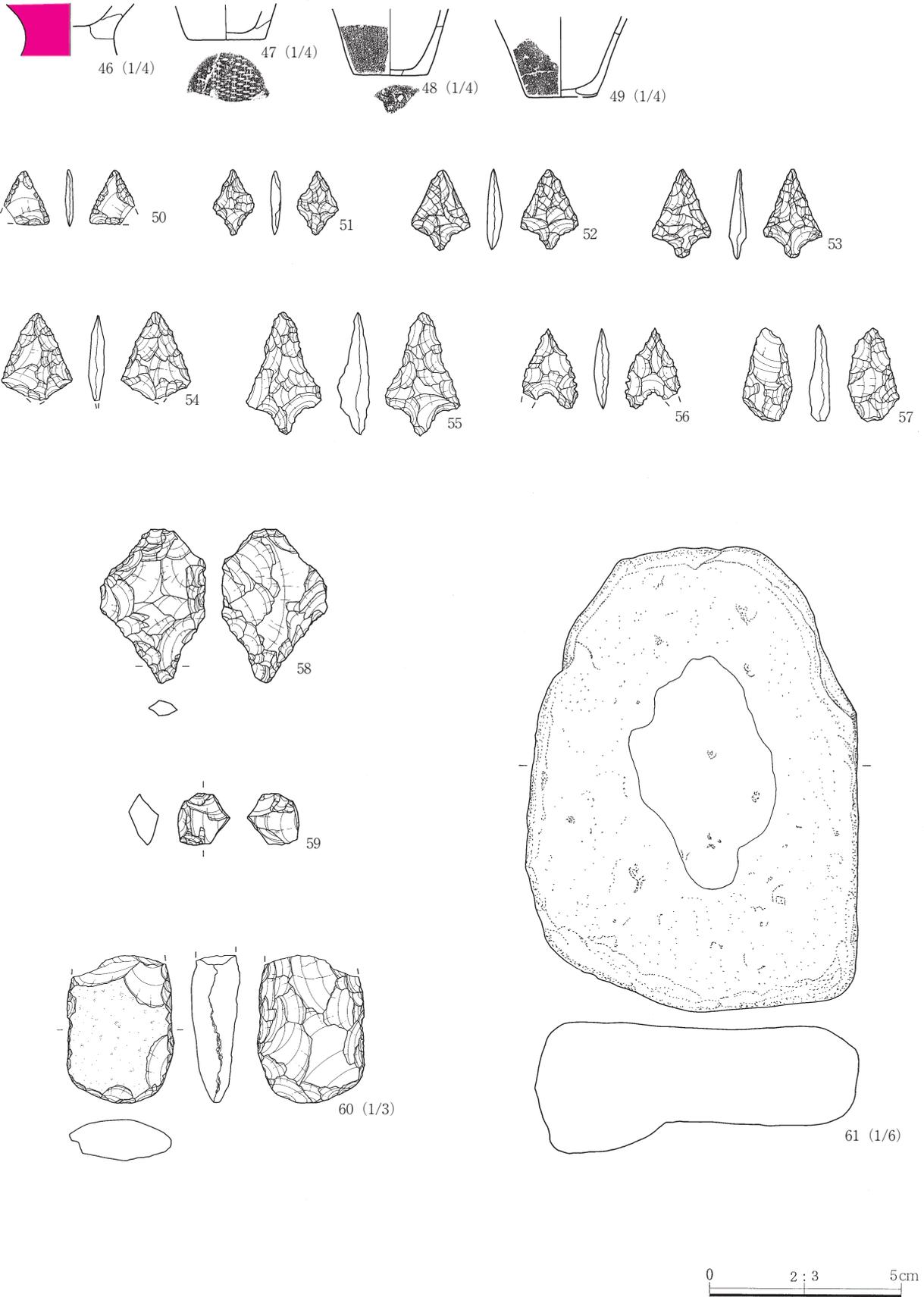
第219図 29区26号配石出土遺物（2）

第4節 縄文時代の配石遺構



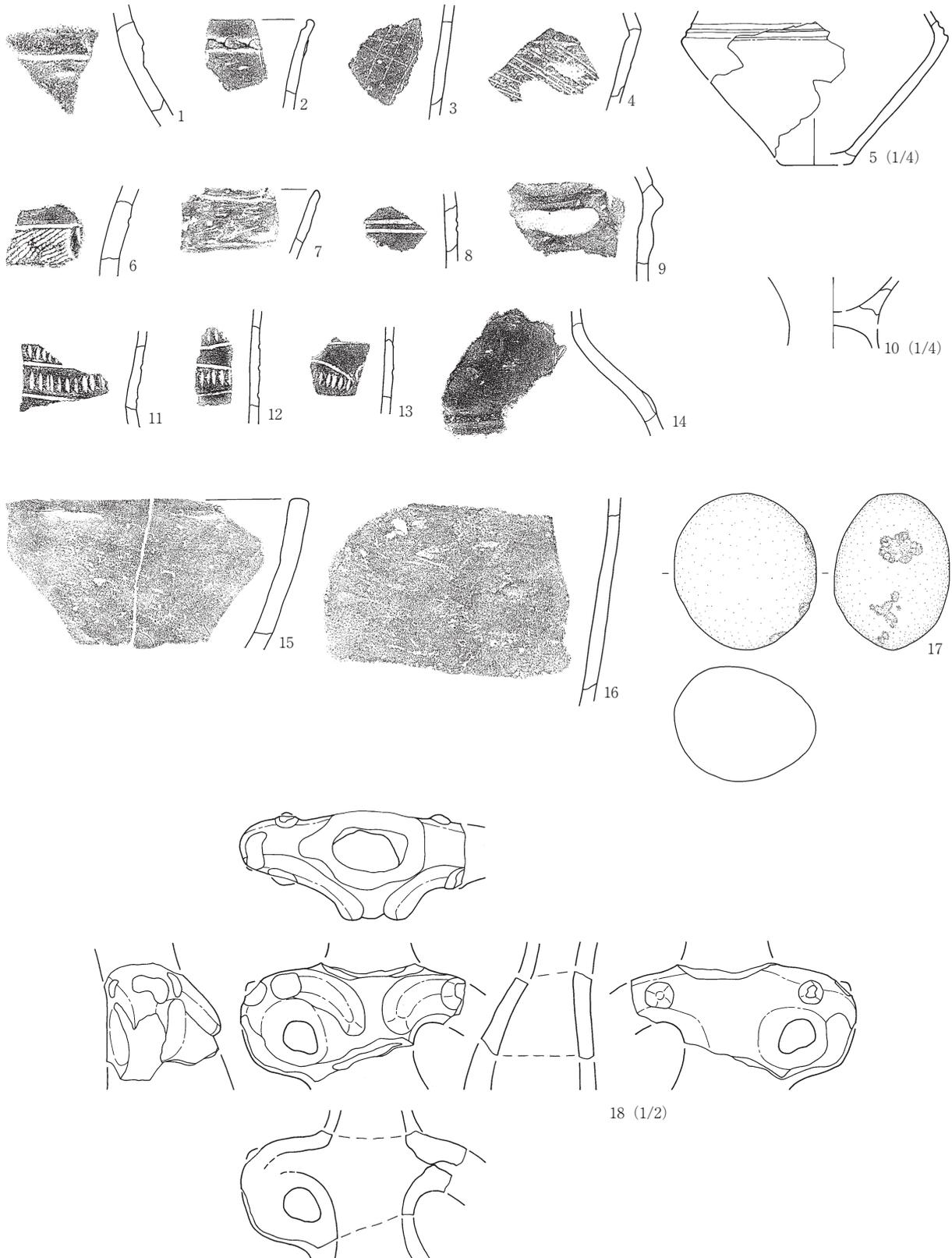
第220図 29区27号配石出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



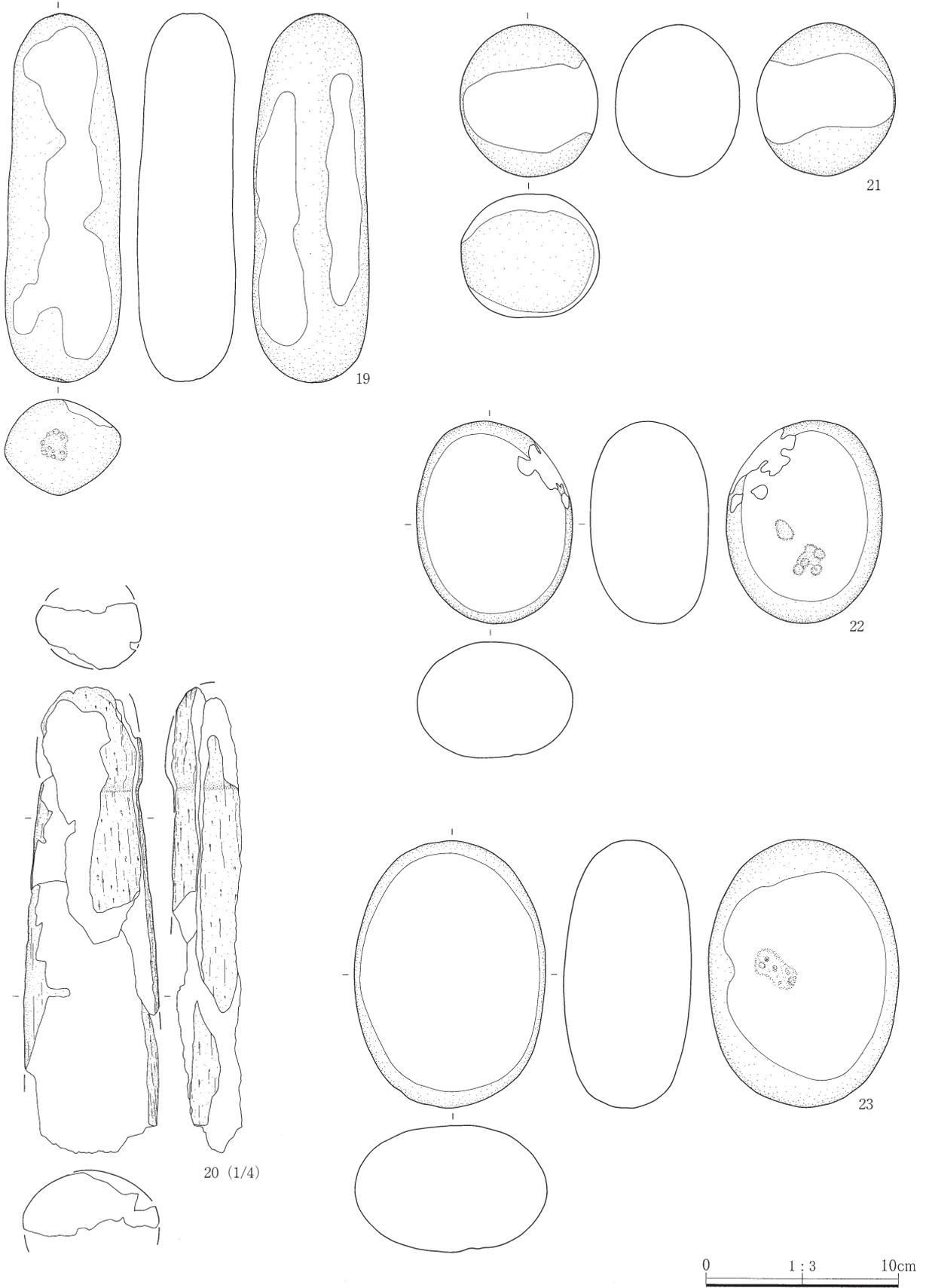
第221図 29区27号配石出土遺物（2）

第4節 縄文時代の配石遺構



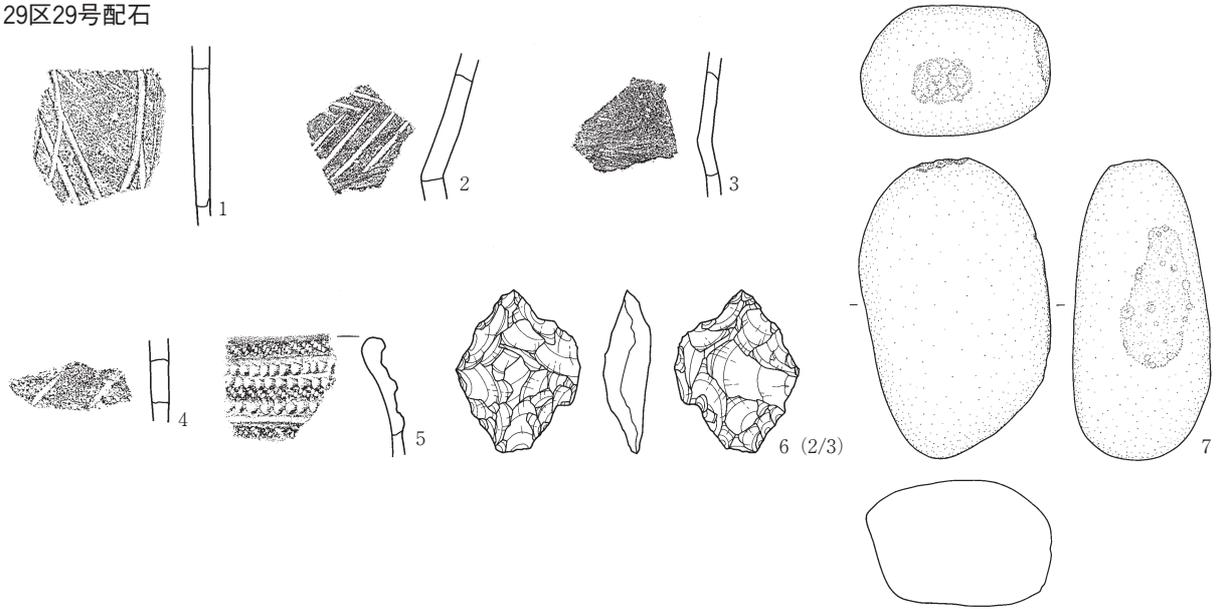
0 1:3 10cm

第222図 29区28号配石出土遺物(1)

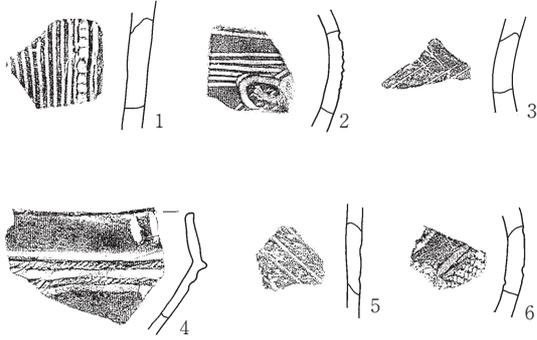


第223図 29区28号配石出土遺物（2）

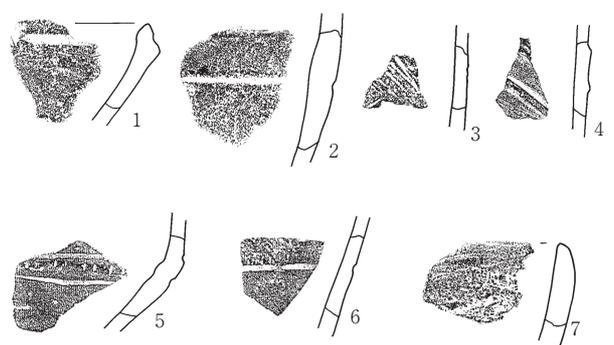
29区29号配石



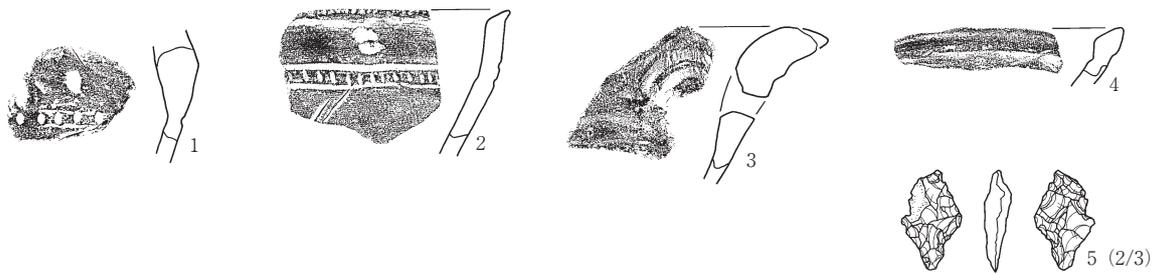
29区31号配石



29区32号配石



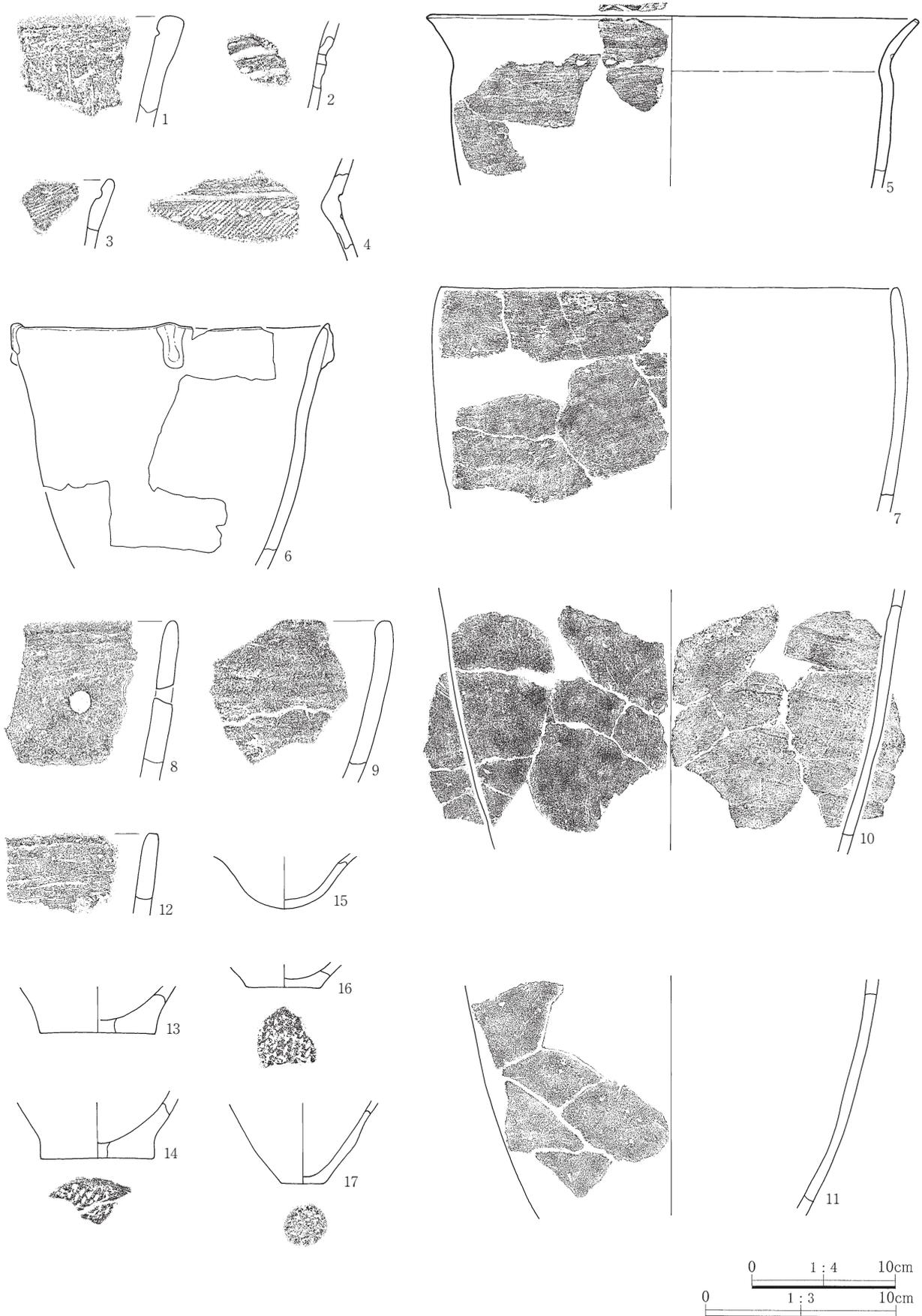
29区33号配石



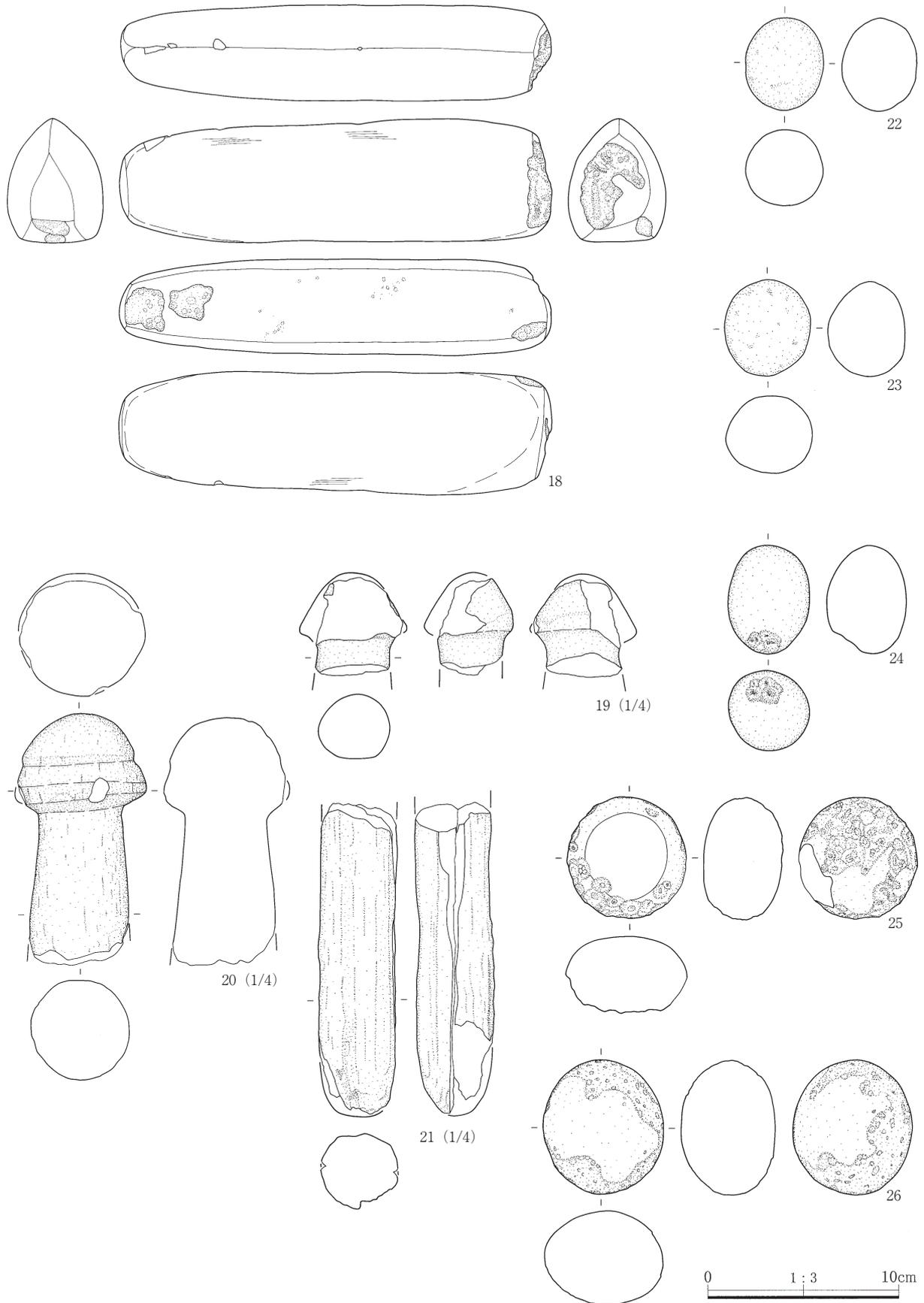
0 1:3 10cm

第224図 29区29号・31号～33号配石出土遺物

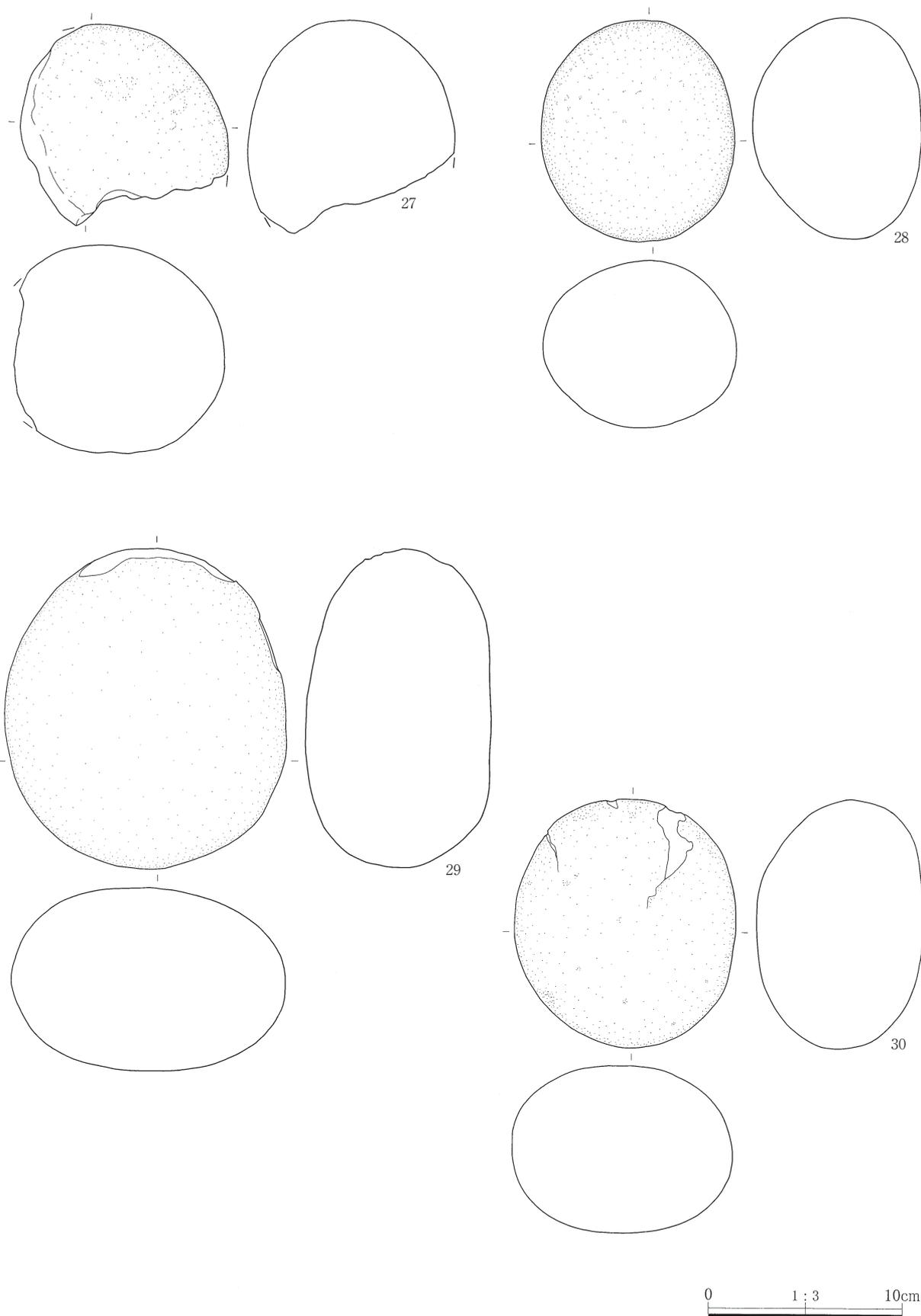
第3章 発見された遺構と遺物



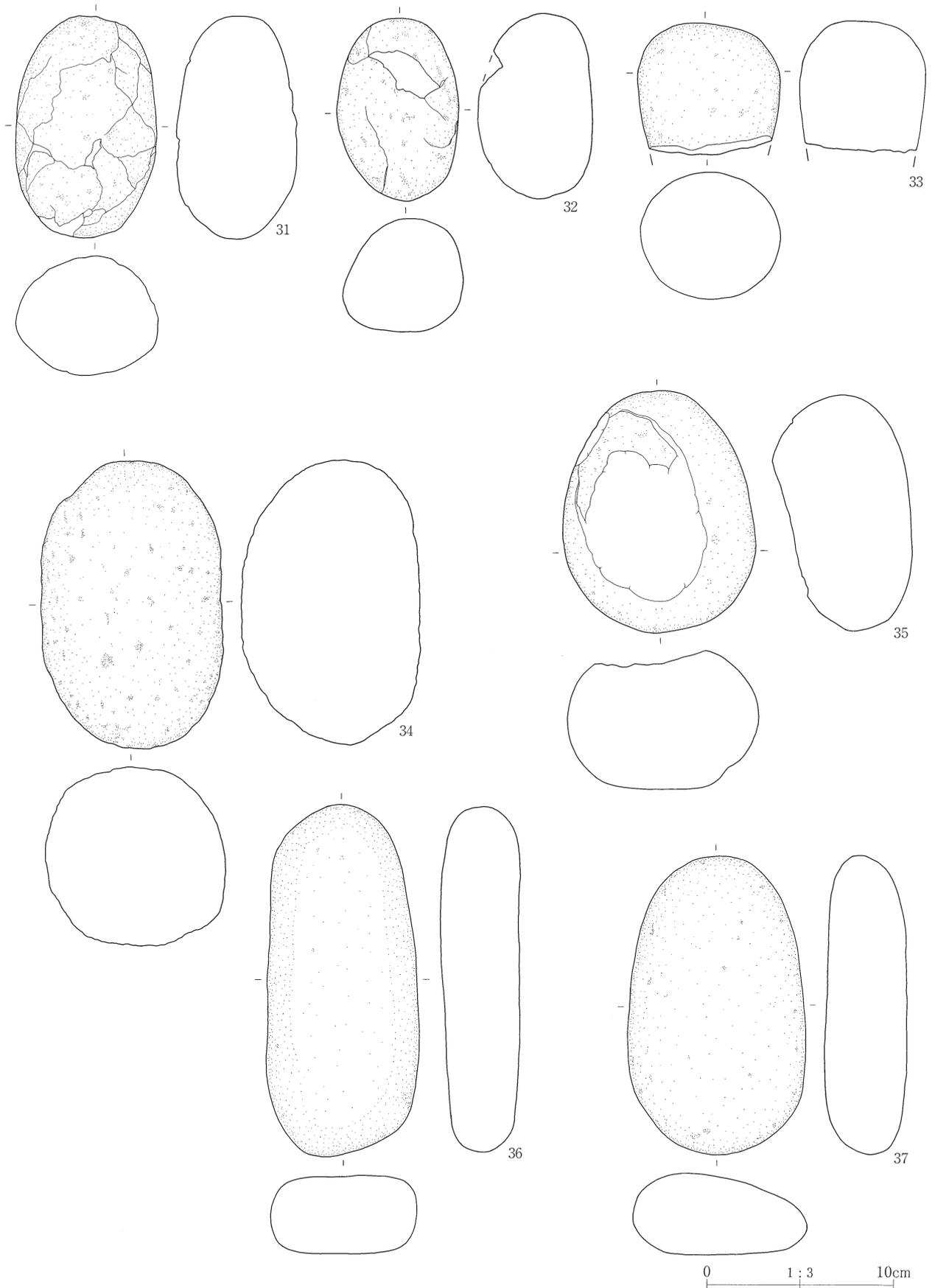
第225図 29区30号配石出土遺物（1）



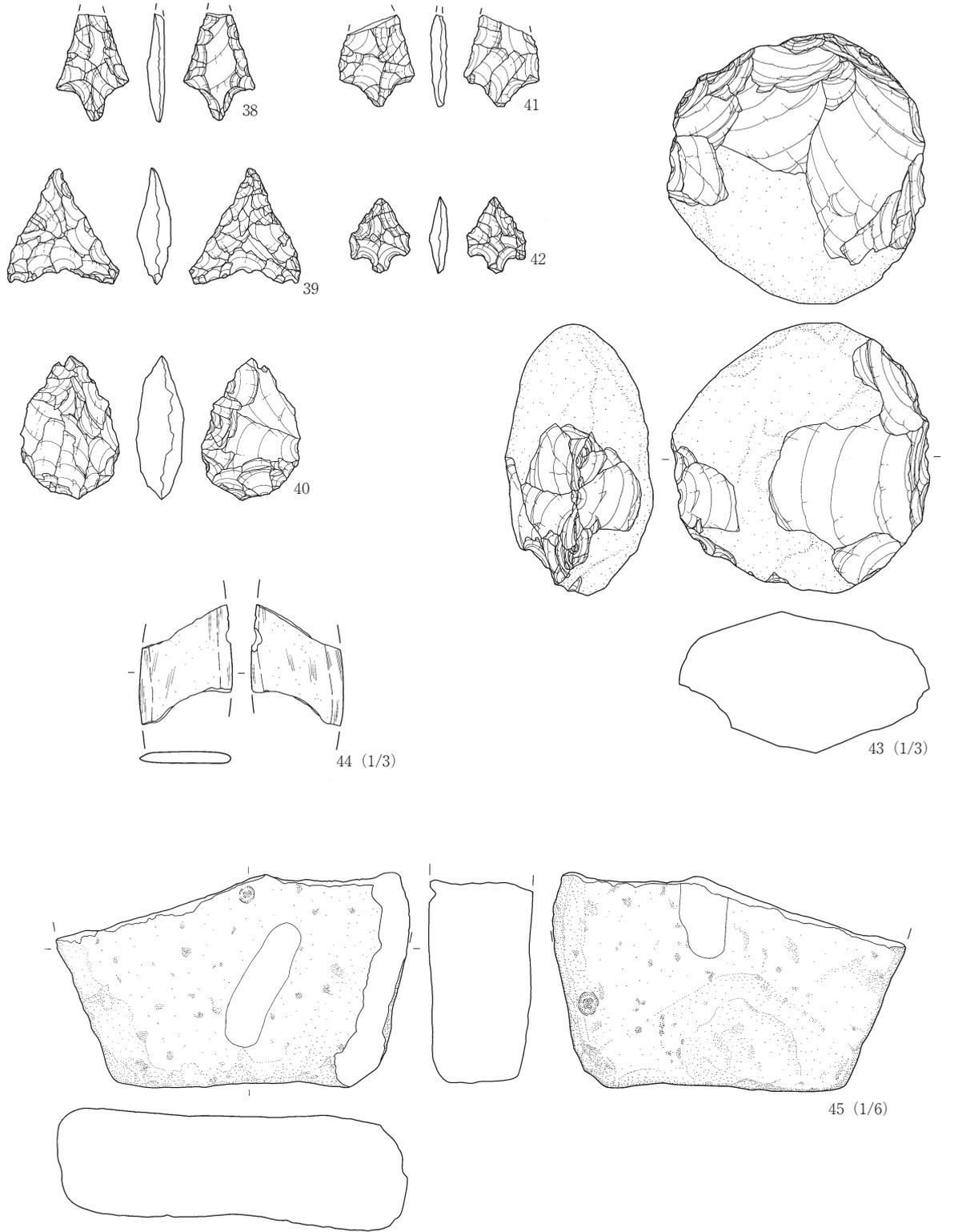
第226図 29区30号配石出土遺物(2)



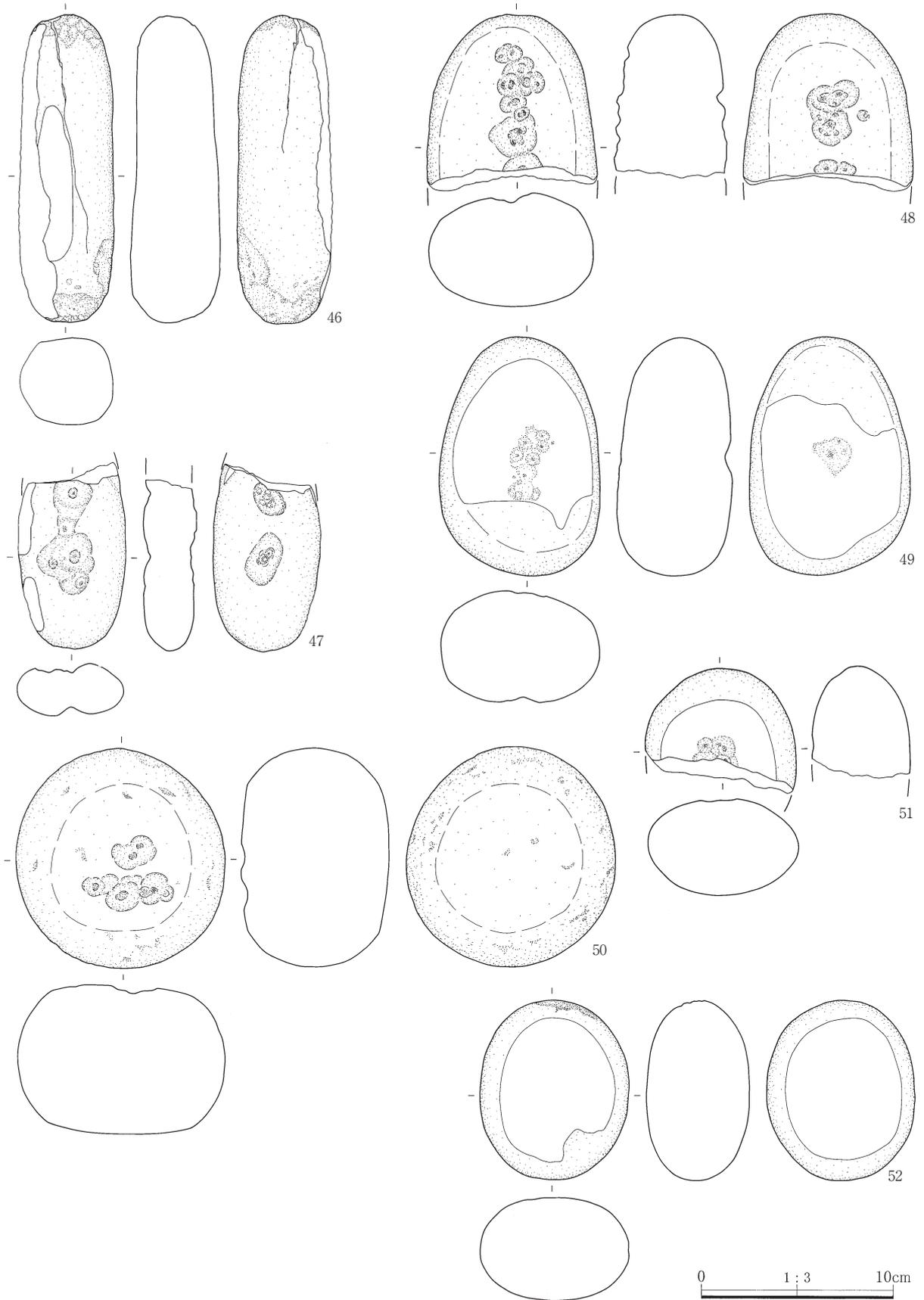
第227図 29区30号配石出土遺物（3）



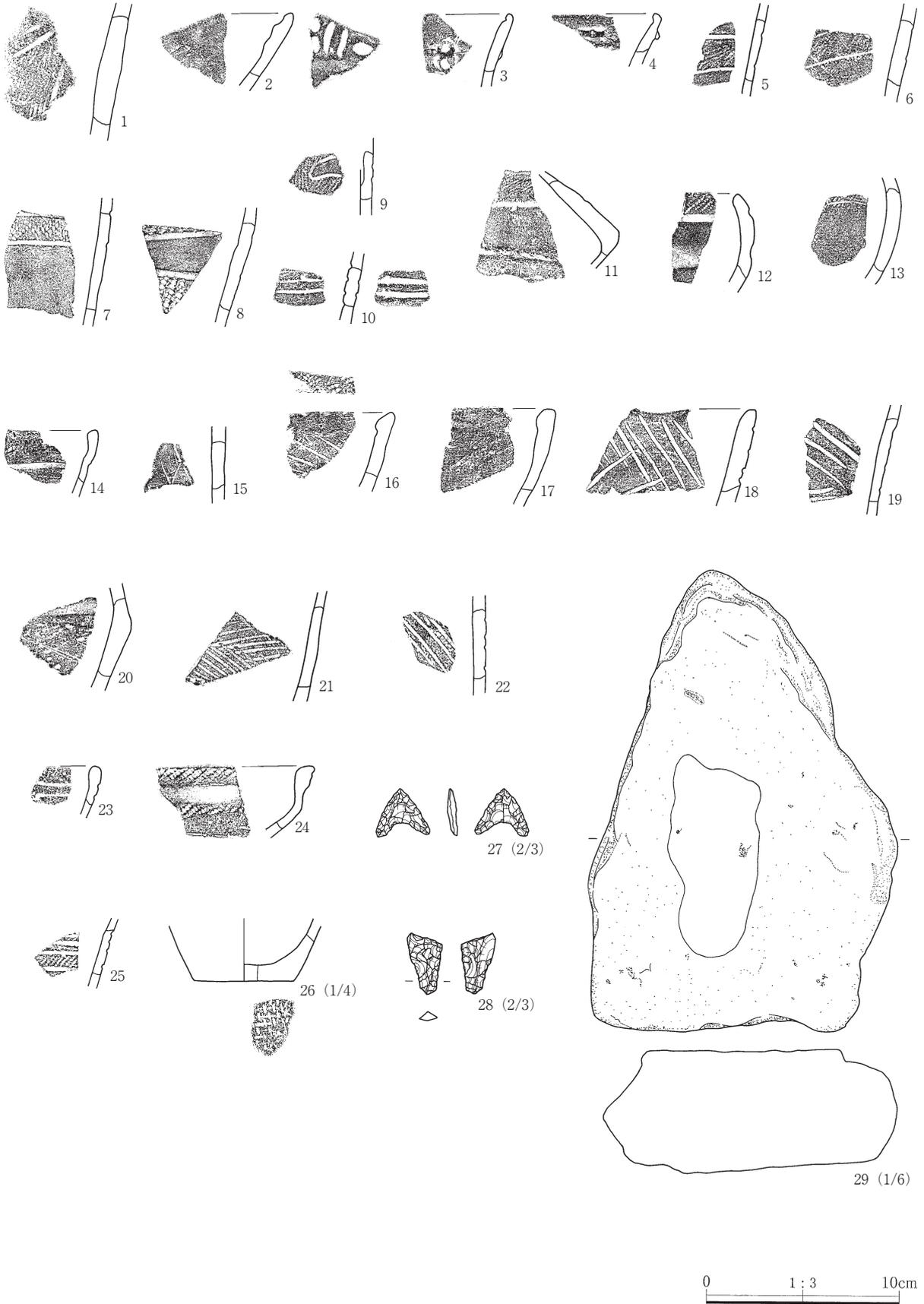
第228図 29区30号配石出土遺物（4）



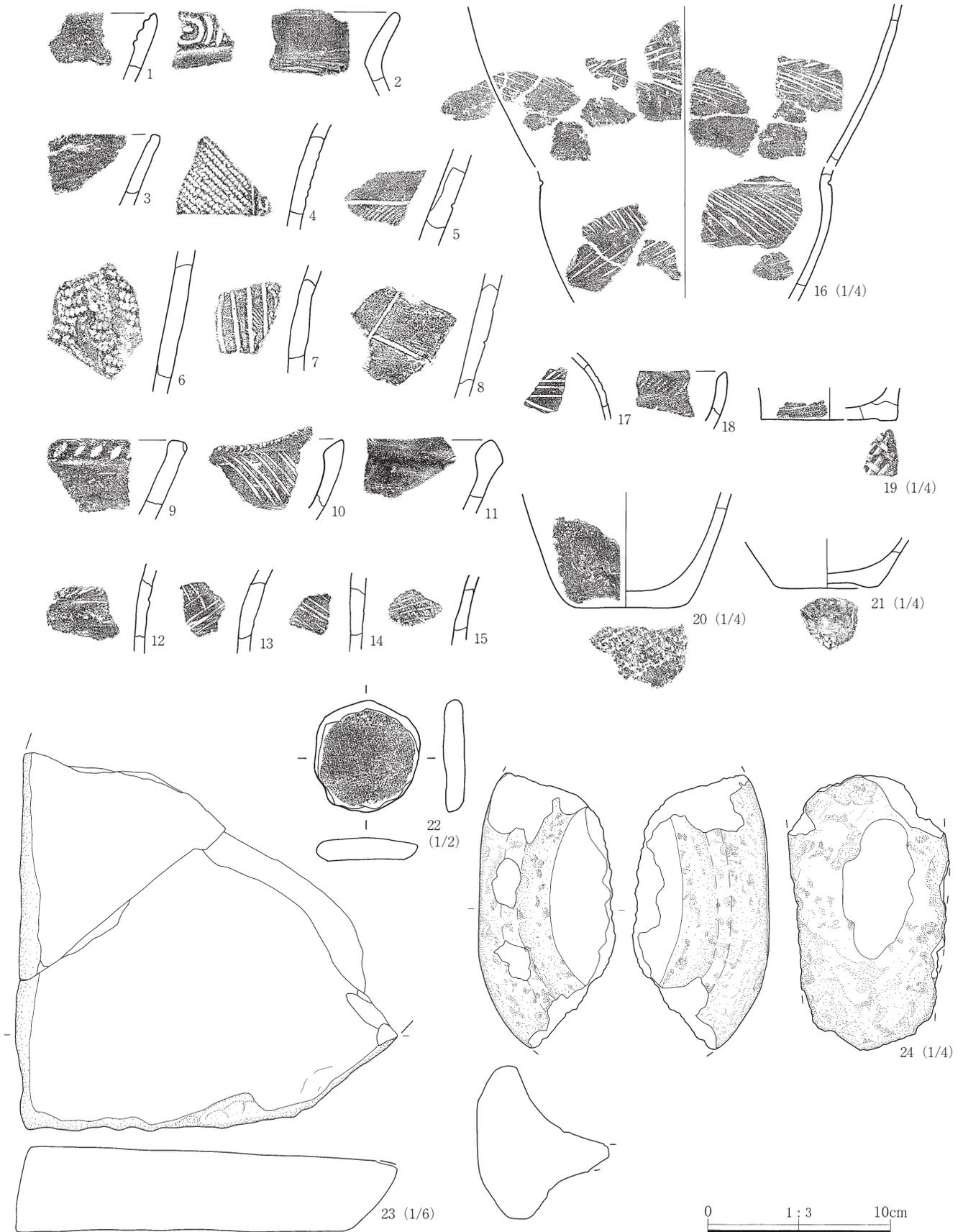
第229図 29区30号配石出土遺物（5）



第230図 29区30号配石出土遺物（6）

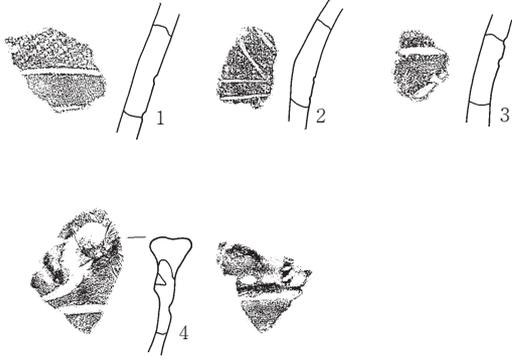


第231図 29区34号配石出土遺物



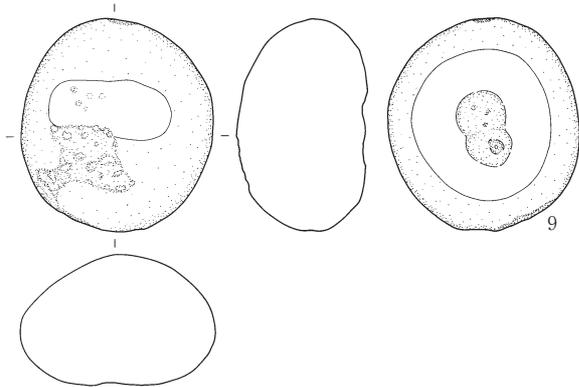
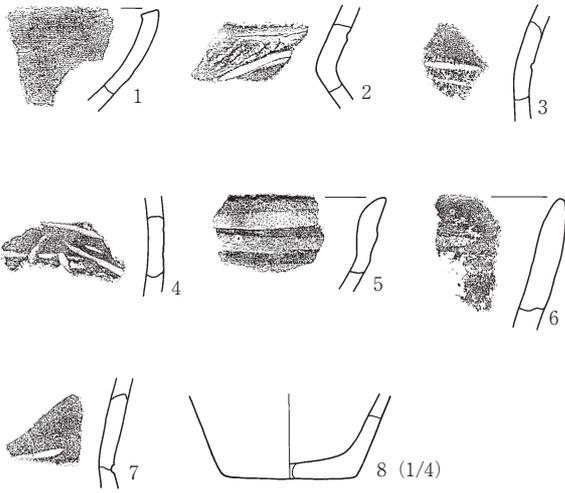
第232図 29区35号配石出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

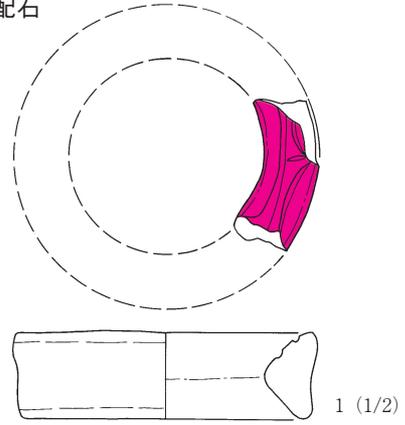


29区36号配石

29区39号配石



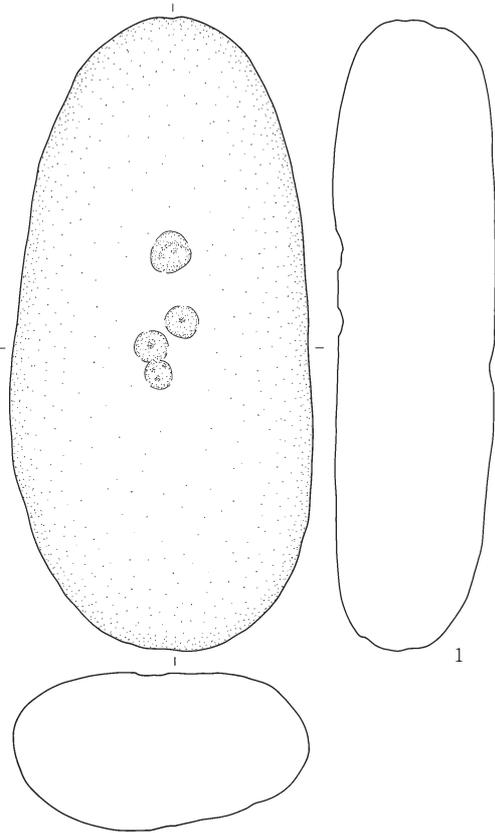
29区37号配石



29区40号配石



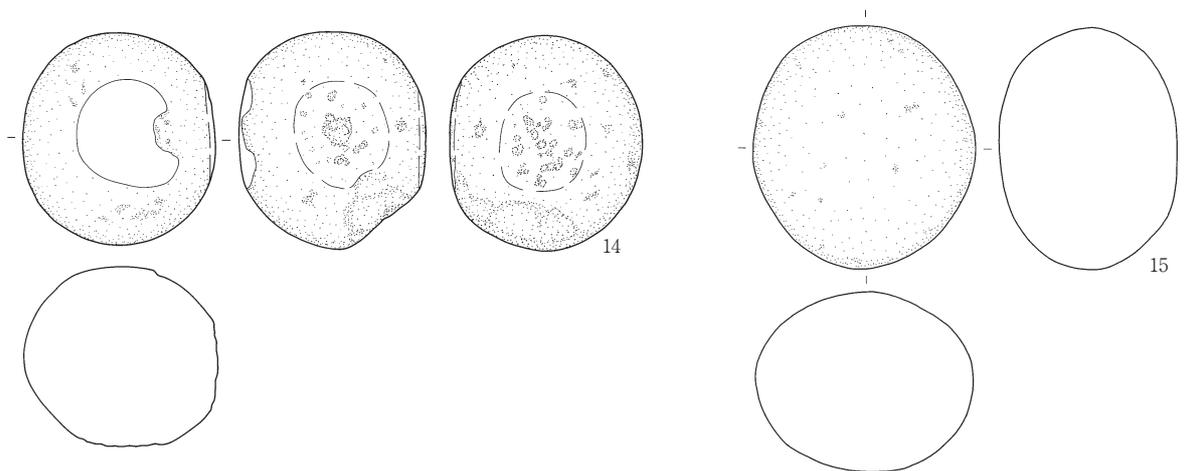
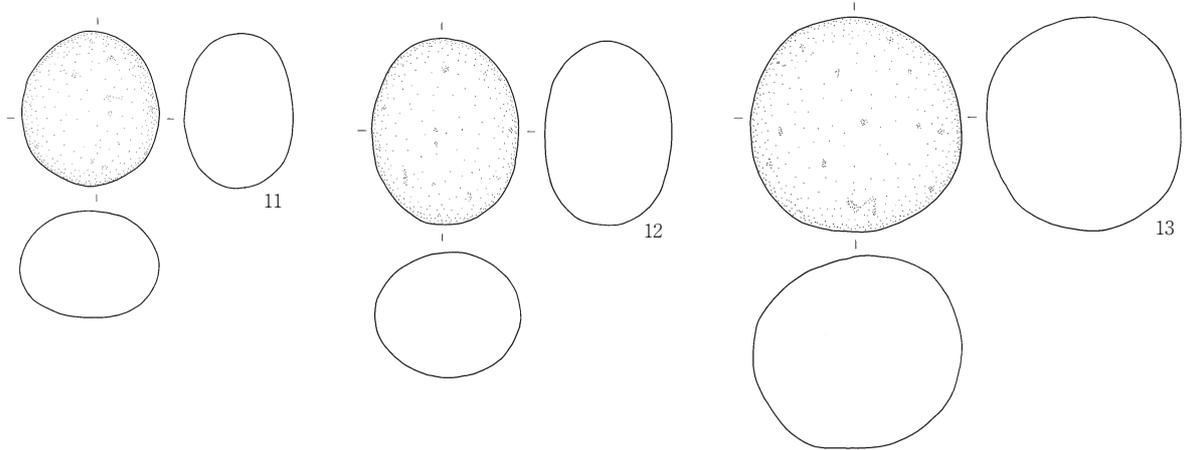
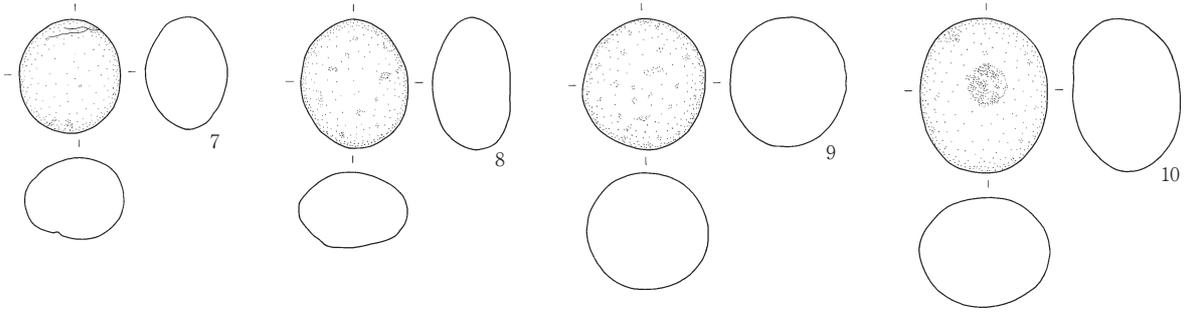
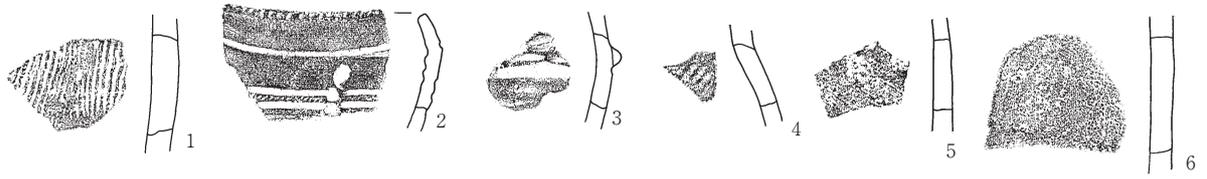
29区43号配石



0 1 : 3 10cm

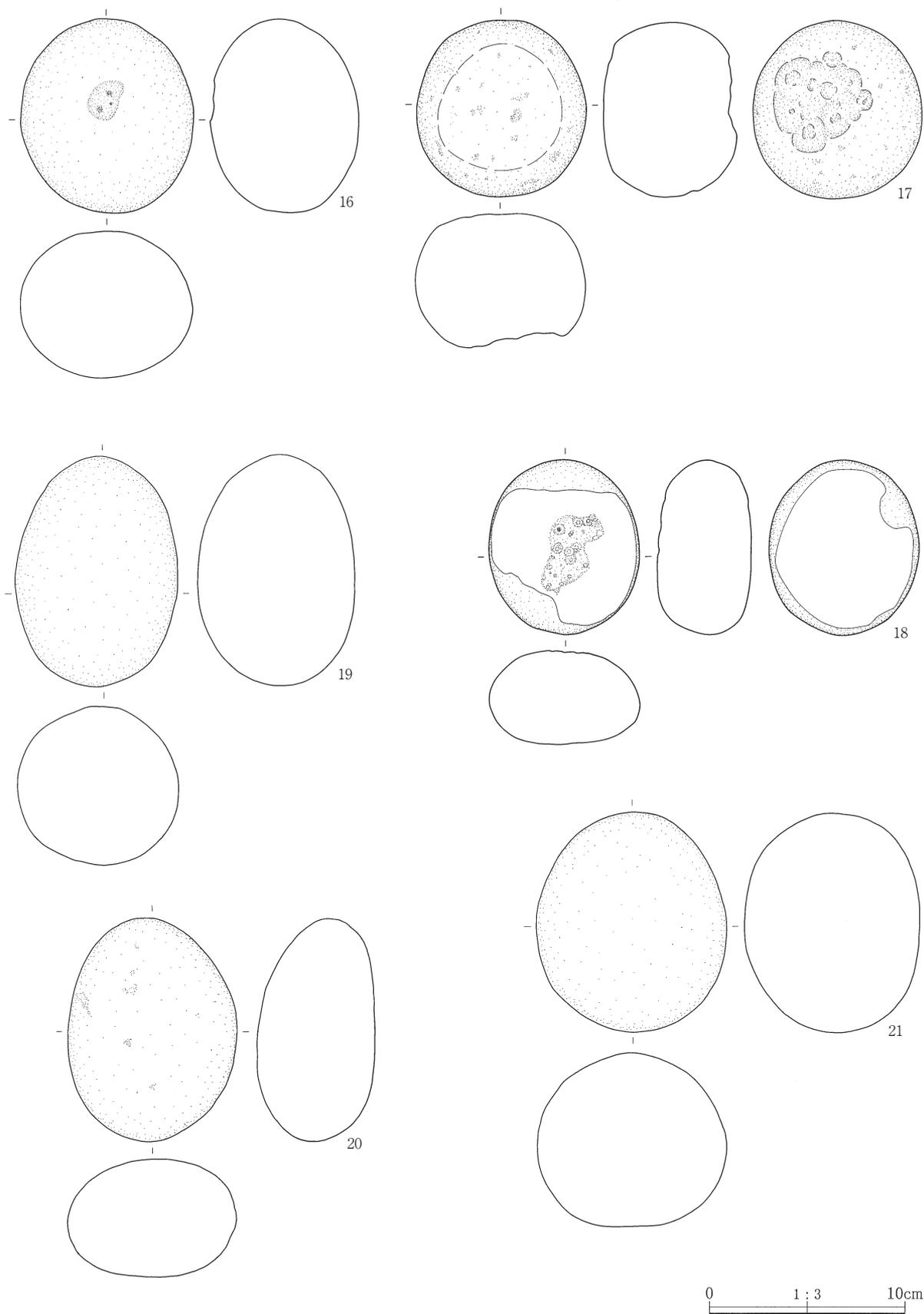
第233図 29区36号・37号・39号・40号・43号配石出土遺物

第4節 縄文時代の配石遺構

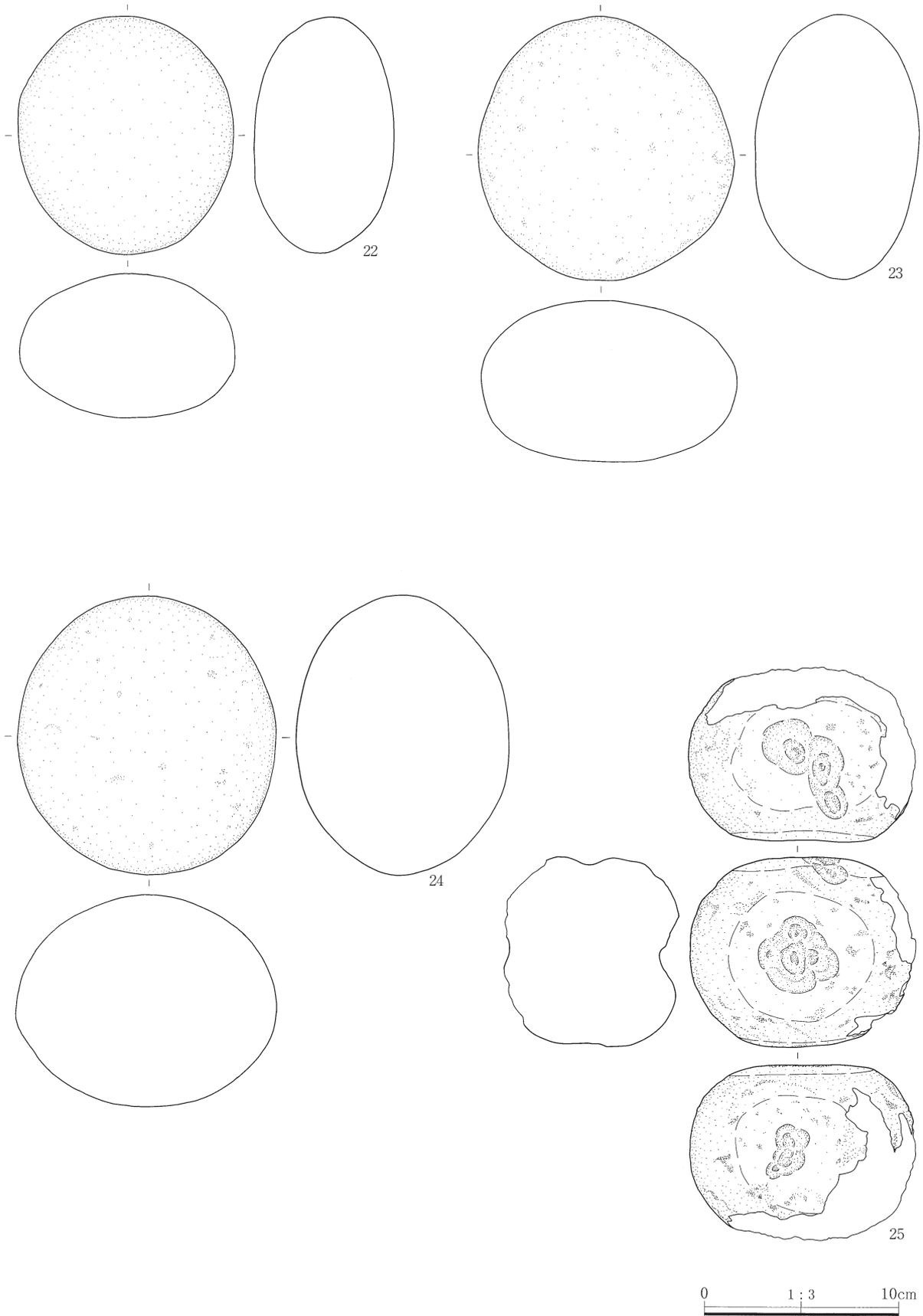


0 1 : 3 10cm

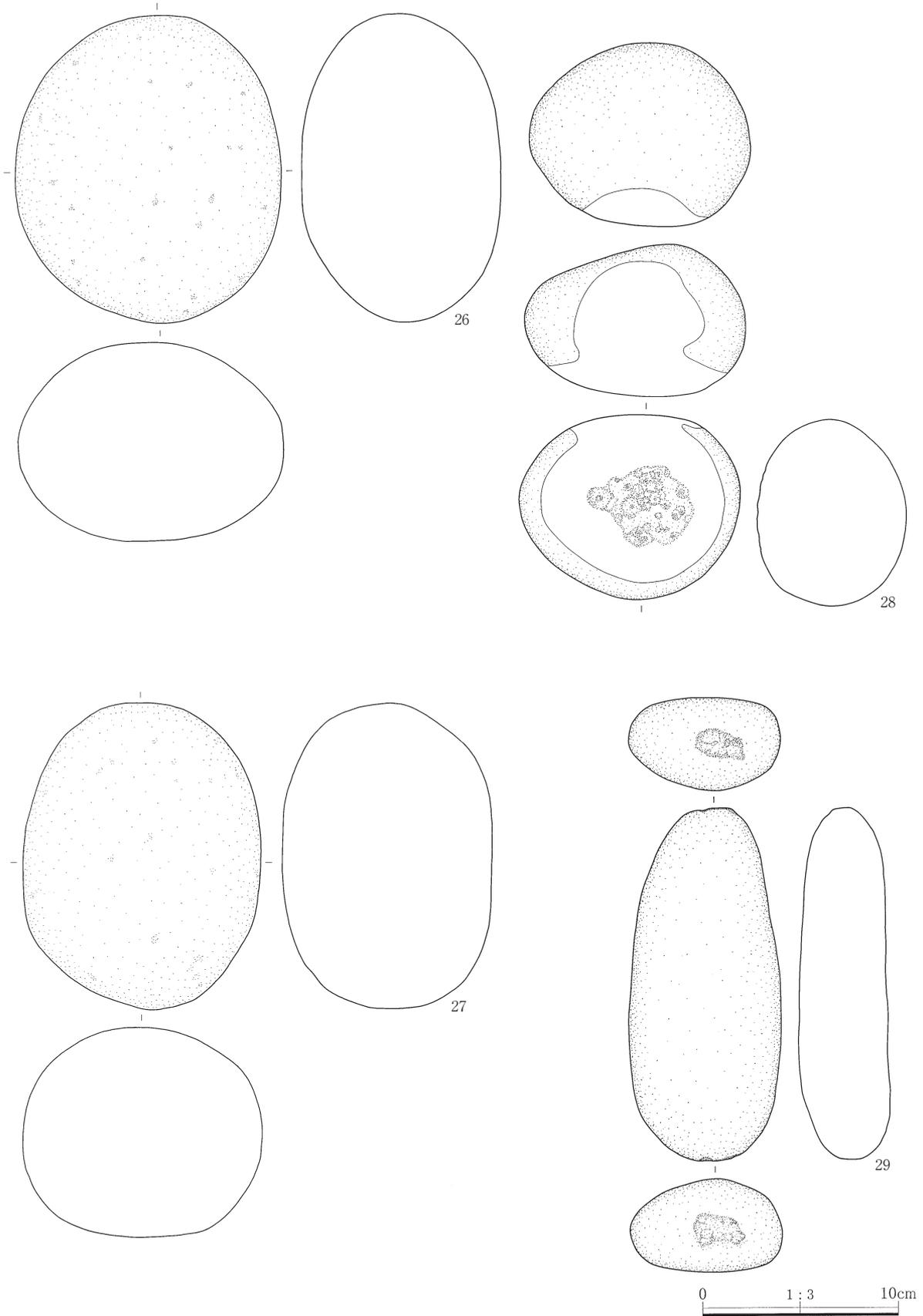
第234図 29区42号配石出土遺物(1)



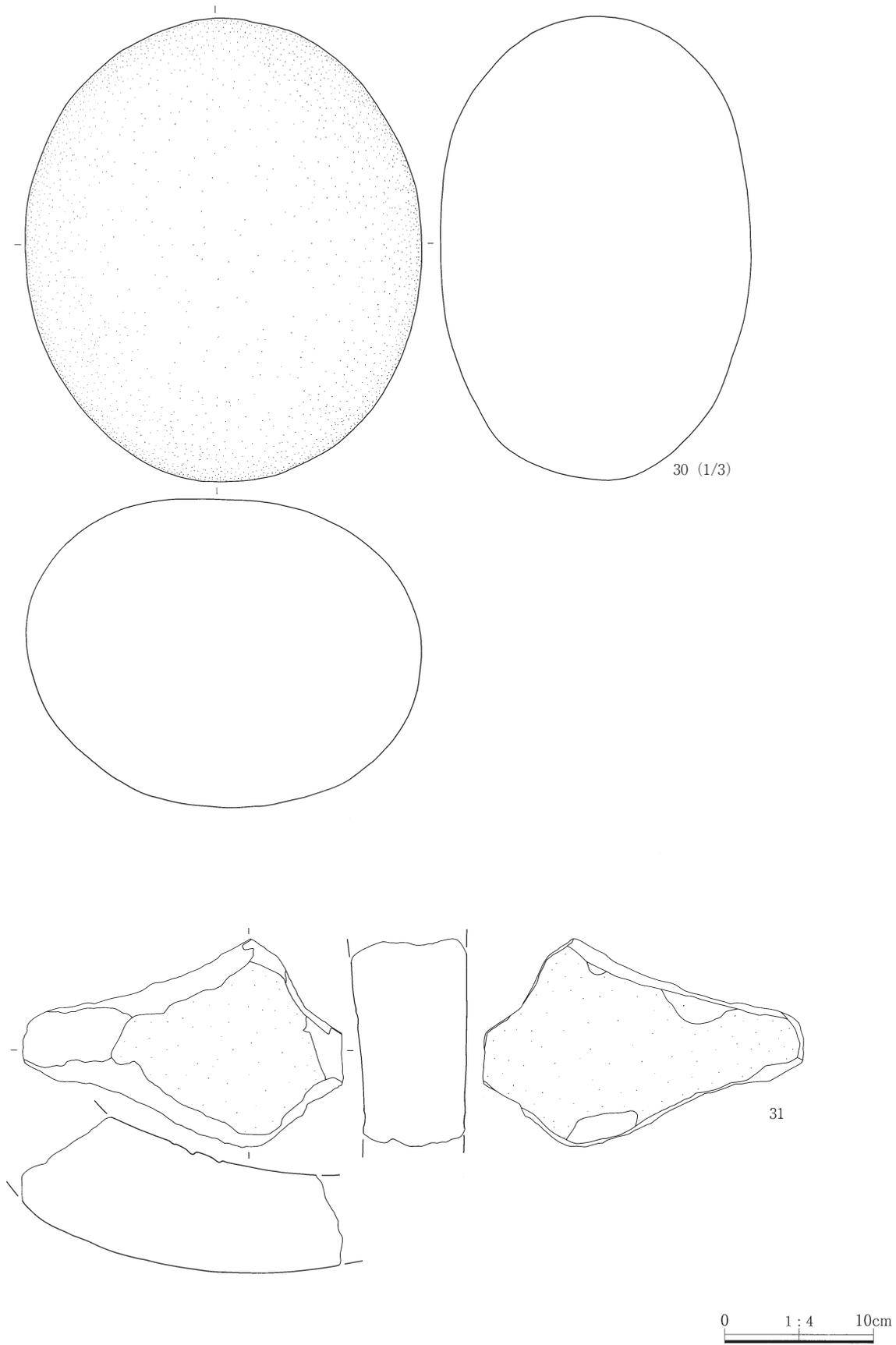
第235図 29区42号配石出土遺物（2）



第236図 29区42号配石出土遺物（3）

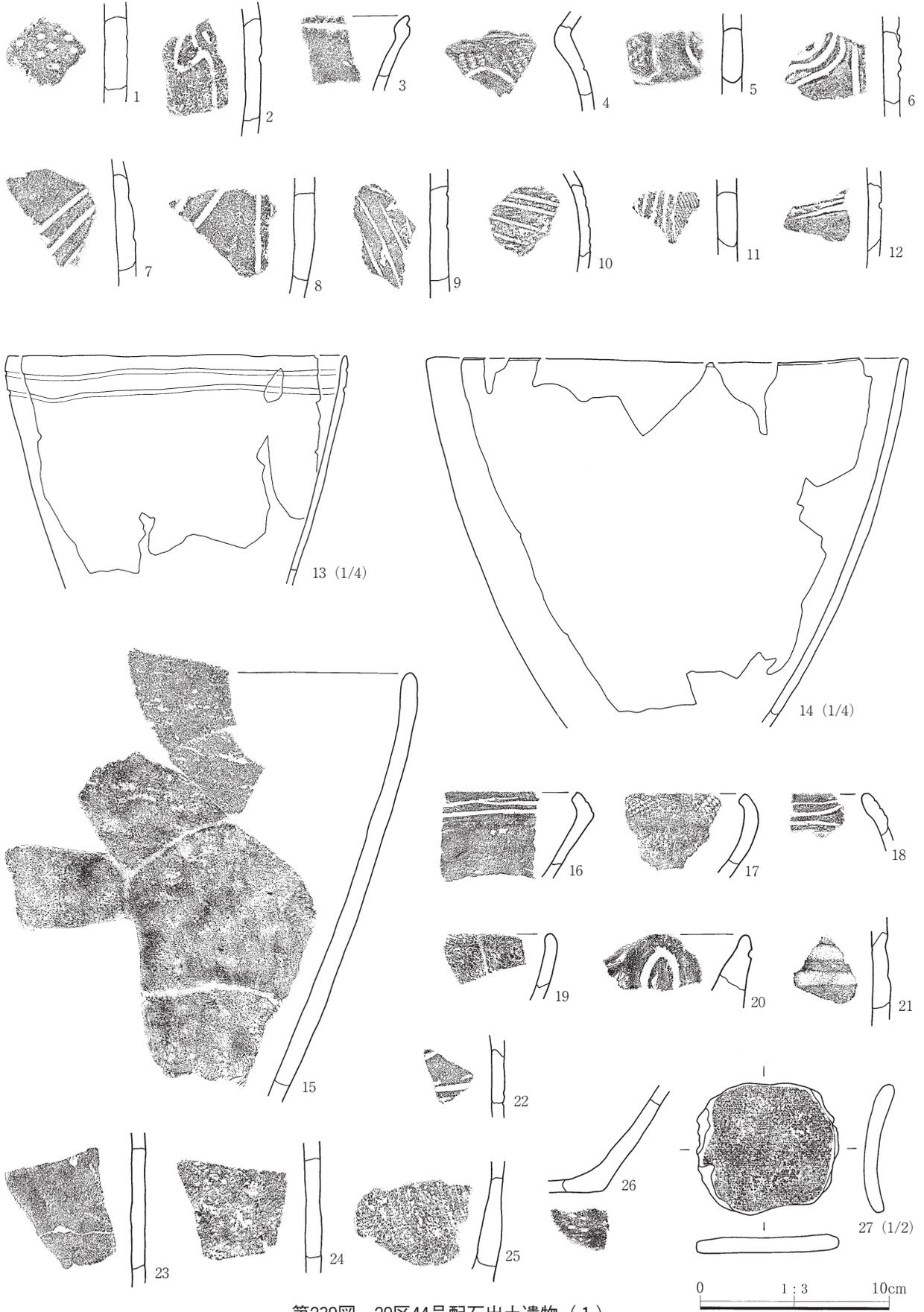


第237図 29区42号配石出土遺物（4）



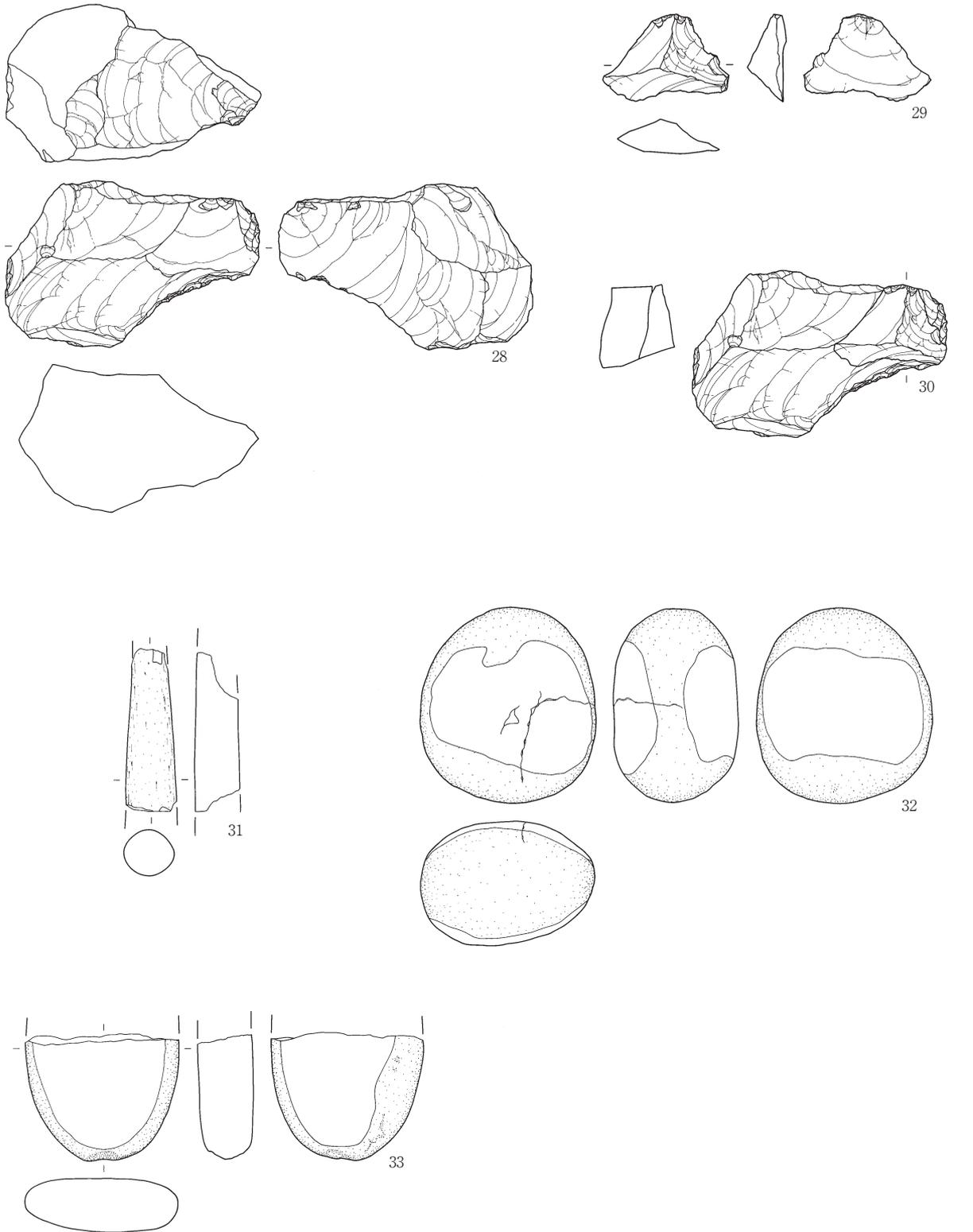
第238図 29区42号配石出土遺物（5）

第3章 発見された遺構と遺物



第239図 29区44号配石出土遺物 (1)

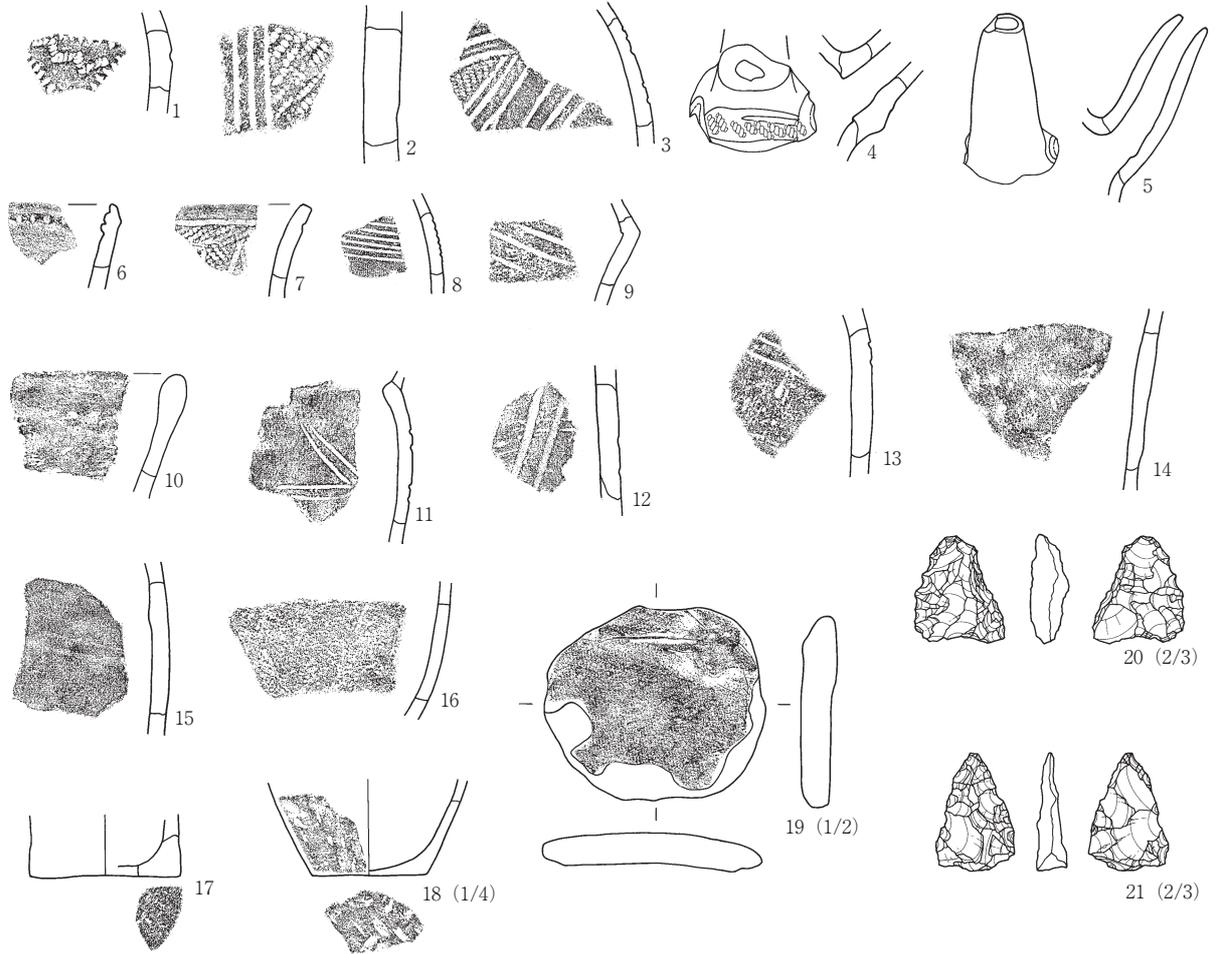
第4節 縄文時代の配石遺構



0 1:3 10cm

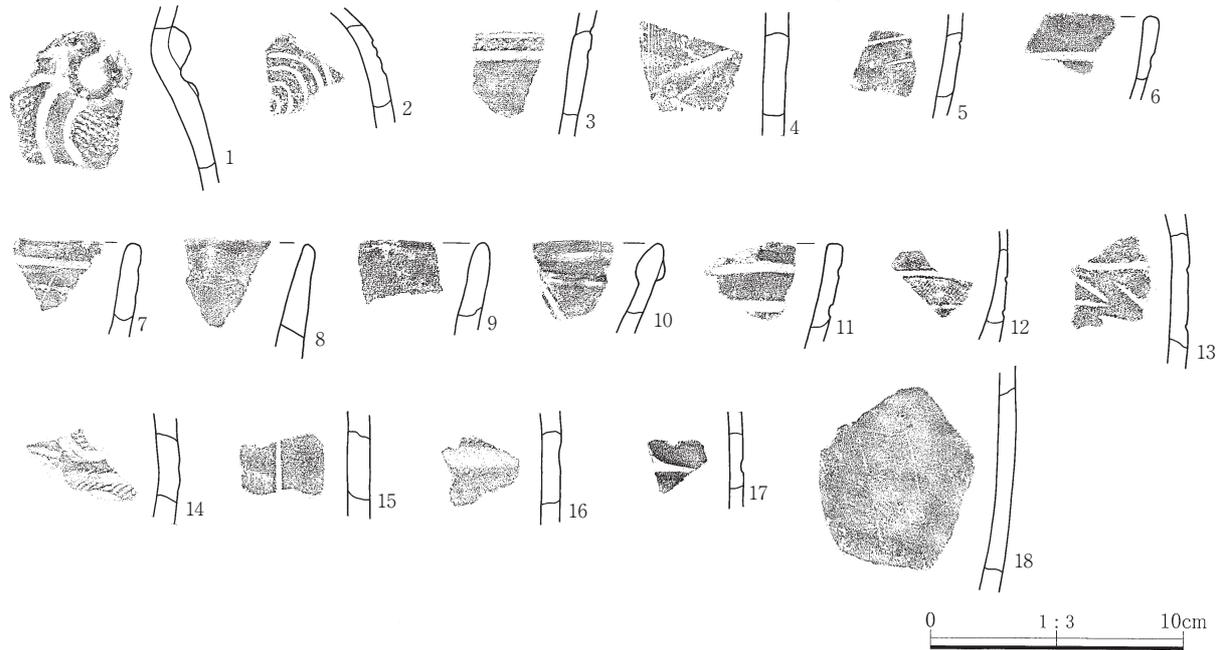
第240図 29区44号配石出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物



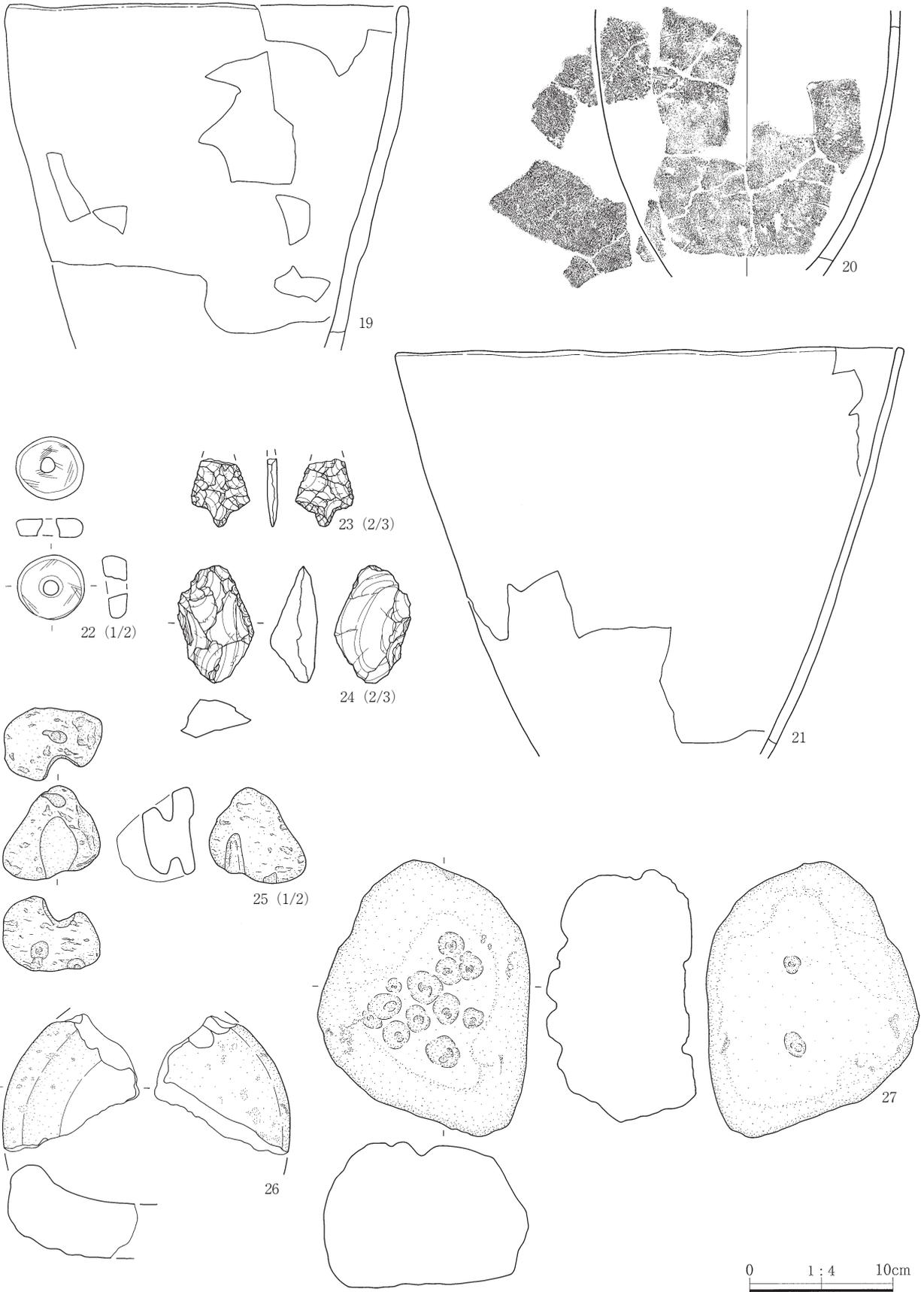
29区45号配石

29区46号配石



0 1:3 10cm

第241図 29区45号・46号配石出土遺物

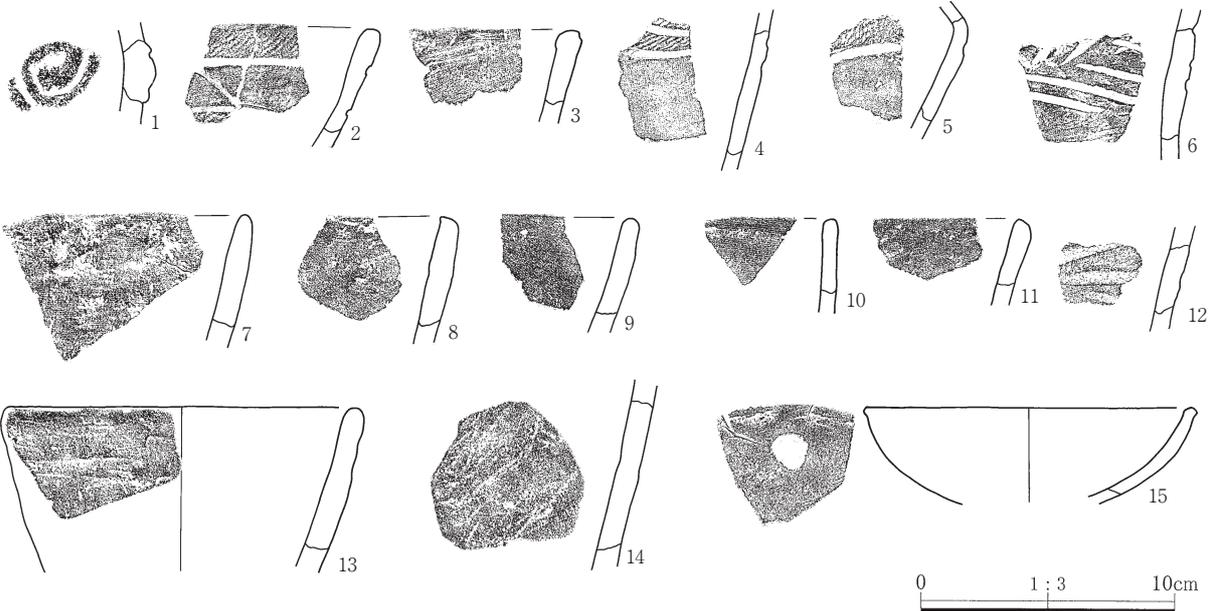


第242図 29区46号配石出土遺物

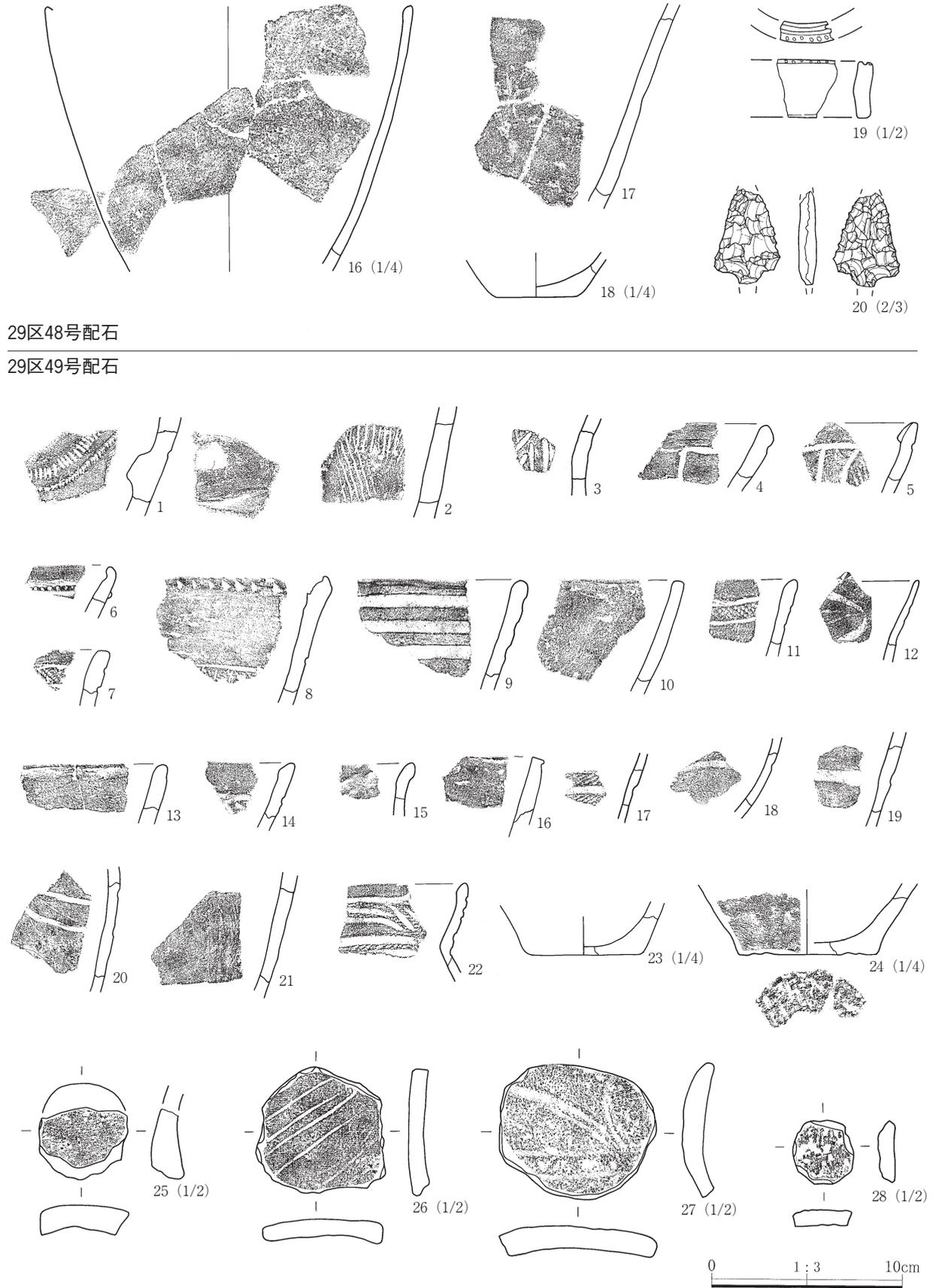


29区47号配石

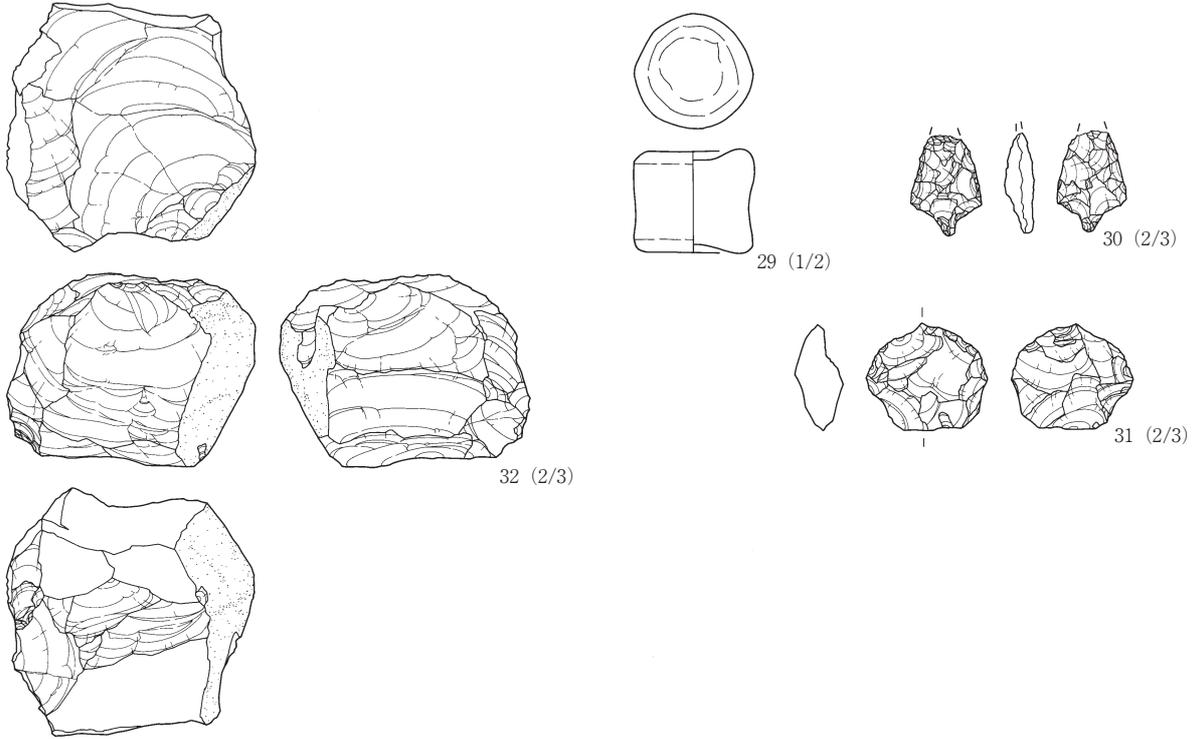
29区48号配石



第243図 29区47号・48号配石出土遺物

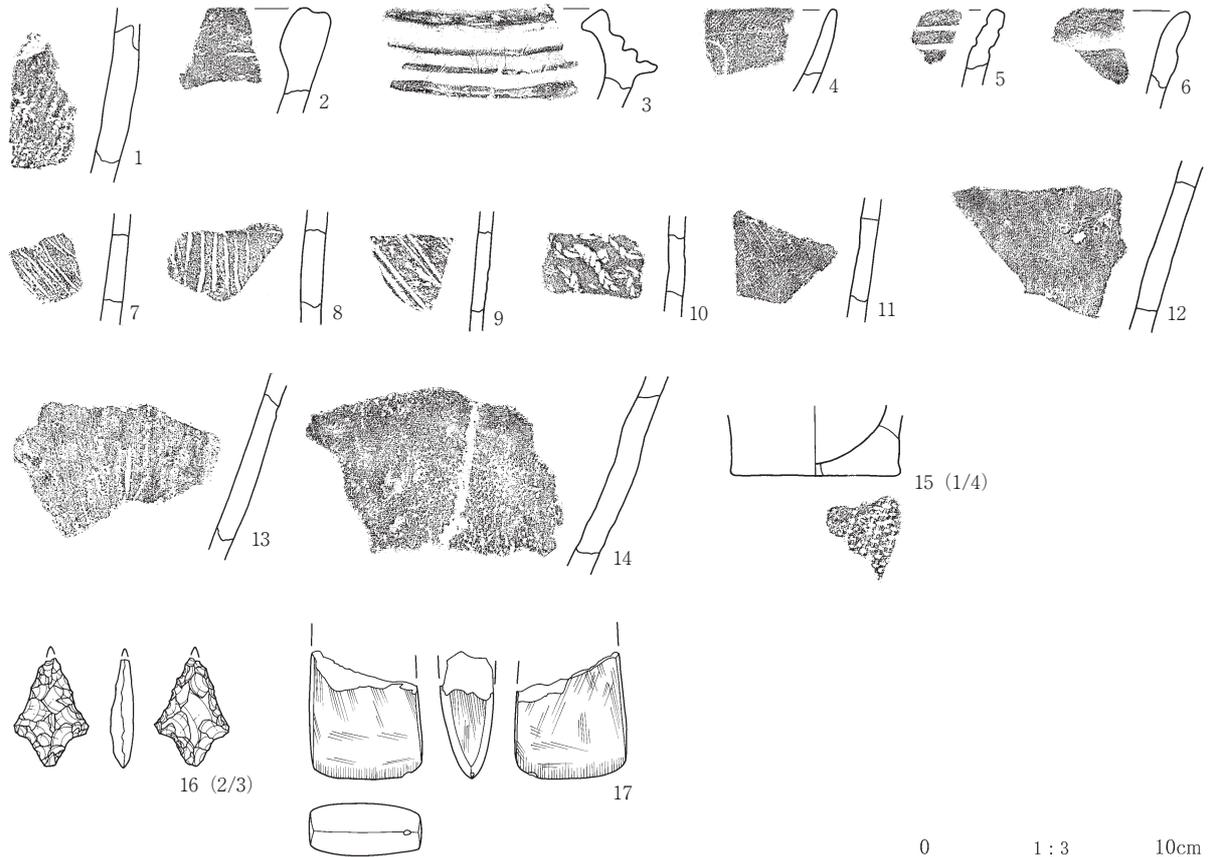


第244図 29区48号・49号配石出土遺物



29区49号配石

29区50号配石



0 1 : 3 10cm

第245図 29区49号・50号配石出土遺物

30区配石遺構

30区では、1号から22号までの22基の配石遺構が調査された。そのうち、14号・18号・19号は中世以後の墓に、1～3号・5号・6号・9号・10号は欠番に変更となり、今回は残る11基の配石遺構について報告する。

30区は調査範囲が狭く、縄文時代中期には環状集落の一面に該当するが、そこに中世の屋敷地が重複し、その後の削平もかなり及んでいる。そのため、特に西半部では遺構の重複と削平が著しく、不明瞭な部分が多い。ここに報告する遺構も多様な変形を受けているものが含まれるであろう。

30区4号配石

調査年度 平成11年度

位置 O-1・2グリッド

経過 表土除去後の遺構確認作業で弧状に連なる礫群が確認され、住居を想定したが、炉等の施設が発見できないことから配石として扱われた。礫は暗褐色土中のほぼ同一面にあり、大半が地山面から15cm前後浮いた状態で分布しているが、南半部の礫は地山面付近のものも混在している。

重複 29号住居及び12号・13号・16号土坑が重複するが、切り合い関係は不明である。

形状 西半部を崩落地で失うが、直径4m前後の円周に沿って弧状に礫が並ぶ。礫は、北半部では30cm大のものが一列に配置されているが、南半部では小ぶりのものを集積している。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大きな川原石がいくつか使われている以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 土器は中期の破片が387点出土しており、主な土器加曾利E4式である。石器は削器1点、加工痕ある剥片3点、磨石類4点、台石1点、石棒片3点、多孔石2点、剥片8点の他に、土製円盤4点、軽石製品1点が出土している。これら出土遺物のうち、石棒片や台石・多孔石などの大型石器は配石と

して使用されていたが、土器片や小型石器類の大半は配石の下層から出土している。

所見 柱穴に沿って周礫が並ぶ柄鏡形住居に該当するものと判断したい。時期は加曾利E4式期に比定されよう。

30区7号配石

調査年度 平成11年度

位置 I-1グリッド

経過 遺構確認作業で鉄平石2石が敷かれた状態で確認され、その下から土坑状の落ち込みが見つかった。

重複 周囲で土坑が数多く確認されているが、重複する遺構はない。

形状 1辺40cm大の鉄平石2石が、一部を重ねて敷かれた状態で確認された。周囲に他の礫は見当たらない。

下部遺構 鉄平石の真下で長軸70cm、短軸50cm、深さ46cmほどの土坑が確認された。

遺物 確認されていない。

所見 周囲は削平が著しく判然としないが、敷石住居があった可能性もある。

30区8号配石

調査年度 平成11年度

位置 O-2グリッド

経過 重複する28号住居と相前後して確認された遺構で、礫の下で土坑が確認されたことから、配石として調査された。

重複 28号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。

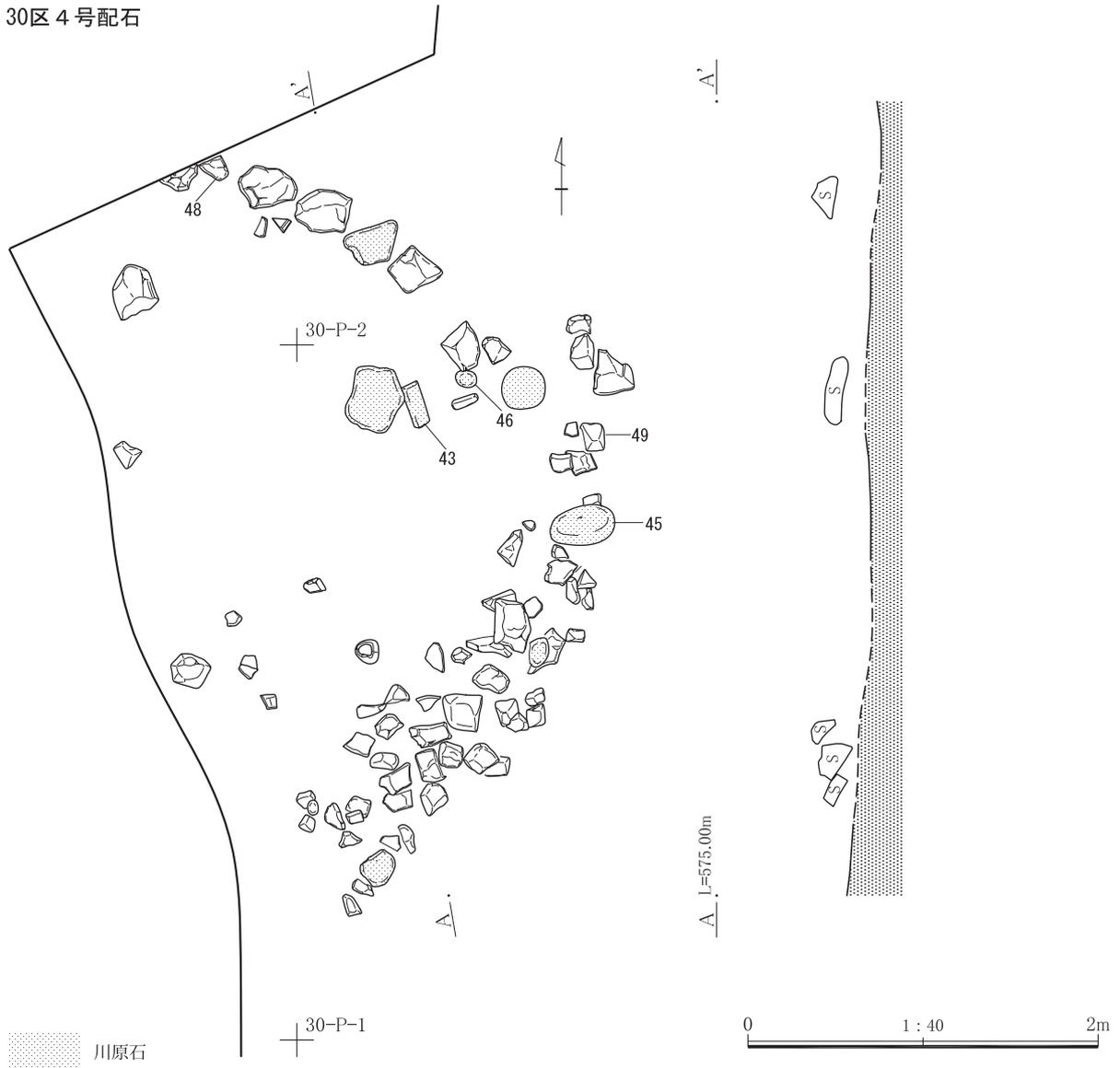
形状 10～25cm大の礫10数個がほぼ同一面に集積された状態で確認され、礫群の下で直径100cm、深さ30cmほどの不整形の土坑が検出された。

石材等 全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 中期後半の土器小片が1点出土している。

所見 土坑と判断するが、礫は重複する28号住居

30区4号配石



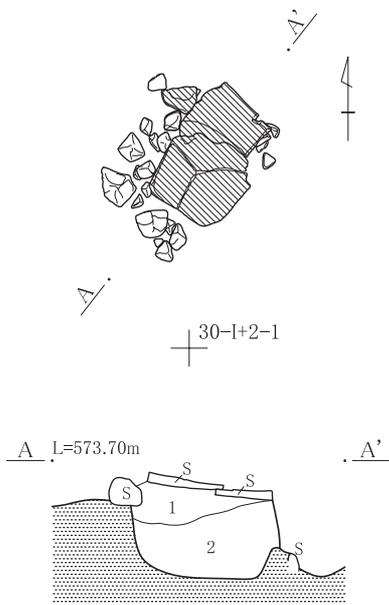
30区4号配石 (南東から)



30区4号配石 (南から) 南半部分の礫

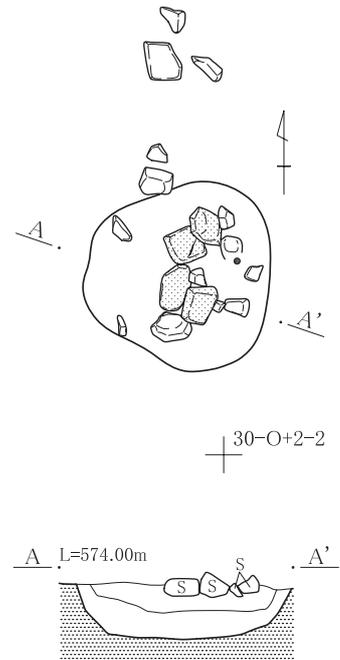
第246図 30区4号配石

30区7号配石

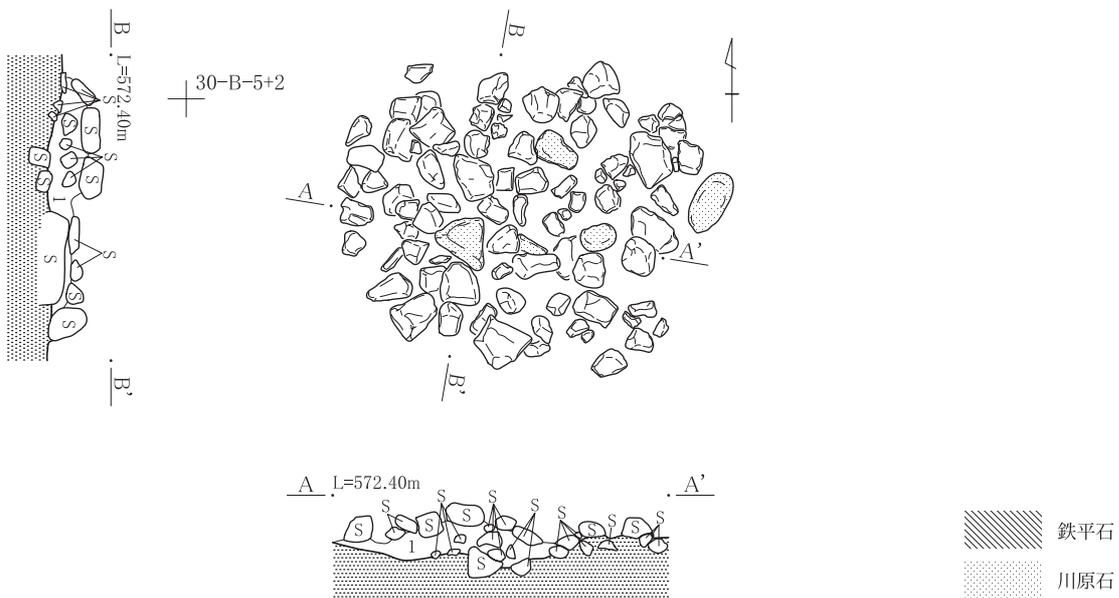


- 1、黒褐色土 軟質でフカフカ。
- 2、暗褐色土 地山ブロックを含む。

30区8号配石



30区11号配石



鉄平石
 川原石

0 1:40 2m

第247図 30区7号・8号・11号配石

第3章 発見された遺構と遺物

に伴う可能性もある。時期は中期後半に比定しておきたい。

30区11号配石

調査年度 平成10年度

位置 A-5グリッド

経過 10~20cm大の礫が一定範囲に集積し、川原石を含むことから配石とされた。

重複 重複する遺構はない。

形状 東西2m、南北1.5mほどの範囲に10~20cm大の礫が集積した状態で確認された。礫は高低差30cmほどの間に折り重なった状態で集積されていた。

下部遺構 確認されていない。

石材等 川原石数個の他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 確認されていない。

所見 下部遺構は確認されていないが、礫は高低差をもって集積されており、土坑状の掘り方が存在した可能性が高い。

30区12号配石

調査年度 平成9年度

位置 C-5グリッド

経過 調査範囲の北端部で確認されたもので、図では表現していないが、礫の下に木の根がかなり入り込んでおり、現況を留めていない可能性もある。

重複 南側に190号土坑（住居に変更）が接近する。

形状 20~30cm大の礫が、直径80cmほどの環状に並べたような状態で確認された。

下部遺構 確認されていない。

石材等 川原石1個の他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 確認されていない。

所見 下部に土坑があった可能性もあるが、木の根による攪乱を強く受けており、遺構から除外しておきたい。

30区15号配石

調査年度 平成10年度

位置 D-1グリッド

形状 20~30cm大の礫が土坑の南東側に集積した状態で確認された。

下部遺構 南北方向に長軸をとる長方形の土坑で、規模は長軸148cm、短軸120cm、深さは26cmである。土坑の南西側には南北方向に細長くやや深い部分があり、2つの土坑が重複している可能性がある。

石材等 小さな川原石が数個あるが、それ以外は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 中期~後期の土器破片19点と土製円盤3点が出土しており、主な土器は加曽利B2式である。

所見 南北方向に長軸をとる土坑墓の可能性もある。その場合、2つの土坑墓が重複していることも考えられる。時期は加曽利B2式期に比定しておきたい。

30区16号配石

調査年度 平成10年度

位置 D-3グリッド

形状 長さ50cmの大型礫の横に完存品の石皿があり、その上に25cmほどの扁平礫を置いた状態で確認された。

下部遺構 確認されていない。

石材等 いずれも地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 石皿以外に、伴出した遺物はない。

所見 性格は不明だが、何らかの遺構の一部と思われる。

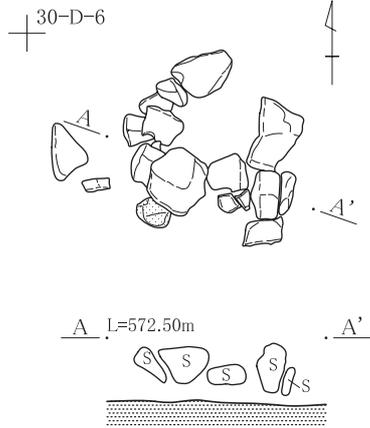
30区17号配石

調査年度 平成9年度

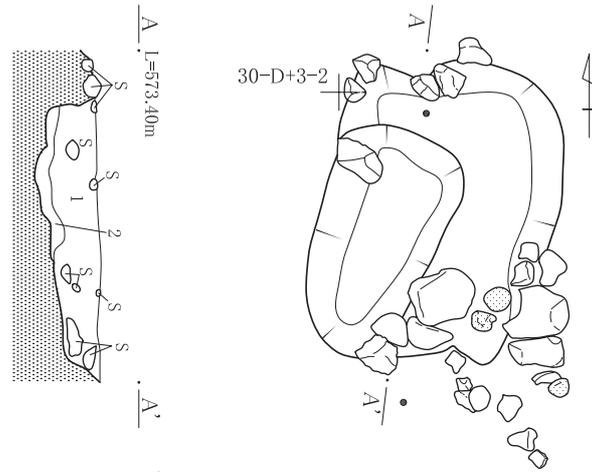
位置 D-5グリッド

形状 1m四方ほどの範囲に10~20cm大の礫が集積した状態で確認された。川原石を数個含み、礫は高低差をもって集積されている。

30区12号配石

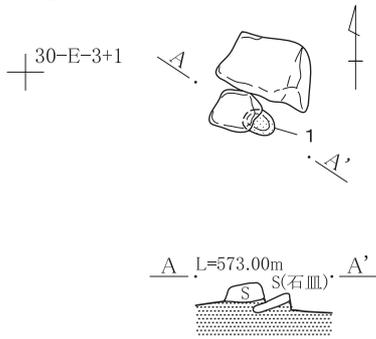


30区15号配石



- 1、黒褐色土
- 2、黄褐色土

30区16号配石



30区16号配石 (南から)

30区17号配石



30区17号配石 (北から)

川原石

0 1:40 2m

第248図 30区12号・15号～17号配石

第3章 発見された遺構と遺物

下部遺構 確認されていない。

石材等 川原石数個の他は全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 確認されていない。

所見 礫の数は少ないが、状況は11号配石と類似しており、土坑状の掘り方が存在した可能性が高い。

30区20号配石

調査年度 平成10年度

位置 E-3グリッド

経過 表土除去後の遺構確認作業で、地山より上層の暗褐色土中で2.3m四方の範囲に礫が集積した状態で確認された。その後の調査で、礫群の下および周囲から土坑が検出された。

重複 西半部に24号土坑（旧195号土坑）が重複し、それを切る。

形状 10～25cm大の礫が、2.3m四方の範囲に集積した状態で確認された。大きな礫は扁平なものが多く、礫を水平に置いた状態で直径1.5mの環状に巡っている。この状態は20区2号配石と類似するが、礫は全周しておらず、やや間も空いている。

下部遺構 確認されていないが、西半部に24号土坑が重複する。

石材等 全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 確認されていない。

所見 下部遺構の追求などの必要事項の調査結果が残されていないため、所見は差し控えたい。

30区21号配石

調査年度 平成9年度

位置 E-4グリッド

経過 地山に多量の礫が含まれる地区で鉄平石が確認され、同一面の周辺にも大型の扁平礫が散布することから、配石として調査した。

重複 鉄平石の北西側に散布する礫は、37号住居（加曾利E1式期）の上面に重複する。

形状 1辺40cmの鉄平石が水平に敷かれ、その周

囲に小割りしたような鉄平石を並べ、北側と南側には鉄平石を立てて設置している。鉄平石の北側には30～40cm大の扁平礫がほぼ同一面に敷いたように散布している。

下部遺構 確認されていない。

石材等 鉄平石以外は、全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

遺物 確認されていない。

所見 敷石住居が存在した可能性が考えられる。敷かれた鉄平石の南北辺には立てた状態の鉄平石が残っており、本来は箱状に設置されていたものと思われる。

30区22号配石

調査年度 平成10年度

位置 G-4グリッド

経過

重複 重複する遺構はないが、周囲に26号～32号土坑が近接する。

形状 直径1.5mほどの環状に礫が集積した状態で確認された。礫は10～25cm大のものが使用されており、扁平なものは少なく、厚手の礫が多い。

下部遺構 確認されていない。

石材等 全て地山に含まれる礫と同様の粗粒輝石安山岩亜角礫である。

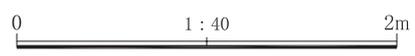
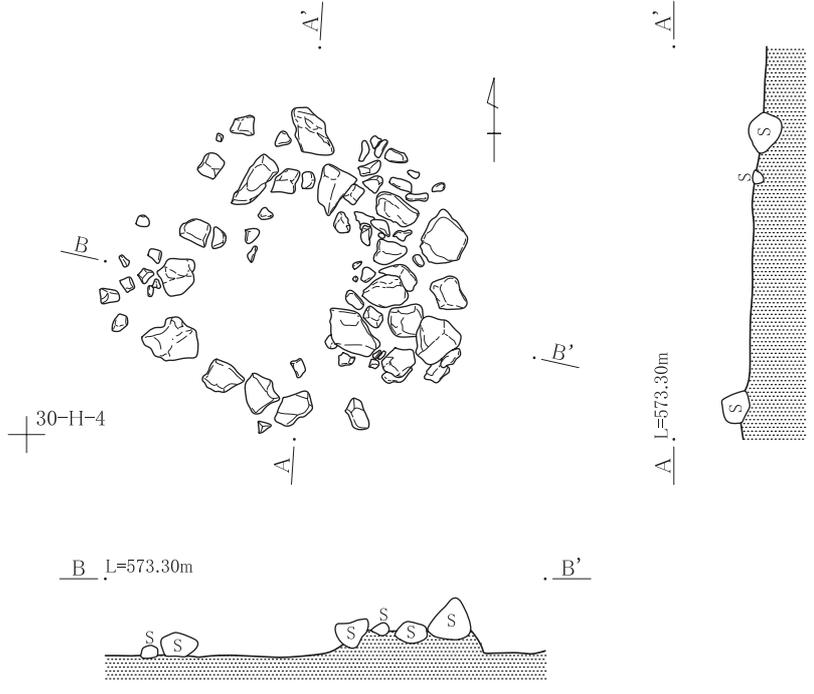
遺物 確認されていない。

所見 下部遺構の追求などの必要事項の調査結果が残されていないため、所見は差し控えたい。

30区20号配石

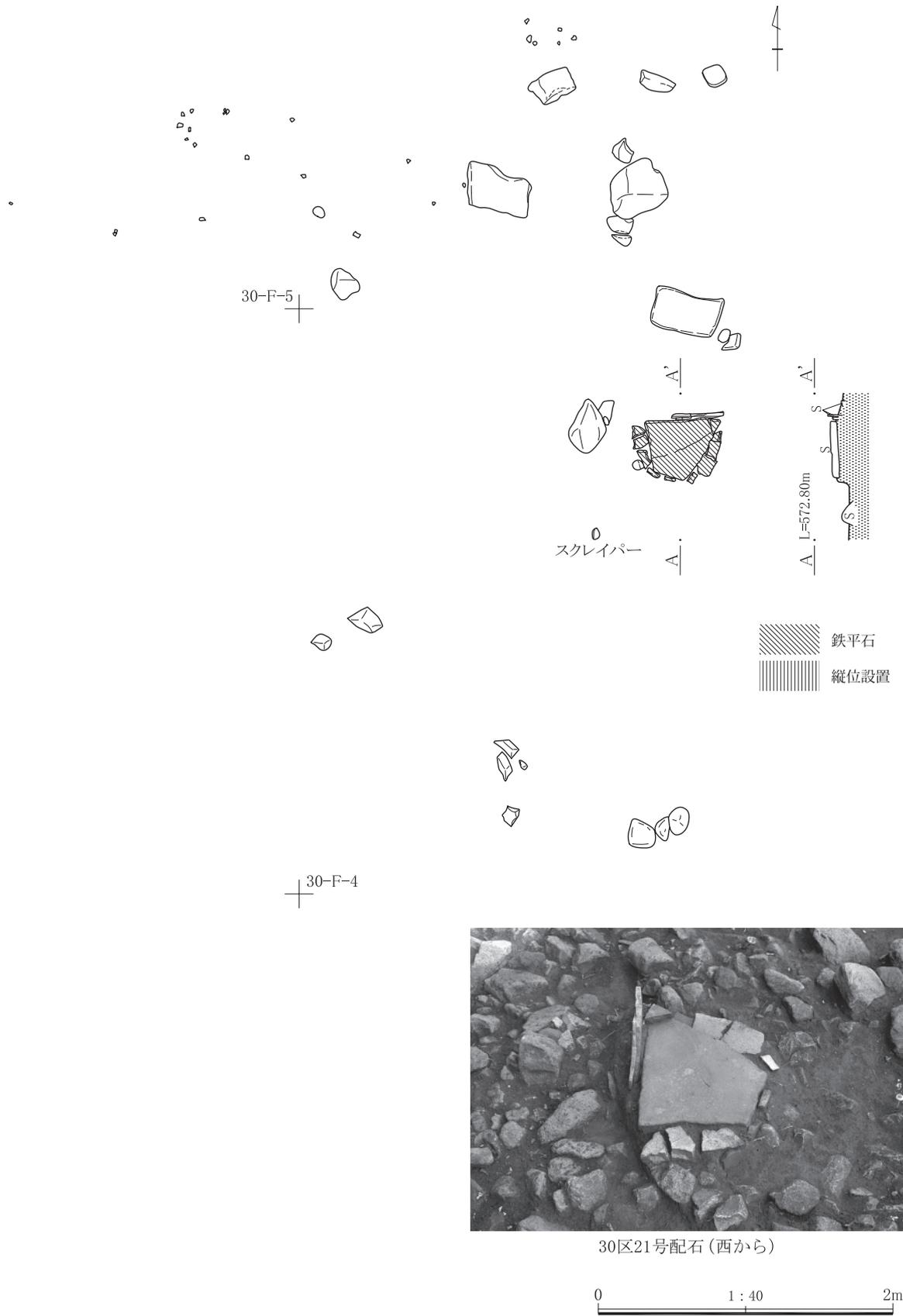


30区22号配石

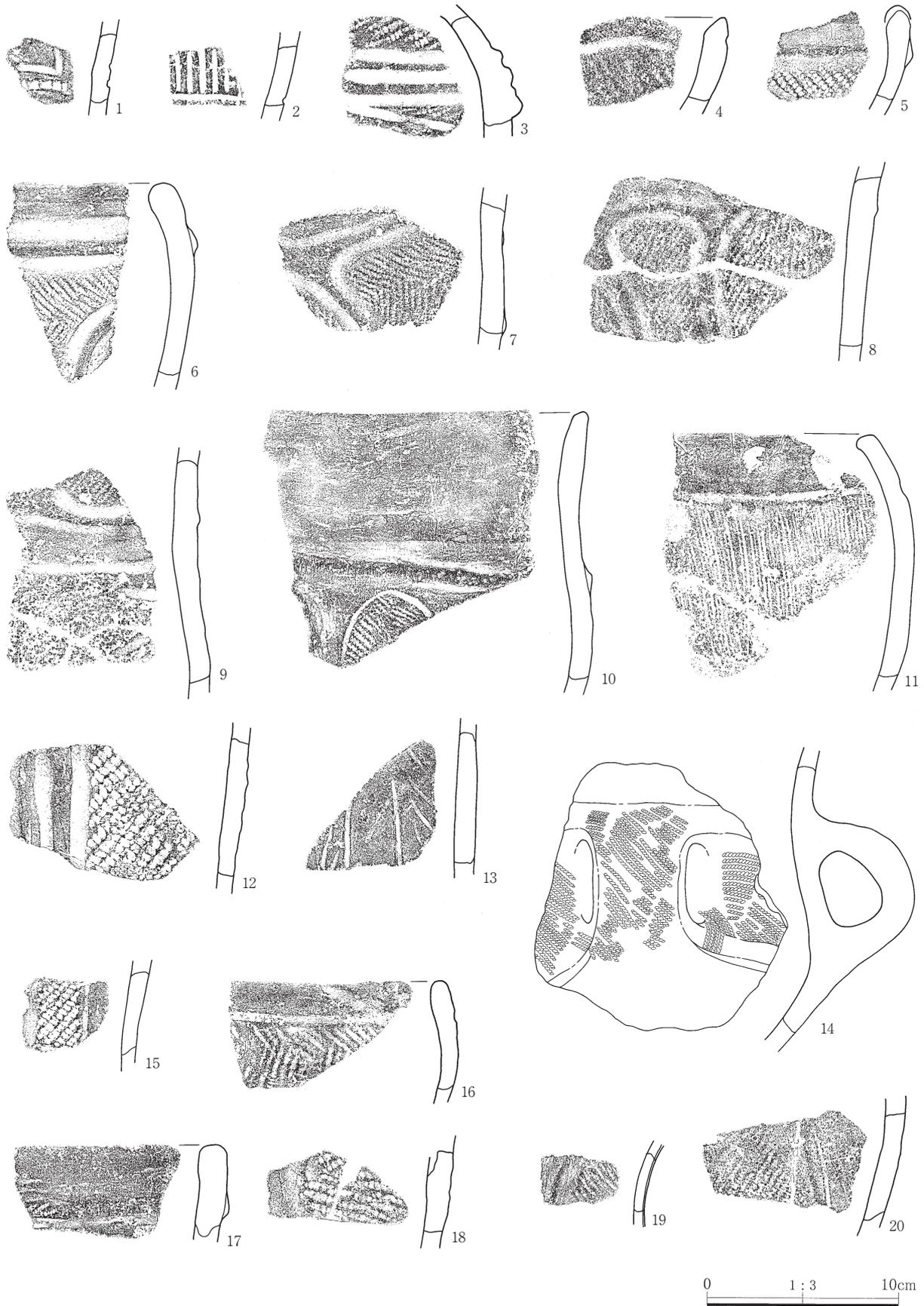


第249図 30区20号・22号配石

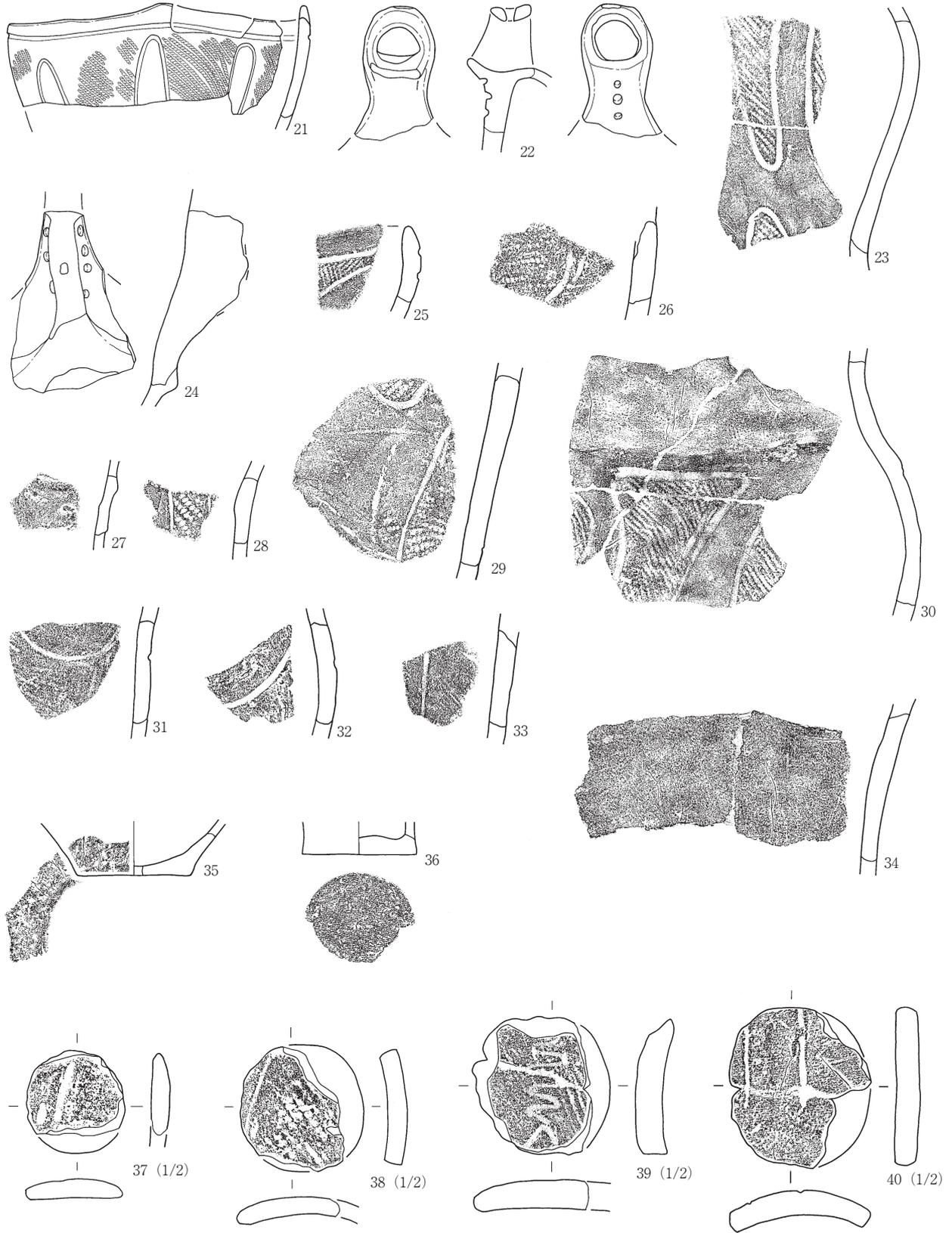
30区21号配石



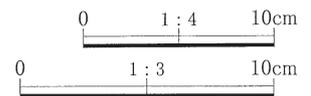
第250図 30区21号配石

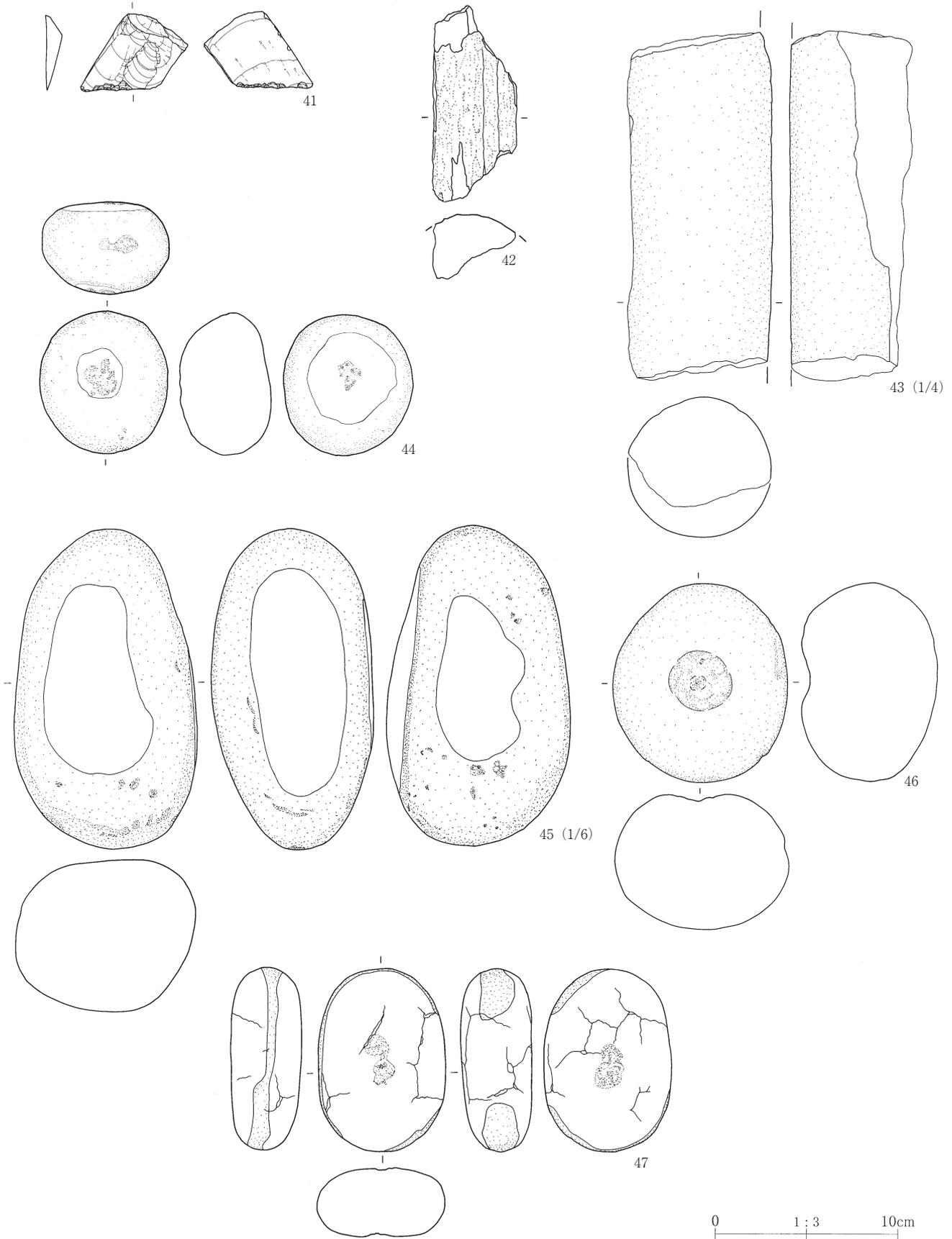


第251図 30区4号配石出土遺物(1)

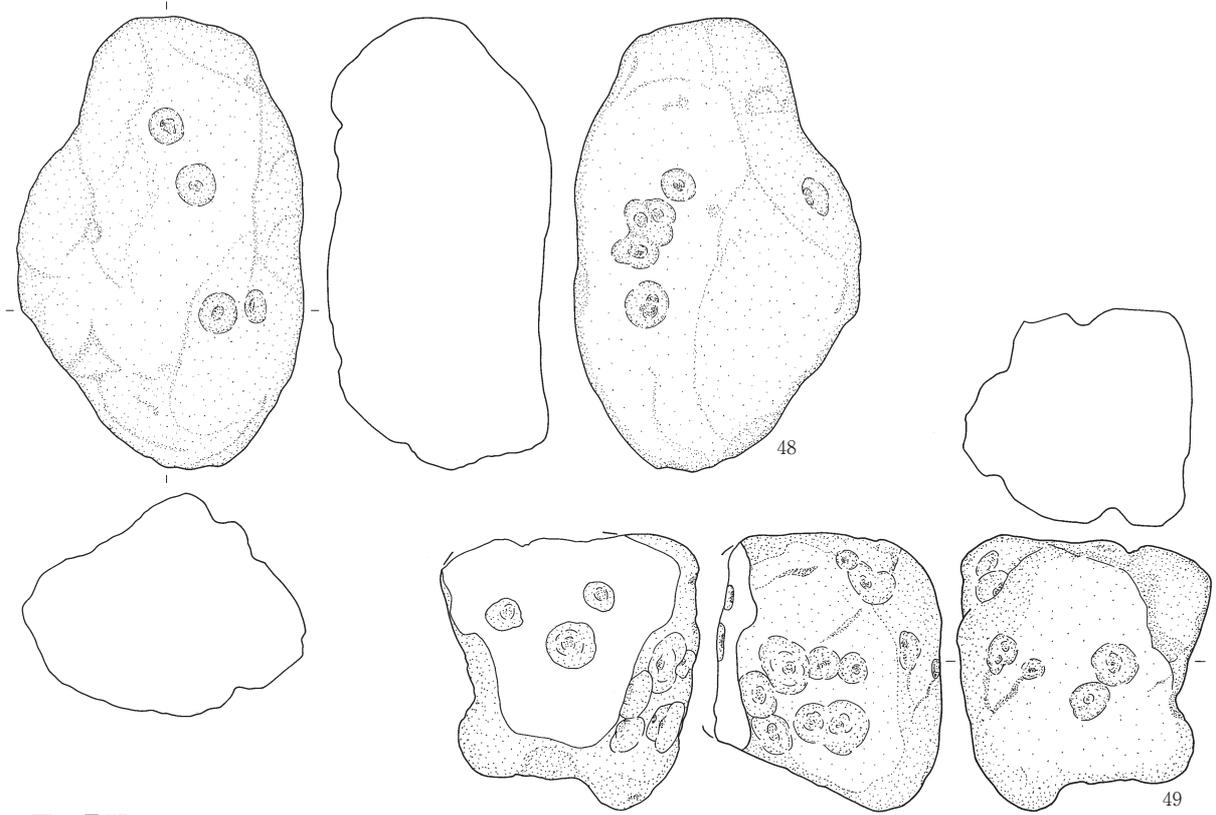


第252図 30区4号配石出土遺物(2)





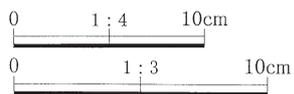
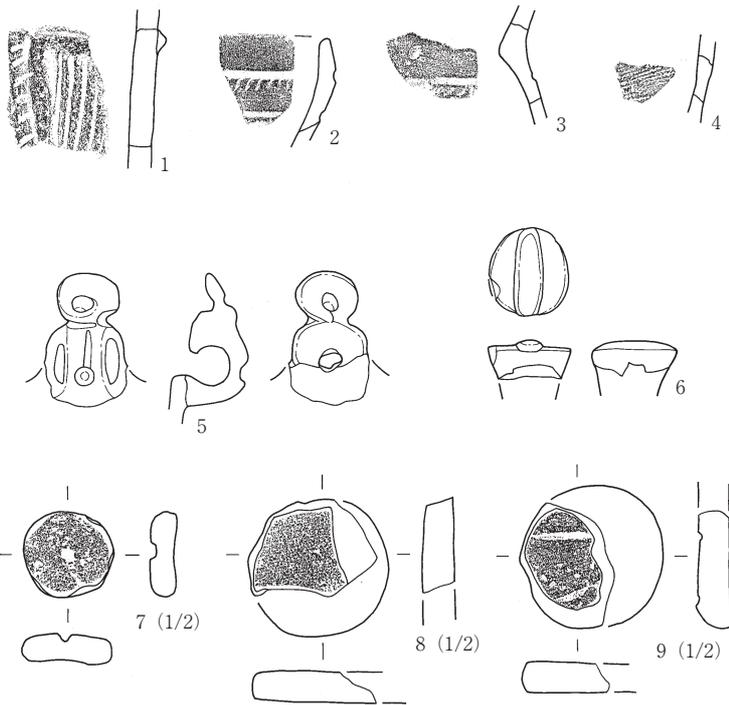
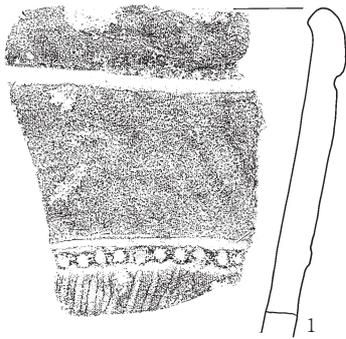
第253図 30区4号配石出土遺物(3)



30区4号配石

30区8号配石

30区15号配石



第254図 30区4号・8号・15号配石出土遺物